プロファイル管理 2402 LTSR

プロファイル管理は、Citrix Virtual Appsサーバー、Citrix Virtual Desktops™で作成された仮想デスクトップ、および物理デスクトップのプロファイルソリューションとして意図されています。プロファイルを管理したい各コンピューターにプロファイル管理をインストールします。

Active Directoryグループポリシーオブジェクトにより、Citrix®ユーザープロファイルの動作を制御できます。多くの設定を調整できますが、一般的には、これらのトピックで説明されているように、一部の設定のみを構成すれば十分です。

展開に適したポリシー選択の適切なセットを選択する最善の方法は、構成を決定する記事の質問に答えることです。

プロファイル管理の利用権はEULAに記載されています。

これらのトピックで使用されている用語については、用語集を参照してください。

新機能

累積更新プログラム 4 (CU4)

リリース日: May 08, 2026

新機能

このリリースについて

Profile Management 2402 LTSR 累積更新プログラム 4 (CU4) は、2402 LTSR CU3 のリリース以降に報告された 4 つ以上の問題を修正します。

プロファイル管理 CU3

プロファイル管理 CU2

プロファイル管理 CU1

Profile Management (初回リリース)

このリリースの既知の問題

非推奨および削除

Citrix製品サブスクリプション特典の対象日

2402 LTSR CU4 で修正された問題

Profile Management 2402 LTSR CU4 には、以下の修正された問題が含まれています。

Profile Management 2402 LTSR CU3 と比較。

- Citrix Virtual Apps and Desktops™ を 1912 LTSR から 2203 LTSR CU5 にアップグレードした後、ログオンタイムアウトが発生する可能性があります。
- ユーザーが公開デスクトップにサインインすると、ユーザープロファイル管理 (UPM) ポリシーがそれらを除外している場合、画像、音楽、ビデオなどのフォルダーがローカルに再作成されない場合があります。その結果、最初のログオン後にそれらのフォルダーにアクセスすると、「場所が利用できません」というエラーメッセージが表示されることがあります。

- **フォルダーのプロファイルストリーミング**ポリシーが有効になっている間に、ユーザーがログオン直後にログオフした場合、Profile Management がクラッシュする可能性があります。
- Windows Server 2022 で、CVAD 2402 CU1 および CPM プロファイルと併用した場合、Microsoft Teams 2.1 がログオン時に自動的に起動しない場合があります。
- Citrix Profile Management Containers では、Adobe Acrobat および Adobe Reader で Adobe Stamps と基本的な検索機能が失敗する可能性があります。
- Profile Management を特定のコンテナーと併用すると、`HKCU\\Software\\Microsoft\\Windows\\CurrentVersion\\Explorer\\SessionInfo` レジストリキーがログオフ時にクリアされません。その結果、2回目のログオン時にスタートアップアプリケーションが起動に失敗する可能性があります。
- `ProcessSecurityThread` が割り当て解除されたリソースへのアクセスを試行すると、Citrix Profile Management サービスはログオフ時にクラッシュする可能性があります。
- Profile Management (UPM) を使用して VDA を 2402 CU3 にアップグレードした後、新しいユーザープロファイルの `AppData\\Local\\Packages` フォルダーがログオフ時にユーザーストアに同期されない場合があります。その結果、Teams プロファイル情報などのローミングアプリケーションデータが新しいユーザープロファイルに保存されません。

累積更新プログラム 3 (CU3)

リリース日: August 26, 2025

新機能

- ファイルベースのプロファイルソリューションで、フォルダーのプロファイルストリーミング機能が自動構成によって有効になります
- Citrix® プロファイル管理は、ユーザーローミングシナリオにおける新しいMicrosoft Teamsの登録をサポートします。

このリリースについて

Profile Management 2402 LTSR 累積更新プログラム 3 (CU3) は、2402 LTSR CU2 のリリース以降に報告された4つ以上の問題を修正します。

プロファイル管理 CU2

プロファイル管理 CU1

Profile Management (初期リリース)

このリリースの既知の問題

非推奨および削除

Citrix製品サブスクリプション特典の対象期間

2402 LTSR CU3で修正された問題

比較対象: Profile Management 2402 LTSR CU2

- 2402 LTSRでReplicate User Storesを使用している場合、アクセスパフォーマンスに基づいてストアの選択が機能しないことがあります。プロファイルが別のデータセンターのファイルサーバーからロードされる場合、ログオンが遅くなることがあります。
- Profile Managerサービスがランダムなタイミングで予期せずクラッシュすることがあります。影響を受けるサーバーでサービス停止を監視しているときに、この問題に気づくことができます。
- 2402.1にアップグレードした後、FASを使用するCitrix Profile Management (UPM) 環境で、Office 365アプリと新しいMicrosoft Teamsがユーザー資格情報を保持しません。
- Citrix Profile Managementバージョン2402では、Adobe保護モードが有効になっている場合、OneDriveコンテナからAdobeファイルを開くことができません。
- Microsoft TeamsアプリとVDAバージョンをアップグレードした後、新しいMicrosoft Teamsバージョン2.1以降はCitrixセッション内で開かれません。

累積更新プログラム 2 (CU2)

リリース日: February 06, 2025

新機能

- ファイルベースのプロファイルソリューションで、フォルダーのプロファイルストリーミング機能が自動構成によって有効になります。
- Citrix® Profile Managementは、ユーザーローミングシナリオにおける新しいMicrosoft Teamsの登録をサポートします。

このリリースについて

Profile Management 2402 LTSR累積更新プログラム 2 (CU2) は、2402 LTSR CU1のリリース以降に報告された11個の問題を修正します。

プロファイル管理 CU1

Profile Management (初期リリース)

このリリースの既知の問題

非推奨と削除

Citrix製品サブスクリプションアドバンテージの対象日

2402 LTSR CU2 で修正された問題

比較対象: Profile Management 2402 LTSR CU1

- Outlook にメールを追加する際に OST パスを変更すると、Citrix Profile Management は次回のログイン時にカスタマイズされたパスをデフォルトの場所 `(drive:\Users\user\AppData\Local\Microsoft\Outlook)` にリセットします。
- CVAD 2402 にアップグレードした後、VDA が svchost.exe および UPMACTION.sys が原因で BSOD とともにランダムにクラッシュする可能性があります。
- ファイルサーバーに KB5040456 および KB5041828 をインストールした後、ユーザーログオン中に高い CPU 使用率と遅延が発生し、Workspace からアプリケーションを起動する際に問題が発生する可能性があります。
- CVAD 2402 にアップグレードした後、UserProfileManager.exe がランダムにクラッシュする可能性があります。
- Citrix Desktops で Outlook VHDX ファイルがマウントされず、Outlook 起動時に outlook.ost ファイルが見つからないというエラーが発生する問題に遭遇する可能性があります。
- Profile Management コンテナが使用されている場合、ICA® セッション内で App-V アプリケーションプロセスを開始できません。
- VDA 2402 では、User Profile Management (UPM) プロファイルコンテナの仮想ハードディスク (VHD) が期待どおりに自動拡張されません。プロファイルが設定された制限に達しても、VHD はデフォルトの設定制限を超えてサイズが増加しません。
- 2402 LTSR コントロールレイヤーにアップグレードし、VDA (Windows 2022) をクリーンインストールした後、公開されたアプリケーションのファイルエクスプローラーに重複するデスクトップ、ドキュメント、および OneDrive フォルダーが表示されることがあります。
- Citrix User Profile Management (UPM) プロファイルコンテナが有効になっている場合、ユーザーは OneNote で問題が発生する可能性があります。特に Excel や Word などの添付ファイルを含むファイルを編集および保存する際に問題が発生します。
- Citrix Profile Management 2402CU1 にアップグレードした後、公開されたデスクトップを起動する際に、特に「Multiple Simultaneous Sessions」サポートが有効になっている場合、

「The User Profile Service service failed to sign-in. User profile cannot be loaded」というエラーが断続的に発生する可能性があります。

- Citrix Profile Management では、プロファイルコンテナが有効になっており、プロファイルコンテナの読み取り/書き込み (RW) ファイルがマージされていない場合、一部のユーザーが一時プロファイルを受け取る可能性があります。

累積更新プログラム 1 (CU1)

リリース日: August 20, 2024

新機能

- ファイルベースのプロファイルソリューションで、フォルダーのプロファイルストリーミング機能が自動構成によって有効になりました。
- Citrix® Profile Managementは、ユーザーローミングシナリオにおける新しいMicrosoft Teamsの登録をサポートします。

このリリースについて

Profile Management 2402 LTSR累積更新プログラム 1 (CU1) は、2402 LTSRの初回リリース以降に報告された7つの問題を修正します。

Profile Management (初回リリース)

このリリースの既知の問題

非推奨と削除

Citrix製品サブスクリプション特典の対象期間

2402 LTSR CU1 で修正された問題

比較対象: Profile Management 2402 LTSR 初期リリース

- Citrix Profile Management LTSR 2402 を使用し、2402 ISO バージョンから AD サーバーに日本語の `ctxprofile.adml` をコピーすると、グループポリシーオブジェクト (GPO) を編集できません。
- セッション内で Microsoft Teams、ブラウザ拡張機能、Profile Management、およびプロファイルコンテナが連携して動作する際に問題が発生する可能性があります。詳細については、「新しい Microsoft Teams のローミングを有効にする」を参照してください。

- Profile Management を使用してフルプロファイルコンテナでプロファイルを管理している場合、最新バージョンの AutoCAD でエラーが発生する可能性があります。
- `Replicate user stores` ポリシーを有効にすると、Citrix Profile Management は、最高のパフォーマンスを持つストアを優先するように構成されている場合でも、待機時間の長いユーザーストアを選択する可能性があります。
- ファイルベース (ローミング) プロファイルソリューションの場合、バージョン更新の問題を含め、直接アクセスプロファイルコンテナの再アタッチとレプリケーションに関する問題が発生する可能性があります。
- マルチセッション環境で Citrix Profile Management を使用している場合、ミラーフォルダーでファイルやフォルダーが見つからない問題が発生する可能性があります。
- Citrix Profile Management で、同じイベントに対して複数の Event Tracing for Windows (ETW) イベント登録が発生する可能性があります。
- VDA 2308 から LTSR 2402 にアップグレードした後、ユーザーログオフ中に Citrix User Profile Manager Service がクラッシュする可能性があります。

新機能

このリリースでは、全体的なパフォーマンスと安定性の向上に役立ついくつかの問題に対処しています。

修正された問題

Profile Management 2402 LTSR には、以下の修正された問題が含まれています。

- Citrix Profile Management ドライバーが正常にインストールされていないため、VDA のアンインストールまたはアップグレードが失敗します。
- ドメインに参加していない環境で AAD ユーザーグループを使用すると、アプリケーションアクセス制御が機能しません。
- 同じユーザーの同時セッションがある場合、ユーザーがインストールした UWP アプリを表示および開くことができない場合があります。
- Citrix Profile Management 2203 以前で生成されたプロファイルコンテナをアップグレードすると、プロファイルパスが誤って変更されます。
- ドメインに参加していない環境では、UWP アプリを開くことができない場合があります。
- ドメインに参加していない環境で、ユーザーがログオンしている間に Citrix Profile Management がプロファイルコンテナの内容を誤って削除します。

- Citrix Profile Management では、2 つのプロファイルコンテナディスクが同時に誤ってマウントされます。

既知の問題

- フルプロファイルコンテナまたはOneDriveコンテナが有効になっている場合、ユーザーがマシンにログオンすると、次のメッセージが表示されます。
  - ユーザーがコンテナを有効にする前にOneDriveフォルダを使用していた場合、および
  - コンテナが有効になった後、ユーザーが初めてマシンにログオンする場合。

  移行の問題(/en-us/profile-management/2402-ltsr/media/known-issues-2206-2.png)

  この問題を解決するには、**再試行**をクリックします。すると、OneDriveフォルダはコンテナに正常に移行されます。
- ユーザーが以下の状況でフォルダをゴミ箱に移動すると、「フォルダアクセス拒否」というメッセージが表示されます。
  - 部分プロファイルコンテナまたはOneDriveコンテナが有効になっている場合、ユーザーがいずれかのコンテナからフォルダを削除しようとすると。
  - フルプロファイルコンテナが有効になっている場合、ユーザーがユーザープロファイルフォルダ内にはないが、プロファイルと同じディスク上にあるフォルダを削除しようとすると。

  フォルダアクセス拒否(/en-us/profile-management/2402-ltsr/media/known-issues-2206-1.png)

  この問題を回避するには、代わりに完全に削除します。
  - フォルダを選択し、**Shift + Delete**を押して完全に削除します。
  - **ごみ箱のプロパティ**を**ファイルをゴミ箱に移動しない。削除時にファイルを直ちに削除する。**に設定します。

  ごみ箱のプロパティ(/en-us/profile-management/2402-ltsr/media/known-issues-2206-1-workaround.png)
- 既存のユーザープロファイルに対してフォルダリダイレクトを有効にすると、サブフォルダが失われる可能性があります。

この問題は、既存のCitrix Profile Management (CPM) ユーザープロファイルにのみ影響します。**フォルダーリダイレクト** (MicrosoftまたはCPM) がフォルダーに対して新しく有効にされ、同時に**フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**も有効になっている場合、サブフォルダーが新しい場所に移行しない可能性があります。

例えば、サブフォルダー (**FolderA**) が**ドキュメント**の下に存在し、**ドキュメント**がまだリダイレクトされていない場合、フォルダーリダイレクトを有効にすると、通常、次回のログオン時に**ドキュメント**フォルダーが新しいリダイレクト先に移行します。しかし、**フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**がオンになっている場合、**FolderA**とその内容は移行せず、失われる可能性があります。

回避策:

a. 既存のユーザープロファイルに対して**フォルダーリダイレクト**を有効にする前に、**フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**ポリシーを無効にします。
b. 次回のユーザーログオン後、リダイレクトされたフォルダーが新しい場所に正常に移行したことを確認します。
c. **フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**ポリシーを再度有効にします。

- Windows 11およびWindows Server 2025では、Citrix Profile Management 2402 CU4、2507 CU2、2607 LTSR、またはそれ以前のバージョンがインストールされていると、Windows Searchサービスがクラッシュする可能性があります。詳細については、「ネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを有効にする」を参照してください。

サードパーティ通知

Profile Management の現在のリリースには、以下のドキュメントで定義されている条件に基づいてライセンス供与されたサードパーティ製ソフトウェアが含まれている場合があります。

Profile Management サードパーティ通知

クイックスタートガイド

この記事では、Profile Management のインストールと構成に関するクイックリファレンスを提供します。

前提条件

すべてのシステム要件が満たされていることを確認してください。詳細については、システム要件を参照してください。

Profile Management のインストール

Profile Management は、Virtual Delivery Agent (VDA) のインストールに含まれています。VDA の場合、Profile Management をインストールまたはアップグレードするには、VDA ソフトウェアをインストールまたはアップグレードするだけです。

Profile Management の展開は、.msi ファイルと、.adm または .admx ファイルのいずれかをインストールすることで構成されます。ファイルをインストールするには、インストールとセットアップの手順に従ってください。

> **注：**
>
> 潜在的な競合を避けるため、Citrix Profile Management プロセス (`%ProgramFiles%\Citrix\User Profile Manager\UserProfileManager.exe`) をアンチウイルスソフトウェアの除外リストに追加してください。詳細については、Citrix Antivirus Best Practicesを参照してください。

Profile Management を集中管理で構成する場所を決定する

Profile Management を集中管理で構成する方法は3つあります。以下のいずれかの方法を選択してください。

- Active Directory の GPO を使用する
- Citrix Studio のポリシーを使用する

- ワークスペース環境管理™ (WEM) を使用する

  Active Directory の GPO を使用して Profile Management を構成する方法については、Knowledge Center の記事 CTX222893を参照してください。

  Citrix Studioのポリシーを使用してProfile Managementを構成する手順については、Knowledge Centerの記事CTX222893を参照してください。

  WEMを使用してProfile Managementを構成する手順については、Knowledge Centerの記事CTX229258を参照してください。

Profile Managementを構成する

基本設定を構成する

1. ユーザーストアを作成する

   ファイル共有の作成やフォルダー権限の設定など、安全なユーザーストアを作成するための推奨事項は、Microsoftの記事Deploying Roaming User Profilesで入手できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作において高レベルのセキュリティを確保します。

2. ユーザーストアへのパスを指定する
3. Profile Managementを有効にする
4. 基本設定を確認する

   基本設定を確認するには、次の手順を実行します。

   a. Citrix Studioで、**Enable logging**、**Logon**、および**Logoff**の各ポリシーを**Enabled**に設定します。

   b. VDAにログオンし、`gpupdate /force`を管理者として実行します。

   c. VDAからログオフし、再度ログオンします。

   d. デフォルトのログファイルパス`C:\Windows\System32\Logfiles\UserProfileManager`に移動し、`pm.log`ファイルを開き、ログオンイベントを探して、次のメッセージが存在することを確認します。

   ```
   Starting logon processing…

   Finished logon processing successfully in [s]:
   ```

Profile Managementの構成を計画する

1. Profile Managementの展開を計画するには、環境とユーザーに適した構成を形成する一連のポリシー設定を決定します。ユーザープロファイルの**自動構成**機能は、Citrix Virtual Apps and Desktopsの展開における意思決定の一部を簡素化します。

   展開の推奨アプローチを決定するには、環境に関する次の基本的な質問に答えてください。

   - パイロットまたは本番
   - プロファイルの移行または作成
   - 永続的またはプロビジョニング済み、および専用または共有
   - モバイルまたは静的
   - どのアプリケーションが使用されているか

2. それに応じてProfile Managementを構成するには、以下を実行します。

   - ユーザープロファイルをストリーム配信します。ユーザープロファイルのストリーム配信を参照してください。
   - アクティブライトバックを有効にします。アクティブライトバックの構成を参照してください。
   - 必須プロファイルを指定します。テンプレートまたは必須プロファイルの指定を参照してください。
   - 除外を構成します。項目の含める/除外を参照してください。
   - フォルダーリダイレクトを構成します。フォルダーリダイレクトの構成を参照してください。
   - アプリケーションを構成します。ネイティブOutlook検索エクスペリエンスの有効化を参照してください。

3. Profile Managementの設定を確認します。

   a. この記事で前述した基本設定を確認します。

   b. ポリシー設定については、`pm_configure.log` ファイルを確認してください。次のメッセージが存在することを確認します。

   ```
   Configuration value read from Policy: LoggingEnabled=

   Configuration value read from INI file: CEIPEnabled=
   ```

```
Configuration value PSAlwaysCache set neither in policy nor in INI
file. Defaulting to:
```

トラブルシューティング

詳細については、トラブルシューティング を参照してください。

Profile Management の仕組み

Profile Management は、同じユーザーによる同時ドメインログオンがプロファイルに複雑さや一貫性の問題を引き起こす環境におけるユーザープロファイルの欠点を解決します。たとえば、ユーザーがローミングプロファイルに基づいて2つの異なる仮想リソースへのセッションを開始した場合、最後に終了したセッションのプロファイルが最初のセッションのプロファイルを上書きします。「最終書き込み優先 (last write wins)」として知られるこの問題は、ユーザーが最初のセッションで行ったパーソナライズ設定をすべて破棄します。

この問題は、リソースサイロごとに個別のプロファイルを使用することで対処できます。ただし、このアプローチでは、管理オーバーヘッドとストレージ容量の要件が増加します。もう1つの欠点は、ユーザーがアクセスするリソースサイロによって異なる設定を経験することです。

Profile Management は、プロファイルを簡単かつ確実に最適化します。中間段階およびログオフ時に、レジストリの変更とプロファイル内のファイルおよびフォルダーは、各ユーザーのユーザーストアに保存されます。一般的に、ファイルが存在する場合、タイムスタンプが古い場合は上書きされます。

ログオン時に、ユーザーのレジストリエントリとファイルはユーザーストアからコピーされます。ローカルにキャッシュされたプロファイルが存在する場合、2つのセットは同期されます。その結果、すべてのアプリケーションとサイロのすべての設定がセッション中に利用可能になります。また、サイロごとに個別のユーザープロファイルを維持する必要もなくなります。Citrix® ストリーミングユーザープロファイルは、ログオン時間をさらに短縮できます。

Profile Management は、ネットワーク障害を経験するモバイルユーザー（オフラインプロファイル機能が構成されている場合）や、異なるオペレーティングシステムからリソースにアクセスするユーザー（クロスプラットフォーム設定機能が構成されている場合）のアプリケーション設定を保護するのに役立ちます。

注：Profile Management は、ローカルアカウントではなくドメインユーザーのログオンを処理します。

ネットワークベースのプロファイルが使用されている場合は、組織で Profile Management の導入を検討してください。強制プロファイルやローミングプロファイルなどの他のソリューションを実装し、Microsoft Windows の標準的な知識でそれらを維持することも可能です。ただし、展開が

制限されている場合（たとえば、ユーザーのカスタマイズが制限されているため強制プロファイルが適切なコールセンターなど）を除き、Profile Management が推奨される場合があります。

Citrix は、ユーザー固有のデータがプロファイルとは別に保存されるように、フォルダーリダイレクトを使用することを推奨しています。

ホームフォルダーとテンプレートのパスは、ネットワークの場所のみで構成する必要があります。

プロファイルについて

プロファイルの割り当て

Windowsでユーザーにプロファイルを割り当てるには、どのような方法がありますか?

この記事は、Citrix Profile Managementではなく、Microsoft Windowsにおけるプロファイルの割り当てについて言及しています。

ユーザーにプロファイルを割り当てるには、いくつかの方法があります。

- Active Directory (AD) のユーザーアカウントプロパティを使用する
- グループポリシー (GP) を使用する
- 上記の方法を使用して、Remote Desktop Services (旧称 Terminal Services) セッションに固有のプロファイルを割り当てる

これらの方法の一部は、特定のオペレーティングシステムでのみ利用可能です。

- **Remote Desktop Services**。Windows Server 2008 R2でRemote Desktop Servicesプロファイルを割り当てるには、GPO設定「Set path for Remote Desktop Services Roaming User Profile」を使用します。これは「Computer Configuration\\Administrative Templates\\Windows Component\\Remote Desktop Services\\Remote Desktop Session Host\\Profiles」にあります。以前のマルチセッションオペレーティングシステムでは、「Computer Configuration\\Administrative Templates\\Windows Components\\Terminal Services」にある設定「Set path for TS Roaming Profiles」を使用します。

  個々のユーザーのプロファイルを構成するには、ADのユーザーアカウントプロパティページで個々のアカウントに「Set path for TS Roaming Profiles」を設定することもできます。ただし、通常はGPでこの割り当てを行う方がはるかに優れています。

  ターミナルサーバーで設定「Use mandatory profiles」を使用して、強制プロファイルの使用を強制できます。

- **Windows 7、Windows 8、およびWindows Server**: ユーザーアカウントプロパティページを使用して、個々のアカウントに移動プロファイルを設定します。また、Windows Server 2008 ADおよびWindows 7デバイスの場合、GPO設定「Set roaming profile path for all users logging on to this computer」を使用できます。これは「Computer\\Administrative Templates\\System\\User Profiles」にあります。Windows 8またはWindows Server 2012コンピューターにログオンするユーザーの場合、Windows Server 2012のActive Directoryを使用してユーザーのホームフォルダーを設定することもできます。

複数の方法が使用されている場合、ドメインユーザーにプロファイルを配信するための優先順位は何ですか?

Profile Managementがユーザーのプロファイルを管理するために使用される場合、他のどのプロファイル割り当て方法よりも優先されます。Profile Managementによってプロファイルデータが管理されていないユーザーは、複数の方法を使用してプロファイルを割り当てられる可能性があります。実際に使用されるプロファイルは、次の優先順位に基づいています。

1. Citrixユーザープロファイル (つまり、Profile Managementによって作成されたプロファイル)
2. GPOによって割り当てられたリモートデスクトップサービスプロファイル
3. ユーザープロパティによって割り当てられたリモートデスクトップサービスプロファイル
4. GPOによって割り当てられた移動プロファイル (Windows Server 2008 AD および Windows 7 のみ)
5. ユーザープロパティによって割り当てられた移動プロファイル

Profile Management のアーキテクチャ

この記事では、ユーザー ストアとクロスプラットフォーム設定ストアのフォルダー構造について説明します。ユーザー ストアは、Citrix® ユーザー プロファイルの中央の場所です。クロスプラットフォーム設定ストアは、別の場所です。

Profile Management ストアに関する重要な情報

ユーザー ストアとクロスプラットフォーム設定ストアの構造は、情報提供とローカライズおよびトラブルシューティングの支援を目的としてここに記載されています。プロファイルデータの問題を最小限に抑え、セキュリティを維持するために設計された、次の重要な推奨事項に従ってください。

- どちらのストアの構造も変更しないでください。
- ストアのどの部分にもファイルやフォルダーを直接書き込まないでください。ユーザー ストアは、この点でリダイレクトされたフォルダーとは異なります。

- ユーザー ストアは、リダイレクトされたフォルダーとは別に保管してください。たとえば、`\\server1\profiles\%username%` と `\\server1\folders\%username%` のように、同じファイル サーバーまたは DFS 名前空間の別々の共有に保管できます。この手法により、バージョン 1 とバージョン 2 のプロファイルを一緒にサポートしたり、両方のプロファイル バージョンで共有される単一のリダイレクト フォルダー セットをサポートしたりすることがはるかに容易になります。
- ユーザーがユーザー ストアを見る必要はないため、ドライブ文字を割り当てないでください。
- ユーザー ストアにクォータを課さないでください。プロファイル サイズを制限する場合は、クォータを使用するのではなく、項目を除外することを検討してください。

ユーザー ストアのフォルダー構造

ユーザー ストアは、デフォルトでユーザーのホーム ディレクトリの **WINDOWS** フォルダーになります。これにより、パイロット インストールは簡素化されますが、本番システムでは、ユーザー ストアをネットワーク共有、または（最高の拡張性を得るために）DFS 名前空間として構成してください。エンタープライズ対応のユーザー ストアのサポートされる構成については、「Profile Management を使用した高可用性と災害復旧」で説明されています。

安全なユーザー ストアの作成に関する推奨事項は、Microsoft TechNet Web サイトの「移動ユーザー プロファイル用のファイル共有を作成する」という記事で入手できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作に対して高いレベルのセキュリティを保証します。また、ユーザー ストアへのアクセスを構成する際には、Citrix ユーザー プロファイルを変更または削除するために必要な Administrators グループを含めてください。

注： Windows 7 および Windows 2008 R2 クライアント デバイスでは、Windows 2012 R2 ファイル サーバーで共有を作成する際に、**Encrypt data access** チェック ボックスをオンにしないでください。

ルート レベルのユーザー ストアのフォルダー構造を次の表に示します。

フォルダ	注
	ユーザー ストア内のプロファイルのルート。
`\UPM_Profile`	このフォルダーには、プロファイルからのファイルとフォルダーが含まれています。
`\UPM_Drive_C`	このフォルダーには、プロファイル外から含まれる項目（この場合はドライブ C から）が含まれています。このフォルダーは、Profile Management 4.x 以前からのアップグレード時

フォルダ	注
	に存在します。Profile Management 5.0 では、プロファイル外の項目の管理はサポートされていません。
`\Pending`	このフォルダーには、ロック ファイル、保留中のファイル、およびストリーミング機能が使用されている場合はスタンプ ファイルが含まれています。

いくつかの例をこの表に示します。

フォルダー名の例	注
`\UPM_Profile\Data`	ユーザー プロファイル内の **Data** フォルダーの同期されたコンテンツ。
`\UPM_Profile\AppData_upm_var`	ユーザー プロファイル内の非ローカライズされた Application Data フォルダーの同期されたコンテンツ。このフォルダーは、Profile Management 4.x 以前からのアップグレード時に存在します。バージョン 1 プロファイル（Application Data がその例となるフォルダー）の管理は、Profile Management 5.0 ではサポートされていません。

保留領域

ユーザー ストアには保留領域が含まれます。この領域は、ストリーミングされたユーザー プロファイルとアクティブなライトバック機能によって使用される一時的な保持領域です。ユーザーが最後のセッションからログオフした後、すべてのファイルは保留領域からユーザー ストアに同期されます。新しいセッションでは、ユーザー ストアと保留領域の両方からファイルがダウンロードされるため、ユーザーは常に最新のプロファイルを体験できます。

サーバーが応答しなくなった場合、保留領域内のファイルをユーザー ストアに戻すタイムアウトを設定できます（ストリーミングされたユーザー プロファイル機能の一部として構成されている場合）。

複数のプラットフォームを持つユーザー ストアのフォルダー構造

クロスプラットフォーム設定機能を使用する場合、複数のプラットフォームが関係します。各プラットフォームのプロファイルを分離するために、プラットフォーム固有のフォルダーを定義する必要があります。通常、これは「ユーザー ストアへのパス」ポリシーで Profile Management 変数を使用して行います（たとえば、パスに `%USERNAME%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` を使用します）。

クロスプラットフォーム設定ストアは、クロスプラットフォーム設定機能が構成された後、サポートされているアプリケーションの設定を保持します。ストアの名前と場所は、構成時に指定します（「クロスプラットフォーム設定ストアへのパス」ポリシーを使用）。このストアには、オペレーティング システム間でローミングするユーザー設定のサブセットが保持されます。

たとえば、Windows XP と Windows 7 の間で設定をローミングしたい場合があります。プラットフォーム固有のフォルダーには、Windows XP と Windows 7 に固有のユーザー設定が含まれます。クロスプラットフォーム設定ストアには、これらのオペレーティング システム間でローミングする設定のサブセットが含まれます。ログオン時に、このサブセットはプラットフォーム固有のフォルダーにコピーされ、その一部として残ります。ログオフ時に、サブセットへの変更が抽出され、クロスプラットフォーム設定ストアに戻されます。

各プラットフォーム固有のフォルダーには、標準のサブフォルダー（例：UPM_Profile）が含まれています。詳細については、「ユーザー ストアのフォルダー構造」を参照してください。さらに、UPM_CPS_Metadata サブフォルダーも存在します。このシステムによって作成されたフォルダーには、オペレーティングシステム間で共有される一時設定が含まれています。

ユーザー ストアと AD フォレスト

Citrix ユーザープロファイルは、フォレストをまたいで管理することはできません。同じフォレスト内のドメインをまたいで管理することはでき、同じログオン名を持つ複数のユーザーがフォレスト内の同じリソースにアクセスできます。これには、ユーザー ストアへのパスにある `%USERDOMAIN%` および `%USERNAME%` 変数を使用してプロファイルを一意に識別することが含まれます。

ただし、この場合、ユーザー ストアへのパスを設定する際に、同じログオン名を区別するために変数を使用する必要があります。これを行うには、ドメイン名変数をパスに追加します。また、ユーザー ストアのアクセス許可を設定し、Active Directory のユニバーサルグループを使用して Profile Management の処理済みグループ設定を有効にする必要があります。

オペレーティングシステムのバージョンを設定するには、%ProfVer% などの手動で定義されたシステム変数を使用できます。または、Profile Management 変数を使用して、オペレーティングシ

ステム名、ビット数、またはプロファイルバージョンを設定できます。AD フォレスト内のユーザー ストアパスの例については、「ユーザー ストアへのパスを指定する」を参照してください。

ユーザー ストアのローカライズ

次の表は、プロファイルデータがユーザー ストアとの間で移動されるときに、Profile Management がフォルダーをローカライズおよび非ローカライズする方法の概要を示しています。フォルダー名のみがローカライズおよび非ローカライズされます。たとえば、スタートメニューのエントリやレジストリ設定は、Profile Management によって正しい言語に翻訳されません。

この情報は、Profile Management 4.x 以前からアップグレードする場合にのみ関連します。この場合、バージョン 1 のプロファイルが存在する可能性があります。Profile Management 5.0 では、バージョン 1 のプロファイルの管理はサポートされていません。

バージョン 1 英語フォルダー	ユーザー ストアフォルダー	ユーザープロファイルに対する相対フルパス
アクセシビリティ	Accessibility_upm_var	`\\Start Menu\Programs\Accessories`
アクセサリ	Accessories_upm_var	`\\Start Menu\Programs`
管理ツール	AdminTools_upm_var	`\\Start Menu\Programs`
アプリケーションデータ	AppData_upm_var	`\Local Settings`
クッキー	Cookies_upm_var	
デスクトップ	Desktop_upm_var	
エンターテイメント	Entertainment_upm_var	`\\Start Menu\Programs\Accessories`
お気に入り	Favorites_upm_var	
履歴	History_upm_var	`\Local Settings`
リンク	Links_upm_var	`\Favorites`
ローカル設定	LocalSettings_upm_var	

バージョン 1 英語フォルダー	ユーザー ストアフォルダー	ユーザープロファイルに対する相対フルパス
マイドキュメント	MyDocuments_upm_var	
マイミュージック	MyMusic_upm_var	`\My Documents`
マイピクチャ	MyPictures_upm_var	`\My Documents`
マイビデオ	MyVideos_upm_var	`\My Documents`
NetHood	NetHood_upm_var	
PrintHood	PrintHood_upm_var	
プログラム	Programs_upm_var	`\Start Menu`
最近	Recent_upm_vars	
スタートメニュー	StartMenu_upm_var	
テンプレート	Templates_upm_var	
インターネット一時ファイル	TemporaryInternetFiles_upm_var	`\Local Settings`
送る	SendTo_upm_var	
スタートアップ	Startup_upm_var	`\\Start Menu\Programs`
システムツール	SystemTools_upm_var	`\\Start Menu\Programs\Accessories`

Profile Management のユースケース

Citrix Profile Management は、アプリケーションがユーザーにどのように配信されるか、またはどこに格納されているかに関わらず、さまざまなシナリオでユーザーのプロファイルを管理するために実装できます。以下に、これらのシナリオの例を示します。

- 公開アプリケーションを使用する Citrix Virtual Apps™
- 公開デスクトップを使用する Citrix Virtual Apps

- 分離環境にストリーミングされたアプリケーションを使用する Citrix Virtual Apps
- Citrix Virtual Desktops™ にストリーミングされたアプリケーション
- Citrix Virtual Desktops にインストールされたアプリケーション
- 物理デスクトップにストリーミングされたアプリケーション
- 物理デスクトップにローカルにインストールされたアプリケーション

これらのシナリオのうち、Citrix は以下を最も一般的なユースケースと見なしています。

- **複数セッション** - ユーザーが複数の Citrix Virtual Apps サーバーサイロにアクセスするため、複数のセッションが開かれます。ただし、サーバー上のアプリケーション分離とストリーミングは、サーバーサイロの代替手段であることに注意してください。このシナリオについては、このトピックで詳しく説明します。
- **「最後の書き込みが優先」とローミングプロファイルの整合性の問題** - ローミングプロファイルへの最後の書き込みにより、すべての設定が保存されます。そのため、複数のセッションが開いていて一時的な変更が行われた場合、ローミングプロファイルが正しいデータを保持しない可能性があります。さらに、ネットワーク、ストレージの問題、またはその他の問題の結果として、設定がプロファイルに正しく書き込まれない可能性があります。このシナリオについては、このトピックで詳しく説明します。
- **大規模なプロファイルとログオン速度** - プロファイルの肥大化により、ユーザープロファイルが扱いにくくなり、ストレージと管理の問題が発生する可能性があります。通常、ログオン時に Windows はユーザーのプロファイル全体をネットワーク経由でローカルユーザーデバイスにコピーします。肥大化したプロファイルの場合、この動作によりユーザーのログオン時間が長くなる可能性があります。

複数セッション

特に大規模な環境では、ユーザーが、同じファーム内であろうと複数のファーム内であろうと、異なる Citrix Virtual Apps サーバーに格納されている異なるアプリケーションにアクセスするために、複数のセッションを開く必要がある場合があります。可能な場合は、アプリケーション分離またはストリーミングを検討して、同じ Citrix Virtual Apps サーバーにアプリケーションを格納し、ユーザーが単一のサーバーからすべてのアプリケーションにアクセスできるようにし、それによって単一のセッションを使用できるようにします。ただし、事業部門が特定のサーバーを制御している場合や、アプリケーションをストリーミングできない場合は、これが不可能な場合があります。

Citrix仮想アプリサーバーから様々なアプリケーションにアクセスすることがユーザーにとって本当に必要であると判断された場合、プロファイルへの影響を特定する必要があります。

以下の図は、複数のセッションが存在する場合にアプリケーション設定が失われる可能性がある例を示しています。

図(/en-us/profile-management/2402-ltsr/media/upm-multiple-sessions-1.png)

例えば、MaryはApp A、App B、App Cにアクセスしたいと考えており、それぞれServer 1、Server 8、Server 12にルーティングされます。各アプリケーションにログオンすると、Maryのターミナルサービスローミングプロファイルが各サーバーにロードされ、各セッションのフォルダーがリダイレクトされます。MaryがServer1のApp Aにログオンしているときに、Setting1を変更し、そのセッションからログオフします。その後、Maryは他の2つのアプリケーションでの作業を完了し、ログオフします。

ログオフ時、MaryがServer 1のセッション内で行った変更は上書きされます。これは、最後に閉じられたセッションの設定が保持され、一時的な変更は保持されないためです。翌日、Maryが App Aにログオンすると、彼女が行った変更が表示されないため、不満を感じます。

プロファイル管理は、一般的にこの状況の発生を防ぐことができます。プロファイル管理は、セッション中に変更された特定の設定のみを書き戻します。その他の変更されていない設定はすべてそのまま残ります。したがって、発生する可能性のある唯一の競合は、Maryが別のセッション内でSetting1を変更した場合です。ただし、このシナリオでプロファイル管理が使用されている場合、ユーザーは最新の変更が保持されることを期待するでしょう。そして、実際にそのようになります。

「最後の書き込みが優先される」問題とローミングプロファイルの一貫性の問題

このシナリオは、このトピックの最初のシナリオと似ています。「最後の書き込みが優先される」問題はさまざまな形で現れる可能性があり、アクセスするデバイスの数が増えるにつれてユーザーの不満が高まる可能性があります。

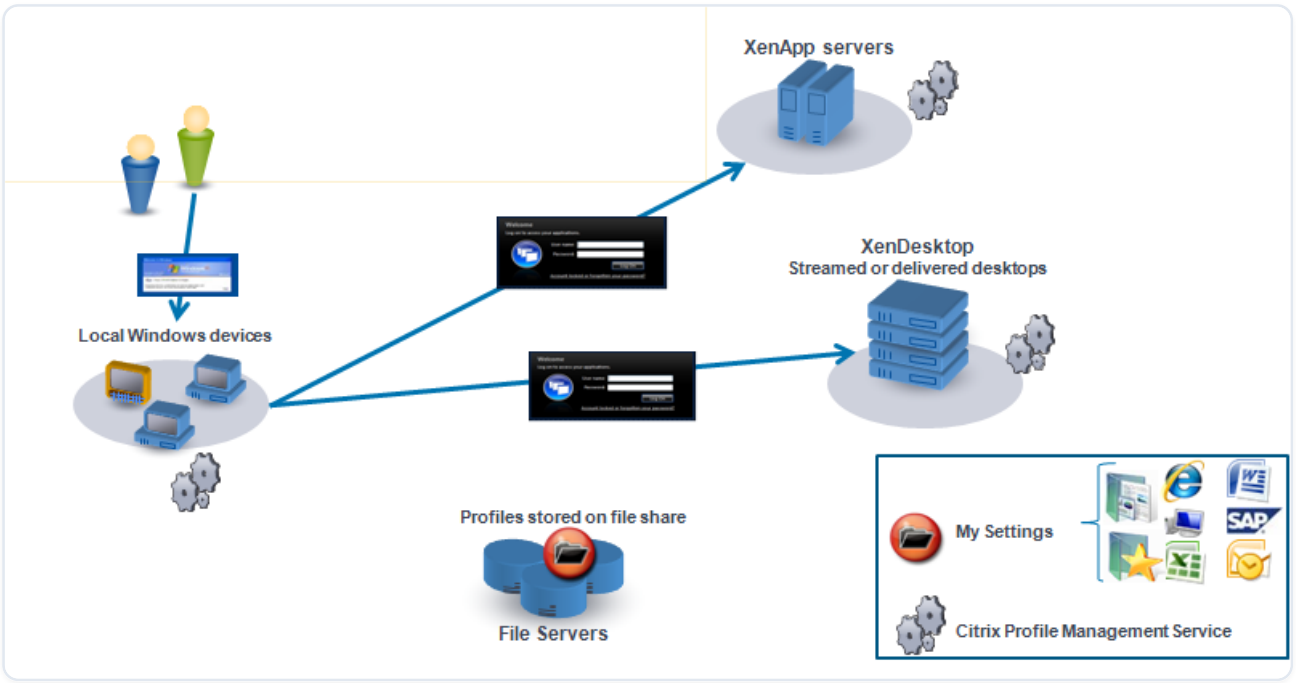
ローミングプロファイルは、リダイレクトされたフォルダーを除き、すべてのプロファイルデータを保持するため、ユーザープロファイルは大きくなる可能性があります。これにより、プロファイルをダウンロードする必要があるためログオン時間が増加するだけでなく、特にネットワークの問題がある場合、ログオフの書き込みフェーズ中に一貫性の問題が発生する可能性が高まります。

プロファイル管理を使用すると、特定のデータをユーザープロファイルから除外できるため、ユーザープロファイルを最小限のサイズに保つことができます。差分のみがプロファイルに書き込まれるため、ログオフの書き込みフェーズはデータ量が少なく、高速です。プロファイル管理は、一時的なデータにプロファイルを使用するが、アプリケーション終了時にそれらをクリーンアップしないアプリケーションにとって有益です。

複数のリソースにアクセスする

ユーザーが複数のリソースにアクセスするにつれて、プロファイルはより複雑になります。プロファイルがネットワークに保存されている場合、Microsoft Windows はレジストリを使用してユーザー設定を保存します。プロファイルはログオン時にネットワークからローカルデバイスにコピーされ、ログオフ時にネットワークにコピーし直されます。日常的に、ユーザーは複数のコンピューターにアクセスし、デスクトップとラップトップを切り替え、Citrix Virtual Apps and Desktops™ または Citrix DaaS (旧 Citrix Virtual Apps and Desktops service) で作成された仮想リソースにアクセスします。

この図は、単一の Citrix® ユーザープロファイルが、複数のリソースにログオンするユーザーにどのように追従するかを示しています。



例えば、ユーザーはローカルの物理デスクトップを持ち、そこから Citrix Virtual Apps で公開されたアプリケーションにアクセスします。また、Citrix Virtual Desktops で作成された仮想デスクトップにもアクセスします。設定が適切に構成されていない限り、ユーザーの設定はこれらすべてのリソースで統一されません。

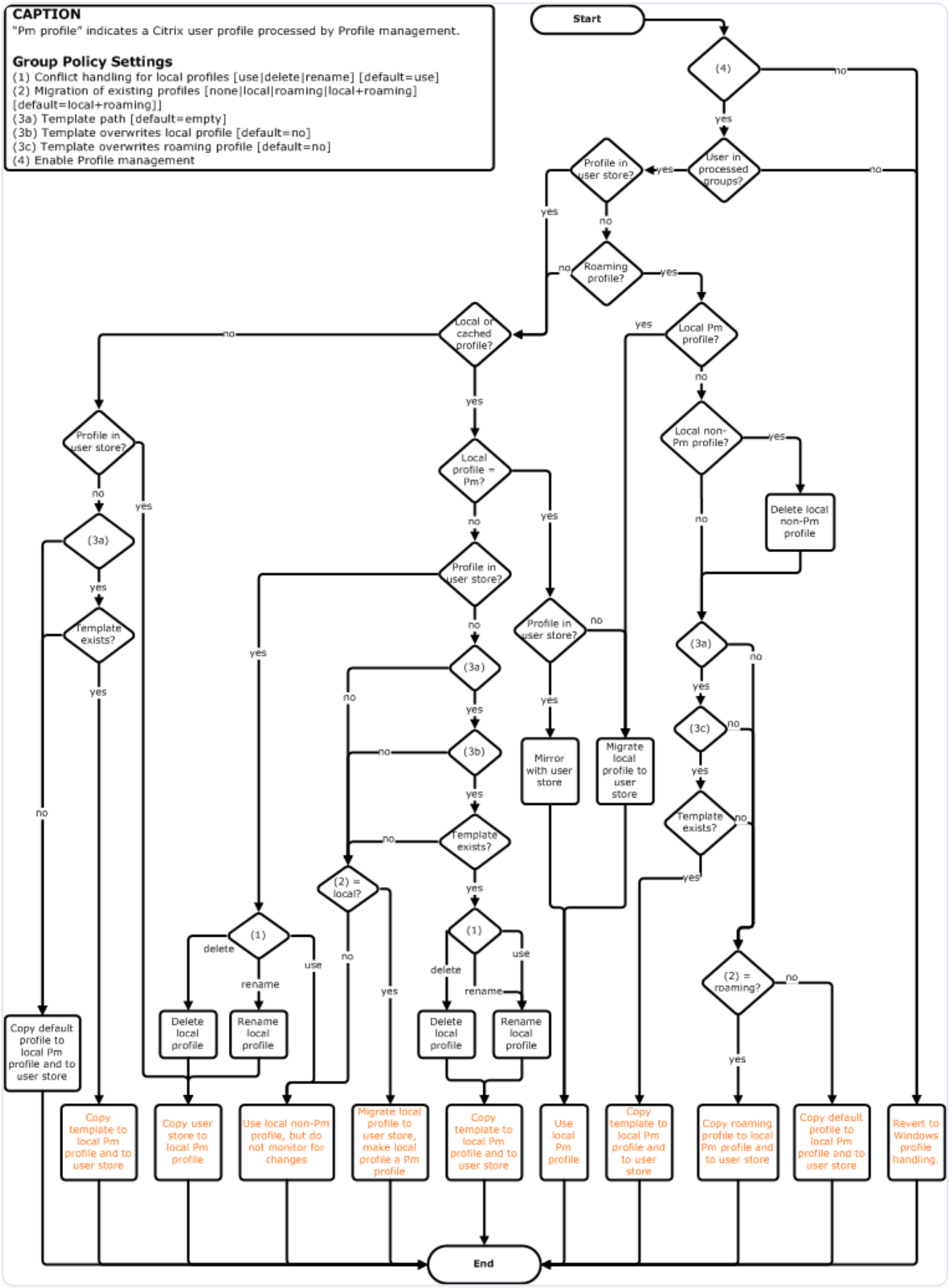
さらに、共有リソースにアクセスする場合、移動プロファイルの動作は「最後の書き込みが優先される」ことを意味します。例えば、管理者が移動プロファイルを有効にし、ユーザーがローカルデスクトップの背景色を変更したとします。その後、ユーザーは Citrix 仮想デスクトップにログオンし、ローカルデスクトップからログオフし、仮想デスクトップからログオフします。ローカルデスクトップと仮想デスクトップの両方が同時に開かれており、最後のログオフは仮想デスクトップからでした。したがって、仮想デスクトップセッションからの設定がプロファイルに最後に書き込まれたものであり、背景色の変更は失われます。

ログオン図

この図は、ユーザープロファイルの移行戦略の詳細を検討するのに役立ちます。また、パフォーマンスの以下の側面についても説明しています。

- プロファイルを移行すると、2つのネットワークコピーが発生し、ログオンプロセスが遅くなります。例えば、「**デフォルトプロファイルをローカルPmプロファイルとユーザーストアにコピー**」という操作には、以下の2つのコピーが含まれます。1つはローミングプロファイルストアからローカルコンピューターへの完全なプロファイルコピー、もう1つはローカルコンピューターからユーザーストアへの完全なプロファイルコピーです。
- キャッシュされたプロファイルが使用される場合、ネットワークを介したプロファイルデータのコピーは行われません。

図を下から上に読み進めてください。下部のボックスにある目的の操作（例えば、「**デフォルトプロファイルをローカルPmプロファイルとユーザーストアにコピー**」）を確認します。そして、必要な移行設定を特定するために、パスを逆方向にたどります。

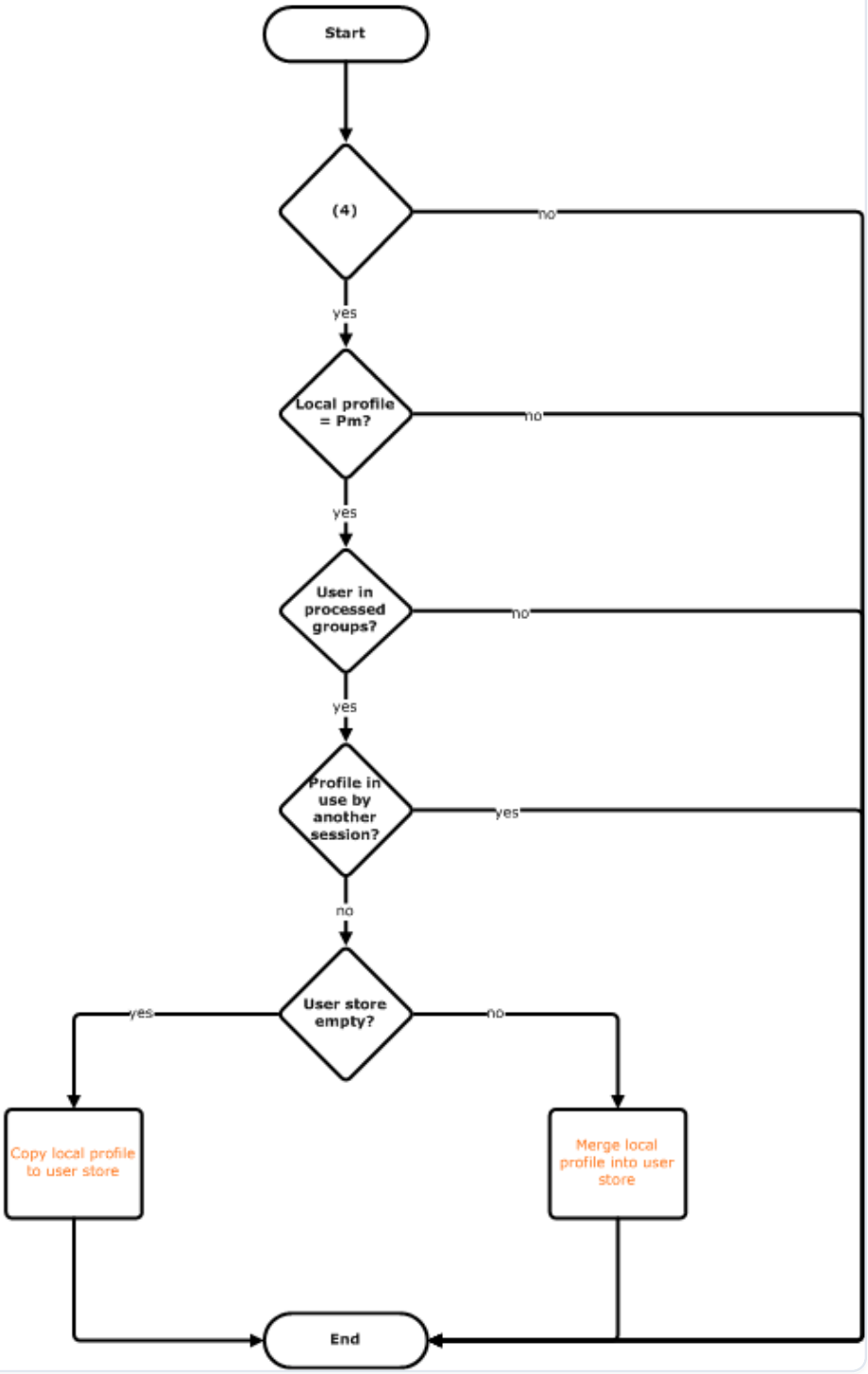

CAPTION
"Pm profile" indicates a Citrix user profile processed by Profile management.
Group Policy Settings
(1) Conflict handling for local profiles [use|delete|rename] [default=use]
(2) Migration of existing profiles [none|local|roaming|local+roaming] [default=local+roaming]]
(3a) Template path [default=empty]
(3b) Template overwrites local profile [default=no]
(3c) Template overwrites roaming profile [default=no]
(4) Enable Profile management
Start
(4)
User in processed groups?
Profile in user store?
Roaming profile?
Local or cached profile?
Local Pm profile?
Local non-Pm profile?
Delete local non-Pm profile
Local profile = Pm?
Profile in user store?
(3a)
Template exists?
(3b)
(2) = local?
(1)
Delete local profile
Rename local profile
Mirror with user store
Migrate local profile to user store
(3c)
(2) = roaming?
Copy default profile to local Pm profile and to user store
Copy template to local Pm profile and to user store
Copy user store to local Pm profile
Use local non-Pm profile, but do not monitor for changes
Migrate local profile to user store, make local profile a Pm profile
Use local Pm profile
Copy roaming profile to local Pm profile and to user store
Revert to Windows profile handling.
End

ログオフ図

この図は、ログオフ時にプロファイルデータをコピーまたはマージするために使用されるロジックを示しています。

CAPTION
"Pm" indicates a Citrix user profile processed by Profile management.

Group Policy Settings
(1) Conflict handling for local profiles [use|delete|rename] [default=use]
(2) Migration of existing profiles [none|local|roaming|local+roaming] [default=local+roaming]]
(3a) Template path [default=empty]
(3b) Template overwrites local profile [default=no]
(3c) Template overwrites roaming profile [default=no]
(4) Enable Profile management



デプロイメントを計画する

Profile Management の展開を計画するには、環境とユーザーに適した構成を形成する一連のポリシー設定を決定します。自動構成機能は、Citrix 仮想デスクトップの展開における意思決定の一部を簡素化します。あらゆる展開でこの重要なタスクを実行するためのガイドとして、「構成を決定する」を参照してください。

構成を決定し、それをレビューおよびテストした後、一般的な展開は次の要素で構成されます。

1. ユーザーストアの作成
2. Profile Management のインストール
3. Profile Management の有効化

.ini ファイルを使用したパイロットスタディの計画

以下の情報は、パイロットスタディまたは評価中に Profile Management の .ini ファイルを使用する際に役立つことを目的としています。

重要：評価目的で .ini ファイル (UPMPolicyDefaults_all.ini) を使用する予定がある場合は、本番環境でグループポリシー (GP) の使用に切り替える前に、ファイルの名前を変更してください。たとえば、ファイルの名前を UPMPolicyDefaults_all_old.ini に変更します。ファイルの名前を変更することで、本番設定のみが適用され、評価中に指定した設定が使用されないことを確実にできます。

ファイルの名前が変更されていない場合、Profile Management はグループポリシーで構成されていない設定がないかファイルを調べ、見つかった非デフォルト設定を採用します。したがって、不要な設定が導入されるリスクを排除するには、本番環境で使用したいすべての設定を .ini ファイルではなくグループポリシーを使用して構成してください。

.ini ファイルには、.adm ファイルおよび .admx ファイルと同じポリシーが含まれていますが、ポリシーの名前は異なります。GP の名前に慣れていて、.ini ファイルを使用したパイロットスタディを計画している場合は、「Profile Management ポリシー」の表を使用して名前を比較してください。

.ini ファイルの展開の詳細については、「Profile Management のアップグレード」および「ローカル GPO を使用した Profile Management のテスト」を参照してください。

構成を決定する

Profile Management を構成するには、環境に関する次の基本的な質問に答えることをお勧めします。

1. パイロットまたは本番
2. プロファイルの移行または作成
3. 永続的またはプロビジョニング済み、および専用または共有
4. モバイルまたは静的
5. 使用中のアプリケーション

回答に基づいて、展開用に Profile Management を構成します。その他のすべてのポリシーはデフォルトのままにしておくことができます。

次のステップ

- インストールとセットアップ
- トラブルシューティング

ヒント

Profile Management の設定を確認および展開する際は、以下のヒントを参照してください。

UPMConfigCheck ツールを使用して設定を確認する

UPMConfigCheck は、ライブの Profile Management 展開を検査し、最適に構成されているかどうかを判断する PowerShell スクリプトです。詳細については、Knowledge Center の記事 CTX132805 を参照してください。

コンピューターをOUにグループ化する

質問への回答が異なるコンピューターセットで同じである場合は、それらをActive Directoryの組織単位 (OU) にグループ化することを検討してください。また、そのOUにアタッチされた単一のグループポリシーオブジェクト (GPO) を使用して、プロファイル管理を構成することも検討してください。

これらの質問への回答が異なる場合は、コンピューターを別々のOUにグループ化することを検討してください。

あるいは、ドメインがWMIフィルタリングをサポートしている場合は、すべてのコンピューターを同じOUにグループ化し、適切に構成されたGPO間で選択するためにWMIフィルタリングを使用できます。

パイロットまたは本番

パイロット展開の目的は、ソリューションを迅速かつ確実に実証できることです。重要な目標は、パイロット内のコンポーネントの数を減らすことかもしれません。Profile Managementの場合、2つのコンポーネントはユーザー ストアと、プロファイルが処理されるユーザーの選択です。

ポリシー: ユーザー ストアへのパス

Citrix®ユーザープロファイル用のユーザー ストアのセットアップは、Windowsローミングプロファイル用のプロファイル ストアのセットアップとまったく同じです。

パイロット展開の場合、これらの考慮事項は無視できることがよくあります。ユーザー ストアへのパス ポリシーのデフォルト値は、ユーザーのホームディレクトリにある **Windows** フォルダーです。これは、単一のオペレーティングシステム（したがって、単一のプロファイルバージョン）のみが展開されている限り、単一プラットフォームのパイロットでうまく機能します。プロファイルバージョンの詳細については、プロファイルについてを参照してください。このオプションは、ユーザーのホームディレクトリに十分なストレージがあり、ファイルサーバーのクォータが適用されていないことを前提としています。Citrixは、プロファイルでのファイルサーバークォータの使用を推奨していません。その理由は、複数のファイルサーバーでCitrixユーザープロファイルを共有するに記載されています。

本番展開の場合、セキュリティ、負荷分散、高可用性、および災害復旧を慎重に考慮する必要があります。ユーザー ストアの作成と構成については、以下のトピックの推奨事項に従ってください。

- Profile Managementのアーキテクチャ
- ユーザー ストアを作成する
- ユーザー ストアへのパスを指定する
- Profile Managementによる高可用性と災害復旧

ポリシー: 処理されるグループ、除外されるグループ

本番展開の複雑さにより、Profile Managementの展開をすべてのユーザーに同時にリリースするのではなく、段階的に行う必要がある場合があります。展開が進行中の間、異なるリソースに接続すると異なるプロファイルエクスペリエンスが得られることをユーザーに伝えることができます。

パフォーマンス上の理由から、Profile ManagementはEULAによってライセンスされており、組み込みのライセンスチェックは行われません。ライセンスの割り当ては、ユーザーをActive Directory (AD) ユーザーグループに割り当てるか、適切な既存のADグループを使用することで管理できます。

パイロット展開では、Profile Managementの使用は、単一の代表的なADグループを使用できない複数の部門からの少数のユーザーグループへの招待によって制限されます。この場合、処理されるグループと除外されるグループのポリシーは未構成のままにします。Profile Managementはグループメンバーシップのチェックを行わず、すべてのユーザーが処理されます。

これらのポリシーの詳細については、処理されるグループのプロファイルを定義するを参照してください。

重要: すべての場合において、Profile Management によって処理されるユーザー数が、関連するEULAで定められた制限を超えないように確認してください。

プロファイルを移行または作成する

Profile Managementの展開を活用して、組織のプロファイルを更新できます。最初は小規模でカスタマイズされたプロファイルを使用し、それへの追加を厳密に制御します。あるいは、既存のプロファイルをProfile Management環境に移行し、長年にわたって蓄積された個人設定を保持する必要があるかもしれません。

既存のプロファイルを移行することを決定した場合は、「既存のプロファイルの移行」および「ローカルプロファイルの競合処理」ポリシーを構成します。

次の図は、この質問に対する回答に基づいてこれらのポリシーを構成する方法を示しています。

図(/en-us/profile-management/2402-ltsr/media/upm-migrate.png)

ポリシー: テンプレートプロファイル

まったく新しいプロファイルセットを作成する場合は、「テンプレートプロファイル」ポリシーを使用してこの目的のテンプレートを作成することを検討してください。詳細については、「テンプレートまたは必須プロファイルを指定する」を参照してください。テンプレートを作成しない場合、Profile ManagementはユーザーにデフォルトのWindowsプロファイルを提供します。テンプレートが不要な場合は、このポリシーを無効のままにします。

テンプレートプロファイルポリシーは、**ユーザーストアへのパス**ポリシーに似ています。このポリシーは、Profile Managementによって管理されているコンピューターにユーザーが初めてログオンしたときに、ユーザープロファイルを作成するための基礎として使用できるプロファイルの場所を指定します。

オプションで、すべてのログオンに対してテンプレートをCitrix®必須プロファイルとして使用できます。計画の一環として、ユーザーがアクセスするアプリケーションの特定などのタスクを実行する必要があります。それに応じて、プロファイル内のレジストリの状態、ショートカット、および

デスクトップ設定を構成する必要があります。プロファイルフォルダーのアクセス許可を設定し、ユーザーのログオンスクリプトを変更する必要があります。

> **注:**
>
> Citrix Virtual Desktops™展開で必須プロファイルを選択する場合は、Profile Managementの.admまたは.admxファイルではなく、Citrix Studioを使用することをお勧めします。

永続的かプロビジョニング済みか、および専用か共有か

プロファイルを作成するマシンの種類は、構成の決定に影響します。主な要因は、マシンが永続的かプロビジョニング済みか、および複数のユーザーで共有されるか、1人のユーザー専用であるかです。

永続システムには何らかの種類のローカルストレージがあり、その内容はシステムがオフになっても永続することが期待されます。永続システムは、SANなどのストレージテクノロジーを使用して、ローカルディスクの模倣を提供する場合があります。対照的に、プロビジョニング済みシステムは、ベースディスクと何らかの種類のIDディスクから「オンザフライ」で作成されます。ローカルストレージは通常、RAMディスクまたはネットワークディスクによって模倣され、後者は高速リンクを備えたSANによって提供されることがよくあります。プロビジョニングテクノロジーは通常、Provisioning ServicesまたはMachine Creation Services™（あるいはサードパーティ製の同等品）です。プロビジョニング済みシステムが永続的なローカルストレージを持つ場合もあり、これはPersonal vDiskによって提供されることがあります。これらは永続的として分類されます。

これら2つの要因を合わせると、以下のマシンタイプが定義されます。

- **永続的かつ専用** - 例としては、Machine Creation Services（Citrix virtual desktops™内）で作成された、静的割り当てとPersonal vDiskを持つシングルセッションOSマシン、および物理ワークステーションとラップトップで作成されたPersonal vDiskを持つデスクトップがあります。
- **永続的かつ共有** - 例としては、Machine Creation Services（Citrix virtual desktops内）で作成されたマルチセッションOSマシン、およびCitrix virtual apps™サーバーがあります。
- **プロビジョニング済みかつ専用** - 例としては、Provisioning Services（Citrix virtual desktops内）で作成された、静的割り当てを持つがPersonal vDiskを持たないシングルセッションOSマシンがあります。

- **プロビジョニング済みかつ共有** - 例としては、Provisioning Services（Citrix virtual desktops内）で作成された、ランダム割り当てを持つマルチセッションOSマシン、およびCitrix virtual appsサーバーで作成されたPersonal vDiskを持たないデスクトップがあります。

以下のProfile Managementポリシー設定は、異なるマシンタイプに対する推奨ガイドラインです。これらは通常うまく機能しますが、展開の要件に応じて逸脱することもできます。

注：Citrix virtual desktops展開では、ログオフ時にローカルキャッシュされたプロファイルを削除、プロファイルストリーミング、および常にキャッシュは、自動構成機能によって適用されます。

ポリシー	永続的かつ専用	永続的かつ共有	プロビジョニング済みかつ専用	プロビジョニング済みかつ共有
ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除	無効	有効	無効 (注 5)	有効
プロファイルストリーミング	無効	有効	有効	有効
常にキャッシュ	有効 (注 1)	無効 (注 2)	無効 (注 6)	無効
アクティブライトバック	無効	無効 (注3)	有効	有効
ローカル管理者のログオンを処理する	有効	無効 (注4)	有効	有効 (注7)

注

1. このマシンタイプではプロファイルストリーミングが無効になっているため、 設定は常に無視されます。
2. を無効にします。ただし、このポリシーを有効にし、ファイルサイズ制限 (MB単位) を定義することで、ログオン後できるだけ早く大きなファイルがプロファイルに読み込まれるようにすることができます。このサイズ以上のファイルは、できるだけ早くローカルにキャッシュされます。

3. Citrix Virtual Appsサーバー間をローミングするユーザーのプロファイルへの変更を保存する場合を除き、 を無効にします。この場合は、このポリシーを有効にします。
4. ホスト型共有デスクトップの場合を除き、 を無効にします。この場合は、このポリシーを有効にします。
5. ログオフ時のローカルキャッシュプロファイルの削除を無効にします。これにより、ローカルにキャッシュされたプロファイルが保持されます。マシンが個々のユーザーに割り当てられているため、プロファイルがキャッシュされている場合、ログオンが高速になります。
6. 常にキャッシュを無効にします。ただし、このポリシーを有効にし、ファイルサイズ制限（MB単位）を定義することで、ログオン後できるだけ早く大きなファイルがプロファイルに読み込まれるようにすることができます。このサイズ以上のファイルは、できるだけ早くローカルにキャッシュされます。
7. ローカル管理者のログオン処理を有効にします。ただし、Citrix Virtual Appsサーバー間をローミングするユーザーのプロファイルは除きます。この場合、このポリシーを無効にします。

モバイルまたは静的

マシンはActive Directoryドメインに常時接続されていますか？ラップトップや同様のモバイルデバイスは、おそらく接続されていません。同様に、一部の展開では、永続的なローカルストレージを持つ固定マシンがあるかもしれませんが、それらのマシンはデータセンターから長期間分離されている場合があります。例えば、遠隔地の支社が衛星通信によって本社と接続されている場合などです。もう1つの例は、インフラストラクチャが復旧中で、電力や通信が断続的になる災害復旧の場合です。

通常、Profile Managementは、ネットワークが利用できない間にユーザーがログオフしない限り、短時間のネットワーク障害（24時間未満）に対して回復力があります。このような状況では、ログオンプロセスを大幅に高速化するいくつかの方法でProfile Managementを最適化できます。これが静的ケースです。

長期間の切断が予想される場合、または企業ネットワークから切断されている間にユーザーがコンピューターからログオフまたはシャットダウンできる必要がある場合、Profile Managementを最適化することはできません。ユーザーが再接続すると、プロファイル全体がユーザーストアからフェッチされるため、ログオンが遅くなります。これがモバイルケースです。

モバイルケース

長期間の切断（およびActive Directoryドメインへの断続的な接続のみ）の場合、Offline profile supportポリシーを有効にします。このアプローチにより、サポートされていない最適化を制御す

る以下のポリシーの効果が自動的に無効になります。これらのポリシーはグループポリシーで無効になっているように見えないかもしれませんが、効果はありません。

- プロファイルストリーミング
- 常にキャッシュ

注: If オフラインプロファイルサポートが有効になっている場合、 **アクティブライトバック**は尊重されますが、コンピューターがネットワークに接続されている場合にのみ機能します。

静的ケース

ポリシー: オフラインプロファイルサポート

短期間の切断の場合、Offline profile supportポリシーを無効にします。これにより、以下のいずれかのポリシーを設定できます。

ポリシー: ストリームユーザープロファイルグループ

Streamed user profile groupsポリシーを「未構成」に設定します。このポリシーを有効にしても、Profile streamingも有効になっている場合にのみ効果があります。Streamed user profile groupsは、ストリーミングプロファイルの利用を特定のActive Directoryユーザーグループに制限するために使用されます。これは、Profile Managementの古いバージョンから移行する際の一部のシナリオで役立ちます。このポリシーの設定方法については、「ユーザープロファイルのストリーム」を参照してください。

このポリシーに適用される高可用性と災害復旧に関する情報については、「シナリオ4 - 移動ユーザー」を参照してください。

ポリシー: 保留中のエリアロックファイルのタイムアウト

「**保留中のエリアロックファイルのタイムアウト**」ポリシーを「未構成」に設定して、デフォルトの操作（保留中のエリアロックの1日間のタイムアウト）を適用します。これはサポートされている唯一の値であるため、このポリシーを調整しないでください。

ポリシー: アクティブなライトバック

このポリシーの詳細については、「永続的またはプロビジョニング済み、および専用または共有」を参照してください。

使用中のアプリケーション

展開環境で使用されているアプリケーションは、Profile Management の構成方法に影響します。ただし、他の構成決定とは異なり、単純な「はい」または「いいえ」の推奨事項はありません。

決定は、アプリケーションが永続的なカスタマイズをどこに保存するか（レジストリまたはファイルシステム）によって異なります。

アプリケーションが設定とユーザーのカスタマイズをどこに保存するかを特定するために、ユーザーのアプリケーションを徹底的に分析し、理解してください。Process Monitor などのツールを使用して、アプリケーションのバイナリを監視します。Google も別のリソースです。Process Monitor の詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/sysinternals/downloads/procmon>` を参照してください。

アプリケーションの動作を理解したら、インクルージョンを使用して処理するファイルと設定を定義します。除外を使用して、処理しないものを定義します。デフォルトでは、`AppData\Local` 内のファイルを除き、プロファイル内のすべてが処理されます。展開環境に次のいずれかのアプリケーションが含まれている場合は、`AppData\Local` のサブフォルダーを明示的に含める必要がある場合があります。

- DropBox
- グーグル クローム
- Visual Studio のワンクリック発行で作成されたアプリケーション

シンプルなアプリケーション

シンプルなアプリケーションとは、適切に動作するアプリケーションのことです。これらは、パーソナライズ設定を HKCU レジストリハイブに、パーソナライズファイルをプロファイル内に保存します。シンプルなアプリケーションには基本的な同期が必要であり、そのためには次の方法で項目を含めたり除外したりする必要があります。

- これらのポリシーにおける相対パス（%USERPROFILE% に対する相対パス）：
  - 同期するディレクトリ
  - 同期するファイル
  - 除外リスト - ディレクトリ
  - 除外リスト - ファイル
  - ミラーリングするフォルダー

  注：%USERPROFILE% は Profile Management によって暗黙的に指定されます。これらのポリシーに明示的に追加しないでください。
- これらのポリシーにおけるレジストリ相対パス（HKCU ルートに対する相対パス）：
  - 除外リスト

- 包含リスト

項目の含め方と除外方法については、「項目の含め方と除外方法」を参照してください。

レガシーアプリケーション

レガシーアプリケーションは適切に動作せず、パーソナライズファイルをプロファイル外のカスタムフォルダーに保存します。推奨される解決策は、レガシーアプリケーションで Profile Management を使用するのではなく、Citrix Virtual Desktops の Personal vDisk 機能を使用することです。

複雑なアプリケーション

複雑なアプリケーションには特別な処理が必要です。アプリケーションのファイルは相互参照する可能性があり、相互に関連するグループとして扱われる必要があります。Profile Management は、複雑なアプリケーションに関連する2つの動作をサポートしています：クッキー管理とフォルダーミラーリングです。

Internet Explorerでのクッキー管理は、以下の両方のポリシーが常に指定される基本的な同期の特殊なケースです。

- ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する
- ミラーリングするフォルダー

フォルダーミラーリング、クッキー管理、およびこれらのポリシーの設定方法の詳細については、「トランザクションフォルダーの管理」を参照してください。

クロスプラットフォームアプリケーション

クロスプラットフォームアプリケーションとは、複数のプラットフォームでホストされる可能性のあるアプリケーションです。Internet ExplorerおよびMicrosoft Officeの特定のバージョンでは、Profile Managementはプラットフォーム間での個人設定の共有をサポートしています。これらの設定は、レジストリまたはプロファイル内のファイルとして保存されます。

クロスプラットフォームアプリケーションの推奨ポリシー設定は、「クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ」に記載されています。

他のアプリケーションの設定をプラットフォーム間で共有したい場合は、SepagoのProfile Migratorを使用することをお勧めします。

JavaおよびWebアプリケーション

Javaアプリケーションはプロファイル内に多くの小さなファイルを残す可能性があり、これによりプロファイルの読み込み時間が大幅に増加する可能性があります。したがって、`AppData\Roaming\Sun\Java`を除外することを検討してください。

ポリシーの概要

次の表は、さまざまな種類のアプリケーションに対してProfile Managementを構成するために使用するポリシーをまとめたものです。表では次の用語が使用されています。

- **相対**。%USERPROFILE%（指定してはならない）に対するローカルボリューム上の相対パス。例：`AppData\Local\Microsoft\Office\Access.qat`、`AppData\Roaming\Adobe\`。
- **絶対**。ローカルボリューム上の絶対パス。例：`C:\BadApp*.txt`、`C:\BadApp\Database\info.db`。
- **レジストリ相対**。HKCUハイブ内のパスを指します。例：`Software\Policies`、`Software\Adobe`。
- **フラグ**。パス情報が不要な処理を有効または無効にするためにフラグを使用します。例：Enabled、Disabled。

ポリシー	ポリシーの種類 (レジストリ、フォルダー、またはファイル)	ワイルドカードのサポート?	アプリケーションの種類 - シンプル	アプリケーションの種類 - レガシー	アプリケーションの種類 - 複雑
同期するディレクトリ	フォルダ	はい	相対	絶対値	
同期するファイル	ファイル	はい	相対	絶対値	
除外リスト - ディレクトリ	フォルダ	はい	相対	絶対値	
除外リスト - ファイル	ファイル	はい	相対	絶対値	
包含リスト	レジストリ		レジストリ相対		

ポリシー	ポリシーの種類 (レジストリ、フォルダー、またはファイル)	ワイルドカードのサポート?	アプリケーションの種類 - シンプル	アプリケーションの種類 - レガシー	アプリケーションの種類 - 複雑
除外リスト	レジストリ		レジストリ相対		
ミラーリングするフォルダー	フォルダ			絶対値	相対
ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する					フラグ

ファイル名とフォルダー名でのワイルドカード処理

ファイルやフォルダー（レジストリエントリではなく）を参照するポリシーは、ワイルドカードをサポートしています。詳細については、「ワイルドカードの使用」を参照してください。

包含ルールと除外ルール

Profile Managementは、ユーザープロファイル内のファイル、フォルダー、およびレジストリキーをユーザープロファイルから含めたり除外したりするためのルールを使用します。これらのルールにより、合理的で直感的な動作が実現されます。すべての項目はデフォルトで含まれます。そこから、トップレベルの例外を除外として構成し、次にトップレベルの例外に対するより深い例外を包含として構成するといったことができます。項目を含めたり除外したりする方法を含むルールの詳細については、「項目の包含と除外」を参照してください。

プロファイル内の非英語フォルダー名

バージョン1プロファイルを使用する非英語システムの場合、包含リストと除外リストで相対パスをローカル言語で指定します。たとえば、ドイツ語システムでは、**Documents**ではなく**Dokumenten**を使用します。複数のロケールをサポートしている場合は、各言語で含まれる項目または除外される項目をそれぞれ追加します。

次のステップ

1. 構成の決定に記載されているすべての質問に回答します。
2. 回答に基づいて、展開用のProfile Managementを構成します。その他のすべてのポリシーはデフォルトのままにすることができます。
3. ローカルGPOでProfile Managementをテストするに記載されているように、設定をテストおよび確認してから、Profile Managementを有効にします。

複数のプラットフォームの計画

複数のプラットフォームでのユーザープロファイルが課題となるのはなぜですか?

ユーザーが複数のコンピューティングデバイスにアクセスすることは一般的です。あらゆる種類のローミングプロファイルにおける課題は、これらのデバイス上のシステム間の違いから生じます。たとえば、デスクトップにローカルファイルへのショートカットを作成し、別のデバイスに移動したときにそのファイルが存在しない場合、デスクトップには壊れたショートカットが残ります。

シングルセッションOSとマルチセッションOSの間でローミングする場合にも同様の問題が発生します。一部の設定（電源設定やビデオ設定など）はサーバーに適用できない場合があります。さらに、各デバイスにアプリケーションが同様にインストールされていない場合、ローミング時に他の問題が発生する可能性があります。

一部のパーソナライズ設定（マイ ドキュメント、お気に入り、OSやアプリケーションのバージョンに依存しないその他のファイルなど）は、他の設定よりもはるかに管理が容易です。しかし、ドキュメントの種類が1つのシステムでのみサポートされている場合、これらの設定でさえローミングが困難になることがあります。たとえば、あるユーザーがMicrosoft Projectを1つのシステムにインストールしているが、別のデバイスではそのファイルの種類が認識されない場合があります。同じアプリケーションが2つのシステムに存在し、一方のシステムには異なるアドオンがインストールされており、ドキュメントによってそれが期待される場合、この状況はさらに悪化します。

アプリケーションのインストール方法を変更すると、どのように問題が発生しますか?

プラットフォームが同じようにインストールされていても、各プラットフォームでアプリケーションが異なる方法で構成されている場合、アプリケーションの起動時にエラーが発生する可能性が

あります。たとえば、あるプラットフォームのExcelではマクロやアドオンがアクティブになるが、別のプラットフォームではアクティブにならない場合があります。

スタートメニュー

スタートメニューにはリンク（LNKおよびLNK2ファイル）が含まれています。メニューのユーザー固有の部分はプロファイルに保存され、ユーザーはその部分を変更できます。カスタムリンク（実行可能ファイルやドキュメントへのリンク）を追加することは一般的です。さらに、言語固有のリンクは、同じアプリケーションに対して複数のスタートメニューエントリを生成します。また、ドキュメントを指すリンクは、他のコンピューターでは無効になる場合があります。その理由は、ドキュメントへのパスが別のシステムに対する相対パスであるか、アクセスできないネットワークパスであるためです。

デフォルトでは、Profile Managementはスタートメニューフォルダーの内容を保存しません。これは、実行可能ファイルを指すリンクがコンピューターに依存することが多いためです。ただし、システムが類似している状況では、Profile Management構成にスタートメニューを含めることで、ユーザーがデスクトップ間をローミングする際の整合性が向上します。あるいは、フォルダーリダイレクトを使用してスタートメニューを処理することもできます。

注： 最も無害に見える変更からでも、予測不能な副作用が生じることがよくあります。たとえば、Sepagoブログの `<https://helgeklein.com/blog/2009/09/citrix-user-profile-manager-upm-and-the-broken-rootdrive/>` にある記事を参照してください。

常にプラットフォーム間でスタートメニューの動作をテストおよび検証してください。

クイック起動ツールバー

クイック起動ツールバーにはリンクが含まれており、ユーザーが構成できます。デフォルトでは、**クイック起動**ツールバーはProfile Managementによって保存されます。一部の環境では、リンクがコンピューターに依存する可能性があるため、**クイック起動**ツールバーの保存が望ましくない場合があります。

ツールバーをプロファイルから除外するには、フォルダー除外リストに次のエントリを追加します: `AppData\Roaming\Microsoft\Internet Explorer\Quick Launch`。

作成するプロファイルの種類?

重要: 構造の違いがあるため、複数のプラットフォームを含む環境では、各ユーザーに対して個別のバージョン1およびバージョン2プロファイルを作成することをお勧めします。Windows VistaとWindows 7のプロファイル名前空間の違いにより、これらのプラットフォーム間でプロファイルを共有することは困難です。また、Windows XPとWindows Server 2003間でも障害が発生する可能

性があります。バージョン1およびバージョン2プロファイルの詳細は、 プロファイルについてを参照してください。

ここでの複数プラットフォームの定義には、複数のオペレーティングシステム（異なるビット数を含む）だけでなく、同じオペレーティングシステム上で実行されている複数のアプリケーションバージョンも含まれます。次の例は、この推奨事項の理由を示しています。

- 32ビットシステムには、オペレーティングシステムに32ビットオペレーティングシステムに固有の場所でアプリケーションを起動するよう指示するレジストリキーが含まれている場合があります。64ビットシステムでCitrix®ユーザープロファイルによってキーが使用された場合、そのシステムにその場所が存在せず、アプリケーションの起動に失敗する可能性があります。
- Microsoft Office 2003、Office 2007、およびOffice 2010は、一部のWord設定を異なるレジストリキーに保存します。これらのアプリケーションが同じオペレーティングシステムで実行されている場合でも、Wordアプリケーションの3つの異なるバージョンごとに個別のプロファイルを作成する必要があります。

プロファイルの相互運用性を確保するために、CitrixユーザープロファイルでMicrosoftフォルダーリダイレクトを使用することをお勧めします。Windows VistaまたはWindows 7がWindows XPと共存する必要がある環境では、これはさらに重要です。

ヒント: 組織のデータ管理ポリシーによっては、Active Directoryから削除されたユーザーアカウントのプロファイルをユーザーストアおよびクロスプラットフォーム設定ストアから削除することをお勧めします。

複数のファイルサーバーでCitrix®ユーザープロファイルを共有する

Profile Managementの最もシンプルな実装は、ユーザーストアが1つの地理的場所にいるすべてのユーザーをカバーする1つのファイルサーバー上にあるものです。このトピックでは、複数のファイルサーバーを含む、より分散された環境について説明します。高度に分散された環境の詳細については、「Profile Managementによる高可用性と災害復旧」を参照してください。

注: ユーザーストアのサーバー側ファイルクォータは無効にしてください。クォータがいっぱいになるとデータ損失が発生し、プロファイルのリセットが必要になるためです。プロファイルに保持される個人データ（例: ドキュメント、音楽、画像）の量を制限するには、サーバー側ファイルクォータが有効になっている別のボリュームへのフォルダーリダイレクトを使用する方が適切です。

ユーザーストアは複数のファイルサーバーに配置でき、これは多くのプロファイルをネットワーク全体で共有する必要がある大規模な展開でメリットがあります。Profile Managementは、ユーザーストアを単一の設定である**ユーザーストアへのパス**で定義するため、この設定に属性を追加することで複数のファイルサーバーを定義します。Active Directoryのユーザースキーマで定義されている任意のLDAP属性を使用できます。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows/win32/adschema/attributes-all?redirectedfrom=MSDN>`を参照してください。

ユーザーが異なる都市にある学校にいて、#l#属性（場所を表す小文字のL）がこれを表すように構成されているとします。ロンドン、パリ、マドリードに拠点があります。ユーザーストアへのパスを次のように構成します。

`\#l#.userstore.myschools.net\profile#sAMAccountName#\%ProfileVer%\`

パリの場合、これは次のように展開されます。

`\\Paris.userstore.myschools.net\profile\JohnSmith\v1\`

次に、利用可能なサーバー間で都市を分割します。たとえば、DNSでParis.userstore.myschools.netをServer1を指すように設定します。

この方法で属性を使用する前に、そのすべての値を確認してください。それらは、サーバー名の一部として使用できる文字のみを含んでいる必要があります。たとえば、#l#の値にはスペースが含まれていたり、長すぎたりする場合があります。

#l#属性を使用できない場合は、同様のパーティショニングを実現する#company#や#department#などの他の属性についてADユーザースキーマを調べてください。

カスタム属性を作成することもできます。`Sysinternals`ツールであるActive Directory Explorerを使用して、特定のドメインに対してどの属性が定義されているかを確認します。Active Directory Explorerは`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/sysinternals/downloads/adexplorer>`で入手できます。

注: プロファイルやサーバーを区別するために、%homeshare%などのユーザー環境変数を使用しないでください。Profile Managementはシステム環境変数を認識しますが、ユーザー環境変数は認識しません。ただし、関連するActive Directoryプロパティである`#homeDirectory#`を使用できます。したがって、ユーザーのHOMEディレクトリと同じ共有にプロファイルを保存したい場合は、ユーザーストアへのパスを`#homeDirectory#\profiles`として設定します。

ユーザーストアへのパスでの変数の使用については、以下のトピックで説明されています。

- ユーザーストアへのパスを指定する
- OU内およびOU間のプロファイルを管理する

- Profile Managementによる高可用性と災害復旧

OU内およびOU間でプロファイルを管理する

OU内

組織単位 (OU) 内でプロファイル管理がプロファイルを管理する方法を制御できます。Windows Server 2008環境では、WMI (Windows Management Instrumentation) フィルタリングを使用して、.admまたは.admxファイルをOU内のコンピューターのサブセットに制限します。WMIフィルタリングは、Service Pack 1 (SP1適用済みGPMC) を適用したグループポリシー管理コンソールの機能です。

WMIフィルタリングの詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/previous-versions/windows/it-pro/windows-server-2003/cc779036(v=ws.10)>`および`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/previous-versions/windows/it-pro/windows-server-2003/cc758471(v=ws.10)>`を参照してください。

SP1適用済みGPMCの詳細については、`<https://www.microsoft.com/ja-jp/download/details.aspx?id=21895>`を参照してください。

以下の方法を使用すると、単一のOU内で単一のグループポリシーオブジェクト (GPO) を使用して、異なるOSを持つコンピューターを管理できます。各方法は、ユーザーストアへのパスを定義するための異なるアプローチです。

- ハードコードされた文字列
- プロファイル管理変数
- システム環境変数

ハードコードされた文字列は、1種類のコンピューターのみを含む場所を指定します。これにより、それらのコンピューターからのプロファイルをプロファイル管理によって一意に識別できます。たとえば、Windows 7コンピューターのみを含むOUがある場合、**ユーザーストアへのパス**に`\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\Windows7`を指定できます。この例では、Windows7フォルダーがハードコードされています。ハードコードされた文字列は、プロファイル管理サービスを実行するコンピューターでのセットアップを必要としません。

プロファイル管理変数は、コンピューターを一意に識別するために柔軟に組み合わせることができ、セットアップを必要としないため、推奨される方法です。たとえば、異なるビット数のオペレーティングシステムで実行されているWindows 7およびWindows 8プロファイルを含むOUがある場合、**ユーザーストアへのパス**に`\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`を指定できます。この例では、2つのプロファイル管理変数は、

Win7x86 (Windows 7 32ビットオペレーティングシステムで実行されているプロファイルを含む) およびWin8x64 (Windows 8 64ビットオペレーティングシステムで実行されているプロファイルを含む) のフォルダーに解決される可能性があります。プロファイル管理変数の詳細については、「プロファイル管理ポリシー」を参照してください。

システム環境変数には、いくつかの構成が必要です。これらは、プロファイル管理サービスを実行する各コンピューターで設定する必要があります。プロファイル管理変数が適さない場合は、次のようにシステム環境変数をユーザーストアへのパスに組み込むことを検討してください。

各コンピューターで、%ProfVer%というシステム環境変数を設定します。(ユーザー環境変数はサポートされていません。) 次に、ユーザーストアへのパスを次のように設定します。

```
`\\upmserver\upmshare\%username%.%userdomain%\%ProfVer%`
```

たとえば、Windows 7 32ビットコンピューターの場合は%ProfVer%の値をWin7に、Windows 7 64ビットコンピューターの場合はWin7x64に設定します。Windows Server 2008 32ビットおよび64ビットコンピューターの場合は、それぞれ2k8および2k8x64を使用します。これらの値を多くのコンピューターで手動で設定するのは時間がかかりますが、Provisioning Servicesを使用する場合は、ベースイメージに変数を追加するだけで済みます。

ヒント: Windows Server 2008 R2およびWindows Server 2012では、グループポリシーを使用して環境変数の作成と適用を高速化できます。グループポリシー管理エディターで、 **コンピューターの構成** > **基本設定** > **Windows の設定** > **環境**、次に **操作** > **新規** > **環境変数**の順にクリックします。

OU間

Profile Management が OU 間でプロファイルを管理する方法を制御できます。OU の階層と GPO の継承によっては、複数の OU に適用される共通の Profile Management ポリシーセットを 1 つの GPO に分離できます。たとえば、**ユーザー ストアへのパス** と **Profile Management を有効にする** は、すべての OU に適用する必要があります。そのため、これらを専用の GPO に個別に保存し、そこでこれらのポリシーのみを有効にする（他のすべての GPO では未構成のままにする）ことができます。

専用の GPO を使用して、継承されたポリシーを上書きすることもできます。GPO の継承については、Microsoft の Web サイトを参照してください。

Profile Management におけるドメインとフォレストのサポート

Profile Management は、Windows Server 2008 および Windows Server 2012 のドメインおよびフォレストの機能レベルをサポートしています。古いオペレーティングシステムはサポートされていません。

システム環境変数を使用すると、複数のドメインでユーザー名を明確に区別するのに役立ちます。詳細については、「OU 内および OU 間でのプロファイルの管理」を参照してください。

Profile Managementでの高可用性とディザスターリカバリ

前提条件として、ユーザーストアの構造と作成方法を理解してください。詳細については、「Profile Managementアーキテクチャ」および「ユーザーストアの作成」を参照してください。

これらのトピックでは、Citrix Profile Managementに適用される高可用性とディザスターリカバリのサポートされているシナリオについて説明します。これらのシナリオを関連する基盤となるMicrosoftテクノロジーに関連付け、サポートされている内容を特定します。

- シナリオ1: 地理的に隣接するユーザーストアとフェールオーバークラスターの基本設定
- シナリオ2: 複数のフォルダーターゲットとレプリケーション
- シナリオ3: ディザスターリカバリ
- シナリオ4: 移動ユーザー
- シナリオ5: ユーザーストアの負荷分散

Profile Managementは、信頼性の高い環境で動作することを前提としています。主に、この信頼性はActive Directory (AD) とネットワークユーザーストア (NUS) の可用性に適用されます。どちらかが利用できない場合、Profile Managementはプロファイルを提供できず、Windowsに責任を委ねます。Windowsは通常、デフォルトのプロファイルを提供します。

ローミングプロファイルとの比較

ディザスターリカバリおよび高可用性のシナリオでは、Citrix Profile ManagementはMicrosoftローミングプロファイルに影響を与えるのと同じ問題の影響を受ける可能性があります。特に明記されていない限り、Profile Managementはこのような問題を解決しません。

特に、次の点に注意してください。

- Profile Managementのサポートは、ローミングプロファイルもサポートされているシナリオに限定されます。

- オフラインファイルのキャッシュオプションは、ローミングユーザープロファイル共有で無効にする必要があります。同じ制限がProfile Management共有にも適用されます。
- ローミングプロファイルはDFS共有からロードされません。同じ制限がProfile Management共有にも適用されます。詳細については、`<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/2533009>`を参照してください。

シナリオ 1 - 地理的に隣接するユーザー ストアとフェールオーバー クラスターの基本設定

「ユーザーには、常に地理的に隣接した、優先されるネットワーク ユーザー ストア (NUS) をプロファイルに使用させたい。」この場合、オプション 1 と 2 が適用されます。

「NUS をフェールオーバー クラスター上に配置して、高可用性を実現したい。」この場合、オプション 2 が適用されます。

次の図は、このシナリオを示しています。北米 (NA) のユーザーは、ブリスベンではなくニューヨークの NUS を使用したいと考えています。目的は、遅延を減らし、オーストラリアまたはニュージーランド (ANZ) への大陸間リンクを介して送信されるトラフィックを最小限に抑えることです。

図(/en-us/profile-management/2402-ltsr/media/upm-ha-dr-scenario1-1.png)

オプション 1 – DFS 名前空間

背景情報

Microsoft DFS 名前空間テクノロジーの概要については、「DFS 名前空間の概要」を参照してください。

このオプションの実装

DFS 名前空間は、ブログ記事で提示されている問題の一部を解決できます。

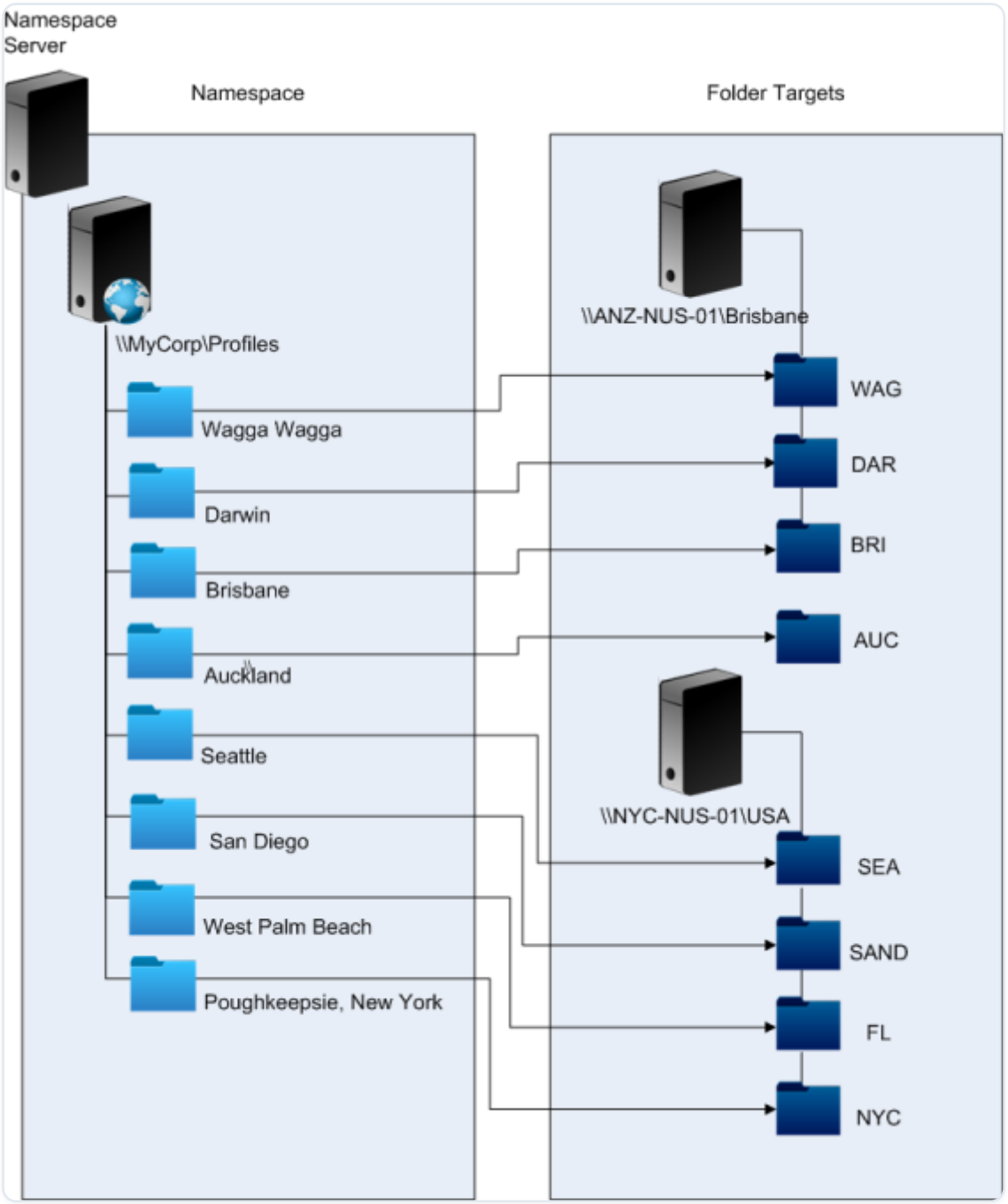
`\\MyCorp\Profiles` という NUS の名前空間を設定しましょう。これは名前空間ルートです。ニューヨークとブリスベン (およびその他のサイト) に名前空間サーバーを設定します。各名前空間サーバーには、各 Active Directory の場所に相当するフォルダーがあり、それらのフォルダーはニューヨークまたはブリスベンのサーバー上のターゲットを持っています。

Active Directory (ユーザー レコードの一部) には、次の場所が構成されている場合があります。

AD ロケーション属性 (#L#)	地理的な場所
ワガワガ	ANZ

AD ロケーション属性 (#L#)	地理的な場所
ダーウィン	ANZ
ブリスベン	ANZ
オークランド	ANZ
シアトル	該当なし
サンディエゴ	該当なし
ウェストパームビーチ	該当なし
ポキプシー、ニューヨーク	該当なし

次の図は、DFS名前空間を使用してこれを設定する1つの方法を示しています。



設定が完了したら、ユーザー ストアへのパス設定を次のように構成します。

`\\MyCorp\Profiles#l#`

8つのサイトに属するユーザーのプロファイルは、シナリオで要求される地理的制約を満たすように、わずか2台のサーバーに分散されます。

代替案

名前空間ターゲットを順序付けし、次のように順序付けルールを使用できます。DFS 名前空間が使用するターゲットを解決する際、ローカルサイト内のターゲットのみが選択されるように指定

できます。これは、特定のユーザーについて、すべてのデスクトップとサーバーが同じサイトに属することが保証されている限り機能します。

たとえば、通常ポキプシーを拠点とするユーザーがワガワガを訪れた場合、この手法は失敗します。そのユーザーのラップトッププロファイルはブリスベンから取得されるかもしれませんが、公開アプリケーションで使用されるプロファイルはニューヨークから取得されるかもしれません。

推奨される手法であるAD属性を使用すると、ユーザーが開始するすべてのセッションで同じDFS名前空間の選択が行われるようになります。その理由は、#I# がマシンの構成ではなく、ユーザーのAD構成から派生するためです。

オプション 2 - フェールオーバークラスタリングを使用したDFS名前空間

参考資料

- 2ノードファイルサーバーフェールオーバークラスターの構成に関するステップバイステップガイドについては、「2ノードクラスターファイルサーバーの展開」を参照してください。
- 名前空間の種類の選択については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/dfs-namespaces/choose-a-namespace-type>` を参照してください。

このオプションの実装

フェールオーバークラスタリングを追加すると、基本的な高可用性を提供できます。

このオプションの重要な点は、ファイルサーバーをフェールオーバークラスターに変換し、フォルダーターゲットが単一のサーバーではなくフェールオーバークラスターでホストされるようにすることです。

名前空間サーバー自体に高可用性が必要な場合は、スタンドアロンの名前空間を選択する必要があります。ドメインベースの名前空間は、名前空間サーバーとしてのフェールオーバークラスターの使用をサポートしていません。フォルダーターゲットは、名前空間サーバーの種類に関係なく、フェールオーバークラスターでホストされる場合があります。

重要: フェールオーバークラスター内のサーバーが失敗した場合、ファイルロックの状態が保持されない可能性があります。Profile Management は、プロファイル処理中の特定の時点で NUS 上のファイルロックを取得します。重要な時点でのフェールオーバーがプロファイルの破損につながる可能性があります。

シナリオ 2 - 複数のフォルダーターゲットとレプリケーション

「ローカルのNUSが利用できない場合、ユーザーが企業ネットワーク上の別のバックアップ場所からプロファイルデータを取得できるようにしたい。変更を行った場合、それらの変更は、優先NUSが再び利用可能になったときに、そこに戻される必要がある。」

このシナリオにおける基本的な要件は、ネットワーク上のプロファイルの代替場所を提供することです。ユースケースには、ネットワークインフラストラクチャの部分的な障害や、フェールオーバークラスターなどのフォルダーターゲットの完全な利用不能が含まれます。

検討する必要があるオプションは、複数のフォルダーターゲットの使用とDFSレプリケーションの使用です。

オプション 1 - 複数のフォルダーターゲットへの参照

参考資料

DFS名前空間のチューニングに関する情報については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/dfs-namespaces/tuning-dfs-namespaces>`を参照してください。

このオプションについて

参照とは、ユーザーデバイスによって順番に試行されるターゲットの順序付きリストです。これは、ソフトウェアライブラリのようにターゲットが読み取り専用であるシナリオ向けに設計されています。ターゲット間に連携はないため、この手法をプロファイルで使用すると、同期できない複数のプロファイルが作成される可能性があります。

ただし、参照内のターゲットに対して、順序付け方法とターゲット優先度の両方を定義することは可能です。適切な順序付け方法を選択すると、すべてのユーザーセッションによって一貫したターゲットが選択されるように見えます。しかし実際には、ユーザーのすべてのデバイスが同じサイト内にある場合でも、サイト内ルーティングの問題により、異なるセッションによって異なるターゲットが選択される可能性があります。デバイスが参照をキャッシュすると、この問題はさらに複雑になる可能性があります。

Important: This option is not suitable for Profile Management deployments and is not supported. However, file replication has been used in some specialized deployments in which only a single session can be guaranteed and Active write back is disabled. For information on these special cases, contact Citrix Consulting.

オプション 2 - 分散ファイルシステムレプリケーション

参考資料

- 分散ファイルシステムレプリケーション (DFSR) の概要については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/dfs-replication/dfsr-overview>`を参照してください。
- レプリケートされたユーザープロファイルデータに関するサポートステートメントについては、`<https://techcommunity.microsoft.com/t5/ask-the-directory-services-team/microsoft-8217-s-support-statement-around-replicated-user/ba-p/398230>`を参照してください。
- DFSRが分散ファイルロックをサポートしない理由を理解するには、`<https://blogs.technet.com/b/askds/archive/2009/02/20/understanding-the-lack-of-distributed-file-locking-in-dfsr.aspx>`を参照してください。

このオプションの実装

DFSレプリケーションは、帯域幅が制限されたネットワーク接続を介したフォルダー同期を提供します。このオプションは、単一の名前空間フォルダー定義が参照する複数のフォルダーターゲットを同期するため、オプション1の問題を解決するように見えます。実際、フォルダーがフォルダー定義のターゲットとして追加されると、レプリケーショングループに属するものとして指定できます。

考慮すべきレプリケーションには2つの形式があります。

- 一方向レプリケーション（アクティブ-パッシブ レプリケーションとも呼ばれます）は、重要なデータを安全なリポジトリにバックアップするために設計されています。このレプリケーションは、たとえば災害復旧サイトの維持に適しています。パッシブターゲットが参照に対して無効になっており、災害復旧計画がアクティブ化されたときにのみ呼び出される限り、Profile Managementで機能させることができます。
- 双方向レプリケーション（アクティブ-アクティブ レプリケーションとも呼ばれます）は、グローバル共有データへのローカルな読み取り/書き込みアクセスを提供することを目的としています。ここでは、即時レプリケーションは必ずしも要件ではありません。共有データはめったに変更されない可能性があります。 重要: アクティブ-アクティブDFSRはサポートされていません。

スケジュールは、データがレプリケートされる頻度を定義します。頻繁なスケジュールはCPUと帯域幅の両方でより集中的ですが、即時更新を保証するものではありません。

その操作のさまざまな時点で、Profile Managementは、(共有)ユーザー ストアへの更新を調整するために、NUSで特定のファイルをロックする必要があります。通常、これらの更新はセッションの開始時と終了時、およびアクティブなライトバックが有効になっている場合はセッションの途中で行われます。DFSレプリケーションでは分散ファイルロックがサポートされていないため、Profile ManagementはNUSとして1つのターゲットしか選択できません。この設定により、双方向レプリケーション（アクティブ-アクティブ レプリケーション）の価値が事実上排除され、したがってProfile Managementには適しておらず、サポートされていません。一方向レプリケーション（アクティブ-パッシブ レプリケーション）は、災害復旧システムの一部としてのみProfile Managementに適しています。その他の用途はサポートされていません。

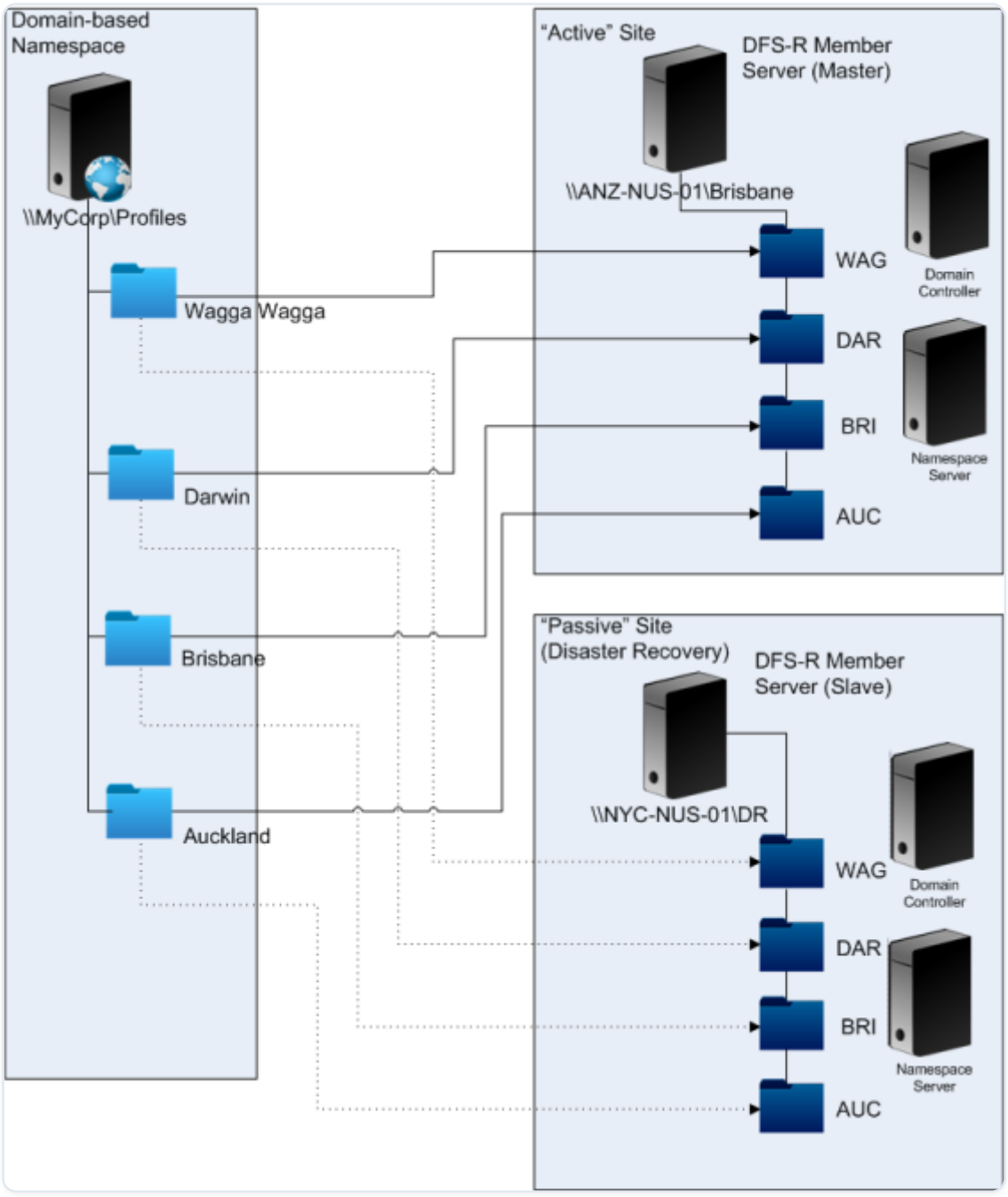
シナリオ 3 - ディザスターリカバリー

「Citrix®ユーザープロファイルを処理するための完全なディザスターリカバリーサイトは、どのように設定すればよいですか？」

Profile Management は、ディザスターリカバリー (DR) に必要な主要な機能をサポートしています。

- **DFS 名前空間**。ドメインベースの名前空間サーバーは、DRサイトが独自の名前空間サーバーを持つことができるため、このシナリオでは推奨されます。(スタンドアロンの名前空間サーバーはレプリケートできませんが、フェールオーバークラスターでホストできます。)
- **複数のフォルダーターゲットとDFSレプリケーション**。各NUSに対して、少なくとも2つのターゲットを提供しますが、通常運用では1つのみを有効にします。無効になっているターゲット (DRサイトにある) が最新の状態に保たれるように、一方向のDFSレプリケーションを設定します。
- **個々のフォルダーターゲットをホストするためのフェールオーバークラスター**。オプション。DRサイトのリソースを無駄にする可能性があります。

この図では、ドメインベースの名前空間がNUSを管理します。(シナリオ1の図では、意図的に名前空間を含めていませんでした。) DRサイトを含む各サイトに名前空間サーバーを含めることができます。すべてのサーバーは、名前空間の同じビューをサポートします。



DRプランがアクティブ化されると、DRサイトのNUSは、マスターNUSからレプリケートされた変更で最新の状態になります。ただし、名前空間サーバーはまだ名前空間の誤ったビューを反映しているため、その構成を更新する必要があります。各フォルダーについて、マスターサイトのフォルダーターゲットを無効にし、DRサイトのフォルダーターゲットを有効にする必要があります。

ADの更新が伝播した後、名前空間サーバーはDRフォルダーターゲットを正しく特定し、DRサイトはProfile Managementで使用できるようになります。

注: ユーザー ストアへのパス設定は、実際のサーバーではなく名前空間フォルダーを参照するため、Profile Managementの構成を更新する必要はありません。

実際には、DRサイトは通常プロファイルには使用されないため、一方向または双方向のレプリケーションが可能です。災害が終了すると、DRサイトからマスターサイトへの接続により、災害中にNUSに加えられた変更がマスターサイトにレプリケートされます。

シナリオ 4 - 移動するユーザー

「スタッフが異なるオフィス間を移動する際、優先 NUS を変更して、地理的に近い NUS を引き続き使用できるようにしたい。」

このシナリオの難しさは、ユーザーのログオンセッションが複数の場所から集約される可能性があることです。通常、ユーザーはデスクトップセッションをあるサイトから別のサイトへとローミングします。しかし、多くのアプリケーションは、ユーザーのデスクトップの現在の場所を認識しないバックエンドサーバーでホストされています。

さらに、ユーザーは切断されたセッション（おそらくホームロケーションでホストされている）に再接続する可能性があります。何らかの理由でセッションがユーザーの新しい場所にある NUS に切り替えられると、パフォーマンスが低下します。

ホットデスクを利用する移動ユーザーには、**プロファイルストリーミング**と**常にキャッシュ**の設定を使用するのが最善の選択肢です。固定マシンを使用している場合でも、Citrix® ストリーミングユーザープロファイルを使用して迅速にログオンできます。「常にキャッシュ」を有効にすると、プロファイルの残りの部分がバックグラウンドで読み込まれます。

シナリオ 5 - ユーザー ストアの負荷分散

「地理的に隣接する複数のネットワーク ユーザー ストア (NUS) 間でユーザーの負荷分散を行いたい。」

背景情報

Microsoft DFS 名前空間テクノロジーの概要については、DFS 名前空間の概要を参照してください。

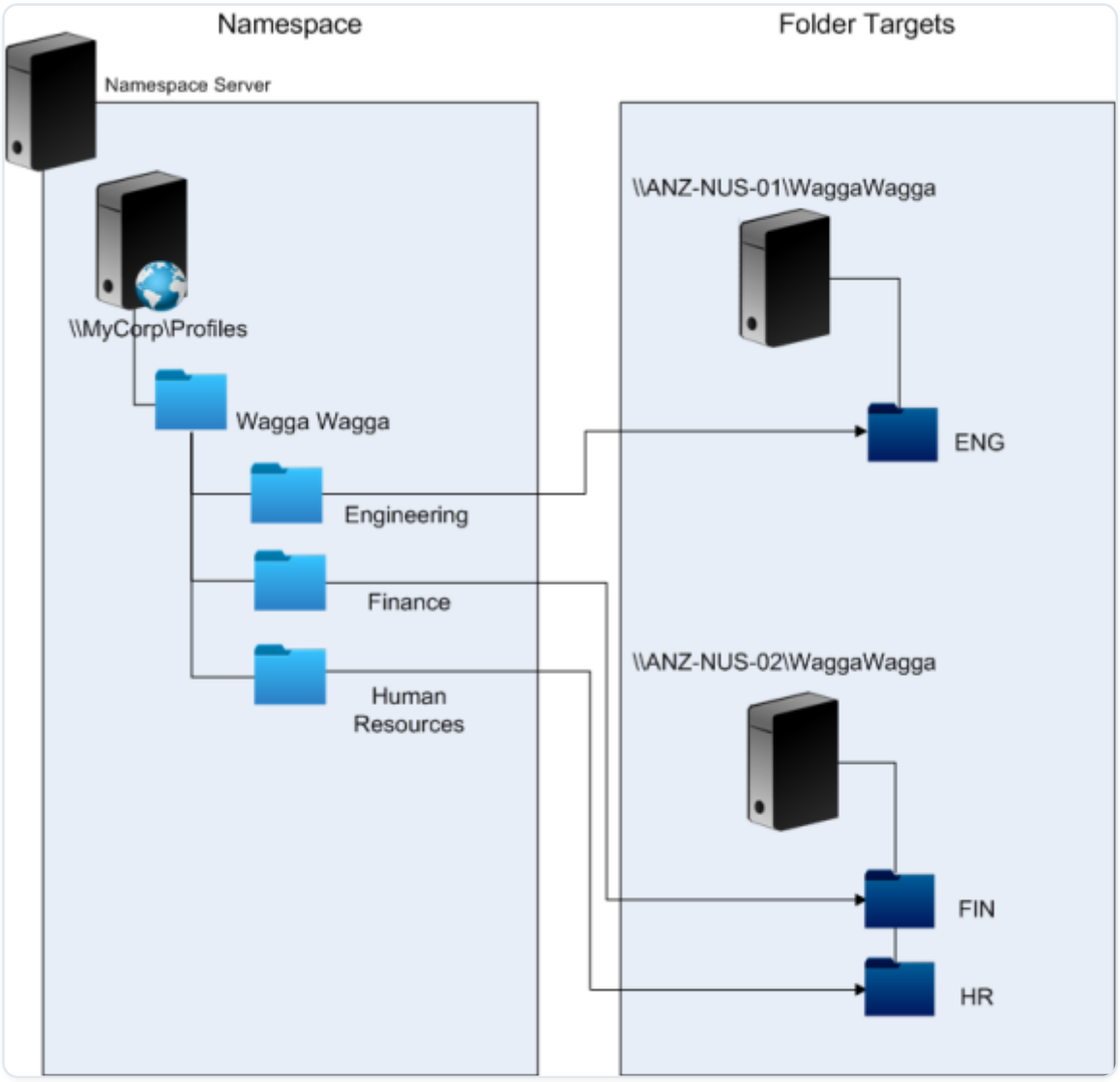
シナリオ 1 とは異なり、このシナリオでは、複数の NUS を必要とするほど大規模な単一サイトがあります。DFS 名前空間を使用することで、シナリオ 1 のソリューションを改善できます。

シナリオ 1 (オプション 1) では、DFS 名前空間を使用して、複数のサイトを同じサーバー上の異なるフォルダーにマッピングしました。同様の手法を使用して、名前空間のサブフォルダーを異なるサーバー上のフォルダーにマッピングできます。

理想的には、ユーザー アカウントを #department# のように同程度のサイズのチャンクに分割する AD 属性が必要です。シナリオ 1 と同様に、#department# は常に定義され、正しいフォルダー名が含まれていることが保証されている必要があります。

シナリオ 1 と同様に、NUS 用の名前空間を `\\MyCorp\Profiles` と設定します。

この図は、名前空間の設定方法を示しています。



セットアップが完了したら、 設定を次のように構成します。

`\\MyCorp\Profiles#l##department#`

この構成では、Wagga Wagga のユーザーは、両方ともローカルである 2 つの NUS サーバーに分散されます。

Profile Management を使用したフォルダーリダイレクトの計画

Profile Management はフォルダーリダイレクトをサポートしており、その使用が推奨されます。

Active Directory (AD) を使用すると、アプリケーションデータやドキュメントなどのフォルダーをネットワークの場所に保存（リダイレクト）できます。フォルダーの内容はリダイレクトされた場所に保存され、ユーザープロファイルには含まれないため、プロファイルのサイズが削減されます。AD のバージョンによっては、リダイレクトできるフォルダーとできないフォルダーがあります。さらに、フォルダーリダイレクトを構成すると、必須プロファイルのユーザーでも、プロファイルの使用を制限しながら一部の設定、ファイル、その他のデータを保存できます。

一般的なガイドラインとして、ネットワーク帯域幅が許す限り、セッション内で定期的にアクセスされないすべてのユーザーデータに対してフォルダーリダイレクトを有効にすることをお勧めします。

リダイレクトできるすべてのフォルダーが AD でアクセスできるわけではありません。特定のオペレーティングシステムでリダイレクトできるフォルダーは、レジストリの `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\User Shell Folders` にあります。

フォルダーリダイレクトに関する重要な情報

Profile Management でフォルダーリダイレクトを使用する際の以下の重要な点に注意してください。

- XenDesktop 7 では、Citrix Virtual Desktops™ ポリシーを使用して Studio でリダイレクトするフォルダーを指定します。詳細については、Citrix Virtual Desktops のドキュメントを参照してください。
- フォルダーリダイレクトを正常に構成するには、バージョン 1 とバージョン 2 のプロファイル間のフォルダー構造の違いに注意してください。
- フォルダーリダイレクトを使用する際のセキュリティに関する詳細については、Secure および Microsoft TechNet Web サイトの「Folder Redirection Overview」の記事を参照してください。
- ユーザーストアは、リダイレクトされたフォルダーに使用される共有とは異なるものとして扱います。
- リダイレクトされたフォルダーを除外リストに追加しないでください。

このビデオを視聴して詳細を学ぶ:

サードパーティのディレクトリ、認証、およびファイルサービス

この記事では、Microsoft が提供するサービス以外のディレクトリ、認証、およびファイルサービスに対するサポートについて説明します。

ディレクトリサービス

重要: Active Directory (AD) は、Profile Management の運用に不可欠です。その他のディレクトリサービスはサポートされていません。これらのサービスには以下が含まれます。

- ノベル eDirectory。
- Windows 2000 Server またはそれ以前のオペレーティングシステム (OS)。Windows 2000 Server は AD をサポートしていますが、必要なレベルではありません。詳細については、「Profile Management でのドメインとフォレストのサポート」を参照してください。Microsoft Windows NT 4.0 は AD より前のものです。
- Samba 4 またはそれ以前。

認証サービス

その他の認証サービスは、ドメイン内で AD と共存できますが、Profile Management ではサポートされていません。その理由は、Profile Management Service と同様に、これらのサービスが winlogon.exe と相互作用し、ユーザーログオンプロセスに問題を引き起こす可能性があるためです。たとえば、Novell の認証サービスは、ユーザーがプリンターやファイル共有などの Novell リソースにアクセスすることを許可しますが、サポートされていません。

ファイルサービス

サードパーティのファイルサービスは、ユーザーストアおよびフォルダーリダイレクト (使用されている Windows オペレーティングシステムでサポートされている場合) に使用できます。ファイルサーバーは、Server Message Block (SMB) または Common Internet File System (CIFS) タイプであり、NTFS ファイルシステムをサポートしている必要があります。これらの理由により、以下がサポートされています。

- Windows Server 2003 またはそれ以降
- サンバ 3

重要: Novell ディレクトリに対する認証が必要なため、Novell ファイルサービスはサポートされていません。

複数のプラットフォーム上のプロファイルとProfile Managementの移行に関するFAQ

このセクションでは、複数のWindowsオペレーティングシステム、または単一オペレーティングシステムの複数のバージョンやビット数を持つ環境でプロファイルを使用することに関する質問と回答を掲載しています。

プロファイルとの互換性の問題を確実に回避するにはどうすればよいですか?

異種環境をサポートする必要性と、ユーザーとそのデバイスを追跡するためのパーソナライズ設定の必要性のバランスを取ります。通常、これら2つのニーズのバランスは、管理者とIT部門によってのみ決定できます。ユーザープロファイルを次のように調整することで、異なるシステムを管理します。プロファイルがローミングする場合、問題は適切に処理されるか、必要に応じて設定は完全に無視され、まったく追跡されないようにする必要があります。これは、多くのサードパーティ製ソフトウェアソリューションの基礎となっています。

トラブルシューティングを最小限に抑えるには、同じデバイス設定（インストールされているアプリケーション、OSバージョンなど）間でプロファイルをローミングするようにしてください。しかし、現代の多くのシナリオでは、これは容易に達成できず、不完全なユーザーエクスペリエンスにつながります。たとえば、ユーザーは複数のオペレーティングシステムを使用しているからといって、お気に入りやマイドキュメントを複製する必要はありません。この場合、管理者はフォルダーリダイレクトを使用することでユーザーエクスペリエンスを向上させることができます。このMicrosoft機能の使用は、他のシナリオでも推奨されます。

異なるシステム間でプロファイルを共有できますか?

Citrixでは、プラットフォームごとに1つのベースプロファイルを持つことを推奨しています。これは、オペレーティングシステムごとに1つのプロファイルを持つことと必ずしも同じではありません。この推奨事項の詳細については、「複数のプラットフォームの計画」を参照してください。これにより、連携しない可能性のある設定や、特定のOSに適用されない設定の数を最小限に抑えることができます。たとえば、デスクトップの電源設定は、サーバーシナリオやリモートデスクトップサービス（旧ターミナルサービス）が関与するシナリオには適用されません。

プロファイルの数を簡素化して減らし、複数のOSで使用しようとすると、設定の競合のリスクが高まります。システムが同じでない場合、このリスクはさらに増大します。たとえば、Microsoft Officeのアドインがすべてのデバイスに存在しない場合があります。幸いなことに、特定のデバイ

スに適用されないこのような設定は、多くの場合無視されます。無視されない場合にサポートの問題が発生します。アドインが存在しない場合、Microsoft Excelは起動に失敗します。

Profile Managementは、複数のバージョンまたはプラットフォーム間で設定をどのように有効にしますか?

Citrix®は、複数のベースプロファイル間で共通設定をローミングする機能を提供します。Citrixは、Microsoft Office、Internet Explorer、壁紙などの設定のローミングを可能にします。これらの種類のシナリオをサポートする能力は、アプリケーションがプラットフォーム間の設定のローミングをどの程度サポートしているかによって制限されます。次の質問のリンクは、Microsoftの立場とベストプラクティスをカバーしています。

Microsoftは、プラットフォームとバージョン間でローミングプロファイルをどのようにサポートしていますか?

関連情報については、「ローミングユーザープロファイルの展開」を参照してください。

Office 2007のツールバー設定については、「クイックアクセスツールバーのカスタマイズ」を参照してください。

標準のMicrosoft Windowsプロファイルソリューションが技術的、カスタム、またはビジネス要件を完全に満たさない場合、Profile Managementは実行可能なソリューションとなります。

x86プラットフォームとx64プラットフォーム間でプロファイルを共有することは可能ですか?

Windows x86 と x64 間で 1 つのプロファイルを共有することは一般的に機能するかもしれませんが、いくつかの問題が発生する可能性があります。

いくつかの理由があります。たとえば、その理由の 1 つは、使用ごとのファイル関連付けが `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Classes` に保存されることです。非管理者が Firefox をデフォルトブラウザとして設定した場合、32 ビットシステムには以下が保存されます。

`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Classes\FirefoxHTML\shell\open\command` -\> "`C:\Program Files\Mozilla Firefox\firefox.exe`" -requestPending -osint -url "%1"

このパスを含むプロファイルが Windows x64 で使用される場合、OS は 64 ビット版の Firefox を探しますが、これは存在しません。代わりに、32 ビット版が `C:\Program Files (x86)\Mozilla Firefox` にインストールされている可能性があります。これにより、ブラウザが起動しなくなります。

逆もまた同様です。パスが x64 プラットフォームで設定されているのに、x86 プラットフォームで使用される場合です。

複数のプラットフォームで 1 つのプロファイルがどのように動作するかをテストしたいのですが、どこから始めればよいですか?

複数のプラットフォームで 1 つのプロファイルを使用する実験を行うには、テストと検証が重要です。推奨されるアプローチは、プラットフォームごとに 1 つのプロファイルを持つことです。単一のプロファイルが複数のプラットフォームでどのように動作するかを調べたい場合は、以下の情報が役立つかもしれません。

次の質問に答えることで、何が問題を引き起こす可能性があるかを特定することから始めます。このトピックの残りの質問を、問題への対処と追跡のアイデアとして使用してください。

プラットフォーム間で機能する項目：

- マイドキュメントと「お気に入り」
- 構成情報（デフォルトを含む）をプロファイル内に完全に保存するアプリケーション

機能しない可能性がある項目：

- ハードコードされたデータ、パスデータなどを保存するアプリケーション
- x64 または x86 プラットフォームに固有の設定
- すべてのシステムに存在するわけではない Excel アドインなど、同一ではないアプリケーションのインストール。これらのインストールは、アプリケーションによって異なるあらゆる種類のエラー状態を引き起こす可能性があります。

ユーザーがログオンするコンピューターに基づいてプロファイルを割り当てることはできますか?

はい。Profile Managementは、ローカルデスクトップ、Citrix Virtual Apps、Citrix Virtual Desktops™、またはこれらの任意の組み合わせに基づいてプロファイルを適用できます。

適切なProfile Management設定が有効になっている場合、Remote Desktop Services（旧Terminal Services）プロファイルは、ユーザーがターミナルサーバーまたはCitrix Virtual Appsセッションを使用している場合にのみ使用されます。この設定は、ユーザーがRemote Desktop Servicesセッションを通じてログオンする際に、既存のプロファイル（Citrixユーザープロファイルを除く）を上書きします。

Windows 7では、GPOコンピューター設定を使用して、ユーザーがログオンするコンピューターに基づいてプロファイルを割り当てることができます。繰り返しになりますが、これはGPに基づいているため、プロファイルの割り当てはGPOが適用されるOUに依存します。

コンピューターに基づくプロファイルの割り当てが望ましいのはなぜですか?

個別のユーザーエクスペリエンスが必要な場合、ユーザーがログオンするコンピューターにプロファイルを割り当てることは有用です。たとえば、管理者は、Remote Desktop Services（旧Terminal Server）セッションで使用されるプロファイルを、デスクトップで使用されるプロファイルとは別に保持することを決定する場合があります。

Profile ManagementはWindowsユーザープロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行しますか?

Profile Managementを構成して、ユーザーがログオンするときに既存のローミングプロファイルとローカルプロファイルを自動的に移行できます。また、テンプレートプロファイルまたはデフォルトのWindowsプロファイルを新しいCitrixユーザープロファイルのベースとして使用することもできます。

Profile Managementの移行の計画と設定については、「プロファイルの移行または作成」を参照してください。ソフトウェアがWindowsユーザープロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行する方法の詳細については、「ログオン図」を参照してください。

どのプロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行できますか?

Profile Managementは、Windowsローカルプロファイルと Windowsローミングプロファイルを移行できます。強制プロファイル（.manファイル）はProfile Managementによって無視されますが、Citrixユーザープロファイルのテンプレートとして使用できます。Profile Managementが正しく機能するように、すべてのユーザーへの強制プロファイルの割り当てを無効にしてください。

既存のWindows強制プロファイルをテンプレートとして使用するには、「テンプレートまたは強制プロファイルの指定」を参照してください。

テンプレートプロファイルの使用方法?

Profile Managementでは、新しいCitrixユーザープロファイルの作成のベースとして使用されるテンプレートプロファイルを指定できます。通常、初めてプロファイルを割り当てられるユーザーは、ログオンするWindowsデバイスのデフォルトユーザープロファイルを受け取ります。これは許容できるかもしれませんが、異なるデバイスのデフォルトユーザープロファイルに違いがあると、ユーザーのために作成されるベースプロファイルにも違いが生じることを意味します。した

がって、テンプレートプロファイル機能はグローバルなデフォルトユーザープロファイルと見なすことができます。

ユーザーがプロファイルデータに変更を加えるのを防ぎたい場合は、テンプレートプロファイルをCitrix強制プロファイルとして識別することもできます。

詳細については、テンプレートまたは必須プロファイルの指定を参照してください。

インストールとセットアップ

インストールパッケージをダウンロードする

開始する前に、有効なCitrix®アカウントがあることを確認してください。

ダウンロードを完了するには、次の手順に従います。

1. Citrix Virtual Apps and Desktopsダウンロードページにアクセスします。
2. ダウンロードしたいバージョン（例：2206）を見つけて展開し、「**制限付きダウンロードにアクセスするためにサインイン**」をクリックします。
3. Citrixアカウントの資格情報でサインインします。
4. 「**Citrix Virtual Apps and Desktops™ 7 `<Version_Number>` > 製品ソフトウェア > Citrix Virtual Apps and Desktops 7 `<Version_Number>`, すべてのエディション**」を選択します。
5. 「**製品ISOに含まれるが、個別にパッケージ化されているコンポーネント**」ノードを展開し、「**Profile Management**」サブノードで「**ファイルのダウンロード**」をクリックします。
6. 表示される「**ダウンロード契約**」ダイアログボックスで、ダウンロードを開始するために契約に同意します。

   ダウンロードが完了すると、`ProfileMgmt_<version_number>.zip`ファイル（例：ProfileMgmt_2206.zip）がダウンロードフォルダーに表示されます。

ダウンロードに含まれるファイル

ダウンロードしたパッケージを解凍します。パッケージに含まれるファイルについては、次の表を参照してください。

ファイル名	説明	場所
x86.msi	32ビットシステム用インストーラー	
x64.msi	64ビットシステム用インストーラー	

ファイル名	説明	場所
CitrixBase.adml および CitrixBase.admx	プロファイル管理ポリシー階層用のADMXテンプレートファイル	`\Group Policy Templates\CitrixBase`
ctxprofile.adml および ctxprofile.admx	プロファイル管理ポリシー設定用のADMXテンプレートファイル	`\Group Policy Templates\<language>` (例: `\Group Policy Templates\en`)

Profile Managementをインストールする

Profile Managementは、VDAインストーラーのオプションコンポーネントです。VDAと一緒に、または個別にインストールできます。この記事では、Profile Management独自のインストーラーを使用してProfile Managementをインストールする方法について説明します。

VDAとともにProfile Managementをインストールする方法について詳しくは、Citrix Virtual Apps and Desktopsドキュメントの「VDAのインストール」を参照してください。

概要

管理するユーザープロファイルを持つ各コンピューターにProfile Managementをインストールする必要があります。通常、配布ツール、イメージングソリューション、またはストリーミングテクノロジーを使用して、コンピューター上でMSIインストーラーを実行します。任意のコンピューターに直接インストールすることもできます。サイレントインストールがサポートされています。

一般的なインストール手順は次のとおりです。

1. MSIインストーラーを実行します。
2. グループポリシーを使用してProfile Managementを構成するには、ADMXテンプレートファイルをグループポリシーに追加します。

> **注:**
>
> すべてのユーザーコンピューターに同じバージョンのProfile Managementをインストールすることをお勧めします。また、同じバージョンのADMXテンプレートファイルをグループポリシーに追加してください。このアプローチにより、異なるユーザーストア構造（異なる

> バージョン）が存在する場合に発生する可能性のあるプロファイルデータの破損を防ぐことができます。

MSIインストーラーを実行する

この手順では、Profile Managementを単一のコンピューターにインストールします。

1. 管理者としてコンピューターにログオンします。
2. インストールパッケージのルートフォルダーにあるMSIインストーラーを実行します。インストールウィザードが表示されます。
3. 画面の指示に従ってインストールを完了します。
4. コンピューターを再起動します。

インストーラーは、DLLやその他のファイルに加えて、インストール場所（デフォルトでは`C:\Program Files\Citrix\User Profile Manager`）にこれらのファイルを作成します。

ファイル名	説明
UPMPolicyDefaults_all.ini	Profile Management .iniファイル
UserProfileManager.exe	Profile Managementによって管理されるコンピューター上で機能を実行するWindowsサービス

コマンドラインからMSIインストーラーを実行する

コマンドラインからMSIインストーラーを実行すると、ユーザーの操作なしでインストールを完了できます。

コマンドラインインストールでは、以下のインストールオプションも提供されます。

- `/norestart`オプションを使用して再起動を抑制します。

  オペレーティングシステムによっては、コンピューターが再起動するまでProfile Managementが機能しない場合があります。たとえば、Windows 7ワークステーションを再起動する必要はありません。
- 必要に応じて`INSTALLDIR`を指定します。
- Profile Managementの.iniファイルのインストールを防ぐには、`INSTALLPOLICYINIFILES`を`no`に設定します。

以前のバージョンで.iniファイルを使用しており、その設定をこのバージョンで使用したい場合は、インストール後に各設定をGroup Policy Editorの対応するProfile Managementポリシーに手動で転送してください。

- アップグレードには`OVERWRITEINIFILES=yes`オプションを使用します。詳しくは、Profile Managementのアップグレードを参照してください。

次の例では、ユーザーインターフェイスと再起動を表示せずにProfile Managementをインストールします。UACが有効になっている場合は、昇格された特権で`msiexec`コマンドを実行します。たとえば、管理者として実行したコマンドプロンプトから実行します。

```
msiexec /i <path to the MSI file> /quiet [/norestart]
[INSTALLDIR=<installation directory>]   [OVERWRITEINIFILES=yes]
[INSTALLPOLICYINIFILES=no]
```

Profile Managementをアンインストールする

この手順は、単一のコンピューターからProfile Managementをアンインストールします。開始する前に、コンピューターの管理者であることを確認してください。

1. データ損失を避けるため、すべてのユーザーがログオフしていることを確認してください。
2. プログラムと機能のインストール済みプログラムの一覧から、**Profile Management** を選択し、**アンインストール** をクリックします。
3. **はい**をクリックします。
4. コンピューターを再起動します。

サイレントモードでProfile Managementをアンインストールすることもできます。

ADMXテンプレートファイルをグループポリシーに追加する

グループポリシーを使用してProfile Managementを構成する方法に応じて、ADMXテンプレートファイルを*ドメインコントローラー*または*コンピューター*に追加します。

- OU内のコンピューターに対してProfile Managementを一元的に構成するには、ADMXテンプレートファイルをすべてのドメインコントローラーに追加します。
- 各コンピューターに対してProfile Managementを個別に構成するには、ADMXテンプレートファイルをそのコンピューターに追加します。

インストールパッケージから以下のファイルをコピーし、ドメインコントローラーまたはコンピューター上の場所に貼り付けます。詳細な手順については、以下の表を参照してください。

ファイル名	元 (インストールパッケージ)	先 (ドメインコントローラーまたはコンピューター)
CitrixBase.adml	`\Group Policy Templates\CitrixBase`	`C:\Windows\PolicyDefinitions\<language>` (例: `C:\Windows\PolicyDefinitions\en-US`)
CitrixBase.admx	`\Group Policy Templates\CitrixBase`	`C:\Windows\PolicyDefinitions`
ctxprofile.adml	`\Group Policy Templates\<language>` (例: `\Group Policy Templates\en`)	`C:\Windows\PolicyDefinitions\<language>` (例: `C:\Windows\PolicyDefinitions\en-US`)
ctxprofile.admx	`\Group Policy Templates\<language>` (例: `\Group Policy Templates\en`)	`C:\Windows\PolicyDefinitions`

ADMXテンプレートファイルについて詳しくは、こちらのMicrosoft記事を参照してください。

GPOでProfile Managementポリシーを構成する

ADMXファイルをドメインコントローラーに追加したら、以下の手順に従ってProfile Managementポリシーを表示および構成します。

1. ドメインコントローラーで、**Active Directoryユーザーとコンピューター**を開きます。Profile Managementがインストールされているコンピューターを含むOUを特定します。
2. **グループポリシーの管理**を開き、OUを右クリックして、**このドメインにGPOを作成し、ここにリンク**を選択し、GPOを作成します。

> **注:**

> GPOにセキュリティフィルターを適用する場合は、認証済みユーザーグループまたはコンピューターグループのいずれかを使用してください。個々のユーザーのみを含むセキュリティグループは使用しないでください。

3. **グループポリシーオブジェクト**から、新しく作成したGPOを右クリックし、**編集**を選択します。グループポリシー管理エディターウィンドウが表示されます。
4. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート... > Citrixコンポーネント > Profile Management**を選択します。すべてのProfile Managementポリシーが表示されます。
5. 必要に応じてProfile Managementを構成します。

ローカルGPOでProfile Managementをテストする

本番環境にProfile Managementを展開する前に、テスト環境をセットアップすることをお勧めします。設定をドメインのグループポリシーオブジェクト (GPO) に転送するための完全にサポートされた簡単な方法は、マシンへのローカルインストールに基づいています。

一般的なワークフローは次のとおりです。

1. マシンにProfile Managementをインストールします。
2. (/ja-jp/profile-management/2402-ltsr/plan/configuration.html)に記載されている質問への回答に基づいて、ローカルGPOを使用してProfile Managementポリシーを構成します。
3. (/ja-jp/profile-management/2402-ltsr/configure/enable.html)を有効にする。
4. ログオンおよびログオフの動作をテストします。
5. 満足のいく結果が得られるまで、ローカルGPO設定を調整します。

概要

マシンが本番OUのメンバーである場合、ローカルGPOを使用してProfile Managementを安全にテストできます。ローカルGPOポリシーは、OUおよびドメインのポリシーが利用できない場合に有効になります。ローカルGPOを使用する場合は、他の場所（たとえば、ドメインやサイトなど）でProfile Management GPOが使用されていないことを確認してください。

ドメインGPOを使用してグループポリシーを構成できない場合、ローカルGPOを長期的なソリューションとして使用できます。ただし、この方法では、次のような複雑さが環境に導入されます。

- 各マシンにProfile Management ADMXファイルがインストールされている必要があります。

- ドメインユーザーは、複数のマシンにアクセスする際に設定を維持できない可能性があります。

> **重要:**
>
> ローカルGPOを長期的なエンタープライズソリューションとして使用することはお勧めしません。

ユーザーエクスペリエンスをテストする

プロファイルソリューションを実装する際は、ユーザーがさまざまなマシンからリソースにアクセスする際のユーザーエクスペリエンスの違いを最小限に抑える必要があります。

ユーザーのレジストリとファイルは、物理マシン、プロファイル構成、およびオペレーティングシステムによって異なる場合があります。そのため、ユーザーがローミングするマシンのシステムインストール間の違いに対処するようにProfile Managementを構成する必要があります。

そのためには、本番環境を模倣した方法でユーザーのリソースアクセスを確認します。これらのリソースには、次のものが含まれる場合があります。

- ローカルにインストールされたアプリケーションを持つマシン
- ストリーミングまたはローカルにインストールされたアプリケーションを含む仮想デスクトップ
- 仮想アプリサーバーから公開またはストリーミングされた仮想アプリ
- ターミナルサービスクライアント

オペレーティングシステムのバリエーションをテストする

ユーザーは異なるオペレーティングシステムからアプリケーションにアクセスする場合があります。それらの間のバリエーションにより、単一のユーザープロファイル内で競合する設定が作成される可能性があります。

詳しくは、「プロファイルバージョン」を参照してください。

アップグレードと移行

Profile Management のアップグレード

この記事では、Active Directory を使用して Profile Management の展開をアップグレードする方法について説明します。

重要： このアップグレードプロセスでは、手順の順序に従うことが重要です。新しい .adm または .admx ファイルをグループポリシーに追加してから、すべてのコンピューターのソフトウェアをアップグレードしてください。事前にアップグレードすると、ログファイルが2つの場所に保存される可能性があります。1つは古いバージョンのログファイルを含み、もう1つは新しいバージョンのファイルを含みます。この考慮事項は、特に Citrix Virtual Desktops™ の展開に影響します。

また、アップグレードはスケジュールされたメンテナンス期間中に行うことも重要です。または、Active Directory のレプリケーションによって変更が展開全体に伝播される時間帯にアップグレードしてください。通常、アップグレードには最大24時間かかる場合があります。

アップグレードプロセスには以下が含まれます。

1. グループポリシーオブジェクト（GPO）を作成し、新しい .adm または .admx ファイルを新しい GPO に追加する

   \- または -

   この記事の後半で説明するように、既存の .adm または .admx ファイルをアップグレードする.
2. この記事の後半で説明するように、すべてのコンピューターで .msi ファイルをアップグレードする.
3. GPO を適用する.

既存の .adm ファイルをアップグレードするには

以前のバージョンの Profile Management .adm ファイルがグループポリシーに存在する場合、次の手順を使用してアップグレードできます。アップグレードすると、以前のバージョンのすべてのポリシー設定が保持されます。

1. ドメインコントローラーで、次のいずれかを実行します。

   - 既存の .adm ファイルをインポートします。ファイルはダウンロードパッケージの GPO_Templates フォルダーにあります。
   - ダウンロードパッケージの GPO_Templates フォルダーから .admx ファイルを `C:\Windows\PolicyDefinitions` フォルダーにコピーし、.adml ファイルを `C:\Windows\PolicyDefinitions\<localized` フォルダーにコピーします\>。たとえば、英語のオペレーティングシステムでは、\<localized folder\> は en-US です。

2. Profile Management を構成するために使用するコンピューターで、グループポリシーオブジェクトエディターを開きます。
3. グループポリシーオブジェクトエディターで、**管理用テンプレート**を右クリックし、**テンプレートの追加と削除**を選択します。
4. 既存の Profile Management .adm ファイル（例: ctxprofile5.4.1）を選択し、**削除**をクリックしてから**閉じる**をクリックします。管理用テンプレート\Citrix フォルダーが削除されます。
5. **管理用テンプレート**を右クリックし、もう一度**テンプレートの追加と削除**を選択します。
6. **追加**をクリックし、新しいバージョンの .adm または .admx ファイル（例: ctxprofile5.5.0）の場所に移動して選択し、**閉じる**をクリックします。新しいファイルがインポートされますが、古い設定は保持されます。

.msi ファイルをアップグレードするには

すべてのユーザーデバイスに同じバージョンの Profile Management をインストールし、その同じバージョンの .adm または .admx ファイルをすべてのドメインコントローラー上の各グループポリシーオブジェクトに追加することをお勧めします。これにより、異なるユーザープロファイル構造（異なるバージョンからのもの）が存在する場合に発生する可能性のあるプロファイルデータの破損を防ぐことができます。

新しい設定を有効にする前に、すべてのコンピューターを最新バージョンの Profile Management にアップグレードすることをお勧めします。使用しているバージョンで設定が新しいかどうかを確認するには、「Profile Management ポリシー」を参照してください。

1. アップグレードするコンピューターからすべてのユーザーがログオフしていることを確認してください。
2. 各コンピューターで .msi ファイルを実行して、既存のバージョンに新しいバージョンの Profile Management をインストールします。詳細については、「インストールとセットアップ」を参照してください。

.ini ファイルをアップグレードするには

以前のバージョンの Profile Management で .ini ファイルを編集し、新しいバージョンにアップグレードします。ソフトウェアはファイルが編集されたことを検出し、デフォルトでは上書きしません。既存の .ini ファイル設定を保持し、新しいバージョンの新しい設定を使用するには、次のいずれかを実行する必要があります。

- 新しいバージョンの .ini ファイルから新しい設定を、既存の編集済み .ini ファイルに手動で追加します。
- 既存の編集済みバージョンの .ini ファイルのコピーを保存します。アップグレード中にファイルを強制的に上書きするには、OVERWRITEINIFILES=yes コマンドラインオプションを使用します。保存した設定をアップグレードされた .ini ファイルに追加します。例:

  ```
  msiexec /i <path to the MSI file\> /quiet [INSTALLDIR=<installation directory>] [OVERWRITEINIFILES=yes] [INSTALLPOLICYINIFILES=no]
  ```

注

HDX™ を介して Profile Management ポリシーを構成するには、次の操作を行う必要があります。

- Delivery Controller をアップグレードします。これは、HDX が XenApp および XenDesktop のレイアウト `image-full\x64\Citrix Desktop Delivery Controller` に存在する UserProfileManager_PowerShellSnapIn.msi ファイルから Profile Management ポリシー設定を読み取るためです。
- VDA をアップグレードして、Profile Management の最新バージョンを入手します。

その他のリソース

- Profile Management ポリシー
- インストールとセットアップ

構成

構成の優先順位

Profile Management は、グループポリシーと .ini ファイルを使用して構成できます。構成設定は次のように適用されます。

1. グループポリシーで定義された設定が優先されます。ポリシー設定が「**未構成**」に設定されている場合にのみ、.ini ファイルが照会されます。

   注: 組織単位内のサイトやドメインにグループポリシーオブジェクトを選択的に適用する場合、さらに優先順位が適用されます。「グループポリシー: フィルタリングとアクセス許可」を参照してください。ドメインおよびOUのグループポリシーは、ローカルポリシーよりも優先されます。
2. 設定がポリシーによって定義されていない場合、Profile Management は .ini ファイルから設定を読み取ろうとします。
3. 設定がグループポリシーまたは .ini ファイルで構成されていない場合、デフォルト設定が使用されます。

グループポリシーと .ini ファイルで同じ設定を異なる方法で構成したい場合があります。たとえば、グループポリシー設定でデフォルトのログ記録を有効にし、トラブルシューティングに使用するコンピューターでは .ini ファイルを使用して詳細なログ記録を有効にしたい場合などです。

Profile Management の .ini ファイルについて

デフォルト構成

Profile Management には、.ini ファイルに保存されたデフォルト構成が付属しています。このファイルは、Profile Management Service が認識できるようにインストールフォルダーに配置する必要があります。デフォルト構成は、ほとんどの環境に適しています。これは、すべてのグループのすべてのユーザーのプロファイルを処理します。

Windows XP または Windows Server 2003 で Profile Management の非英語展開を使用している場合、UPMPolicyDefaults_all.ini を使用して、適切な言語バージョンの .ini ファイルを作成する必要があります。このファイルのコピーを言語に合わせて名前変更し（例: スペイン語の場合は

UPMPolicyDefaults_all_es.ini）、フォルダー名をローカライズします。次のファイル名を使用します。

- フランス語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_fr.ini
- ドイツ語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_de.ini
- スペイン語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_es.ini
- 日本語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_ja.ini
- 簡体字中国語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_zh-CN.ini

.iniファイルを変更する

.iniファイルにエントリを追加する場合は、変数と値が正しい形式であることを確認してください。

フラグ（オン/オフインジケーター）は次の形式である必要があります。

```
<variable>=<value>
```

値が1の場合は設定が有効になり、その他の値または値がない場合は無効になります。たとえば、次のエントリは`ServiceActive`設定を有効にします。

```
ServiceActive=1
```

次のいずれかのエントリは設定を無効にします。

```
ServiceActive=ON

ServiceActive=OFF

ServiceActive=TRUE

ServiceActive=FALSE

ServiceActive=
```

リストエントリは次の形式である必要があります。

```
<value>=
```

次のエントリは、同期するMicrosoft Officeファイルを指定します。

```
[SyncFileList]

AppData\Local\Microsoft\Office\*.OfficeUI
```

グループポリシー設定の変更は、ターゲットコンピューターで手動または自動のポリシー更新が行われたときに有効になります。 .iniファイルの変更は、推奨されるコマンド **gpupdate /force** を発行したときに有効になります。または、ターゲットコンピューターでProfile Management Serviceを再起動したときに変更が有効になります。

プロファイル管理を有効にする

既定では、展開を容易にするため、プロファイル管理はログオンまたはログオフを処理しません。プロファイル管理は、他のすべてのセットアップタスクを実行し、Citrix®ユーザープロファイルが環境でどのように機能するかをテストした後にのみ有効にしてください。

グループポリシーを使用してプロファイル管理を有効にするには、次の手順に従います。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理**の下で、**プロファイル管理を有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。

UPMPolicyDefaults_all.iniファイルを使用してプロファイル管理を有効にすることもできます。そのためには、次の手順に従います。

1. プロファイル管理がインストールされているマシンで、`C:\Program Files\Citrix\User Profile Manager\UPMPolicyDefaults_all.ini` に移動します。
2. UPMPolicyDefaults_all.iniをメモ帳で開きます。
3. 設定を編集して、特定の要件を反映させます。

この設定がグループポリシーで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がグループポリシーまたは.iniファイルで構成されていない場合、プロファイル管理はWindowsユーザープロファイルを一切処理しません。

次の方法でプロファイル管理を有効にすることもできます。

- Citrix Studio。Citrix Studioを使用してプロファイル管理を有効にする手順については、Knowledge Centerの記事CTX222893を参照してください。
- Workspace Environment Management (WEM)。WEMを使用してプロファイル管理を有効にする手順については、Knowledge Centerの記事CTX229258を参照してください。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

このビデオを見て、詳細を確認する：



ユーザー ストアへのパスを指定する

ユーザー ストアへのパスを指定する前に、 Profile Management architecture を参照し、展開に関連する場合は、次の影響を理解してください。

- 多言語プロファイルの保存
- 含める項目と除外する項目の組み合わせ

1. Profile Management で、 ポリシーをダブルクリックします。
2. を選択し、ユーザー設定（レジストリの変更と同期されたファイル）が保存されるディレクトリ（ユーザー ストア）へのパスを入力します。

パスは次のいずれかです。

- **相対パス**。このパスはホームディレクトリに対する相対パスである必要があります。ホームディレクトリは通常、Active Directory (AD) のユーザーの #homeDirectory# 属性として構成されます。
- **UNC パス**。このパスは通常、サーバー共有または DFS 名前空間を指定します。
- **無効または未構成**。この場合、`\#homeDirectory#\Windows`の値が想定されます。

この設定には、次の種類の変数を使用できます。

- パーセント記号で囲まれたシステム環境変数（例: %ProfVer%）。システム環境変数には通常、追加のセットアップが必要です。詳しくは、「(/ja-jp/profile-management/2402-ltsr/plan/administer.html)」を参照してください。
- ハッシュで囲まれた AD ユーザーオブジェクトの属性（例: #sAMAccountName#）。

- Profile Management 変数。詳しくは、「(/ja-jp/profile-management/2402-ltsr/policies/settings.html)」を参照してください。

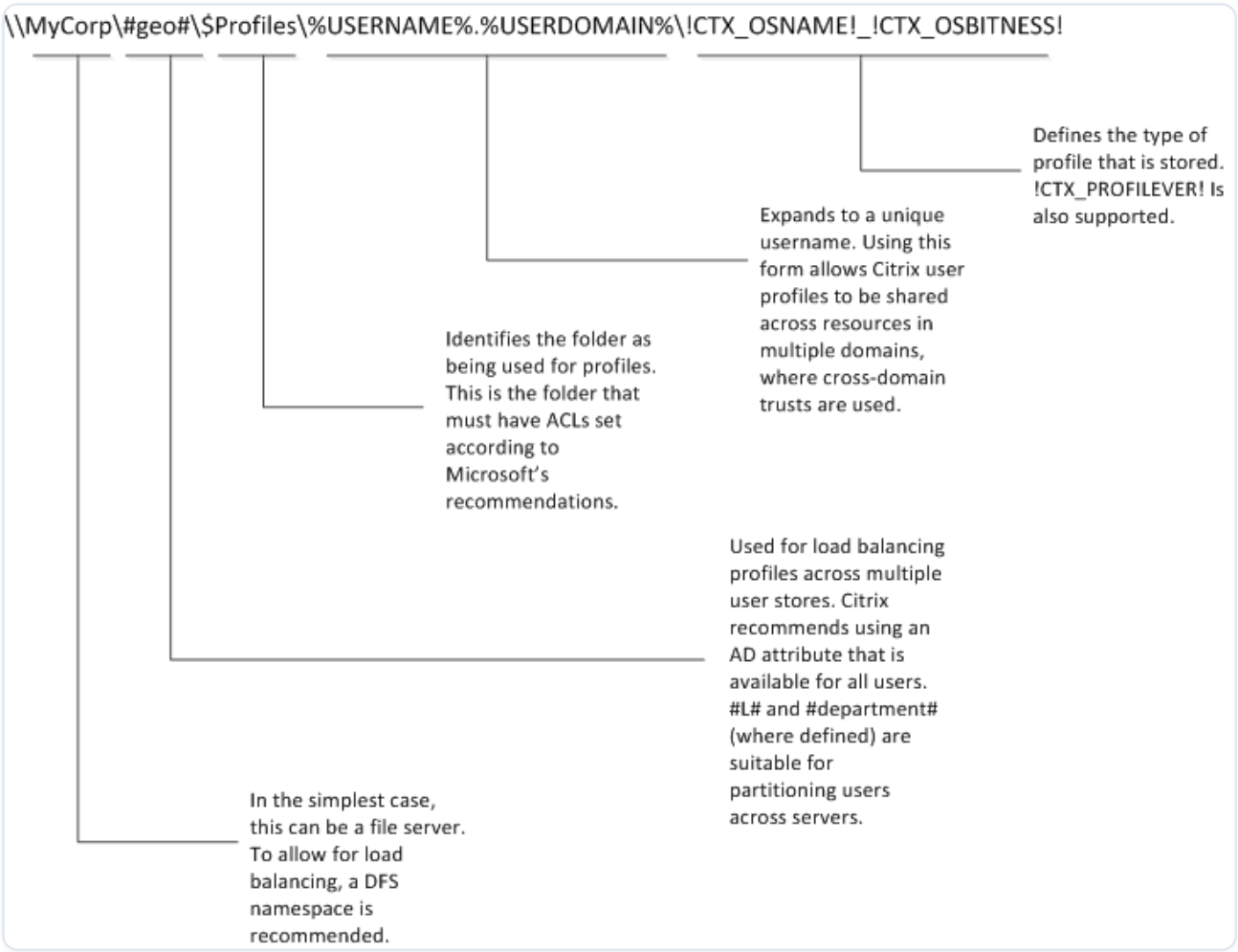
ユーザー環境変数は、`%username%` と `%userdomain%` を除いて使用できません。場所やユーザーなどの組織変数を定義するために、カスタム AD 属性を作成することもできます。属性では大文字と小文字が区別されます。

例:

- `\\server\share#sAMAccountName#` は、ユーザー設定を UNC パス `\\server\share\JohnSmith` に保存します（現在のユーザーの #sAMAccountName# が JohnSmith に解決される場合）。
- `\\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` は `\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64` に展開される場合があります。

重要: どの属性または変数を使用する場合でも、この設定がNTUSER.DATを含むフォルダーの1つ上のフォルダーに展開されることを確認してください。たとえば、このファイルが `\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64\UPM_Profile` に含まれている場合、ユーザー ストアへのパスを `\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64` として設定します（`\UPM_Profile` サブフォルダーではありません）。

この図は、AD属性、環境変数、およびProfile Management変数を組み込んだ、ユーザー ストアへの一般的なパスのコンポーネントを示しています。



ユーザー ストアへのパスを指定する際に変数を使用する方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。

- 複数のファイルサーバーでCitrixユーザープロファイルを共有する
- OU内およびOU間でプロファイルを管理する
- Profile Managementによる高可用性と災害復旧

ユーザーストアへのパスが無効になっている場合、ユーザー設定はホームディレクトリのWindowsサブディレクトリに保存されます。

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの設定が使用されます。この設定がここまたは.iniファイルで構成されていない場合、ホームドライブ上のWindowsディレクトリが使用されます。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているとおり、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

自動構成を使用する

自動構成は、Profile Management の展開を簡素化するのに役立ちます。Citrix 環境に基づいて推奨されるポリシー設定を自動的に適用し、手動での構成を減らし、パフォーマンスを向上させます。

仕組み

Profile Management は、実行時に環境を評価し、それに応じてポリシー設定を調整します。次のような要素を確認します。

- Windows OS のバージョン
- Citrix Virtual Desktops およびパーソナル vDisk の有無
- インストールされているアプリケーション
- 既存の Citrix Profile Management (CPM) ポリシー設定

自動構成は、ポリシーを次の2つの方法で調整します。

- カスタマイズが保持されるポリシー
- カスタマイズが上書きされる可能性があるポリシー

カスタマイズが保持されるポリシー

Profile Management は、以下のポリシーが **未構成** に設定されている場合にのみ調整します。カスタム設定は変更されません。

- アクティブライトバック
- 常にキャッシュする
- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する
- キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延
- プロファイルストリーミング

カスタマイズが上書きされる可能性のあるポリシー

プロファイル管理は、スタートメニューローミングなどの機能との互換性を確保するために、以下のポリシーを調整する場合があります。

- ミラーリングするフォルダー
- 除外リスト - ディレクトリ、除外リスト - ファイル
- 同期するディレクトリ、同期するファイル

- プロファイルコンテナから除外するフォルダー

表: 自動構成による調整

条件	機能サポート	構成の変更
ファイルベースのプロファイルソリューション または **プロファイルコンテナのローカルキャッシュ** が有効な **コンテナベースのプロファイルソリューション**	スタートメニューローミング。詳細については、「スタートメニューローミングのベストプラクティス」を参照してください。自動構成を無効にすると、スタートメニューに問題が発生する可能性があります。	• 「**ミラーするフォルダー**」と「**同期するディレクトリ**」に `AppData\Local\Packages`、`AppData\Local\Microsoft\Windows\Caches` を追加します。これらのパスを「**除外リスト - ディレクトリ**」から削除します。
同上	同上	同上 - 「**同期するファイル**」に `AppData\Local\Microsoft\Windows\UsrClass.Dat*` を追加します。このパスを「**除外リスト - ファイル**」から削除します。
プロファイルコンテナーのローカルキャッシュが有効になっていないコンテナーベースのプロファイルソリューション	プロファイルコンテナー全体が有効になっている場合にAutoCADが開けない問題の回避策	「**プロファイルコンテナーから除外するフォルダー**」に `AppData\Local\Temp`、`AppData\Roaming\Autodesk\AutoCAD 2025`、および `AppData\Local\Autodesk\AutoCAD 2025` を追加します。
OneDriveコンテナーが有効	OneDrive SSOローミング。自動構成を無効にすると、**OneDriveコンテナー**のSSOで問題が発生する可能性があります。	「**ミラーするフォルダー**」と「**同期するディレクトリ**」に `AppData\Local\Packages\Microsoft.AAD.BrokerPlugin_cw5n1h2txyewy` を追加し

条件	機能サポート	構成の変更
		ます。このパスを「**除外リスト**」から削除します。

自動構成の管理

自動構成はデフォルトで*有効*になっています。トラブルシューティングを行う場合、または高度なカスタマイズを適用する場合にのみ、これを無効にしてください。

自動構成を無効にするには、次の手順に従います。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrixコンポーネント > Profile Management > 詳細設定**に移動します。
3. 「**自動構成を無効にする**」を開きます。
4. 「**有効**」を選択します。
5. 変更を保存するには、「**OK**」を選択します。
6. 影響を受けるマシンで`gpupdate /force`を実行します。
7. 変更を有効にするには、ログオフしてから再度ログオンします。

トラブルシューティング

自動構成に関連する問題のトラブルシューティングが必要な場合、またはProfile Managementの問題のトラブルシューティングが必要な場合は、自動構成を無効にして、必要な設定を手動で構成します。

1. 自動構成の管理の手順を使用して、自動構成を無効にします。
2. 前の表のガイダンスに基づいて、ポリシー設定を更新します。
3. 影響を受けるマシンで`gpupdate /force`を実行します。
4. 変更を適用するには、ユーザーにログオフして再度ログオンしてもらいます。

項目を含める/除外する

この記事では、Profile Management がユーザープロファイルから項目を含めたり除外したりするために使用するプロセスについて説明します。ユーザーのログオンおよびログオフエクスペリエンスを向上させるために、デフォルトの包含リストまたは除外リストを変更する場合は、このプロ

セスを理解していることを確認してください。この変更が必要かどうかを判断するには、「使用中のアプリケーション」を参照してください。

たとえば、Microsoft Word は高度にカスタマイズ可能で頻繁に使用されるアプリケーションであり、アクセス方法に関わらずローミングユーザーに同じエクスペリエンスを提供する必要があるため、含めることができます。逆に、一部のグループではめったに使用されないエンタープライズアプリケーションは、ログオンおよびログオフのたびにプロファイルデータをダウンロードする必要がないため、除外することができます。

デフォルトでは、ローカルプロファイル内のすべてのファイルとフォルダーはユーザーストアと同期されます。同期したくないファイルやフォルダーは、除外リストに追加することで指定できます。フォルダーを除外した場合でも、同期したいサブフォルダーは包含リストに追加することで指定できます。

含めることができる項目と除外できる項目は次のとおりです。

- プロファイル内に含まれるファイルとフォルダー。
- 個人設定を保存するHKCUハイブのレジストリエントリ。HKLMハイブのエントリはデフォルトでは処理されず、処理するように構成することもできません。

項目を含める/除外する前に

ユーザープロファイルの内容を調整する前に、組み込みのWindowsパフォーマンスモニター（Perfmon）カウンターのセットを使用することを検討してください。これらはプロファイルの動作に関する洞察を提供します。利用可能なカウンターには、プロファイルサイズとローカルコンピューターでCitrix®ユーザープロファイルを作成するのにかかる時間の測定値が含まれます。

プロファイルをローカル（Profile Managementを実行するコンピューター上）にキャッシュするかどうかを決定する必要がある場合があります。この決定に影響する要因には、展開内のCitrix製品、ローカルコンピューター上の利用可能なスペース、および展開内のユーザー数があります。

ファイルとフォルダー

含まれるフォルダー名と除外されるフォルダー名はすべて言語固有です。ただし、ユーザーストア内のフォルダー名は、オペレーティングシステムの言語に依存しない形式です。

オペレーティングシステムによってローカルとして扱われるディスク上のファイルまたはフォルダーを同期できます。ネットワークマップされたドライブ上のファイルまたはフォルダーは同期できません。

レジストリ

既存のユーザーの場合、HKCUハイブ全体がユーザーストアにコピーされます。新規ユーザーの場合、Microsoftのローカル、ローミング、デフォルト、またはテンプレートプロファイルのハイブがコピーされます。ユーザーストアに変更が加えられると、包含が追加され、除外がハイブから削除されます。

不要なキーを含むテンプレートプロファイルがある場合は、SepagoのProfile Nurseなどのツールを使用して、ユーザー ストアからそれらを削除します。

除外について

除外はログオン時ではなくログオフ時に処理されます。これらはユーザー ストアからデータを削除するのではなく、新しいデータが書き込まれるのを防ぎます。

デフォルトの除外を除いて、通常、Profile Managementを初めて展開するときに項目を除外する必要はありません。その後、アプリケーションのパフォーマンスを追跡し、ユーザーからのフィードバックを収集するにつれて、複数のアプリケーションの設定が競合する場合や、不要な設定の収集によりユーザーのNTUSER.DATファイルが大きくなった場合に、項目を除外する必要があるかもしれません。

リダイレクトされたフォルダーを除外として追加しないでください。

重要: Citrixでは、`AppData\LocalLow`フォルダーを同期から除外することを推奨しています。デフォルトの構成では、除外リストにすでに`AppData\LocalLow`が含まれています。さらに、`AppData\Local`フォルダーから一部のコンテンツを除外することもできます。`AppData\LocalLow`または`AppData\Local`を除外しない場合、大量のデータがネットワーク経由で転送され、ユーザーはログオンの遅延を経験する可能性があります。これらのフォルダーは、標準のWindowsローミングプロファイルでは同期されません。

含めるルールと除外するルール

Profile Managementがファイル、フォルダー、およびレジストリキーを含めたり除外したりする際に、以下のルールが使用されます。

1. すべての項目はデフォルトで含まれます
2. 同じパスが含める項目と除外する項目の両方として構成されている場合、含める項目が優先されます
3. 同じフォルダー内では、含める項目が除外する項目よりも優先されます
4. フォルダー階層の上位にある除外する項目よりも、含める項目が優先されます
5. フォルダー階層の上位にある含める項目よりも、除外する項目が優先されます

これらのルールにより、合理的で直感的な動作が実現されます。すべての項目はデフォルトで含まれます。この出発点から、最上位の例外を除外として構成し、次に最上位の例外に対するより深い例外を含める項目として構成するといったことができます。

デフォルトの包含と除外

> **注:**
>
> デフォルトの包含と除外は、ファイルベースのプロファイルソリューションにのみ適用されます。

> このトピックでは、Profile Managementが処理に含めるデフォルトアイテムと除外するデフォルトアイテムについて説明します。展開内のアプリケーションによっては、追加の（デフォルト以外の）アイテムが必要になる場合があります。含めるまたは除外する追加アイテムを決定するのに役立つ情報については、「(/ja-jp/profile-management/2402-ltsr/plan/applications-to-profile.html)」を参照してください。

重要：.iniファイルではなくグループポリシーを使用する場合（または、.iniファイルでのテストが成功した後でグループポリシー展開を展開する場合）、インストールされている.iniファイルとは異なり、.admまたは.admxファイルではデフォルトでアイテムは含まれたり除外されたりしません。デフォルトアイテムは手動でファイルに追加する必要があります。これらのアイテムは、このトピックの表に示されています。以下に注意してください。

- .iniファイルと.admまたは.admxファイルの設定名をマッピングし、Profile Management変数（例：\!ctx_internetcache\!）がどのように展開されるかを理解するために、(/ja-jp/profile-management/2402-ltsr/policies/settings.html)を使用します。
- .iniファイルから包含と除外を貼り付ける際は、各アイテムの末尾の=（等号）を削除してください。
- 包含と除外に最初のバックスラッシュを追加しないでください。

レジストリ包含リスト

デフォルト値
<空>

レジストリ除外リスト

デフォルト値
`Software\Microsoft\AppV\Client\Integration=`
`Software\Microsoft\AppV\Client\Publishing=`
`Software\Microsoft\Speech_OneCore=`

注: Microsoft App-V を使用している場合、この除外は正しくなく、 プロファイル管理と App-V に記載されているように、異なる除外が必要です。

フォルダー包含リスト

デフォルト値
<空>

プロファイル内のすべてのフォルダーはデフォルトで含まれます。

フォルダー除外リスト

この表のフォルダーは同期から除外されます。

デフォルト値
!ctx_internetcache!=
`\\!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\Cache=`
`\\!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\Cached Theme Images=`
`\\!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\JumpListIcons=`
`\\!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\JumpListIconsOld=`
`\\!ctx_localappdata!\GroupPolicy=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\AppV=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Messenger=`

デフォルト値
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Office\15.0\Lync\Tracing=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\OneNote=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Outlook=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Terminal Server Client=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\UEV=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows Live=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows Live Contacts=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\Application Shortcuts=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\Burn=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\CD Burning=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\Notifications=`
`\\!ctx_localappdata!\Packages=`
`\\!ctx_localappdata!\Sun=`
`\\!ctx_localappdata!\Windows Live=`
`\\!ctx_localsettings!\Temp=`
`\\!ctx_roamingappdata!\Microsoft\AppV\Client\Catalog=`
`\\!ctx_roamingappdata!\Sun\Java\Deployment\cache=`
`\\!ctx_roamingappdata!\Sun\Java\Deployment\log=`
`\\!ctx_roamingappdata!\Sun\Java\Deployment\tmp=`
$Recycle.Bin=
`AppData\LocalLow=`

デフォルト値
トレース=

ファイルの包含リスト

デフォルト値
<空>

プロファイル内のすべてのファイルは、デフォルトで含まれます。

ファイルの除外リスト

デフォルト値
<空>

プロファイル内のファイルは、デフォルトでは除外されません。

項目を含める/除外する

前提条件として、含める項目と除外する項目の仕組みを理解していることを確認してください。詳細については、「項目を含める/除外する」を参照してください。デフォルトで含まれる項目と除外される項目については、「デフォルトの包含と除外」を参照してください。

項目を含めたり除外したりする際に、複数のエントリを区切るにはEnterキーを使用します。

アイテムを除外するには

1. **Profile Management** \> **Registry** の下で、**Exclusion list** ポリシーをクリックします。
2. **Enabled** を選択します。
3. **Show** をクリックし、ログオフ時にProfile Managementで同期したくない `HKCU` ハイブ内のレジストリキーを追加します。例: `Software\Policies`。
4. **Profile Management** \> **File system** の下で、**Exclusion list - directories** ポリシーをダブルクリックします。
5. **Enabled** を選択します。
6. **Show** をクリックし、Profile Managementで同期したくないフォルダーを追加します。

   次の点に注意してください。

- ユーザープロファイル (%USERPROFILE%) に対する相対パスを使用してフォルダーを指定し、パスの先頭のバックスラッシュは省略します。
- プロファイルの場所を特定するには変数 `%USERPROFILE%` を使用しますが、このポリシーに変数を直接入力しないでください。
- Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

  例:

  - `Desktop`. `Desktop`フォルダーを同期しません。
  - `MyApp\tmp`. `%USERPROFILE%\MyApp\tmp`フォルダーを同期しません。

7. 「**Profile Management**」\>「**ファイルシステム**」で、「**Exclusion list - files**」ポリシーをダブルクリックします。
8. 「**Enabled**」を選択します。
9. 「**Show**」をクリックし、Profile Managementで同期したくないファイルを追加します。

次の点に注意してください。

- ファイル名は、ユーザープロファイル (%USERPROFILE%) からの相対パスで指定します。このポリシーには変数 (%USERPROFILE%) を入力しないでください。
- ファイル名でのワイルドカードはサポートされており、再帰的に適用されます。Profile Management 7.15以降では、縦棒 (`|`) を使用して、ポリシーを現在のフォルダーのみに制限できます。
- Profile Management 2112以降では、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

  例：

  - `Desktop\Desktop.ini`. `Desktop`フォルダー内の`Desktop.ini`を無視します。
  - `AppData*.tmp`. `AppData`フォルダーとそのサブフォルダー内の、`.tmp`拡張子を持つすべてのファイルを無視します。
  - `AppData*.tmp|`. `AppData`フォルダー内のみの、`.tmp`拡張子を持つすべてのファイルを無視します。
  - `Downloads*\a.txt`. `Downloads`フォルダーの直下のサブフォルダー内の`a.txt`を無視します。

「**Exclusion list**」が無効になっている場合、レジストリキーは除外されません。この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、レジストリキーは除外されません。

除外リスト - ディレクトリが無効になっている場合、フォルダーは除外されません。この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

除外リスト - ファイルが無効になっている場合、ファイルは除外されません。この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ファイルは除外されません。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

項目を含めるには

> **ヒント:**
>
> 特定のトップレベルフォルダーを含めることができます。共同作業環境では、この手順により、重要なフォルダーを他の管理者に通知できるという利点があります。

1. **Profile Management** \> **Registry**で、**Inclusion list**ポリシーをダブルクリックします。
2. **Enabled**を選択します。
3. **Show**をクリックし、ログオフ時にProfile Managementで処理させたいプロファイル関連のレジストリキーを`HKEY\_CURRENT\_USER`ハイブに追加します。例: `Software\Adobe`。
4. **Profile Management** \> **File system** \> **Synchronization**で、**Directories to synchronize**ポリシーをダブルクリックします。
5. **Enabled**を選択します。
6. **Show**をクリックし、除外されたフォルダー内にあるがProfile Managementで同期させたいフォルダーを追加します。例: `Desktop\exclude\include`は、フォルダー`Desktop\exclude`が同期されない場合でも、`include`サブフォルダーが同期されるようにします。

   次の点に注意してください。

- ユーザープロファイルに対する相対パスを使用してフォルダーを指定します。
- Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

7. 「**プロファイル管理**」\>「**ファイルシステム**」\>「**同期**」で、「**同期するファイル**」ポリシーをダブルクリックします。
8. 「**有効**」を選択します。
9. 「**表示**」をクリックし、除外されたフォルダー内にあるが、Profile Managementで同期させたいファイルを追加します。

   次の点に注意してください。

   - ユーザープロファイルに対する相対パスでファイルを指定します。
   - ファイル名でのワイルドカードはサポートされており、再帰的に適用されます。ただし、ワイルドカードをネストすることはできません。Profile Management 7.15以降では、垂直バー (`|`) を使用して、ポリシーを現在のフォルダーのみに制限し、サブフォルダーに適用されないようにすることができます。
   - Profile Management 2112以降では、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

     例：

     - `AppData\Local\Microsoft\Office\Access.qat`。デフォルト構成で除外されているフォルダー内のファイルを指定します。
     - `AppData\Local\MyApp*.cfg`。`AppData\Local\MyApp`フォルダーとそのサブフォルダー内の`.cfg`拡張子を持つすべてのファイルを指定します。
     - `Downloads*\a.txt`。`Downloads`フォルダーの直下のサブフォルダー内の`a.txt`を指定します。

   - Profile Managementは、各ユーザーのプロファイル全体を、インストールされているシステムとユーザーストアの間で同期します。このリストにファイルを追加して、ユーザープロファイルに含める必要はありません。

ここで**包含リスト**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、HKEY_CURRENT_USERハイブ全体が処理されます。

ここで**同期するディレクトリ**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないフォルダーのみが同期されます。この設定を無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

ここで**同期するファイル**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないファイルのみが同期されます。この設定を無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

ワイルドカードを使用する

ファイルやフォルダーを参照するポリシーでは、疑問符 (`?`) やアスタリスク (`*`) などのDOS形式のワイルドカード文字を使用できます。例としては、ファイルの包含/除外リストやフォルダーの包含/除外リストがあります。疑問符 (`?`) は1文字に一致します。アスタリスク (`*`) は0文字以上の文字に一致します。

Profile Management 7.15以降では、垂直バー (`|`) を使用して、ポリシーを現在のフォルダーのみに制限できます。

次の点に注意してください。

- ファイル名内のワイルドカードは再帰的に機能しますが、フォルダー名内のワイルドカードは機能しません。ワイルドカードを使用する場合は、有効なパスを指定してください。
- ワイルドカードをサポートするポリシーは、環境変数やActive Directory属性の使用など、他の種類の変数をサポートしません。レジストリエントリを参照するポリシーではワイルドカードを使用できません。

例

ワイルドカード `<path name>\h*.txt` は house.txt、h.txt、house.txt.txt に一致しますが、ah.txt には一致しません。

ワイルドカード `<path name>\a?c.txt` は abc.txt に一致しますが、ac.txt には一致しません。

ワイルドカード `<path name>\a?c*d.txt` は abcd.txt と abccd.txt に一致しますが、acd.txt には一致しません。

プロファイルルートフォルダーでのポリシーの構成:

- `*.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダー内の拡張子 .txt を持つすべてのファイルを指定します。
- `*h.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダー内でこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `h*.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダー内でこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `a?c.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダー内でこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `*.txt|` は、ルートフォルダー内の .txt 拡張子を持つファイルのみを指定します。

プロファイル以外のルートフォルダーでのポリシーの構成:

- `AppData*.txt` は、AppData フォルダーとそのサブフォルダー内でこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `AppData*h.txt` は、AppData フォルダーとそのサブフォルダー内でこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。

ログオン除外チェックを有効にする

ログオン除外チェックを有効にする機能は、ユーザーがログオンしたときに、ユーザー ストア内のプロファイルに除外されたファイルとフォルダーが含まれている場合に、Profile Management が何を行うかを制御します。デフォルトでは、この機能は無効になっています。

除外されたファイルとフォルダーとは、それぞれ**除外リスト - ファイル**および**除外リスト - ディレクトリ**ポリシーに追加するファイルとフォルダーを指します。ユーザーがログオフしても、Profile Managementは除外されたファイルとフォルダーをユーザー ストアに同期しません。ただし、除外されたファイルとフォルダーは、除外リストに追加する前にユーザー ストアに存在する場合があります。**ログオン除外チェックを有効にする**ポリシーを使用すると、ユーザーがログオンしたときに、Profile Managementでこれらのファイルとフォルダーを無視するか、ユーザー ストアから削除することができます。

この機能を使用するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix Components > Profile Management > ファイルシステム**で、**ログオン除外チェック**ポリシーをダブルクリックします。

3. **有効**を選択します。
4. ドロップダウンメニューからオプションを選択します。デフォルトでは、**除外されたファイルまたはフォルダーを削除する**が選択されています。
5. **OK**をクリックします。

この機能には、次の3つのオプションがあります。

- **除外されたファイルまたはフォルダーを削除する**。ユーザーがログオンしたときに、ユーザーストアから除外されたファイルとフォルダーを削除します。
- **除外されたファイルまたはフォルダーを無視する**。ユーザーがログオンしたときに、ユーザーストアから除外されたファイルとフォルダーを無視します。
- **除外されたファイルまたはフォルダーを同期する**。ユーザーがログオンしたときに、ユーザーストアからローカルプロファイルに除外されたファイルとフォルダーを同期します。

> **警告:**
>
> **除外されたファイルまたはフォルダーを削除する**を選択すると、Profile Managementはユーザー ストアから除外されたファイルとフォルダーを完全に削除します。除外されたファイルとフォルダーを再度含めても、ログオン時にProfile Managementはキャッシュされたローカルプロファイルからそれらを削除します。

> 変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。ログオフして、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

.iniファイルを使用してログオン除外チェックを有効にするには、次の手順を実行します。

1. Profile Management .iniファイルを開きます。
2. セクションにEnableLogonExclusionCheck項目を追加します。
3. EnableLogonExclusionCheck項目の値を次のように設定します。
    - ユーザーストアから除外リストで指定された除外ファイルとフォルダーを無視するには、値を1に設定します（例：EnableLogonExclusionCheck=1）。
    - ユーザーストアから除外リストで指定された除外ファイルとフォルダーを削除するには、値を2に設定します（例：EnableLogonExclusionCheck=2）。

- チェックを無効にするには、値を0に設定します（例：EnableLogonExclusionCheck=0）。

4. Profile Management .iniファイルを保存して閉じます。
5. 変更を有効にするには、`gpupdate /force`コマンドを実行します。

構成の優先順位:

1. この設定がグループポリシーオブジェクト（GPO）で構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がGPOにも.iniファイルにも構成されていない場合、ポリシーは無効になります。

ユーザープロファイルのストリーミング

デフォルトでは、Citrix Profile Management は、ユーザーがログオンするときに、ユーザープロファイル全体をユーザーストアからローカルコンピューターに取得します。ユーザープロファイル内の大きなファイルは、ログオンの遅延を引き起こす可能性があります。ユーザーのログオンエクスペリエンスを向上させるために、プロファイルストリーミング機能を有効にすることができます。

この機能を有効にすると、Profile Management は、ログオン後にアクセスされたときにのみプロファイルファイルとフォルダーを取得します。

プロファイルストリーミング機能を有効にする

次のポリシーを使用して、プロファイルストリーミング機能を有効にします。

- **プロファイルストリーミング。** このポリシーを有効にすると、ユーザーがアクセスしたときにプロファイル*ファイル*がローカルコンピューターに取得されます。
- **フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする。** このポリシーを有効にすると、ユーザーがアクセスしたときにプロファイル*フォルダー*がローカルコンピューターに取得されます。

ポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理 > ストリーミングされたユーザープロファイル**にアクセスします。
3. **プロファイルストリーミング**をダブルクリックします。**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

4. **フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**をダブルクリックします。**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

プロファイルストリーミングの強化機能を有効にする

プロファイルストリーミング機能を有効にした後、必要に応じてさまざまな強化機能を適用できます。

例 1: ユーザーから大容量プロファイルファイルの読み込みが遅いという報告がありました。この場合、**常にキャッシュ**ポリシーを有効にし、大容量ファイルの最小サイズを指定します。Profile Management は、ユーザーログオン*中*に、そのサイズより大きいファイルをローカルプロファイルにキャッシュします。

例 2: 組織では、ユーザーが特定のプロファイルフォルダーに頻繁にアクセスします。そのため、プロファイルストリーミングが有効になっている場合でも、ユーザーログオン時にそれらのフォルダーをローカルプロファイルにフェッチしたいと考えています。この目標を達成するには、**プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**ポリシーを有効にし、プロファイルストリーミングからフォルダーを除外します。

必要に応じて拡張機能を有効にします。詳細な手順は次のとおりです。

1. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ストリーミングユーザープロファイル**にアクセスします。
2. 大きなファイルの読み込み時間を短縮するには、Profile Management でログオン*中*に大きなファイルをローカルプロファイルにキャッシュできるようにします。詳細な手順は次のとおりです。

   a. **常にキャッシュ**をダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. キャッシュするプロファイルファイルのサイズの下限 (MB) を設定します。プロファイル全体をキャッシュするには、制限をゼロに設定します。

      注:

      - 制限を超えるファイルは、Profile Management がユーザーログオン*中*にバックエンド処理スレッドを開始するとすぐに、ローカルプロファイルにキャッシュされます。
      - 制限を下回るファイルは、ユーザーがアクセスしたときにローカルプロファイルにフェッチされます。

   d. **OK**をクリックします。

3. プロファイルストリーミングをドメイン内の特定のユーザーグループにのみ適用するには、次の手順に従います。

   a. **ストリーミングユーザープロファイルグループ**をダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. ユーザーグループのリストを入力します。エントリを区切るには`Enter`を押します。

   d. **OK**をクリックします。

   注: デフォルトでは、このポリシーは無効になっており、プロファイルストリーミングはドメイン内のすべてのユーザーグループに適用されます。

4. 特定のプロファイルフォルダーとファイルをプロファイルストリーミングから除外するには、次の手順に従います。

   a. **プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**ポリシーをダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. **表示**をクリックします。

   d. Profile Managementでストリームしたくないフォルダーを追加します。詳細については、この記事の後半にあるプロファイルストリーミングの除外を有効にするを参照してください。

5. 同じユーザーの同時セッションで最適なログオンエクスペリエンスを確保するには、次の手順に従います。

   a. をダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. をクリックします。 詳細については、この記事の後半にある保留領域のプロファイルストリーミングを参照してください。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。詳細については、`<https://technet.microsoft.com/ja-jp/library/bb490983.aspx>`を参照してください。

構成の優先順位

の各ポリシーの構成の優先順位は次のとおりです。

- GPOまたは.iniファイルで**** が構成されていない場合、 は無効になります。

- GPOで**** が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここまたは.iniファイルで構成されていない場合、無効になります。
- が無効になっている場合、すべてのユーザーグループが処理されます。この設定がGPOで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がGPOまたは.iniファイルで構成されていない場合、すべてのユーザーが処理されます。
- GPOまたは.iniファイルで**** が構成されていない場合、フォルダーのプロファイルストリーミングは無効になります。
- GPOまたは.iniファイルで**** が構成されていない場合、すべてのフォルダーがストリームされます。
- GPOまたは.iniファイルで**** が構成されていない場合、保留領域のプロファイルストリーミングは無効になります。

プロファイルストリーミング除外を有効にする

プロファイルストリーミングの除外が有効になっている場合、Profile Managementは除外リスト内のフォルダーをストリームしません。除外リスト内のすべてのフォルダーとファイルは、ユーザーがログオンするとすぐにユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチされます。

プロファイルストリーミングの除外を有効にするには、次の手順に従います。

1. 「プロファイル管理」の下で、「**ストリームユーザープロファイル**」をダブルクリックします。
2. 「**プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**」ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**Enabled**」を選択します。
4. 「**表示**」をクリックします。
5. Profile Managementでストリームしたくないフォルダーを追加します。フォルダー名は、絶対パスまたはユーザープロファイルに対する相対パス (`%USERPROFILE%`) として指定できます。その変数を使用してプロファイルの場所を特定しますが、このポリシーに変数自体を入力しないでください。パスの先頭のバックスラッシュは省略してください。

例:

- デスクトップ。デスクトップフォルダーは、ユーザーログオン時にフェッチされます。
- `MyApp\tmp` 。 `%USERPROFILE%\MyApp\tmp` フォルダーは、ユーザーログオン時にフェッチされます。

ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイル内の以下のフォルダーはデフォルトで除外されます。

- `AppData\Local\Microsoft\Credentials`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Credentials`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Crypto`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Protect`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\SystemCertificates`

注:

- このポリシーは、プロファイルストリーミングが有効になっている場合にのみ適用されます。
- このポリシーは、ワイルドカード `*` および `?` をサポートしていません。
- エントリを区切るには、`Enter` と入力します。
- プロファイルストリーミング除外リストを手動で編集する場合、ログオンがハングするのを避けるために、前述のデフォルトで除外されているフォルダーを追加する必要があります。

保留領域のプロファイルストリーミング

Profile Managementは、同じユーザーの同時セッションで変更されたプロファイルファイルとフォルダーを一時的に保存するために、保留領域を使用します。デフォルトでは、この領域はプロファイルストリーミング機能の例外です。この機能が有効になっている場合でも、ユーザーがログオンすると、この領域のファイルとフォルダーはローカルプロファイルにフェッチされます。

同じユーザーの同時セッションで最適なログオンエクスペリエンスを確保するには、プロファイルストリーミング機能の強化として「**保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする**」機能を有効にします。このポリシーが有効になっている場合、Profile Managementは、ユーザーがログオン時ではなく、アクセス時に保留領域のファイルとフォルダーをローカルプロファイルにフェッチします。その領域に大きなファイルがある場合、ユーザーのログオン時間が大幅に短縮されます。

> **注:**
>
> このポリシーが有効になっている場合、ユーザーがセッションを開始すると、各ユーザーのユーザーストアに `PendingArea.vhdx` という名前のディスクが作成されます。ユーザーが複数の同時セッションを開始すると、各セッションに対して `Diff-V<version number>.vhdx` (例: Diff-V1.vhdx) という名前の追加ディスクが作成されます。

バージョン2402以降、ファイルベースのプロファイルソリューションでは、以下のプロファイルストリーミング機能がデフォルトで有効になっています：プロファイルストリーミング、フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする、ペンディングエリアのプロファイルストリーミング。

ユーザー ストアをレプリケートする

ユーザー ストアのレプリケートポリシーを使用すると、ユーザーのログオンおよびログオフごとにユーザー ストアを複数のパスにレプリケートできます。これにより、プロファイルの冗長性が提供され、ユーザー プロファイルの可用性が高レベルで保証されます。

注：

- この機能は、ファイルベースとコンテナベースの両方のプロファイルソリューションに適用されます。
- レプリケートされたプロファイルコンテナは、ユーザーログオンのプロファイル冗長性を提供しますが、セッション内フェールオーバーには提供しません。
- このポリシーを有効にすると、システムI/Oが増加し、ログオフが長くなる可能性があります。

仕組み

ユーザー ストアへのパスポリシーを使用して構成されたユーザー ストアに加えて、**ユーザー ストアのレプリケート**ポリシーを使用して、さらにユーザー ストアを構成できます。複数のユーザー ストアが環境に展開および構成されている場合、Profile Managementは次のように動作します。

- ユーザーの*ログオン*中に、Profile Managementはユーザーの最新プロファイルを持つユーザー ストアを選択します。複数のユーザー ストアが最新プロファイルを持っている場合、デフォルトでは、Profile Managementは最初に構成されたストア（構成順序で最も早いもの）を選択します。Profile Managementが最高のアクセスパフォーマンスを持つストアを選択するように有効にすることもできます。詳細については、「ユーザー ストアの選択方法を変更する」を参照してください。
- ユーザーの*ログオフ*中に、Profile Managementはローカルプロファイルをすべてのユーザー ストアに書き戻します。

レプリケートされたユーザー ストアを構成する

プロファイルの冗長性を提供するには、**ユーザー ストアへのパス**ポリシーを使用して構成されたユーザー ストアに加えて、追加のユーザー ストアを設定します。グループポリシーを使用してレプリケートされたユーザー ストアを構成するには、次の手順に従います。

グループポリシーを使用して構成を完了するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**にアクセスし、**ユーザー ストアのレプリケート**ポリシーをダブルクリックします。
3. ポリシーを**有効**に設定します。
4. 「**ユーザー ストアをレプリケートするパス**」の横にある「**表示**」をクリックします。
5. 「**値**」フィールドに、レプリケートされたユーザー ストアのパスを入力します。他のレプリケートされたユーザー ストアについても、この手順を繰り返します。

   ユーザープロファイルの一部でプロファイルコンテナが有効になっている場合、コンテナベースのプロファイルとファイルベースのプロファイルを異なる場所にレプリケートできます。そのためには、パスを次の形式で入力します: `<path to the replicated file-based profiles>|<path to the replicated container-based profiles>`。例: `\\path_a|\\path_b` は、Profile Management がファイルベースのプロファイルを `\\path_a` に、コンテナベースのプロファイルを `\\path_b` にレプリケートすることを示します。
6. 「**OK**」をクリックし、もう一度「**OK**」をクリックします。

> **注:**
>
> セッション中に変更されたファイルとフォルダーをユーザー ストアに同期するには、アクティブなライトバックを有効にする ポリシーを有効にします。

ユーザー ストアの選択方法を変更する

デフォルトでは、複数のユーザー ストアが利用可能な場合、Profile Management は最新のプロファイルを持つストアを選択します。複数のオプションがある場合は、最も早く構成されたものを選択します。必要に応じて、Profile Management が最適なアクセスパフォーマンスを持つストアを選択するように有効にできます。詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。

2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定** にアクセスし、「**ユーザー ストアの選択方法**」ポリシーをダブルクリックします。
3. ポリシーを**有効**に設定します。
4. 「**選択方法**」フィールドで、「**アクセスパフォーマンス**」を選択します。構成順序に基づく選択に戻すには、「**構成順序**」を選択します。
   - **構成順序。** Profile Management は、最初に構成されたストア（構成順序で最も早いもの）を選択します。
   - **アクセスパフォーマンス。** Profile Management は、最適なアクセスパフォーマンスを持つストアを選択します。
5. 「**OK**」をクリックします。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここまたは.iniファイルで構成されていない場合、**構成順序**が使用されます。

> **ヒント:**
>
> ユーザーログオン時のストア選択イベントをトレースするには、マシンで**Windows イベントビューアー**を開き、**Windows ログ > アプリケーション**に移動し、ID **5**の**Citrix Profile Management イベント**のフィルターを適用します。

プロファイルコンテナを設定する

> **重要:**
>
> この機能はWindows 7では動作しません。

ユーザープロファイル内の大きなフォルダーは、ユーザーログオンの遅延を引き起こす可能性があります。ログオンエクスペリエンスを向上させるために、Profile ManagementはVHDXベースのプロファイルソリューションであるプロファイルコンテナを提供します。このソリューションにより、選択したプロファイルフォルダーをVHDXプロファイルディスク

> に保存できます。ユーザーがログオンすると、VHDXプロファイルディスクがマウントされ、プロファイルフォルダーがすぐに利用可能になります。

プロファイルコンテナを使用すると、次のいずれかの目標を達成できます。

- コンテナベースのプロファイルソリューションを設定する: ユーザープロファイル全体をプロファイルコンテナに保存します。
- ファイルベースのプロファイルソリューションのユーザーエクスペリエンスを最適化する: ユーザープロファイルの一部をプロファイルコンテナに保存します。

ワークフロー

プロファイルコンテナを展開するための一般的なワークフローは次のとおりです。

1. (オプション) プロファイルコンテナのストレージ容量とパスをカスタマイズする。
2. ニーズに合わせてプロファイルコンテナを有効にする：
   - ユーザープロファイルの一部に対してプロファイルコンテナを有効にする（ファイルベースのプロファイル最適化ソリューション）
   - ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にする（コンテナベースのプロファイルソリューション）

   > **注:**
   >
   > コンテナベースのプロファイルソリューションが有効になっている場合、以下のユーザープロファイル（存在する場合）は、初回使用時に自動的にコンテナに移行されます。
   >
   > - ローカルWindowsユーザープロファイル
   > - Citrix®ファイルベースプロファイルソリューションからのユーザープロファイル
3. プロファイルコンテナの肥大化を防ぐには、フォルダーとファイルを除外する。
4. 展開でマルチセッションシナリオが一般的な場合は、必要に応じてプロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする。
5. プロファイルデータが拡張するにつれてプロファイルコンテナのサイズが動的に増加するようにするには、プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にして構成する。

6. ユーザープロファイル内の同一ファイルに起因するストレージコストを削減するために、ファイル重複排除ポリシーを有効にして構成できます。

   a. プロファイルコンテナから重複排除するファイルを指定する。

   b. (オプション) 重複排除から除外するファイルを指定する。

   c. (オプション) プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズを指定する。

7. (オプション) ADユーザーにプロファイルコンテナへの読み取りアクセスを許可する。

8. ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にしている場合（コンテナベースのプロファイルソリューション）、必要に応じて以下のいずれかのポリシーを有効にできます。

   - 高いレベルのプロファイル可用性を保証するためにプロファイルの冗長性を提供するには、ユーザーストアを複製するを有効にします。
   - ローカルコンピューターにユーザープロファイルをキャッシュするには、プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする。
   - プロファイルコンテナへの同時アクセスを1つのみ許可するには、プロファイルコンテナへの排他的アクセスを有効にする。

     > **注:**
     >
     > 「**プロファイルコンテナへの排他的アクセスを有効にする**」設定がプロファイルコンテナに対して有効になっている場合、「**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**」設定は自動的に無効になります。

   - ログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合にユーザーをログオフするかどうかを指定する。

考慮事項

コンテナベースのプロファイルソリューションを有効にする際は、以下の考慮事項に注意してください。

- ファイルベースのプロファイルソリューションは自動的に無効になり、以下のポリシーは適用されなくなります。
  - プロファイルストリーミング

例外: プロファイルストリーミングは、*プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする*ポリシーが有効になっている場合にのみ、プロファイルコンテナに適用されます。詳細については、「プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする」を参照してください。

- ファイルシステム
- アクティブライトバック
- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する

コンテナベースのプロファイルソリューションに適用されるポリシーを表示するには、「ファイルベースおよびコンテナベースのソリューションのポリシー」を参照してください。

- Outlook の検索インデックスローミング機能との下位互換性を維持するため、Profile Management は、以下のファイルをそれぞれ保存するために使用される2つの VHDX ディスクを保持します。
  - Outlook 検索インデックスデータベース
  - オフライン Outlook データファイル (`.ost`)

(オプション) プロファイルコンテナのストレージ容量とパスをカスタマイズする

デフォルトでは、プロファイルコンテナはユーザー ストアに保存され、デフォルトのストレージ容量は50 GBです。

たとえば、ユーザー ストアのパスを次のように構成します。`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!`。

プロファイルコンテナは、次に以下に保存されます。`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!\ProfileContainer\!ctx_osname!`。

プロファイルコンテナの別のネットワークの場所を指定し、そのデフォルトのストレージ容量を変更できます。詳細については、「VHDファイルのストレージ容量とパスを指定する」を参照してください。

ユーザープロファイルの一部に対してプロファイルコンテナを有効にする

ユーザー ストアでのログオン時間を短縮するには、プロファイルコンテナ機能を有効にし、それらの大きなプロファイルフォルダーをプロファイルコンテナに追加できます。

> **注：**
>
> プロファイルコンテナに追加するフォルダーは、ユーザー ストアにも存在します。プロファイルコンテナ機能を有効にすると、Profile Managementはプロファイルコンテナとユーザーストアの間でフォルダーを同期させます。
>
> プロファイルコンテナ機能を有効にしてから無効にしたとします。一貫性のあるユーザープロファイルを確保するために、Profile Managementはユーザー ストアプロファイルをプロファイルコンテナと同期させます。この同期はユーザーログオン時に行われます。除外リスト内のフォルダーはユーザー ストアにコピーされません。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート：ポリシー定義（ADMXファイル） > Citrixコンポーネント > Profile Management > プロファイルコンテナ設定**で、**プロファイルコンテナ**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式でフォルダーを追加します。サイズの大きいキャッシュファイルを含むフォルダーを追加することをお勧めします。たとえば、Citrix Filesコンテンツキャッシュフォルダーをリストに追加します: `AppData\Local\Citrix\Citrix Files\PartCache`。

コンテナベースのプロファイルソリューションを有効にする

コンテナベースのプロファイルソリューションを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix Components > Profile Management > Profile container settings** で、**Profile container** ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効** を選択します。
4. **表示** をクリックし、プロファイルコンテナーリストにアスタリスク (`*`) を追加します。
5. **OK** をクリックします。

(オプション) フォルダーとファイルを含める/除外する

プロファイルコンテナーが肥大化するのを防ぐため、フォルダーやファイルをそこから除外できます。必要に応じて、親フォルダーが除外されている場合でも、フォルダーやファイルを含めることができます。

プロファイルコンテナーからフォルダーを除外する

> **重要:**
>
> ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナーを有効にしても、フォルダーリダイレクト設定は引き続き有効です。リダイレクトするフォルダーを **プロファイルコンテナーから除外するフォルダー** リストに入れないでください。そうしないと、フォルダーリダイレクトが機能しません。

1. **Profile Management > Profile container settings** で、**プロファイルコンテナーから除外するフォルダー** ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効** を選択します。
3. **表示** をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で除外するフォルダーを入力します。

   フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。例:

   - `Desktop` は `Desktop` フォルダーを示します。
   - `Downloads*` は、`Downloads` フォルダーのすべての直下サブフォルダーを示します。

> **注:**
>
> ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナ（*コンテナベースのプロファイルソリューション*）を有効にすると、`appdata\local\temp` フォルダーはプロファイルコンテナから自動的に除外されます。

> 構成の優先順位:

1. 設定が無効になっている場合、フォルダーは除外されません。

2. ここで設定が構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
3. ここで、または .ini ファイルで設定が構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

プロファイルコンテナにフォルダーを含める

除外されたフォルダーのサブフォルダーをプロファイルコンテナに含めるには、次の手順に従います。

1. **Profile Management > プロファイルコンテナ設定**で、**プロファイルコンテナに含めるフォルダー**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で含めるフォルダーを入力します。

次の点に注意してください。

- このリストのフォルダーは、除外されたフォルダーのサブフォルダーである必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。
- フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。
- ポリシーを有効にして空のリストを構成することは、設定を無効にすることと同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでも設定が構成されていない場合、除外リストにないフォルダーはプロファイルコンテナーに含まれます。

プロファイルコンテナーにファイルを含める

プロファイルコンテナーからフォルダーを除外した後、そのフォルダー内のファイルをプロファイルコンテナーに含めることができます。詳細な手順は次のとおりです。

1. **Profile Management > プロファイルコンテナー設定**で、**プロファイルコンテナーに含めるファイル**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で含めるファイルを入力します。

次の点に注意してください:

- このリストのファイルは、除外されたフォルダー内にある必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。
- ファイル名内のワイルドカードは再帰的に適用されます。ポリシーを現在のフォルダーのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
- Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

例:

- `Desktop\Desktop.ini` は `Desktop\Desktop.ini` ファイルを示します。
- `AppData*.tmp` は、`AppData` フォルダーとそのサブフォルダー内の `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを示します。
- `AppData*.tmp|` は、`AppData` フォルダー内のみの `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを示します。
- `Downloads*\a.txt` は、`Downloads` フォルダーの直下のサブフォルダー内の `a.txt` を示します。

ポリシーを有効にして空のリストを構成することは、設定を無効にすることと同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここで、または.iniファイルで設定が構成されていない場合、除外リストにないファイルはプロファイルコンテナに含まれます。

プロファイルコンテナからファイルを除外する

Profile Management 2112以降、プロファイルコンテナからファイルを除外できます。詳細な手順は次のとおりです。

1. **Profile Management > プロファイルコンテナ設定**で、**プロファイルコンテナから除外するファイル**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で除外するファイルを入力します。

次の点に注意してください。

- ファイル名内のワイルドカードは再帰的に適用されます。ポリシーを現在のフォルダーのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
- Profile Management 2112以降、フォルダー名内のワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

構成の優先順位:

1. 設定が無効になっている場合、ファイルは除外されません。
2. ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここで、または.iniファイルで設定が構成されていない場合、ファイルは除外されません。

(オプション) VHD自動拡張を有効にして構成する

ユーザープロファイルは通常、時間の経過とともに増加します。ストレージ管理を簡素化するために、プロファイルコンテナのVHD自動拡張機能を有効にします。この機能を有効にすると、コンテナの使用率が90%に達したときに、自動的に10 GB拡張され、最大容量は80 GBになります。必要に応じて、これらのデフォルト設定を特定のニーズに合わせてカスタマイズできます。

> **ヒント:**
>
> VHD自動拡張設定をより詳細に制御するには、ユーザーレベルのポリシー設定を使用できます。組織は標準の自動拡張設定を持つことができますが、特定のユーザーに対しては、より大きな最大容量などの固有の設定を提供できます。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. 次の手順でVHD自動拡張を有効にします。
    a. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix Components > Profile Management > プロファイルコンテナ設定**に移動します。
    b. **プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
    c. **有効**を選択します。
    d. **OK**をクリックします。
3. プロファイルコンテナが自動拡張をトリガーするデフォルトのストレージ使用率を変更するには、次の手順に従います。
    a. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix Components > Profile Management > 詳細設定**に移動します。

b. **プロファイルコンテナの自動拡張しきい値**ポリシーをダブルクリックします。
c. **有効**を選択します。
d. **自動拡張しきい値 (%)** フィールドに、必要に応じてパーセンテージを入力します。
e. **OK**をクリックします。

4. プロファイルコンテナが自動的に拡張するストレージ容量を変更するには、次の手順に従います。

a. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**に移動します。
b. **プロファイルコンテナの自動拡張増分**ポリシーをダブルクリックします。
c. **有効**を選択します。
d. **自動拡張増分 (GB)** フィールドに、必要に応じて数値を入力します。デフォルトは 10 (GB) です。
e. **OK**をクリックします。

5. プロファイルコンテナが自動的に拡張できる最大ストレージ容量を変更するには、次の手順に従います。

a. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**に移動します。
b. **プロファイルコンテナの自動拡張制限**ポリシーをダブルクリックします。
c. **有効**を選択します。
d. **自動拡張制限 (GB)** フィールドに、必要に応じて数値を入力します。デフォルトは 80 (GB) です。
e. **OK**をクリックします。

(オプション) プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする

プロファイル管理は、デフォルトでプロファイルコンテナへの同時アクセスをサポートしています。ただし、すべての同時セッションのうち、1つのセッションのみが読み取り/書き込み権限を持ち、プロファイルの変更をコンテナにマージできます。

以下は、プロファイル管理が同時アクセスを処理する方法です。

- セッションログオン時:

読み取り/書き込みセッションが存在するかどうかを確認します。存在する場合、現在のセッションは読み取り専用になります。存在しない場合、それは読み取り/書き込みセッションです。

- セッションログオフ時:

  a. プロファイルコンテナをマウント解除します。

  b. 現在のセッションが読み取り専用の場合、プロファイルの変更を破棄します。

  c. 他の同時セッションがない場合、読み取り/書き込みセッションのプロファイル変更をプロファイルコンテナにマージします。

マルチセッションライトバックを有効にするには、プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にするポリシーを使用します。

(オプション) プロファイルコンテナへの排他的アクセスを有効にする

デフォルトでは、プロファイルコンテナは同時アクセスを許可します。必要に応じて、**プロファイルコンテナ設定 > VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする** を通じて、プロファイルコンテナへの同時アクセスを無効にできます。その結果、プロファイルコンテナは一度に1つのアクセスのみを許可します。

> **注:**
>
> - この設定は、ユーザープロファイル全体に対して有効になっているプロファイルコンテナにのみ適用されます。
> - プロファイルコンテナでこの設定が有効になっている場合、**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする** 設定は自動的に無効になります。

> 詳細については、VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にするを参照してください。

(オプション) プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする

プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする 機能は、プロファイルコンテナがユーザープロファイル全体に対して有効になっている場合にのみ有効になります。**プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする** ポリシーを有効にすると、ユーザーログオン時に、プロファイルコンテナ内のユーザープロファイルがユーザーのローカルユーザープロファイルにキャッシュされます。

重要:

このポリシーが有効になっている場合、OneDrive など、コンテナベースのプロファイルソリューションでのみ機能するアプリケーションが正しく動作しない可能性があります。OneDrive が正しく機能するようにするには、このポリシーを無効にするか、OneDrive コンテナポリシーを有効にしてください。

デフォルトでは、ユーザーログオン時にユーザープロファイル全体がキャッシュされます。ユーザーログオン時間を短縮するには、**プロファイルストリーミング**ポリシーを有効にできます。その結果、ユーザープロファイル内のプロファイルフォルダーは、ログオン後にオンデマンドでキャッシュされます。

注:

ローカルキャッシュからファイルまたはフォルダーを除外するには、**プロファイルコンテナ設定**ではなく、**ファイルシステム**の除外ポリシーと包含ポリシーを使用します。

(オプション) ログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合にユーザーをログオフするかどうかを指定します

デフォルトでは、ユーザーログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合、ユーザーは一時プロファイルを使用してログオンします。しかし、この動作はセッション中に加えられた変更のデータ損失につながります。代わりに、このような場合にユーザーを強制的にログオフさせるには、**ログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合にユーザーをログオフする**ポリシーを有効にできます。このポリシーが有効になっている場合、ユーザーには「**プロファイルを設定できません: プロファイルコンテナが利用できません。OK をクリックするとログオフされ、このセッション中に行われた変更はすべて失われます。**」というエラーメッセージが表示されます。このメッセージで**OK**をクリックすると、すぐにログオフされます。必要に応じて、このポリシーを有効にする際にエラーメッセージをカスタマイズすることもできます。

GPO を使用してこのポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. **プロファイル管理 > プロファイルコンテナ設定**で、**ログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合にユーザーをログオフする**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。

3. **エラーメッセージ**フィールドに、ログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合にユーザーに表示されるメッセージを入力します。空のままにすると、デフォルトのメッセージが表示されます。
4. **OK**をクリックします。

> **注:**
>
> Studio を使用してプロファイル管理ポリシーを構成する場合、**無効**アクションを実行してもこのポリシーを無効にすることはできません。代わりに、このポリシーを無効にするには、ポリシーを編集してその値を**無効**に変更し、ポリシーのチェックボックスをオフにします。

> 構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、設定は無効になります。

（オプション）ADユーザーにプロファイルコンテナへの読み取りアクセスを許可する

適用対象：ファイルベースおよびコンテナベースの両方のプロファイルソリューション。

デフォルトでは、プロファイルコンテナはその所有者のみがアクセスできます。ADドメイン内の他のユーザーにアクセスを拡張するには、**プロファイルコンテナにアクセスするユーザーとグループ**ポリシーを有効にできます。Profile Managementは、このポリシーで指定されたユーザーおよびユーザーグループに**読み取りと実行**のアクセス許可を付与します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. **Profile Management > プロファイルコンテナ設定**で、**プロファイルコンテナにアクセスするユーザーとグループ**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **プロファイルコンテナにアクセスするユーザーとグループ**フィールドで、**表示**をクリックし、コンテナの`Read and Execute`アクセス許可を付与するADユーザーとグループを追加します。ADユーザーまたはグループを識別するには、`domain name\user or group name`形式またはセキュリティ識別子（SID）を使用します。
4. **OK**をクリックし、もう一度**OK**をクリックします。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの設定が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、プロファイルコンテナはその所有者のみがアクセスできます。

プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする

> **ヒント:**
>
> FSLogix Profile Container の詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/fslogix/configure-profile-container-tutorial>` を参照してください。Citrix Profile Management プロファイルコンテナの詳細については、Citrix Profile Management プロファイルコンテナ を参照してください。

概要

FSLogix Profile Container や Citrix Profile Management プロファイルコンテナなどの VHD ベースのプロファイルソリューションは、マルチセッションシナリオでの変更の保存をサポートしていません。これらのソリューションでは、1つのセッション（読み取り/書き込みモード）のみが変更を書き込むことができます。他のセッション（読み取り専用モード）での変更は破棄されます。

ただし、マルチセッションシナリオは Citrix Virtual Apps のユースケースで一般的です。これらのユースケースを容易にするために、**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーを提供しています。このポリシーを使用すると、FSLogix Profile Container と Citrix Profile Management プロファイルコンテナの両方でマルチセッションライトバックを有効にできます。同じユーザーが異なるマシンで複数のセッションを起動した場合、Profile Management は各セッションで行われた変更をユーザーのプロファイルコンテナに同期して保存します。

ユーザーログオン中に、ユーザーのプロファイルコンテナディスクがマウントされ、I/O リクエストはマウントされたディスクにリダイレクトされます。その後、Profile Management はユーザーストアからローカルプロファイルに変更を同期します。

ユーザーログオフプロセス中、Profile Management はセッションで使用されている FSLogix Profile Container のモードによって動作が異なります。

- 読み取り専用モードが使用されている場合、Profile Management は変更をユーザーストアに書き戻します。

- 読み取り/書き込みモードが使用されている場合、Profile Management はユーザーストアからの変更をローカルプロファイルに適用します。その後、変更はユーザーのプロファイルコンテナにマージされます。

> **注:**
>
> FSLogix Profile Container が使用されている場合、マルチセッションライトバック機能はプロファイルストリーミングと互換性がありません。

以下のイベントが変更と見なされます。

- 作成
- 変更
- 削除
- 名前変更

ライトバック戦略

Profile Managementは、「最終書き込み優先」戦略を使用して変更を適用します。

- ファイル/フォルダーの作成および変更の場合、ファイル/フォルダーの最終書き込み時刻を比較して変更をライトバックします。
- ファイル/フォルダーの削除および名前の変更の場合、変更に関連付けられたタイムスタンプを比較して変更をライトバックします。Profile Managementは、変更が発生したときにタイムスタンプをログに記録します。

プロファイルコンテナーのマルチセッションライトバックを有効にする

プロファイルコンテナーのマルチセッションライトバックを有効にするポリシーを**有効**に設定することで、マルチセッションライトバック機能を使用できます。このポリシーは、デフォルトで**無効**に設定されています。

- FSLogix Profile Containerでこの機能を使用するには、次の手順を完了します。
    - FSLogix プロファイルコンテナ
        - FSLogix Profile Containerがインストールされ、有効になっていることを確認します。
        - プロファイルの種類が**読み取り/書き込みプロファイルを試行し、読み取り専用にフォールバックする**に設定されていることを確認します。

    - Citrix プロファイル管理
        - **Profile Managementを有効にする**ポリシーを有効に設定します。
        - **ユーザーストアへのパス**ポリシーを有効なパスで設定します。
        - （オプション）「**処理対象グループ**」および「**除外グループ**」ポリシーを設定します。処理するユーザーグループがFSLogixプロファイルコンテナ内のグループと一致していることを確認します。
        - 「**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**」ポリシーを「**有効**」に設定します。このポリシーはGPOまたはCitrix Studioで設定できます。手順については、この記事の後半を参照してください。

- Citrix Profile Managementプロファイルコンテナのマルチセッションライトバック機能を使用するには、以下の手順を完了します。
    - 「**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**」ポリシーを「**有効**」に設定します。
    - Citrix Profile Managementプロファイルコンテナ機能を有効にする。

「**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**」ポリシーを有効にするには、以下の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. 「**コンピューターの構成**」>「**管理用テンプレート**」>「**Citrix Components**」>「**Profile Management**」>「**詳細設定**」で、「**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**」ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**有効**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

変更を有効にするには、Profile Managementがインストールされているマシンで、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

アプリケーションへのアクセスを制御する

アプリケーションアクセス制御機能を使用すると、ルールを使用してアプリケーションへのアクセスを制御できます。この機能により、アプリケーションとイメージの管理を効率化できます。たとえば、異なる部門に同一のマシンを提供しながら、それぞれの固有のアプリケーション要件を満たすことができ、イメージの数を削減できます。

この記事では、アプリケーションアクセス制御を有効にし、制御ルールを構成するプロセスについて説明します。また、この機能を使用して仮想環境でのイメージ管理を簡素化する例も示します。

> **注:**
>
> この機能は、Active Directory (AD) 環境と非ドメイン参加 (NDJ) 環境の両方に適用されます。

概要

アプリケーションアクセス制御機能を使用すると、非表示ルールを構成することで、ユーザー、マシン、プロセスからアプリケーションを非表示にできます。

非表示ルールは次の2つの部分で構成されます。

- **非表示にするオブジェクト。** アプリケーションに対して非表示にしたいファイル、フォルダー、およびレジストリエントリ。

  たとえば、アプリケーションを非表示にするには、ファイル、フォルダー、レジストリエントリなど、そのアプリケーションに関連付けられているすべてのオブジェクトを指定する必要があります。
- **割り当て。** アプリケーションを非表示にする対象のユーザー、マシン、およびプロセス。

割り当ての種類

非表示ルールにおける割り当ては、プロセス、ユーザー、マシンの3つのカテゴリに分類されます。具体的な割り当ての種類は次のとおりです。

カテゴリ	種類
プロセス	該当なし
ユーザー	• ADおよびAzure Active Directory (AAD) ユーザー • ADおよびAADユーザーグループ

カテゴリ	種類	
マシン	• AD、AAD、およびNDJマシン • ADマシンのグループ（組織単位（OU）にグループ化されているもの） • NDJマシンのグループ（マシンカタログにグループ化されているもの）	

注：

- アプリのアクセス制御のコンテキストでは、OUはマシンのみのコンテナとして使用され、ユーザーのコンテナとしては使用されません。その結果、OU割り当ては、OU内のマシンからのみアプリを非表示にし、OU内のユーザーからは非表示にしません。
- NDJマシンは、Citrix®が作成し、電源管理するマシンに限定されます。

非表示ルールに複数の割り当てが構成されている場合は、次の考慮事項に注意してください。

- これらの割り当てが同じカテゴリ（たとえば、*ユーザー* A と *ユーザー グループ* B）である場合、アプリケーションはこれらの割り当てで指定されたすべてのオブジェクト（ユーザー A とユーザーグループ B のすべてのユーザー）から非表示になります。
- これらの割り当てが異なるカテゴリ（たとえば、*ユーザー* A と マシン X）である場合、アプリケーションはそれらの割り当てで指定されたすべての条件が満たされたときに非表示になります（ユーザー A がマシン X にサインインしたとき）。
- これらの割り当てが *プロセス* カテゴリである場合、アプリケーションはこれらの割り当てで指定されたすべてのプロセスから非表示になります。

注：

> ルールに割り当てが構成されていない場合、ルールで指定されたアプリケーションは非表示になります。

ワークフロー

アプリケーションアクセス制御機能を使用すると、Profile Management は、指定したルールに基づいて、ユーザー、マシン、プロセスからアプリケーションを非表示にできます。アプリケーションアクセス制御を実装するワークフローの概要は次のとおりです。

1. 非表示ルールを作成および生成します。使用できるツールは次の2つです。
    - GUIベースのツール – WEM Tool Hub > アプリケーションアクセス制御用ルールジェネレーター
    - PowerShell ツール – Profile Management インストールパッケージに含まれています。詳細については、「ルールジェネレーターを使用したルールの作成、管理、展開」を参照してください。
2. GPO を使用して、環境内のマシンに非表示ルールを適用します。詳細については、「GPO を使用したアプリケーションアクセス制御の有効化」を参照してください。

ルールジェネレーターを使用したルールの作成、管理、展開

このセクションでは、PowerShell ベースのルールジェネレーターを使用してルールを作成、管理、展開する方法について説明します。

開始する前に、ツールを実行するマシンが次の要件を満たしていることを確認してください。

- Windows 10または11、あるいはWindows Server 2016、2019、または2022で実行されます。
- (AD環境のみ) ユーザーとマシンと同じドメインにあります。

一般的な手順は次のとおりです。

1. **Windows PowerShell**を管理者として実行します。
2. プロファイル管理インストールパッケージ内の**\tool**フォルダーにアクセスし、**CPM_App_Access_Control_Config.ps1**を実行します。
3. 画面の指示に従って、非表示ルールを作成、管理、生成します。
    a. マシンにインストールされている各アプリケーションとその状態を表示します。
        - **未構成**。アプリケーションに対してルールは構成されていません。

- **構成済み**。アプリケーションに対して1つ以上のルールが構成されていますが、それらのいずれもマシンに適用されていません。
- **構成済みで適用済み**。アプリケーションに対して1つ以上のルールが構成されており、少なくとも1つのルールがマシンに適用されています。

```
List of apps to manage:
Index Status           Name
----- ------           ----
    1 Not configured   Adobe Acrobat (64-bit)
    2 Not configured   AppUp.IntelGraphicsExperience
    3 Not configured   AppUp.ThunderboltControlCenter
    4 Not configured   Citrix Secure Access
    5 Not configured   Citrix Workspace 2303
    6 Not configured   DolbyLaboratories.DolbyAccess
    7 Not configured   ELANMicroelectronicsCorpo.ELANTrackPointforThinkpa
    8 Not configured   Git
    9 Not configured   Google Chrome
```

b. アプリケーションリストから、非表示にするアプリケーションをインデックスを入力して選択します。そのアプリケーションに関連付けられているすべてのファイル、フォルダー、およびレジストリエントリが表示されます。

追加の選択(/en-us/profile-management/2402-ltsr/media/app-access-control-tool-add-extra.png)

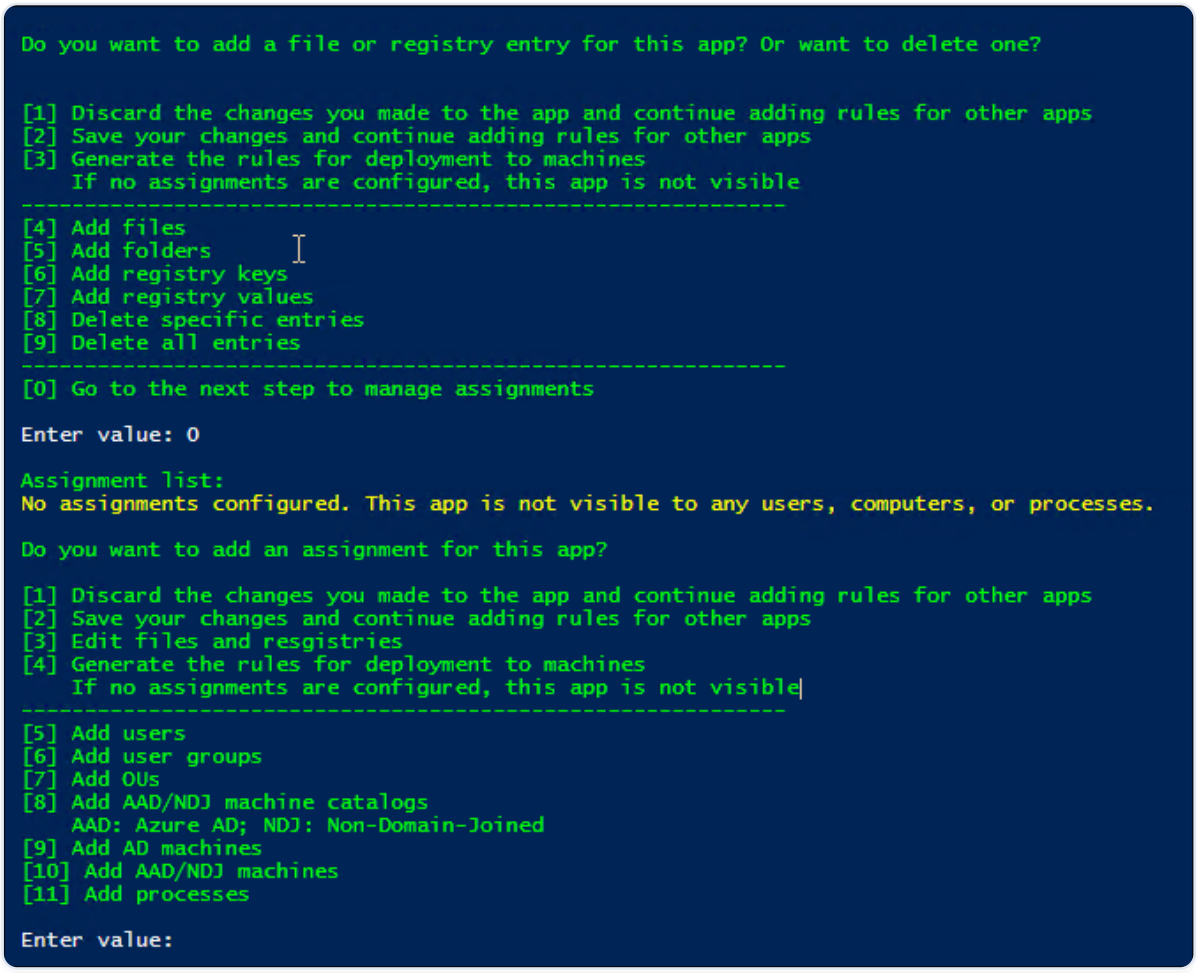
c. 選択したアプリケーションの追加のファイル、フォルダー、またはレジストリエントリを非表示にするには、対応するアクションタイプを選択し、その名前とパスを入力してオブジェクトを追加します。この手順を繰り返して、さらに追加します。

考慮事項:

- パス内のシステム環境変数（%windir%など）はサポートされていますが、ユーザー環境変数（%appdata%など）はサポートされていません。
- ファイルとフォルダーでは、ワイルドカード `*` と `?` がサポートされています。文字列に複数のアスタリスク（'*'）がある場合、2つのアスタリスク間の文字は無視されます。たとえば、文字列 `c:\users\Finance*Manangement*` では、文字 `*Management*` は単一のアスタリスク（*）として扱われます。

> **注:**
>
> 特定のファイル、フォルダー、およびレジストリエントリに関連付けることで、アプリケーションを手動で定義することもできます。

d. ルールの割り当てを構成します。詳細には、割り当ての種類を指定し、アプリケーションを非表示にする特定のオブジェクトを入力します。詳細については、次の表を参照してください。



注:

ルールに割り当てを構成しない場合、ルールで指定されたアプリは非表示になります。

割り当てタイプ	説明
ADユーザー、ユーザーグループ、またはOU	ADドメイン名を縦棒（|）で区切って入力します。
ADマシン	DNSホスト名を縦棒（|）で区切って入力します。

割り当てタイプ	説明
NDJマシンカタログ	縦棒 (|) で区切ってカタログ名を入力します。例: `Machine_catalog_name1|Machine_catalog_name2`
NDJ マシン	WEM Web コンソールで AAD/NDJ オブジェクトセレクター を使用してマシン名を収集し、それらの名前を縦棒 (|) で区切って入力します。例: `Machine_name1|Machine_name2`。すべての非ドメイン参加マシンを追加するには、「**NDJ***」と入力します。
	NDJ マシン名では、ワイルドカード `*` と `?` がサポートされています。
	注: 文字列に複数のアスタリスク (`*`) がある場合、2 つのアスタリスク間の文字は無視されます。たとえば、文字列 `ResearchDep*Virtual*TeamMachine*` では、文字 `*Virtual*` は単一のアスタリスク (`*`) として扱われます。
Azure AD ユーザー	WEM Web コンソールで AAD/NDJ オブジェクトセレクター を使用してユーザーの SID と名前を収集し、`sid1\name1|sid2\name2` の形式で入力します。例: `/azuread/989c2938-6527-4133-bab1-f3860dd15098\Tester1|/azuread/82bdde32-d5d9-4d64-b0ff-9876d4488d05\Tester2`
Azure AD グループ	WEM Web コンソールで AAD/NDJ オブジェクトセレクター を使用してグループの SID と名前を収集し、`sid1\name1|sid2\name2` の形式で入力します。例: `/azuread/989c2938-6527-4133-bab1-f3860dd15098\TestGroup1|/`

割り当てタイプ	説明
	`azuread/82bdde32-d5d9-4d64-b0ff-9876d4488d05\TestGroup2`

4. 手順 3 を繰り返して、他のアプリケーションの非表示ルールを作成します。
5. 画面の指示に従って、構成したルールの生データを生成し、将来の使用のために .txt ファイルに保存します。
6. ルールが期待どおりに機能するかどうかをテストするには、画面の指示に従って、このマシンまたはマシンのグループにルールを展開します。

> **注:**
>
> このツールを本番環境にルールを展開するために使用することはお勧めしません。

GPOを使用してアプリのアクセス制御を有効にする

非表示ルールを作成および生成した後、GPOを使用してそれらを環境内のマシンに適用できます。

GPOを使用して制御ルールをマシンに適用するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > アプリのアクセス制御**にアクセスします。
3. **アプリのアクセス制御**をダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択します。
5. 生成されたルールを保存した.txtファイルを開き、内容をコピーして、**アプリのアクセス制御ルール**フィールドに貼り付けます。
6. **OK**をクリックします。

この機能の構成の優先順位は次のとおりです。

1. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用していない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がどこにも構成されていない場合、この機能は無効になります。

例

このセクションでは、イメージのアプリのアクセス制御を実装するための例を説明します。

要件

この例の要件は次のとおりです。

- 単一のイメージを使用して、営業、人事、エンジニアリング部門の仮想マシンを作成します。
- 次のアプリケーションへのアクセスを制御します。
  - Microsoft Excel: 人事部門のユーザーには表示されません。
  - Visual Studio Code: 営業部門または人事部門のユーザーには表示されません。

ソリューション

インストールされているアプリケーションへのアクセスを制御するために、Profile Management をインストールします。

テンプレートマシンのインストール

イメージをキャプチャするためのテンプレートマシンをインストールします。手順は次のとおりです。

1. 新しいマシンを、ユーザーおよびマシンと同じADドメインに参加させます。
2. マシンに次のソフトウェアをインストールします。
   - 必要に応じて、Windows 10または11、あるいはWindows Server 2016、2019、または2022
   - Profile Management バージョン2303以降
   - 必要なすべてのアプリケーション

非表示ルールを作成および生成する

1. テンプレートマシンで、ルールジェネレーターツールを使用して非表示ルールを作成および生成します。
   - ルール1：人事部門のユーザーからMicrosoft Excelを非表示にする（アプリケーション：Microsoft Excel; 割り当て：HRユーザーグループ）
   - ルール2：営業部門または人事部門のユーザーからVisual Studio Codeを非表示にする（アプリケーション：Visual Studio Code; 割り当て：営業ユーザーグループおよびHRユーザーグループ）

2. 2つのルールの生データを生成し、.txtファイルに保存します。

ツールの使用方法の詳細については、「ルールジェネレーターを使用してルールを作成、生成、および展開する」を参照してください。

これで、テンプレートマシンからイメージをキャプチャできます。

GPOを使用してアプリのアクセス制御を有効にする

仮想マシンが作成されたら、GPOを使用してアプリのアクセス制御を一元的に有効にし、生成されたルールをマシンに適用します。詳細については、「GPOを使用してアプリのアクセス制御を有効にする」を参照してください。

ユーザーレベルのポリシー設定を有効にして構成する

デフォルトでは、ほとんどのProfile Managementポリシーはマシンレベルで機能します。これらのポリシー設定をコンテナ（サイト、ドメイン、またはOU）に適用すると、誰がログオンしても、そのコンテナ内のマシンに適用されます。

「*ユーザーレベルのポリシー設定*」機能が有効になっている場合、これらのマシンレベルのポリシーはユーザーレベルで機能します。つまり、ユーザーまたはグループ固有の設定を構成できます。これらの設定をコンテナに適用すると、指定されたユーザー、または指定されたグループのユーザーがそのコンテナ内のマシンにログオンした場合にのみ適用されます。

設定の競合が発生した場合、Profile Managementは次の優先順位で処理します。

1. ユーザー固有の設定
2. ユーザーグループ固有の設定
3. マシンレベルの設定

構成手順

ユーザーレベルのポリシー設定を有効にして構成するには、次の手順に従います。

1. ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする
2. ユーザーまたはグループのポリシー設定を構成する
3. （オプション）ユーザーグループの優先順位を指定する。

ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする

ユーザーレベルのProfile Management設定を適用するには、まず「*ユーザーレベルのポリシー設定*」機能を有効にする必要があります。この目標は、グループポリシーオブジェクト（GPO）、Workspace Environment Management™（WEM）、またはWeb Studioなどのさまざまなツールを使用して達成できます。

GPOを使用してこの機能を有効にするには、次の手順に従います。

1. GPOを作成し、サイト、ドメイン、OUなどのターゲットマシンを保持するコンテナにリンクします。
2. GPO のグループポリシー管理エディターを開きます。
3. **ポリシー \> 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) \> Citrix コンポーネント \> Profile Management \> 詳細設定** にアクセスします。
4. **ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする** ポリシーをダブルクリックします。
5. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効** を選択し、**OK** をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、無効になります。

ユーザーとグループのポリシー設定を構成する

このセクションでは、ユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成する方法について説明します。

たとえば、組織には経理、営業、マーケティングなどのグループがあります。経理グループは独自のユーザーストアを使用し、他のグループはユーザーストアを共有します。この要件を満たすには、経理グループにユーザーレベルの **ユーザーストアへのパス** ポリシーを構成し、組織にマシンレベルの **ユーザーストアへのパス** 設定を構成します。

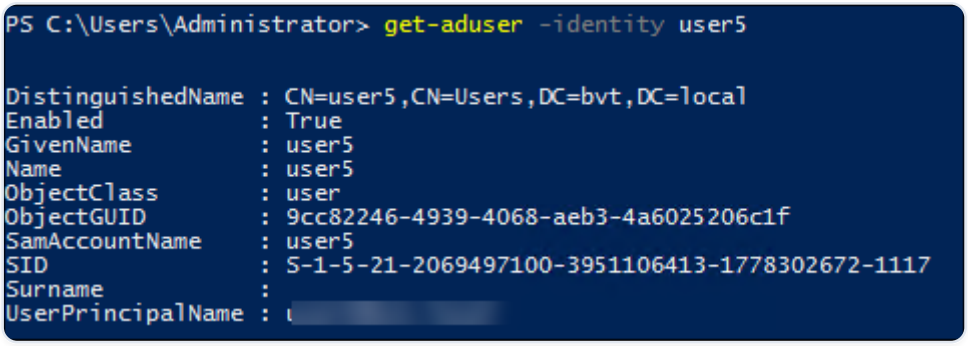
ユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成するには、次の手順に従います。

1. ユーザーとグループのセキュリティ識別子 (SID) を取得する
2. ユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成する

ユーザーとグループのセキュリティ識別子 (SID) を取得する

ユーザーまたはグループのユーザー固有の Profile Management 設定を構成する前に、まずドメイン名に基づいてその SID を取得します。詳細な手順は次のとおりです。

1. ドメインコントローラーにログオンします。
2. **Windows PowerShell** を管理者として実行します。
3. PowerShell コマンドラインから、必要に応じて次のいずれかのコマンドを実行します。
   - ユーザーの SID を取得するには、`Get-ADUser -Identity <ADUser>` と入力します。例: `Get-ADUser -Identity user5`
   - グループの SID を取得するには、`Get-ADGroup -Identity <ADGroup>` と入力します。例: `Get-ADGroup -Identity HR_Group`
4. 返された結果から SID をコピーします (たとえば、次の結果の `S-1-5-21-2069497100-3951106413-1778302672-1117`)。



ユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成する

ユーザーレベルのポリシー設定は、以下を使用して構成できます。

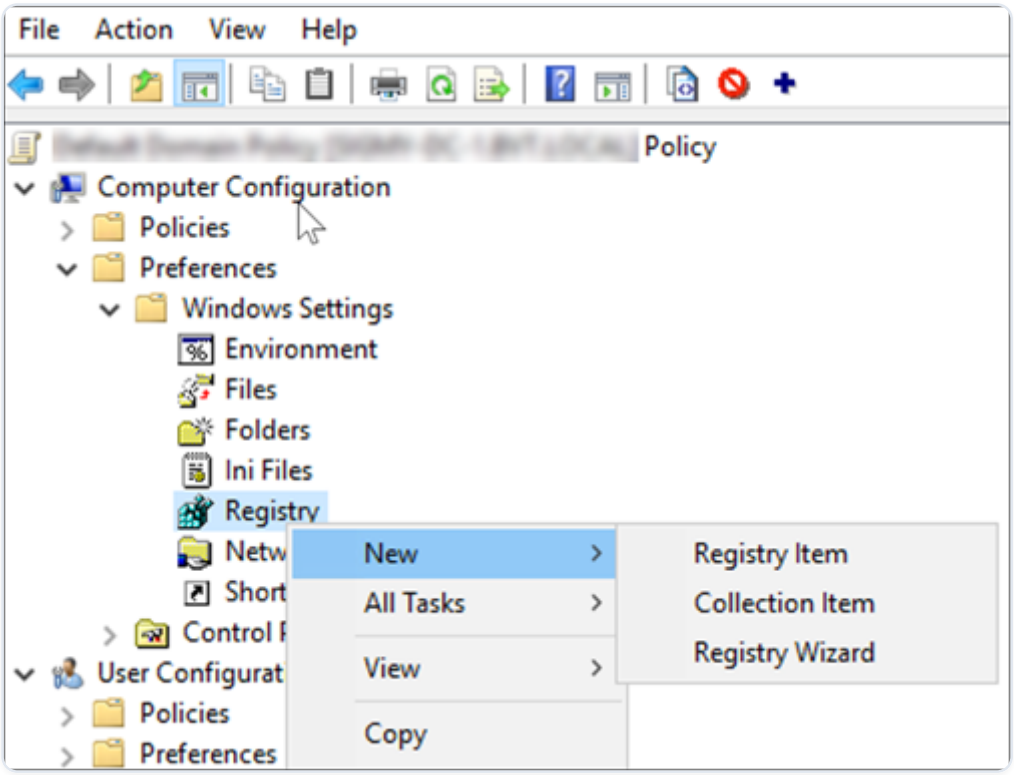
- グループポリシー設定 (GPP)
- WEM Web コンソール

GPP を使用して設定を構成する

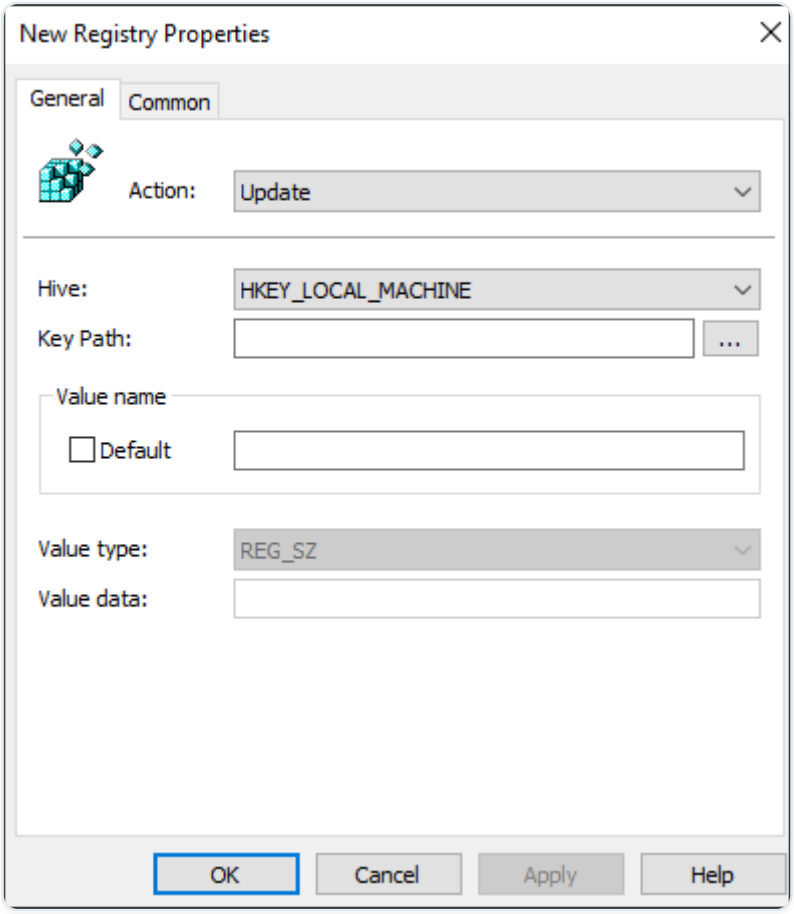
GPP を使用してユーザーレベルのポリシー設定を構成できます。グループポリシーの一部として、GPP 設定は GPO を介してドメイン参加済みコンピューターに自動的に配布されます。

ユーザーまたはグループのポリシー設定を構成するには、次の手順に従います。

1. ターゲット GPO のグループポリシー管理エディターを開きます。



2. 「**コンピューターの構成 \> 基本設定 \> Windows の設定 \> レジストリ**」に移動し、「**新規 \> レジストリ項目**」を右クリックします。「**新しいレジストリのプロパティ**」ウィンドウが表示されます。

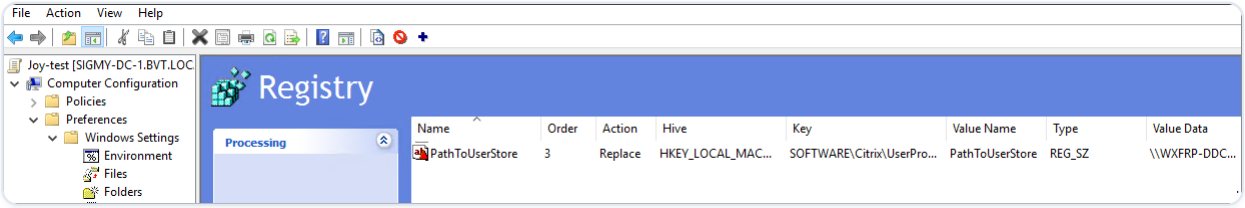


3. 「**全般**」タブで、次の表に示すように、ユーザーまたはグループ固有のポリシーを構成します。この表には、ユーザーの *Path to user store* ポリシー（SID: `S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108`）を設定するための構成例も示されています。

フィールド	説明	例
アクション	デフォルトのままにします。	更新
ハイブ	デフォルトのままにします。	HKEY_LOCAL_MACHINE
キーパス	ユーザーまたはグループ固有のポリシーのレジストリキーパスを入力します。まず、GPP プロパティ設定 テーブルでポリシー名を検索してキーパスを取得します。次に、キーパス内の `<SID>` を実際の SID に置き換えます。	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108`
値の名前	ポリシーのレジストリ値の名前を入力します。ポリシーの値の名前を見つけるには、GPP プロパティ設定 テーブルでポリシー名を検索します。	ユーザーストアへのパス
値のタイプ	ポリシーのレジストリ値の型（REG_SZ または REG_DWORD）を選択します。ポリシーの値の型を見つけるには、GPP プロパティ設定 テーブルでポリシー名を検索します。	REG_SZ
値のデータ	ポリシーのレジストリ値のデータ（設定値）を入力します。値のデータはポリシーによって異なります。詳細については、GPP プロ	`\\WXFRP-DDC-1\UPM1\#sAMAccountName#\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`!

フィールド	説明	例
	パティ設定 テーブルを参照してください。	

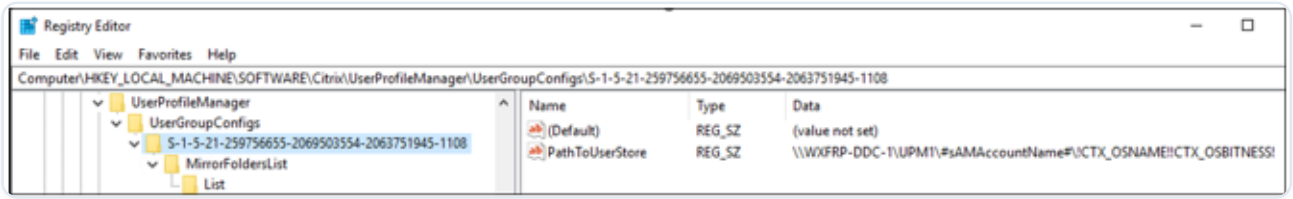
4. 「**共通**」タブをクリックし、「**適用されなくなったときにこの項目を削除する**」を選択します。メッセージボックスが表示されます。
5. 「**OK**」をクリックして確認します。「**全般**」タブの「**アクション**」オプションが「**置換**」に変わります。
6. 「**OK**」または「**適用**」をクリックします。変更はドメインコントローラーに保存されます。構成結果（例: *ユーザー ストアへのパス* ポリシー）が表示されます。



7. このGPOに対してユーザーまたはグループ固有のポリシー設定をさらに構成するには、それぞれについて手順2～6を繰り返します。例セクションの構成例を参照してください。

これらのポリシー設定をコンピューターに手動で同期するには、コンピューターで `groupupdate/force` コマンドを実行します。ユーザーレベルのポリシー設定を有効にするには、コンピューターからログオフして再度ログオンします。

次のスクリーンショットに示すように、ユーザーレベルのポリシー設定は次のレジストリキー `HKLM\SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>` に表示されます。



WEM Web Console を使用して設定を構成する

WEM Web Console を使用して、ユーザーレベルのポリシー設定を構成できます。詳細については、Workspace Environment Management Service ドキュメントの「GPO の作成」を参照してください。

例

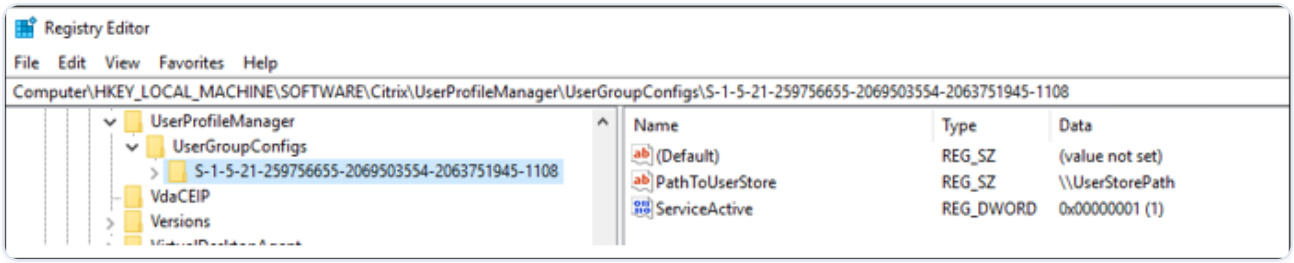
このセクションでは、ユーザーレベルのポリシー設定を構成するためのいくつかの例を示します。

Profile Management を有効にする

GPP設定を使用して、ユーザーまたはグループの「**プロファイル管理を有効にする**」ポリシーを構成します。

フィールド	値
キーパス	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108
値の名前	ServiceActive
値のタイプ	REG_DWORD
値のデータ	1

レジストリ内の場所:



ミラーリングするフォルダー

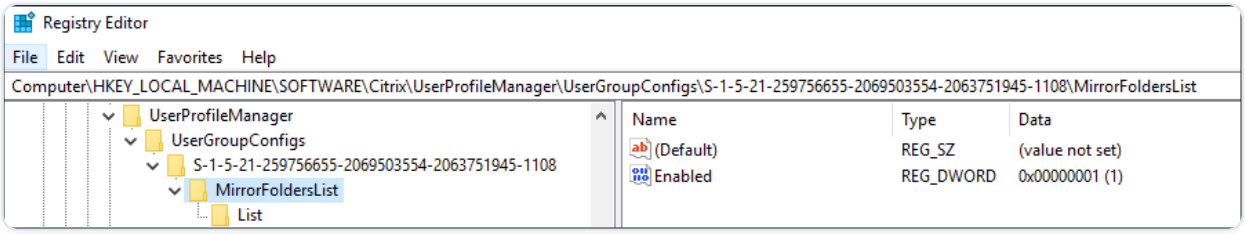
> **注:**
>
> ファイルとフォルダーのリストを含むユーザー固有のポリシーを構成するには、複数のGPPレジストリアイテムを構成する必要があります。

ユーザーまたはグループの**ミラーリングするフォルダー**ポリシーを構成するには、次の手順に従います。

1. これらのGPP設定を使用してポリシーを有効にします。

フィールド	値
キーパス	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108\MirrorFoldersList
値の名前	有効
値のタイプ	REG_DWORD
値のデータ	00000001

レジストリ内の場所:

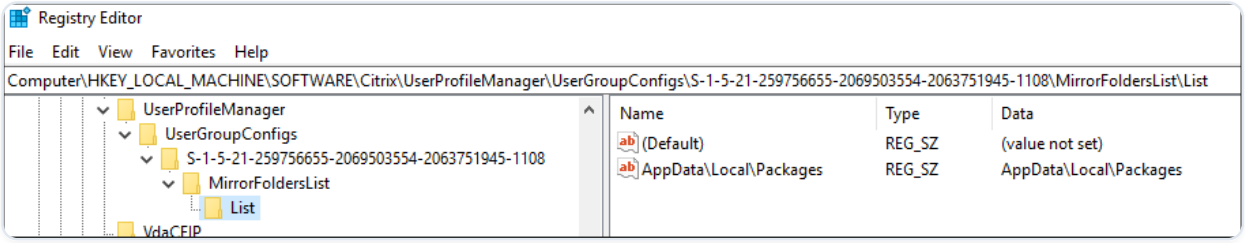


2. これらのGPP設定を使用して、ミラーリングするフォルダー（例: AppData\Local\Packages）を追加します。

フィールド	値
キーパス	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108\MirrorFoldersList\List
値の名前	AppData\Local\Packages
値のタイプ	REG_SZ
値のデータ	AppData\Local\Packages

> **注:**
>
> 「**値の名前**」フィールドと「**値のデータ**」フィールドの両方に、ミラーリングするフォルダーを入力します。

レジストリ内の場所:



3. このポリシーにフォルダーを追加するには、手順2を繰り返します。

（オプション）ユーザーグループの優先順位を指定する

ユーザーが競合するポリシー設定を持つ複数のグループに属している場合は、それらのグループの優先順位を指定します。

設定の競合が発生した場合、最も優先順位の高いグループのポリシー設定が優先されます。優先順位が指定されていない場合、アルファベット順で最も早いSIDを持つグループが優先されます。

GPOを使用して優先順位を構成するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー \> 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) \> Citrix コンポーネント \> Profile Management \> 詳細設定**にアクセスします。
3. 「**ユーザーグループの優先順位を設定**」ポリシーをダブルクリックします。ポリシーウィンドウが表示されます。
4. 「**Enabled**」を選択します。
5. 「**ユーザーグループの優先順位**」フィールドに、グループのセキュリティ識別子 (SID) またはドメイン名を優先順位の降順でセミコロン (`;`) で区切って入力します。

   例:

   `ctxxa.local\groupb;S-1-5-21-674278408-26188528-2146851469-1174;ctxxa.local\groupc;`
6. **OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、優先順位は指定されません。

GPPプロパティ設定

この表は、ユーザーレベルのProfile ManagementポリシーのGPPプロパティ設定を一覧表示します。

注:

この表には6つの列が含まれています。一部はビューポートを超えて表示される場合があります。非表示の列を表示するには、下にスクロールして水平スクロールバーを使用してください。

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
Profile Management を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	ServiceActive	0:無効; 1:有効;	
処理されるグループ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProcessedGroups`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProcessedGroups\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
除外されるグループ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfil`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`eManager\UserGroupConfigs\<SID>\ExcludedGroups`				
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ExcludedGroups\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
ローカル管理者によるログオンの処理	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	ProcessAdmins	0:無効; 1:有効;	
ユーザーストアへのパス	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	PathToUserStore	絶対パス、またはホームディレクトリからの相対パス。	
ユーザーストアの移行	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroup`	REG_SZ	MigrateUserStore	以前使用していたユーザー ストア パス。	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`Configs\<SID>`				
アクティブライトバック	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSMidSessionWriteBack	0:無効; 1:有効;	
アクティブライトバックレジストリ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSMidSessionWriteBackReg	0:無効; 1:有効;	
セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSMidSessionWriteBackSessionLock	0:無効; 1:有効;	
オフラインプロファイルのサポート	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OfflineSupport	0:無効; 1:有効;	
ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroup`	REG_DWORD	DeleteCachedProfilesOnLogoff	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
ルを削除する	`Configs\<SID>`				
キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延	Software\Policies\Citrix\UserProfileManager<SID>	REG_DWORD	ProfileDeleteDelay	遅延 (秒単位)。	
既存プロファイルの移行	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	MigrateWindowsProfilesToUserStoreEnabled	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	MigrateWindowsProfilesToUserStore	1:ローカルとローミング; 2:ローカル; 3:ローミング; 4:なし;	
既存のアプリケーションプロファイルの自動移行	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	ApplicationProfilesAutoMigrationEnabled	0:無効; 1:有効;	
ローカルプロファイルの競合処理	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroup`	REG_DWORD	LocalProfileConflictHandling	1:ローカルプロファイルを使用; 2:ローカルプロファイルを削除; 3:ローカル	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`Configs\<SID>`			プロファイルの名前を変更;	
テンプレートプロファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	TemplateProfilePath	テンプレートプロファイルへのパス。	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	TemplateProfileOverridesLocalProfile	0:無効; 1:有効;	テンプレートプロファイルがローカルプロファイルを上書きする
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	TemplateProfileOverridesRoamingProfile	0:無効; 1:有効;	テンプレートプロファイルが移動プロファイルを上書きする
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	TemplateProfileIsMandatory	0:無効; 1:有効;	すべてのログオンでCitrix必須プロファイルとして使用されるテンプレートプロファイル

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	LoadRetries	再試行回数。	
自動構成を無効にする	Software\Policies\Citrix\UserProfileManager<SID>	REG_DWORD	DisableDynamicConfig	0:無効; 1:有効;	
問題が発生した場合にユーザーをログオフする	Software\Policies\Citrix\UserProfileManager<SID>	REG_DWORD	LogoffRatherThanTempProfile	0:無効; 1:有効;	
カスタマーエクスペリエンス向上プログラム	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CEIP有効	0:無効; 1:有効;	
Outlook の検索インデックスローミングを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OutlookSearchRoamingEnabled	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
Outlook 検索インデックスデータベース - バックアップと復元	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OutlookEdbBackupEnabled	0:無効; 1:有効;	
Outlook検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OutlookSearchRoamingConcurrentSessionEnabled	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OutlookOstVhdxMaxNum	Outlook OST ファイルを保存するための VHDX ディスクの最大数。	
プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	FSLogixProfileContainerSupport	0:無効; 1:有効;	
ユーザーストアをレプリケートする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\Mult`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`ipleRemoteStoreReplication`				
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\MultipleRemoteStoreReplication\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CredBasedAccessEnabled	0:無効; 1:有効;	
VHDX ファイルのストレージ パスをカスタマイズする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	PathToVhdStore	VHDXファイルを保存するパス。	
セッションで VHDX ディスクを自動的に再アタッチする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	EnableVolumeReattach	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
ログオン時のユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	SyncGpoStateEnabled	0:無効; 1:有効;	
OneDriveコンテナを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\OneDriveContainer`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\OneDriveContainer\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CompactVHDFreePortion	空き領域の比率 (%)。	
VHDディスクの圧縮をトリガーす	`SOFTWARE\Citrix\UserProfil`	REG_DWORD	CompactVHDIterations	ログオフ回数。	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
るログオフ回数	`eManager\UserGroupConfigs\<SID>`				
VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CompactVHDnDefrag	0:無効; 1:有効;	
プロファイルコンテナ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainer`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainer\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroup`	REG_DWORD	ProfileContainerLocalCache	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`Configs\<SID>`				
プロファイルコンテナから除外するフォルダー	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerExclusionListDir`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerExclusionListDir\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
プロファイルコンテナに含めるフォルダー	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerInclusionListDir`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerInclusionListDir\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
プロファイルコンテナから除外するファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerExclusionListFile`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerExclusionListFile\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
プロファイルコンテナ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfil`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
に含めるファイル	`eManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerInclusionListFile`				
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerInclusionListFile\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
VHDディスクの圧縮を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	EnableVHDCompact	0:無効; 1:有効;	
除外リスト	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ExclusionListRegistry`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ExclusionListRegistry\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
包含リスト	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\InclusionListRegistry`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\InclusionListRegistry\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
NTUSER.DATのバックアップ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroup`	REG_DWORD	LastKnownGoodRegistry	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`Configs\<SID>`				
除外リスト - ファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncExclusionListFiles`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncExclusionListFiles\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
除外リスト - ディレクトリ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncExclusionListDir`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncExclusionListDir\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
ログオン除外チェック	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	LogonExclusionCheck	0:除外されたファイルまたはフォルダーを同期する; 1:除外されたファイルまたはフォルダーを無視する; 2:除外されたファイルまたはフォルダーを削除する;	
大容量ファイルの処理 - シンボリックリンクとして作成されるファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\LargeFileHandlingList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\LargeFileHandlingList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
同期するディレクトリ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncDirList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncDirList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
同期するファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncFileList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncFileList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
ミラーリングするフォルダー	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\MirrorFoldersList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\MirrorFoldersList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
フォルダーのミラーリングを高速化する	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	AccelerateFolderMirroring	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
プロファイルストリーミング	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	ピーエス有効	0:無効; 1:有効;	
ペンディングエリアのプロファイルストリーミングを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSForPendingAreaEnabled	0:無効; 1:有効;	
常にキャッシュ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSAlwaysCache	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSAlwaysCacheSize	このサイズ以上のファイルをキャッシュする（MB単位）。	
保留中のエリアロックファイルのタイムアウト (日数)	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSPendingLockTimeout	保留中のエリアロックファイルのタイムアウト（日数）。	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
ストリーミングされたユーザープロファイルグループ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\PSUserGroupsList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\PSUserGroupsList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\StreamingExclusionList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\StreamingExcl`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`usionList\List`				
クロスプラットフォーム設定を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CP有効	0:無効; 1:有効;	
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\CPUserGroupList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\CPUserGroupList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
クロスプラットフォーム定義へのパス	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	CPSchemaPath	クロスプラットフォーム定義へのパス。	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	CPパス	クロスプラットフォーム設定ストアへのパス。	
クロスプラットフォーム設定の作成元	Software\Policies\Citrix\UserProfileManager<SID>	REG_DWORD	CPMigrationFromBaseProfileToCPStore	0:無効; 1:有効;	
Citrix Virtual Appsの最適化を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	XenAppOptimizationEnabled	0:無効; 1:有効;	
Citrix Virtual Apps最適化定義へのパス	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	XenAppOptimizationDefinitionPath	Citrix Virtual Apps最適化定義へのパス。	
重複排除のために共有ストアに含めるファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SharedStoreFi`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	leInclusionList				
	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SharedStoreFileInclusionList\List	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
共有ストアから除外するファイル	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SharedStoreFileExclusionList	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SharedStoreFileExclusionList\List	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
プロファイルコンテナの自動拡張しきい値	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	AutoExtendThreshold	自動拡張しきい値 (パーセント)	
プロファイルコンテナの自動拡張増分	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	AutoExtendSize	自動拡張増分 (GB)	
プロファイルコンテナの自動拡張制限	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	AutoExtendLimit	自動拡張制限 (GB)	
VHD コンテナーのデフォルト容量	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	VhdCapacity	デフォルト容量 (GB)	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	DisableConcurrentAccessToProfileContainer	0:無効; 1:有効;	プロファイルコンテナ
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	DisableConcurrentAccessToOneDriveContainer	0:無効; 1:有効;	OneDriveコンテナ
UWPアプリのローミング	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	EnableUwpAppsRoaming	0:無効; 1:有効;	

Azure AD参加済みおよびドメイン非参加のVDAマシンに対するサポートを有効にする

Citrix Profile Managementは、顧客が管理するAzureサブスクリプション内のAzure AD参加済みおよびドメイン非参加のVDAマシンに対して、プロファイル管理を提供できるようになりました。

前提条件

- プロファイル管理 2203以降
- VDAバージョン 2203以降
- プロファイルストレージサーバーの資格情報を保存するためにWorkspace Environment Management (WEM)を使用している場合、WEMエージェントバージョン2109.2.0.1以降

Profile Managementを有効にする

Azure AD参加済みまたはドメイン非参加のVDAマシンでProfile Managementを有効にするには、以下の設定を完了します。

1. 「**Profile Management**」で、「**Enable Profile management**」ポリシーを「**enabled**」に設定します。
2. 「**Path to user store**」ポリシーを、VDAからアクセス可能な有効なパスに設定します。たとえば、ユーザーストアがファイルサーバーまたはAzure Files共有上にある場合、アクセス可能です。
3. 「**Profile container**」ポリシーを「**Enable**」に設定し、プロファイルコンテナリストにアスタリスク (*) を追加します。詳細については、「ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にする」を参照してください。
4. 「**Enable credential-based access to user stores**」ポリシーを「**Enabled**」に設定します。次に、Profile Managementがユーザーストアにアクセスできるように、プロファイルストレージサーバーの資格情報をWEMまたはWindows資格情報マネージャーに保存します。詳細については、「ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする」を参照してください。

ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする

デフォルトでは、Citrix Profile Management は現在のユーザーを偽装してユーザー ストアにアクセスします。この動作では、現在のユーザーがユーザー ストアに直接アクセスする権限を持っている必要があります。対照的に、**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**ポリシーを使用すると、Profile Management はストア自身の資格情報を使用してユーザー ストアにアクセスできます。

このポリシーにより、ユーザー ストアの展開とアクセスにおいて、より柔軟性が得られます。たとえば、このポリシーを使用すると、現在のユーザーがアクセス権を持たないファイル共有 (Azure Files など) にユーザー ストアを展開できます。または、ユーザー ストアへのアクセス時に Profile Management が現在のユーザーを偽装しないようにしたい場合は、このポリシーを有効にできます。

> **注:**
>
> Profile Management は2種類のプロファイル ソリューションを提供しており、ユーザー ストアは両方のストレージ場所として機能します。

- ファイルベースのソリューション。ユーザー プロファイルは、ログオン時にリモート ユーザー ストアからローカル コンピューターにフェッチされ、ログオフ時に書き戻されます。
- コンテナーベースのソリューション。ユーザー プロファイルは VHDX ファイル (プロファイル コンテナーとして知られています) に保存されます。これらの VHDX ファイルは、ログオン時にアタッチされ、ログオフ時にデタッチされます。

このポリシーは、ファイルベースとコンテナーベースの両方のソリューションで利用できます。Profile Management バージョン 2212 より前のバージョンでは、このポリシーはコンテナーベースのソリューションでのみ利用可能です。

セキュアなユーザー ストアの作成に関する詳細については、Microsoft TechNet Web サイトの「ローミング ユーザー プロファイル用のファイル共有を作成する」を参照してください。

Profile Management がストア自身の資格情報を使用してユーザー ストアにアクセスできるようにするには、次の両方のアクションを実行する必要があります。

- Profile Management が実行されている各マシンで、**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**ポリシーを有効にします。
- ストアの資格情報をそれらのマシンに追加します。

その目標を達成するには、次のいずれかの方法を使用できます: Workspace Environment Management™ (WEM) サービス および GPO。

注:

コンテナーベースのソリューションが有効になっている場合、ユーザー ストアの NTFS アクセス許可は保持されます。

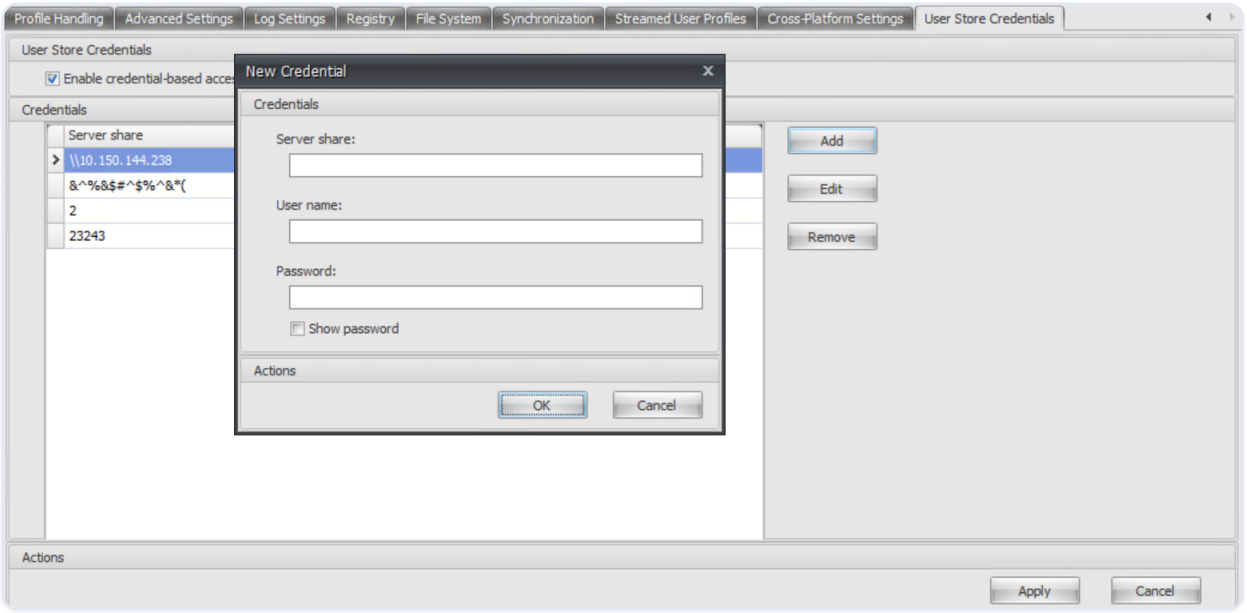
WEMサービスを使用して資格情報ベースのアクセスを有効にする

WEMを使用すると、Profile Managementが実行されている各マシンで同じ資格情報を入力する必要がなくなります。ポリシーを有効にし、WEMサービスコンソールでユーザー ストアの資格情報を一度だけ入力します。その後、WEMサービスはこれらの設定を各マシンに適用します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. 管理コンソールで、**ポリシーとプロファイル > Citrix Profile Management設定 > ユーザー ストアの資格情報**に移動します。
2. **ユーザー ストアの資格情報**タブで、**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**チェックボックスをオンにします。

   WEMでユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にするチェックボックスを選択する(/en-us/profile-management/2402-ltsr/media/selecting-the-enable-credential-based-access-to-user-store-check-box-in-wem.png)
3. **追加**をクリックします。**新しい資格情報**ダイアログボックスが表示されます。



4. プロファイルストレージサーバーのFQDNまたはIPアドレスとその資格情報を入力します。
5. **OK**をクリックします。

GPOを使用して資格情報ベースのアクセスを有効にする

GPOを使用してポリシーを有効にすることを選択した場合、Profile Managementが実行されている各マシンで資格情報を手動で追加する必要があります。

ポリシーを有効にする

詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. 「**ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**」にアクセスし、「**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**」をダブルクリックします。
3. 「**有効**」を選択します。
4. 「**OK**」をクリックします。

Windows 資格情報マネージャーに資格情報を追加する

Profile Management は、ユーザー ストアにアクセスするために、マシンに保存されている資格情報を使用します。Profile Management が実行されている各マシンで、ユーザー ストアの資格情報を **Windows 資格情報マネージャー**に追加します。詳細な手順は次のとおりです。

1. Sysinternals Web サイトから **PsExec** をダウンロードし、ファイルを `C:\PSTools` に解凍します。
2. **スタート**メニューから「**コマンド プロンプト**」を右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。コマンド シェルが起動します。
3. `C:\PSTools\PsExec -s -i cmd` コマンドを実行します。別のコマンド シェルが起動します。

   > **注:**
   >
   > `-s` パラメーターは、ローカル システム アカウントを使用してツールを実行していることを示します。その結果、資格情報を安全に保存できます。

4. 新しいコマンド シェルで、`rundll32.exe keymgr.dll, KRShowKeyMgr` コマンドを実行します。「**保存されているユーザー名とパスワード**」ダイアログ ボックスが表示されます。
5. 「**保存されているユーザー名とパスワード**」ダイアログ ボックスで、「**追加**」をクリックします。
6. プロファイル ストレージ サーバーの FQDN または IP アドレスとその資格情報を入力し、既定の資格情報タイプはそのままにし、「**OK**」をクリックします。

ラージファイル処理を有効にする

プロファイルに存在するラージファイルは、ログオンまたはログオフが遅くなる一般的な原因です。Citrix®は、ラージファイルをユーザー ストアにリダイレクトするオプションを提供します。このオプションにより、これらのファイルをネットワーク経由で同期する必要がなくなります。

グループポリシーでラージファイル処理を有効にするには、次の手順を実行します。

1. **Profile Management**で、**File system**フォルダーを開きます。
2. **Large File Handling - Files to be created as symbolic links**ポリシーをダブルクリックします。
3. 処理するファイルを指定します。

UPMPolicyDefaults_all.iniファイルでラージファイル処理を有効にするには、次の手順を実行します。

1. .iniファイルに**\[LargeFileHandlingList\]**セクションを追加します。
2. そのセクションで処理するファイルを指定します。

ファイルを参照するポリシーでワイルドカードを使用できます。例： `\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Outlook*.ost`

これらのファイルがCitrix Profile Managementの除外リストに追加されていないことを確認してください。

> **注**
>
> 一部のアプリケーションでは、ファイルの同時アクセスが許可されていません。Citrixでは、大容量ファイル処理ポリシーを定義する際に、アプリケーションの動作を考慮することをお勧めします。

> Citrixは、Microsoftセキュリティ更新プログラムMS15-090を適用することを推奨します。一般的なセキュリティ対策として、Microsoft Windowsシステムを常に最新の状態に保つようにしてください。

ファイルの重複排除を有効にする

ユーザープロファイルには、ユーザー ストア内に同一のファイルが複数存在する場合があります。ユーザー ストアにファイルの重複したインスタンスが保存されていると、ストレージコストが増加します。

ファイルの重複排除ポリシーを使用すると、Profile Management はユーザー ストアから重複ファイルを削除し、それらのインスタンスを中央の場所（*共有ストア*と呼ばれる）に 1 つだけ保存できます。これにより、ユーザー ストアでのファイルの重複が回避され、ストレージコストが削減されます。重複排除は、ユーザー ストアと各レプリケートされたユーザー ストアに適用されます。

ファイルの重複排除を有効にし、共有ストアに含めるファイルを指定するには、次のポリシーを構成します。

1. **ファイルの重複排除 > 重複排除のために共有ストアに含めるファイル**
2. (オプション) **ファイルの重複排除 > 共有ストアから除外するファイル**
3. (オプション) **ファイルの重複排除 > プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズ**

> **注：**
>
> 2311以降、ファイルの重複排除ポリシーはプロファイルコンテナにも適用されます。最適なユーザーログオンエクスペリエンスを確保するため、Profile Management はプロファイルコンテナから最大10個のファイルを重複排除します（ただし、**重複排除のために共有ストアに含めるファイル**ポリシーでは10個以上のファイルを定義できます）。重複排除は、リストされたファイルが更新または作成され、指定されたサイズを超え、かつ重複排除されたファイルが10個未満である場合に発生します。

ファイルの重複排除ポリシーを構成すると、Profile Management はユーザー ストアと同じパスに共有ストアを作成します。例：

- ユーザー ストアへのパス: `\\server\profiles$\%USERDOMAIN%\%USERNAME%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`!
- 共有ストアへのパス: `\\server\profiles$\%USERDOMAIN%\SharedFilesStore`

重複排除のために共有ストアにファイルを含める

ユーザー ストアに重複ファイルが存在する場合は、ファイルの重複排除を有効にし、重複排除のために共有ストアに含めるファイルを指定します。

> **重要：**
>
> 共有ストアに重複排除されたすべてのファイルは、すべてのドメインユーザーが読み取れるため、個人データや機密データの重複排除は推奨しません。

詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ファイルの重複排除**にアクセスします。
3. **重複排除のために共有ストアに含めるファイル**をダブルクリックします。
4. **有効**を選択します。
5. **共有ストアに含めるファイルのリスト**フィールドで、**表示**をクリックします。
6. ユーザープロファイルに対する相対パスでファイル名を入力します。

   ワイルドカードは、以下の考慮事項とともにサポートされています。

   - ファイル名内のワイルドカードは再帰的に適用されます。現在のフォルダーのみに制限するには、垂直バー (`|`) を使用します。
   - フォルダー名内のワイルドカードは再帰的に適用されません。

   例：

   - `Downloads\profilemgt_x64.msi` — Downloadsフォルダー内のprofilemgt_x64.msiファイル
   - `*.cfg` — ユーザープロファイルフォルダーとそのサブフォルダー内の.cfg拡張子を持つファイル
   - `Music*` — Musicフォルダーとそのサブフォルダー内のファイル
   - `Downloads*.iso` — Downloadsフォルダーとそのサブフォルダーにある.iso拡張子のファイル
   - `Downloads*.iso|` — Downloadsフォルダー内のみにある.iso拡張子のファイル

- `AppData\Local\Microsoft\OneDrive**.dll` — AppData\Local\Microsoft\OneDriveフォルダーの直下のサブフォルダーにある.dll拡張子のファイル

7. 「**OK**」をクリックし、もう一度「**OK**」をクリックします。

構成の優先順位

1. この設定が無効になっている場合、共有ストアは無効になります。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、共有ストアは無効になります。

共有ストアからファイルを除外する

ワイルドカード文字を使用すると、ファイルのグループを一度にすべて共有ストアに含めることができます。グループから一部のファイルを除外するには、「**共有ストアから除外するファイル**」ポリシーを次のように有効にして構成します。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrixコンポーネント > Profile Management > ファイルの重複排除**にアクセスします。
3. 「**共有ストアから除外するファイル**」をダブルクリックします。
4. 「**有効**」を選択します。
5. 「**共有ストアから除外するファイルのリスト**」フィールドで、「**表示**」をクリックします。
6. ユーザープロファイルからの相対パスでファイル名を入力します。

   ワイルドカードは、以下の考慮事項とともにサポートされています。

   - ファイル名内のワイルドカードは再帰的に適用されます。現在のフォルダーのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
   - フォルダー名内のワイルドカードは再帰的に適用されません。

   例:

   - `Downloads\profilemgt_x64.msi` — Downloadsフォルダー内のprofilemgt_x64.msiファイル
   - `*.tmp` — ユーザープロファイルフォルダーとそのサブフォルダー内の.tmp拡張子を持つファイル

- `AppData*.tmp` — AppDataフォルダーとそのサブフォルダー内の.tmp拡張子を持つファイル
- `AppData*.tmp|` — AppDataフォルダー内のみの.tmp拡張子を持つファイル
- `Downloads*\a.txt` — Downloadsフォルダーの直下のサブフォルダー内のa.txtファイル

7. **OK** をクリックし、もう一度 **OK** をクリックします。

構成の優先順位

1. この設定が無効になっている場合、ファイルは除外されません。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ファイルは除外されません。

プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズを指定します

プロファイルコンテナが有効になっている場合、プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズを指定できます。デフォルトでは、Profile Management は、ファイルが 256 MB を超える場合にのみプロファイルコンテナからファイルを重複排除します。必要に応じて、次の手順でこのしきい値サイズを増やすことができます。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ファイルの重複排除**にアクセスします。
3. **プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズ**をダブルクリックします。
4. **有効**を選択します。
5. **最小サイズ (メガバイト)** フィールドに、必要に応じて 256 より大きい値を入力します。
6. **OK**をクリックします。

構成の優先順位

1. この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、値は 256 になります。

共有ストアのセキュリティ設定を構成する

共有ストアが存在しない場合、Profile Management は次のアクセス許可設定で自動的に共有ストアを作成します。

- ドメインコンピューター: フルコントロールアクセス
- ドメインユーザー: 読み取りアクセス

デフォルト設定ではドメインコンピューターにフルコントロールアクセス権が付与されるため、共有ストアを手動で作成し、セキュリティを向上させるために資格情報ベースのアクセスを実装することをお勧めします。そのためには、次の手順に従ってください。

1. 「**Path to user store**」設定の `%USERNAME%` パラメーターと同じディレクトリレベルに共有ストアフォルダーを作成します。たとえば、「**Path to user store**」設定が `\\SERVER\UPM_USER_STORE\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` の場合、共有ストアフォルダーは `\\SERVER\UPM_USER_STORE\SharedStore` である必要があります。
2. 共有ストアに次の権限を付与します。この図に示すように、ユーザー `SharedStoreManagementUser` は共有ストアへのアクセスに使用される資格情報です。

   共有ストアの管理に使用されるプリンシパル(/en-us/profile-management/2402-ltsr/media/shared_store_principal.png)
3. 各VDAで、`SharedStoreManagementUser` ユーザーアカウントのWindows資格情報を追加して共有ストアにアクセスします。この目的のために、Windows資格情報マネージャーまたはWorkspace Environment Managementを使用できます。詳細については、ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする に記載されている手順を参照してください。

ネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを有効にする

「**Outlookの検索インデックスローミングを有効にする**」機能は、ネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを提供します。この機能により、オフラインOutlookデータファイル（.ost）とユーザー固有の検索データベースがユーザープロファイルとともにローミングされます。

前提条件

この機能は、以下の要件を満たすマシンで利用できます。

- オペレーティングシステム:
  - Microsoft Windows 10 1709 以降のバージョン
  - Windows Server 2016 以降のバージョン
- Microsoft Outlook 2019、2016、または2103、あるいはMicrosoft Office 365

この機能が有効になるように、マシンでMicrosoft Windows Search Serviceが有効になっていることを確認してください。デフォルトでは、Windowsデスクトップでは有効になっており、Windowsサーバーでは無効になっています。Windowsサーバーでサービスを有効にする方法の詳細については、このMicrosoftの記事を参照してください。以下のバージョンがテストされ、サポートされています。

- 7.0.20348.380, 7.0.20348.138,7.0.20344.1
- 7.0.21286.1000, 7.0.21343.1000
- 7.0.17134.376, 7.0.17134.285, 7.0.17134.228, 7.0.17134.1
- 7.0.16299.402, 7.0.16299.248, 7.0.16299.15
- 7.0.15063.413
- 7.0.14393.2457, 7.0.14393.2430, 7.0.14393.2368, 7.0.14393.2312, 7.0.14393.2273, 7.0.14393.2248, 7.0.14393.1884, 7.0.1493.1593
- 7.0.1393.2125, 7.0.1393.1884, 7.0.1393.1770
- 7.0.10240.17443
- 7.0.9600.18722

> **注：**

> この機能は、Microsoft Windows Search Service の将来のバージョンをサポートすることが期待されています。この機能が特定の将来のバージョンの Microsoft Windows Search Service をサポートしない場合は、Citrix テクニカルサポートにお問い合わせください。

仕組み

VHDX (Virtual Hard Disk) は、仮想マシン用の仮想および論理ディスクストレージ領域を表すために使用されるディスクファイル形式です。Outlook の検索インデックスローミングを有効にする機能は、VHDX ファイルに依存して動作します。

VHDX ファイルは、この機能を使用するユーザーごとに作成されます。VHDX ファイルは、ユーザー固有のプロファイルを、そのユーザーのプロファイル専用の個別の仮想ディスクに保存します。Profile Management は、ログオン時に VHDX ファイルをマウントし、ログオフ時にアンマウントします。VHDX ファイルは次の2種類です。

- OutlookOST.vhdx ファイル。オフライン Outlook データファイル (`.ost`) を保存します。

- OutlookSearchIndex.vhdx ファイル。OutlookOST.vhdx ファイルに保存されているオフラインフォルダーファイルの検索インデックスデータベースを保存します。

注：

デフォルトでは、Profile Management はセッション中にデタッチされた VHDX ファイルを自動的に再アタッチします。詳細については、「セッションでデタッチされた VHDX ディスクを自動的に再アタッチする」を参照してください。

Profile Management は、デフォルトで 30 GB の VHDX 容量を提供します。ストレージクォータを適切に計画してください。VHDX の実際の使用量が以前に構成したクォータを超えると、VHDX ファイルはアンマウントされます。

キャッシュされた Exchange モードとオンラインモード間の自動切り替え

Profile Management は、Outlook コンテナが有効なマシンで中断のない Outlook サービスを提供します。

- ユーザーログオン時にOutlookコンテナが機能するためのすべての条件が満たされていることを検出すると、Profile ManagementはOutlookのキャッシュExchangeモードを自動的に有効にします。キャッシュExchangeモードが有効になっている場合、ユーザーはメールボックスデータのためにOutlookコンテナにリンクされます。これらの条件には以下が含まれます。
  - Outlookの検索インデックスローミングを有効にするポリシーが有効になっています。
  - Outlookコンテナがアタッチされています。
  - カスタマイズされたOSTパスが設定されていないか、Outlookコンテナのマウントパスである `appdata\local\microsoft\outlook` に設定されています。
- セッション中にコンテナがデタッチされたことを検出すると、Profile ManagementはOutlookをキャッシュExchangeモードからオンラインモードに切り替えます。ユーザーはメールボックスデータのためにExchange Serverにリンクされます。
- セッション中にコンテナが再アタッチされたことを検出すると、Profile ManagementはOutlookをキャッシュExchangeモードに戻します。

同時セッションのサポート

Outlook検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする機能により、Profile Managementは同じユーザーの同時セッションでネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを提供します。

この機能は、ユーザーの各同時セッションにOutlook OSTファイルのコピーを割り当てます。デフォルトでは、Profile ManagementはOutlook OSTファイルを保存するために2つのVHDXディスク（ディスクごとに1ファイル）を提供します。ユーザーがさらにセッションを開始すると、追加のOutlook OSTファイルはローカルプロファイルに保存されます。

ストレージ容量に余裕がある場合は、VHDXディスクのデフォルト数を増やすことができます。たとえば、数を3に設定します。その結果、Profile Managementは最初の3つのセッションのOSTファイルをVHDXディスクに保存し、それ以降のセッションのOSTファイルはローカルプロファイルに保存します。

Outlook検索インデックスデータベースの自動バックアップと復元

Profile Managementは、検索インデックスデータベースの最後に確認された正常なコピーのバックアップを自動的に保存し、破損が発生した場合はそのコピーに復元できます。

この機能が有効になっている場合、Profile Managementは、ログオン時にデータベースが正常にマウントされるたびに、検索インデックスデータベースのバックアップを保存します。新しいバックアップが正常に保存された後、Profile Managementは以前に保存されたバックアップを削除します。Profile Managementは、そのバックアップを検索インデックスデータベースの正常なコピーとして扱います。検索インデックスデータベースのマウント試行が失敗した場合、Profile Managementは検索インデックスデータベースを最後に確認された正常なコピーに自動的に復元します。

重要:

- Profile Managementは、ポリシーが有効になった後、検索インデックスデータベースが最初に作成された時点では、そのバックアップを保存しません。
- プロファイル管理は、新しいバックアップが正常に保存された後、以前に保存されたバックアップを削除します。バックアップは、VHDXファイルの利用可能なストレージスペースをより多く消費します。

機能を有効にする

ネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを提供するには、**Outlookの検索インデックスローミングを有効にする**機能を有効にし、必要に応じてその拡張機能を有効にします。詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理 > 詳細設定**にアクセスします。
3. 次の手順で機能を有効にします。
    a. **Outlookの検索インデックスローミングを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
    b. **有効**を選択します。
    c. **OK**をクリックします。
4. 同じユーザーの同時セッションでこの機能をサポートするには、次の手順に従います。
    a. **Outlook検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
    b. **有効**を選択します。
    c. 利用可能なストレージ容量がある場合は、**Outlook OSTファイルを保存するためのVHDXディスクの最大数**フィールドでデフォルトのVHDXディスクの数を増やします。このフィールドの詳細については、「同時セッションのサポート」を参照してください。
    d. **OK**をクリックします。
5. この機能の安定性を高めるには、次の手順に従います。
    a. 「**Outlook 検索インデックス データベースのバックアップと復元**」ポリシーをダブルクリックします。
    b. 「**有効**」を選択します。
    c. 「**OK**」をクリックします。
6. この機能の可用性を高めるには、次の手順に従います。
    a. 「**セッションで VHDX ディスクを自動的に再アタッチする**」ポリシーをダブルクリックします。
    b. 「**有効**」を選択します。
    c. 「**OK**」をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行し、すべてのセッションからログオフしてから、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` を参照してください。

> **注：**
>
> この機能を Microsoft Windows 10 1809 以降および Windows Server 2019 以降で動作させるには、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows Search` の下に DWORD 値 `EnablePerUserCatalog = 0` を追加します。レジストリ設定を有効にするには、VDA を再起動します。

OneDriveコンテナを有効にする

OneDriveコンテナを使用すると、OneDriveフォルダーをユーザーとともにローミングできます。その結果、ユーザーはどのコンピューターからでも同じOneDriveフォルダーにアクセスできます。

OneDriveコンテナは、VHDXベースのフォルダーローミングソリューションです。Profile Managementは、ファイル共有上にユーザーごとにVHDXファイルを作成し、ユーザーのOneDriveフォルダーをVHDXファイルに保存します。VHDXファイルは、ユーザーがログオンするときにアタッチされ、ログオフするときにデタッチされます。

Profile Managementは次の2つのプロファイルソリューションを提供しており、OneDriveコンテナはどちらにも適用されます。

- **ファイルベース**。ユーザープロファイルは、ログオン時にリモートユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチされ、ログオフ時に書き戻されます。
- **コンテナベース**。ユーザープロファイルはVHDXファイル（プロファイルコンテナとして知られています）に保存されます。これらのVHDXファイルは、ログオン時に自動的にアタッチされ、ログオフ時にデタッチされます。

OneDriveコンテナを展開するための一般的なワークフローは次のとおりです。

1. (オプション) VHDXファイルの保存パスを指定する
2. OneDriveコンテナを有効にして構成する

> **注：**

- Citrix Profile Management 2206以降、コンテナベースのソリューションを使用している場合、OneDriveフォルダーはデフォルトでユーザーとともにローミングされます。ただし、OneDriveフォルダーを別のコンテナを使用してローミングしたい場合は、OneDriveコンテナを有効にすることもできます。
- Citrix Profile Management 2311以降、OneDriveコンテナは次の同期機能をサポートしています。
  - マルチセッションランタイム同期。ユーザーが1つのセッションでOneDriveファイルに加えた変更は、すべての同時セッションで即座に表示されます。
  - シングルサインオン（SSO）同期。ユーザーは、その後のログオン時にOneDriveの資格情報を再入力する必要がありません。

(オプション) VHDXファイルの保存パスを指定する

デフォルトでは、OneDriveコンテナのVHDXファイルは、ユーザーストアと同じストレージサーバーに保存されます。

たとえば、ユーザーストアのパスを次のように構成します。

`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!`!

OneDriveコンテナのVHDXファイルは、その後、に保存されます。

`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!\OneDrive`

必要に応じて、OneDriveフォルダーのVHDXディスクを保存する別のファイル共有を指定できます。詳細については、「VHDXファイルのストレージパスを指定する」を参照してください。

OneDriveコンテナを有効にして構成する

OneDriveコンテナポリシーを有効にし、VHDXファイルに保存するOneDriveフォルダーを指定します。詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。

2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrix Components > Profile Management > 詳細設定**にアクセスし、**OneDriveコンテナを有効にする**をダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **OneDriveフォルダーのリスト**フィールドで、**表示**をクリックします。
5. ユーザープロファイルに対する相対パスの形式でOneDriveフォルダーを入力し、**OK**をクリックします。

   たとえば、OneDriveフォルダーの絶対パスが `%userprofile%\OneDrive - Citrix` の場合、`OneDrive - Citrix` をリストに追加します。

   > **注：**
   >
   > 相対パスには、`!CTX_OSNAME!` や `!CTX_OSBITNESS!` などの変数を含めることはできません。

6. **OK**をクリックします。

UWPアプリのローミングを有効にする

UWPアプリのローミングを有効にするポリシーを使用すると、UWP (Universal Windows Platform) アプリをユーザーとローミングさせることができます。その結果、ユーザーは異なるデバイスから同じUWPアプリにアクセスできます。

> 「**注：**」:
>
> このポリシーはWindows 10のみに対応しており、他のWindowsバージョンまたはWindows Serverバージョンとは互換性がありません。

動作の仕組み

UWPアプリのローミングを有効にするポリシーが有効になっている場合、Profile Managementは次のように動作します。

1. ユーザーがUWPアプリのインストールを開始すると、Profile Managementはインストールプロセスを監視します。

2. 環境内でアプリが最初にインストールされる場合、Profile Managementは`{User_Store_File_Share_Path}\AppStore\`フォルダーにVHDXディスク（*UWPアプリコンテナ*と呼ばれる）を作成し、アプリ（個人設定を除く）をそのディスクに保存します。同じアプリのその後のインストールでは、Profile Managementは追加のVHDXディスクを作成しません。したがって、各UWPアプリはUWPアプリコンテナ内に単一のVHDXディスクを持ちます。
3. ユーザーがマシンにログオンすると、ユーザーがインストールしたUWPアプリのVHDXディスクがアタッチされます。ユーザーがログオフすると、それらのディスクはデタッチされます。

> 「**重要：**」：
>
> - UWPアプリのローミングは、ポリシーが有効になった後にユーザーごとのパッケージを使用してインストールされたUWPアプリにのみ適用されます。つまり、アプリがインストールされた後にポリシーが有効になった場合、そのアプリはユーザーごとのパッケージを使用して再インストールされるまでローミングの恩恵を受けません。
> - すべてのユーザーがUWP VHDXディスクを共有します。

GPOを使用してUWPアプリのローミングポリシーを有効にする

詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理 > 詳細設定**にアクセスします。
3. **UWP アプリのローミング**ポリシーをダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。
5. UWP ローミングのログオンおよびログオフエクスペリエンスを向上させるには、**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーを次のように有効にします。
    a. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理 > ファイルシステム > 同期**にアクセスします。
    b. **フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーをダブルクリックします。
    c. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

- この設定がGPO、Studio、またはWorkspace Experience Management (WEM) を使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- この設定がどこにも構成されていない場合、この機能は無効になります。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているとおり、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

VHD設定を構成する

この記事では、VHDXベースの機能をカスタマイズおよび最適化する方法について説明します。

- VHDコンテナのストレージ容量とパスを指定する

  適用対象: プロファイルコンテナ、OneDriveコンテナ、フォルダミラーリングコンテナ、およびOutlook検索インデックスコンテナ。
- VHDディスク圧縮設定を有効にして構成する

  適用対象: プロファイルコンテナ、OneDriveコンテナ、およびフォルダミラーリングコンテナ
- VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする

  適用対象: プロファイルコンテナおよびOneDriveコンテナ
- セッションでのVHDXディスクの自動再アタッチを有効にする

  適用対象: プロファイルコンテナ、Outlook検索インデックスコンテナ、フォルダミラーリングコンテナ、およびOneDriveコンテナ。

これらのコンテナの詳細については、以下を参照してください。

- プロファイルコンテナ
- Outlook検索インデックスローミング (*Outlook検索インデックスコンテナ* と呼ばれます)
- フォルダミラーリングソリューションの高速化 (*フォルダミラーリングコンテナ* と呼ばれます)
- OneDriveコンテナ

VHDコンテナのストレージ容量とパスを指定します

デフォルトでは、各VHDXコンテナはユーザーストアに50 GBのディスク容量で保存されます。必要に応じて、別のストレージパスを選択し、デフォルト容量を変更できます。

以下に、VHDXファイルのデフォルトおよびカスタムストレージパスを示します。

- プロファイルコンテナー設定
  - デフォルト: `{USER_STORE_PATH}\ProfileContainer\{OS_NAME_SHORT}\`
  - カスタム: `{VHDX_STORE_PATH}\ProfileContainer\{OS_NAME_SHORT}\`
- Outlook検索インデックスのローミング
  - デフォルト: `{USER_STORE_PATH}\VHD\{OS_NAME_SHORT}\`
  - カスタム: `{VHDX_STORE_PATH}\VHD\{OS_NAME_SHORT}\`
- フォルダーのミラーリングを高速化する
  - デフォルト: {USER_STORE_PATH}\MirrorFolders\
  - カスタム: {VHDX_STORE_PATH}\MirrorFolders\
- OneDriveコンテナを有効にする
  - デフォルト: {USER_STORE_PATH}\OneDrive\
  - カスタム: {VHDX_STORE_PATH}\OneDrive\

Profile Managementは、VHDXファイルにアクセスするために現在のユーザーを偽装し、VHDXファイルのストレージパスに対するDomain Computers `full control` 権限を付与しません。

ストレージパスを指定します

VHDXコンテナ用のネットワークストレージの場所を準備します。ストレージの場所にユーザーに `Modify` 以上の権限を付与していることを確認してください。

VHDXコンテナのストレージパスを指定するには、以下の手順に従います。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix Components > Profile Management > 詳細設定**で、**VHDXファイルのストレージパスをカスタマイズ**ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**Enabled**」を選択します。
4. **VHDXファイルを保存するパス**フィールドに、ストレージの場所の完全なパスを入力します。例：`\\myservername\vhdx_store`。
5. **適用**をクリックし、次に**OK**をクリックします。

設定を有効にするには、以下を実行します。

1. ユーザープロファイルを使用しているすべてのセッションからログオフします。
2. コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

   ポリシーが有効になるタイミングは、使用状況によって異なります。

   - VHDXファイルのストレージパスを初めて指定する場合、ポリシーはユーザーがログオンした後に有効になります。
   - VHDXファイルのストレージパスを変更する場合、ポリシーはユーザーが初めてログオフした後に有効になります。

`gpupdate`コマンドの詳細については、Microsoftドキュメントを参照してください。

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Profile ManagementはVHDXファイルをユーザーストアに保存します。

VHDコンテナのデフォルトのストレージ容量を指定する

各VHDコンテナのデフォルトのストレージ容量は50 GBです。容量を変更するには、以下の手順に従います。

1. 「**グループポリシー管理エディター**」を開きます。
2. 「**コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**」で、「**VHDコンテナのデフォルト容量 (GB)**」ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**Enabled**」を選択します。
4. 「**デフォルト容量 (GB)**」フィールドに、必要に応じて新しい数値を入力します。
5. **OK**をクリックします。

VHDディスク圧縮設定を有効にして構成する

VHDディスク圧縮は、VHDファイル内の空き領域を削除し、データを結合することで、VHDファイルのサイズを縮小するプロセスです。「**VHDディスク圧縮を有効にする**」ポリシーを使用すると、Profile ManagementでVHDディスク圧縮を有効にできます。Profile Managementによって作成されたVHDファイルは、特定の条件が満たされるとユーザーのログオフ時に自動的に圧縮され、中央ストレージまたはクラウドストレージのスペースを節約します。

このセクションでは、VHDディスク圧縮を有効にし、デフォルトの圧縮設定と動作を調整する方法について説明します。

概要

VHDXディスク圧縮は、Profile Managementの以下のVHDXファイルに適用されます。

- プロファイルコンテナ
- OneDriveコンテナ
- フォルダーミラーリングコンテナ

「**VHDディスク圧縮を有効にする**」ポリシーが有効になっている場合、以下のいずれかの条件が満たされると、VHDXファイルはユーザーのログオフ時に自動的に圧縮されます。

- VHDファイルの空き領域の比率が指定された値（デフォルトでは20%）を超えている

  空き領域の比率 = (現在のVHDファイルサイズ – 必要な最小VHDファイルサイズ*) ÷ 現在のVHDファイルサイズ

  * Microsoft Windowsオペレーティングシステムの`MSFT_Partition`クラスのGetSupportedSizeメソッドを使用して取得されます。詳細については、「VHDファイルの必要な最小サイズを取得する」を参照してください。
- 最後の圧縮以降のログオフ回数が指定された値（デフォルトでは5）に達している

> **注:**
>
> ユーザーがログオフすると、VHDディスクの圧縮プロセスはログオフプロセスと並行して実行されます。したがって、ディスク圧縮によってログオフ時間が長くなることはありません。ユーザーが再度ログオンしようとしたときにVHDディスク圧縮プロセスが完了していない場合、Profile Managementはログオン試行を阻止します。

お客様のニーズと利用可能なリソースに応じて、**詳細設定**で以下のポリシーを使用してこれらのデフォルト設定を調整できます。

- VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率
- VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数

VHDディスク圧縮が有効になっている場合、VHDディスクファイルはまずWindowsに組み込まれている`defrag`ツールを使用してデフラグされ、その後圧縮されます。VHDディスクのデフラグはより良い圧縮結果をもたらしますが、無効にするとシステムリソースを節約できます。必要に応じて、**詳細設定**で以下のポリシーを使用してデフラグを無効にできます。

- VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

VHDディスクの圧縮を有効にする

VHDディスク圧縮を有効にすると、プロファイルコンテナ、OneDriveコンテナ、およびフォルダミラーリングコンテナによって消費されるストレージスペースを節約できます。

GPOを使用してVHDディスク圧縮を有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > プロファイルコンテナ設定**にアクセスします。
3. **VHDディスク圧縮**ポリシーをダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. この設定がGPO、Studio、またはWorkspace Environment Management™ (WEM) を使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がどこにも構成されていない場合、この機能は無効になります。

圧縮設定と動作を変更する

VHDディスク圧縮を有効にするとストレージスペースを節約できますが、システムI/Oとネットワーク帯域幅も消費します。圧縮プロセス中のシステムおよびネットワークリソースの使用状況を監視して、以下の設定を調整するかどうかを判断できます。

- VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率
- VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数
- VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

GPOを使用してデフォルトの圧縮設定と動作を変更するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. 「**ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**」にアクセスします。
3. 圧縮をトリガーする空き領域の比率を変更するには、次の手順に従います。
    a. 「**VHD ディスク圧縮をトリガーする空き領域の比率**」ポリシーをダブルクリックします。
    b. 表示されるポリシーウィンドウで、 を選択し、必要に応じてパーセンテージを入力して、 をクリックします。
4. 圧縮をトリガーするログオフ回数（最後の圧縮以降）を変更するには、次の手順に従います。

a. 「**VHD ディスク圧縮をトリガーするログオフ回数**」ポリシーをダブルクリックします。

b. 表示されるポリシーウィンドウで、 を選択し、必要に応じて値を入力して、 をクリックします。

5. VHD ディスク圧縮のデフラグを無効にするには、次の手順に従います。

a. 「**VHD ディスク圧縮のデフラグを無効にする**」ポリシーをダブルクリックします。

b. 表示されるポリシーウィンドウで、 を選択し、 をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

- VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率

a. この設定が GPO、Studio、または WEM を使用して構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。

b. この設定がどこにも構成されていない場合、デフォルト値の 20 (%) が使用されます。

- VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数

a. この設定が GPO、Studio、または WEM を使用して構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。

b. この設定がどこにも構成されていない場合、デフォルト値の 5 が使用されます。

- VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

a. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

b. この設定がどこにも構成されていない場合、デフラグはデフォルトで有効になります。

VHDファイルの必要な最小サイズを取得する

詳細な手順は次のとおりです。

1. VHDファイルがオペレーティングシステムにアタッチされていることを確認します。
2. このPowerShellコマンドを管理者として実行します。

   ```
   Get-WmiObject -Class MSFT_Partition -Namespace ROOT\Microsoft\Windows\Storage
   ```

   現在のデスクトップのすべてのパーティションが表示されます。
3. VHDファイルに対応するパーティションを見つけ、GetSupportedSizeメソッドを使用して必要な最小サイズ (`SizeMin`) を取得します。

VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする

注:

- この設定は、OneDriveコンテナと、ユーザープロファイル全体に対して有効になっているプロファイルコンテナに適用されます。
- この設定がプロファイルコンテナに対して有効になっている場合、**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**設定は自動的に無効になります。

デフォルトでは、VHDコンテナは同時アクセスを許可します。必要に応じて、プロファイルコンテナとOneDriveコンテナの同時アクセスを無効にできます。

詳細な手順は次のとおりです。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix Components > Profile Management > プロファイルコンテナ設定**の下で、**VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**Enabled**」を選択します。
4. 排他的アクセスを有効にするコンテナを選択します。オプションには、**プロファイルコンテナ**と**OneDriveコンテナ**が含まれます。
5. **OK**をクリックします。

設定を有効にするには、次の手順を実行します。

1. ユーザープロファイルを使用しているすべてのセッションからログオフします。
2. コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、設定は無効になります。

セッションでのVHDXディスクの自動再アタッチを有効にする

セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチ機能により、Profile ManagementはVHDXベースのポリシーの高い安定性を確保します。

各VHDX関連ポリシーは、適切に機能するために該当するVHDXディスクに依存します。Profile Managementは、ログオン中にこれらのディスクをアタッチし、ログオフ中にデタッチします。ただし、これらのVHDXディスクはセッション中に誤ってデタッチされる可能性があり、ポリシーが適切に機能しなくなることがあります。VHDXディスクがデタッチされる可能性のある原因には、次のものがあります。

- ファイルサーバーで一時的なエラーが発生する
- ネットワーク接続が遅い

セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチポリシーが有効になっている場合、Profile Managementは、先行するVHDXベースのポリシーで使用されているVHDXディスクを監視します。いずれかのディスクがデタッチされた場合、Profile Managementはディスクを自動的に再アタッチします。

ポリシーを有効にする

デフォルトでは、このポリシーは有効になっています。VHDXベースのポリシーの高い安定性を確保するために、デフォルト設定を維持することをお勧めします。

VHDXベースのポリシーでパフォーマンスの問題が発生した場合は、次の手順に従ってポリシー設定を確認してください。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **Citrix Components > Profile Management > Advanced settings** の下で、**セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチ**ポリシーをダブルクリックします。
3. 設定が**無効**になっている場合は、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

変更を有効にするには、Microsoft の記事に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。これはデフォルトで**有効**になっています。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、ポリシーはデフォルトで有効になります。

競合するプロファイルを解決する

既存の展開にProfile Managementを追加すると、ローカルのWindowsユーザープロファイルとCitrix®ユーザープロファイル（ユーザーストア内）の間で競合が発生する可能性があります。このシナリオでは、ローカルのWindowsプロファイル内のデータがどのように管理されるかを決定する必要があります。

1. Profile Managementで、「プロファイル処理」フォルダーを開きます。
2. **ローカルプロファイルの競合処理**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. ドロップダウンリストから、次のいずれかのオプションを選択します。

    - **ローカルプロファイルを使用する**。Profile ManagementはローカルのWindowsユーザープロファイルを処理しますが、一切変更しません。
    - **ローカルプロファイルを削除する**。Profile ManagementはローカルのWindowsユーザープロファイルを削除し、ユーザーストアからCitrixユーザープロファイルをインポートします。
    - **ローカルプロファイルの名前を変更する**。Profile ManagementはローカルのWindowsユーザープロファイルの名前を変更し（バックアップ目的）、ユーザーストアからCitrixユーザープロファイルをインポートします。

ここでローカルプロファイルの競合処理が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、既存のローカルプロファイルが使用されます。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

テンプレートまたは強制プロファイルを指定する

デフォルトでは、新しいCitrix®ユーザープロファイルは、ユーザーが最初にログオンするコンピューター上のデフォルトのユーザープロファイルから作成されます。Profile Managementは、プロファイルを作成する際に、一元的に保存されたテンプレートを代わりに利用できます。このテンプレートは、任意のネットワークファイル共有に存在する標準のローミング、ローカル、または強制プロファイルにすることができます。

異なるデバイスのデフォルトユーザープロファイルにおけるあらゆる差異は、ユーザー用に作成されるベースプロファイルの違いにつながります。テンプレートプロファイルの選択は、グローバルデフォルトユーザープロファイルと見なすことができます。

前提条件:

- テンプレートプロファイルにユーザー固有のデータが含まれていないことを確認してください
- ユーザーがテンプレートプロファイルへの読み取りアクセス権を持っていることを確認してください
- ファイルNTUSER.MANをNTUSER.DATに名前変更して、強制プロファイルをテンプレートプロファイルに変換します
- テンプレートプロファイル内のNTUSER.DATからSACLを削除します

既存のMicrosoftプロファイルをカスタマイズしてテンプレートプロファイルを作成する方法については、`<https://support.microsoft.com/kb/959753>`および`<https://support.microsoft.com/kb/973289>`を参照してください。

1. Profile Managementの下で、プロファイル処理フォルダーを開きます。
2. **テンプレートプロファイル**ポリシーをダブルクリックします。
3. 有効を選択します。
4. **テンプレートプロファイルへのパス**で、テンプレートまたは強制プロファイルとして使用するプロファイルの場所を入力します。このパスは、NTUSER.DATレジストリファイルと、テンプレートに必要なその他のフォルダーおよびファイルを含むフォルダーへの完全なパスです。

   重要: パスがNTUSER.DATのみで構成されている場合、パスにファイル名を含めないようにしてください。たとえば、ファイル`\\myservername\myprofiles\template\ntuser.dat`の場合、場所を`\\myservername\myprofiles\template`として設定します。

   絶対パスを使用します。これはUNCパスまたはローカルマシン上のパスにすることができます。後者を使用すると、たとえば、Citrix Provisioning™ Servicesイメージにテンプレートプロファイルを永続的に指定できます。相対パスはサポートされていません。

   このポリシーは、Active Directory属性、システム環境変数、または`%USERNAME%`および`%USERDOMAIN%`変数の展開をサポートしていません。
5. 必要に応じて、既存のWindowsユーザープロファイルを上書きするチェックボックスを選択します。ユーザーにCitrixユーザープロファイルがないが、ローカルまたはローミングWindowsユーザープロファイルが存在する場合、デフォルトではローカルプロファイルが使用されます。そして、これが無効になっていない場合、このファイルはユーザーストアに移行されま

す。**テンプレートプロファイルがローカルプロファイルを上書きする**または**テンプレートプロファイルがローミングプロファイルを上書きする**チェックボックスを有効にすることで、設定を変更できます。また、テンプレートをCitrix強制プロファイルとして識別します。Windows強制プロファイルと同様に、Citrix強制プロファイルには変更を保存できません。

ここで**テンプレートプロファイル**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、テンプレートまたは強制プロファイルは使用されません。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

移行ポリシーの選択

Profile Managementが有効になった後、ユーザーが初めてログオンするとき、そのユーザーのCitrix®ユーザープロファイルは存在しません。しかし、ログオン時に既存のWindowsユーザープロファイルを「オンザフライ」で移行できます。どの既存のプロファイル（ローミング、ローカル、またはその両方）をコピーして、それ以降のすべての処理で使用するかを決定します。

移行戦略の計画について詳しくは、「プロファイルの移行または作成」を参照してください。また、既存のプロファイルを移行するためのシステム要件については、「システム要件」を参照してください。

1. Profile Managementで、フォルダーを開きます。
2. ポリシーをダブルクリックします。
3. を選択します。
4. ドロップダウンリストから、次のいずれかのオプションを選択します。

    - ローカル。ローカルプロファイルを移行する場合は、この設定を使用します。
    - ローカルおよびローミング。ローカルプロファイルとローミングプロファイル（以前はターミナルサービスプロファイルとして知られていたリモートデスクトップサービスプロファイルを含む）を移行する場合は、この設定を使用します。
    - ローミング。ローミングプロファイルまたはリモートデスクトップサービスプロファイルを移行する場合は、この設定を使用します。

ここでが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、既存のローカルプロファイルとローミングプロファイルが移行されます。この設定が無効になっている場合、プロファイルは移行されません。この設定が無効に

なっており、ユーザーストアにCitrixユーザープロファイルが存在しない場合、Profile Managementがないセットアップと同様に、プロファイルを作成するための既存のWindowsメカニズムが使用されます。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

処理するグループプロファイルを定義する

処理するユーザープロファイルと処理しないプロファイルを定義できます。コンピューターのローカルグループとドメイングループ（ローカル、グローバル、ユニバーサル）の両方を使用できます。ドメイングループは`<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME>`の形式で指定します。ローカルグループはGROUP NAMEの形式で指定します。

注： コンピューターのローカルグループは、新しく作成されたローカルグループである必要があり、メンバーはドメインユーザーである必要があります。

1. Profile Managementで、**処理されたグループ**ポリシーをダブルクリックします。
2. 「**Enabled**」を選択します。
3. **表示**をクリックします。
4. Profile Managementで処理するユーザーのプロファイルを含むグループを追加します。複数のエントリを区切るにはEnterキーを使用します。

   この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、除外されたグループポリシーを使用して除外しない限り、すべてのユーザーグループのメンバーが処理されます。
5. プロファイル管理で、除外されたグループポリシーをダブルクリックします。
6. 「**Enabled**」を選択します。
7. **表示**をクリックします。
8. Profile Managementで処理しないユーザーを含むグループを追加します。複数のエントリを区切るにはEnterキーを使用します。

   この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、どのグループのメンバーも除外されません。
9. ローカル管理者のプロファイルを管理するには、Profile Managementで、**ローカル管理者のログオンを処理する**ポリシーをダブルクリックし、**有効**をクリックします。

重要： デフォルトでは、Profile Managementは使用中のオペレーティングシステムを認識し、サーバーオペレーティングシステムではなくデスクトップオペレーティングシステム上のローカル管理者のアカウントを処理します。その理由は、ユーザーは通常デスクトップでのみローカル管理者グループのメンバーであり、サーバー環境での処理からローカル管理者を除外することはトラブルシューティングに役立つためです。したがって、デフォルトの動作を変更したい場合にのみ、このポリシーを有効にしてください。

除外されたグループポリシーは、**ローカル管理者のログオンを処理する**ポリシーよりも優先されます。アカウントが両方のポリシーに表示されている場合、Profile Managementはそれを処理しません。

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ローカル管理者のプロファイルは処理されません。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

ユーザー ストアの移行

Profile Management は、データを失うことなくユーザー ストアを移行するソリューションを提供します。この機能は、ユーザー ストアをよりスケーラブルなファイル サーバーに移行したい場合に役立ちます。

ユーザー ストアを移行するには、「ユーザー ストアの移行」ポリシーを「ユーザー ストアへのパス」ポリシーと組み合わせて使用します。「ユーザー ストアの移行」ポリシーでは、ユーザー設定（レジストリの変更と同期ファイル）が以前に保存されていたフォルダーへのパス（以前使用していたユーザー ストアのパス）を指定できます。

パスは、絶対 UNC パスまたはホーム ディレクトリに対する相対パスのいずれかです。どちらの場合も、次の種類の変数を使用できます。

- システム環境変数（パーセント記号で囲む）
- Active Directory ユーザー オブジェクトの属性（ハッシュ記号で囲む）

例：

- フォルダー `Windows\%ProfileVer%` は、ユーザー設定をユーザー ストアの `Windows\W2K3` というサブフォルダーに保存します（%ProfileVer% が W2K3 に解決されるシステム環境変数である場合）。

- `\\server\share#SAMAccountName#` は、ユーザー設定を UNC パス `\\server\share\<JohnSmith>` に保存します（`#SAMAccountName#` が現在のユーザーに対して JohnSmith に解決される場合）。

パスでは、`%username%` と `%userdomain%` を除くユーザー環境変数を使用できません。

この設定が無効になっている場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。

この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの対応する設定が使用されます。

この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。

ポリシー設定の変更が有効になると、以前のユーザー ストアに保存されていたユーザー設定は、「**ユーザー ストアへのパス**」ポリシーで指定された現在のユーザー ストアに移行されます。

グループ ポリシーでユーザー ストアの移行を構成するには、次の手順を実行します。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management** の下で、**ユーザー ストアの移行**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **オプション**ペインで、以前使用したユーザー ストアのパスを入力します。
5. **OK**をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

Citrix Studio で Profile Management ポリシーを構成することもできます。これを行うには、次の手順を実行します。

1. Citrix Studio の左ペインで、**ポリシー**をクリックします。
2. **ポリシーの作成**ウィンドウで、検索ボックスにポリシーを入力します。たとえば、「ユーザー ストアの移行」と入力します。
3. **選択**をクリックして、**ユーザー ストアの移行**ポリシーを開きます。
4. **有効**を選択し、以前使用したユーザー ストアのパスを入力します。
5. **OK**をクリックします。

証明書を保存する

セッション中に証明書ストアにインポートされた個人証明書を保存するには、この手順に従ってください。デフォルトでは、証明書は自動的に同期されます。

設定 にパス `Application Data\Microsoft\SystemCertificates\My` を追加します。この場所にあるApplication Dataフォルダーは、オペレーティングシステムの言語によって決まります。ポリシーを使用して多言語システムを構成する場合は、各言語の場所をリストに追加します。

例

英語システムでは、パスは `Application Data\Microsoft\SystemCertificates\My` です。ドイツ語システムでは、`Anwendungsdaten\Microsoft\SystemCertificates\My` です。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているとおりに、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

フォルダーリダイレクトの構成

フォルダーリダイレクトはMicrosoft Windowsの機能であり、Profile Managementと併用できます。

> **重要:**

> フォルダーリダイレクトは、Microsoft Active Directory (AD) GPOまたはCitrix®ポリシーのいずれか1つの方法のみを使用して構成してください。複数の方法を使用してフォルダーリダイレクトを構成すると、予期しない結果が生じる可能性があります。

> フォルダーリダイレクトを構成するには、次の手順を実行します。

1. 該当するユーザーを、Profile Managementが管理するOUに移動します。
2. GPOを作成し、編集用に開きます。
3. **User Configuration > Administrative Templates > Citrix Components > Profile Management > Folder Redirection**に移動し、リダイレクトするフォルダーを選択します。
4. `<folder name>`フォルダーポリシーのリダイレクトを有効にし、リダイレクトされたパスを入力します。リダイレクトされたフォルダーを除外として追加しないでください。パスにユーザー名やフォルダー名を追加しないでください。たとえば、**Desktop**フォルダーへのパスを

`\\server\share\`として設定した場合、ユーザー環境内のフォルダーは`\\server\share\<user name>\Desktop`としてリダイレクトされます。

5. 変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。詳しくは、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

次のフォルダーをリダイレクトできます。

- AppData(Roaming)フォルダー
- デスクトップ
- スタートメニュー
- ドキュメント
- 画像
- 音楽
- ビデオ
- お気に入り
- 連絡先
- ダウンロード
- リンク
- 検索
- 保存されたゲーム

フォルダーのリダイレクト時には、次の点に注意してください。

- **ドキュメント**フォルダー。ユーザーのホームディレクトリにリダイレクトできます。
- **ミュージック**、**ピクチャ**、**ビデオ**フォルダー。これらは**ドキュメント**フォルダーを基準としたフォルダーにリダイレクトできます。

フォルダーのリダイレクトが機能していることを確認する方法

フォルダーのリダイレクトが機能していることを確認するには、次の手順を実行します。

1. セッションで、リダイレクトしたフォルダーに移動し、フォルダーを右クリックして、**プロパティ**を選択します。

2. プロパティウィンドウで、**ショートカット**タブに移動し、**ターゲット**フィールドを確認します。フィールドにリダイレクトされたパスが表示されている場合、フォルダーリダイレクトは機能しています。そうでない場合、フォルダーリダイレクトは機能していません。

フォルダーリダイレクトログ

> **注:**
>
> Profile Managementは、フォルダーリダイレクトが失敗した場合にのみ、Windowsイベントログに情報を書き込みます。

> Profile ManagementはWindowsイベントログに情報を書き込みます。Windowsイベントビューアーの**アプリケーション**ペインでイベントを表示できます。この情報は、フォルダーリダイレクト機能の使用時に発生する問題のトラブルシューティングに役立ちます。

オフラインプロファイルを構成する

Citrix®オフラインプロファイルは、ネットワークへのアクセスが断続的であるラップトップユーザーまたはモバイルデバイスユーザーを対象としています。この機能により、プロファイルは可能な限り早くユーザー ストアと同期できます。ネットワーク接続が切断されても、再起動または休止状態の後でも、プロファイルはラップトップまたはデバイス上でそのまま保持されます。モバイルユーザーが作業すると、プロファイルはローカルで更新され、ネットワーク接続が再確立されると最終的にユーザー ストアと同期されます。

この機能は、ドメイン参加済みコンピューター（Citrix XenClient®を実行しているコンピューターを含む）でのみ機能します。ネットワーク接続が永続的である傾向があるサーバーやデスクトップコンピューターでの使用は想定されていません。

通常、オフラインプロファイルとストリーム配信ユーザープロファイルの両方を有効にすることはありません。このため、オフラインプロファイルが優先され、ストリーム配信ユーザープロファイルと「ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する」設定が無効になります。ユーザーが最初にログオンするときに、常にラップトップまたはモバイルデバイスに完全なプロファイルがあることを確認してください。

オフラインプロファイルは、次の方法で構成できます。

- **グループポリシーの使用**。このポリシーにより、機能の一元的な管理制御が可能になりますが、オフラインプロファイルを使用するラップトップまたはデバイスを含む別のOUを作成する必要があります。
- **INIファイルの使用**。ラップトップやモバイルデバイス専用の特別なOUを作成したくない場合は、より簡単なオプションです。ただし、この機能の制御は個々のデバイス所有者に委ねられます。このオプションでは、各ラップトップまたはモバイルデバイスで一度限りの構成が必要です。

グループポリシーを使用してオフラインプロファイルサポートが構成されていない場合、INIファイルの値が使用されます。この設定がグループポリシーまたはINIファイルで構成されていない場合、オフラインプロファイルは無効になります。

グループポリシーの使用

1. Profile Managementによって管理されるすべてのコンピューターを含むOUを作成します。オフラインプロファイルを使用するラップトップとモバイルデバイス、Citrix Virtual Apps™サーバー、および仮想デスクトップを含めます。
2. ラップトップとモバイルデバイスのみを含む子OUを作成します。
3. グループポリシー管理で、サイト全体のポリシーを適用するベースライングループポリシーオブジェクト (GPO) を作成し、両方のOUにリンクします。
4. すべてのコンピューターに共通のProfile Management設定でベースラインGPOを構成します。
5. 2番目のオフラインGPOを作成し、子OUにリンクします。
6. オフラインGPOを次のように構成します。
    a. プロファイル管理で、オフラインプロファイルサポートをダブルクリックします。
    b. 有効を選択し、OKをクリックします。
    c. ラップトップおよびモバイルデバイスにのみ適用したい他の設定を構成します。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているとおり、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

.iniファイルの使用

前提条件として、ベースラインGPOとオフラインGPOの両方で、オフラインプロファイルサポートが未構成（デフォルト）であることを確認してください。これらの設定が構成されている場合、.iniファイルの設定は上書きされます。

1. 各ラップトップまたはモバイルデバイスで、プロファイル管理インストーラーによって作成された.iniファイルを見つけます。.iniファイルの場所については、ダウンロードに含まれるファイルを参照してください。
2. この行のコメントを解除します（セミコロンを削除して）。

   ```
   ;OfflineSupport=
   ```

3. .iniファイルを保存します。

   変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているとおり、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

カスタマーエクスペリエンス向上プログラム (CEIP) を構成する

CEIP を構成するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理 > 詳細設定**で、**カスタマーエクスペリエンス向上プログラム**をダブルクリックします。
3. **有効**または**無効**を選択し、**OK**をクリックします。
4. 変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

注：

- ヨーロッパ以外の地域のマシンでは、このポリシーがGPOで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがGPOまたは.iniファイルで構成されていない場合、CEIPは有効になります。
- ヨーロッパ地域のマシンでは、このポリシーがGPOで構成されていない場合、.iniファイルの値に関係なくCEIPは無効になります。

> CEIPの詳細については、Citrix カスタマーエクスペリエンス向上プログラム (CEIP) について を参照してください。

クロスプラットフォーム設定の構成

クロスプラットフォーム設定でサポートされるオペレーティングシステムとアプリケーション

この記事では、Profile Management のこのリリースにおけるクロスプラットフォーム設定機能でサポートされるアプリケーションとオペレーティングシステム (OS) について説明します。

定義ファイルについて

定義ファイルには、選択した Windows アプリケーションの共通のパーソナライズ設定が含まれています。各ファイルとその中の定義により、ユーザーは複数の OS 上で同じアプリケーションに接続でき、各プラットフォームで実質的に同一のプロファイルが提示されます。たとえば、ユーザーは Microsoft Office の 2 つのインスタンスにアクセスする場合があります。1 つは Windows 7 仮想デスクトップにインストールされており、もう 1 つは Windows Server 2003 上で Citrix Virtual Apps™ を使用して公開されています。どちらのインスタンスにアクセスしても、ユーザーの Office エクスペリエンスは一貫しています。

事前構成された定義ファイルは、クロスプラットフォーム設定機能の重要な側面です。サポートされている各アプリケーションには定義ファイルがあります。定義ファイルは XML 形式です。

重要: アプリケーションのすべての OS における動作を徹底的に分析し、この機能の操作を完全に理解しない限り、定義ファイルを編集すると、ユーザープロファイルに予期しない変更が生じ、トラブルシューティングが困難になる可能性があります。このため、Citrix® は、提供されている定義ファイルの編集や新しい定義ファイルの作成をサポートしていません。さらに、Windows ユーザープロファイルの性質上、一部のアプリケーション設定は OS 間で複製できません。

さらに、この機能はレジストリ設定やアプリケーション設定には適していますが、ファイルやフォルダー、またはフォルダーリダイレクトで通常使用されるオブジェクト（たとえば、ブラウザーのお気に入り、デスクトップ、スタートメニューの設定など）には適していないことに注意してください。

サポートされるオペレーティングシステム

サポートされているシングルセッション OS 間、およびサポートされているマルチセッション OS 間でプロファイルをローミングできます。

以下がサポートされています（該当する場合は x86 および x64 バージョン）：

- **シングルセッション OS**。Windows XP、Windows 7、および Windows Vista。
- **マルチセッション OS**。Windows Server 2003、Windows Server 2008、および Windows Server 2008 R2。

サポートされる Citrix 製品

クロスプラットフォーム設定機能は、以下の Citrix 製品をサポートしています。

- Windows Server 2003 以降向けの XenApp® 5 Feature Pack
- XenDesktop® 4 以降

サポートされるアプリケーション

このリリースでは、以下の定義ファイルが利用可能です。XMLファイル名には、サポートされるアプリケーションとバージョンが示されています。

- **Internet Explorer 7 Plus.xml**。このファイルは、Internet Explorerのバージョン7、8、9（お気に入りを除く）のプラットフォーム間でのローミングをサポートします。お気に入りおよびフィードのローミングはサポートされていません。
- **Office 2007.xml** です。
- **Office 2010.xml** です。
- **Wallpaper.xml**。このファイルは、デスクトップの壁紙のプラットフォーム間でのローミングをサポートします。テーマのプラットフォーム間でのローミングはサポートされていません。

重要: 各アプリケーションの定義ファイルは、上記のサポートされているシナリオでのみ使用してください。たとえば、Internet Explorer 7 Plus.xmlは、そのブラウザの複数のバージョン間で設定をローミングします。しかし、Office 2007.xmlまたはOffice 2010.xmlを使用して、Officeのバージョン間で設定をローミングすることはできません。

クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ

計画を実行する

フェーズ1：新しいファイルサーバーの構成

NewDomainに、クロスプラットフォーム設定の管理用 (`\\FileServ3`) と、 `2k12_Farm` のプロファイル保存用 (`\\FileServ2`) のファイルサーバーをセットアップします。

このケースでは、プロファイル用とクロスプラットフォーム設定用に別々のファイルサーバーをセットアップすることを選択します。この方法は厳密には必須ではありませんが、クロスプラットフォーム設定サーバーを利用可能にする簡単な方法です。プロファイルサーバーは、たとえば

DFS名前空間を使用するなど、異なる設計になっている可能性があり、実装に時間がかかる場合があります。

どちらの場合も、共有フォルダー上の移動ユーザープロファイルに関するセキュリティ推奨事項に従って、サーバー共有をセットアップします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/folder-redirection/deploy-roaming-user-profiles>` を参照してください。

フェーズ2：2k8_Farm内のマシンをProfile Management 5.0にアップグレードする

手順については、Profile Managementのアップグレード を参照してください。

フェーズ3：展開する定義ファイルの選択

Microsoft Office、Internet Explorer、およびWindowsの壁紙用に、いくつかの構成ファイル（定義ファイルと呼ばれます）が提供されています。

重要：Citrix®の担当者から指示がない限り、これらのファイルを更新しないでください。

展開に関連する構成ファイルを選択し、これらのファイルのみを `\\FileServ3\CrossPlatform\Definitions` にコピーします。この例では、Office 2007.xmlのみをコピーします。

フェーズ4：2k8_Farm内のマシンをProfile Management 5.0用に構成する

アップグレードが完了したら、クロスプラットフォーム設定機能を（部分的に）有効にするために、以下の構成変更を行います。この段階では、`\\FileServ3\CrossPlatform` のみが利用可能である必要があります。

ポリシー	値	注
ユーザーストアへのパス	`\\FileServ1\Profiles#sAMAccountName#\%ProfVer%`	変更なし。このパスはOldDomainユーザーのみが使用するため、NewDomainユーザーをサポートするために変更する必要はありません。
クロスプラットフォーム設定を有効にする	有効	
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	無効	すべてのユーザーグループが処理されます。

ポリシー	値	注
クロスプラットフォーム定義へのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Definitions`	このパスは、定義ファイルが置かれている場所です。
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Store\%USERNAME%.%USERDOMAIN%`	クロスプラットフォーム設定ストアは両方のドメインのユーザーによって共有されるため、パスには`%USERNAME%`と`%USERDOMAIN%`の両方を指定する必要があります。
クロスプラットフォーム設定の作成元	有効	ユーザーがNewDomainリソースにアクセスする前に、OldDomainからのクロスプラットフォーム設定を使用してクロスプラットフォーム設定ストアを初期化することを保証します。

マシンのログオンスクリプトに変更は必要ありません。

フォルダーリダイレクトポリシーに変更は必要ありません。

OU `2k8_Farm`は実行状態のままにできます。ユーザーがログオンすると、Profile Managementは定義ファイルOffice 2007.xmlで識別された設定をクロスプラットフォーム設定ストアにコピーします。

フェーズ5：2k12_Farmのマシンを準備する

`2k8_Farm`にファイルサーバーがセットアップされたので、Citrix仮想デスクトップサイトを構築する時が来ました。Windows 7仮想デスクトップが稼働しているときにProfile Management 5.0をインストールします。以下に適切な構成を示します。

ポリシー	値	注
ユーザーストアへのパス	`\\FileServ2\Profiles\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\%ProfVer%`	このファイル共有は両方のドメインのユーザーによって使用されるため、ドメイン情報を含めることも重要です。

ポリシー	値	注
アクティブライトバック	無効	
クロスプラットフォーム設定を有効にする	有効	
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	無効	すべてのユーザーグループが処理されます。
クロスプラットフォーム定義へのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Definitions`	このパスは、定義ファイルが置かれている場所です。この設定は、`2k8_Farm`の設定と一致する必要があります。
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Store\%USERNAME%.%USERDOMAIN%`	両方のドメインのユーザーがクロスプラットフォーム設定ストアを共有するため、パスには`%USERNAME%`と`%USERDOMAIN%`の両方を指定する必要があります。この設定は、`2k8_Farm`の設定と一致する必要があります。
クロスプラットフォーム設定の作成元	無効	クロスプラットフォーム設定ストア内のプロファイルデータの初期設定にNewDomainからの設定が使用されるのを防ぎます。これにより、OldDomainからの設定が優先されることが保証されます。

システム環境変数%ProfVer%を設定するマシンのログオンスクリプトが、OU内のすべてのマシンで実行されます。

マシンタイプ	%PROFVER%	注
Windows 2012 上の XenApp サーバー	ウィン2012x64	計画されている 64 ビットサーバーが利用可能になったときに必要になります。詳細

マシンタイプ	%PROFVER%	注
		については、その他の考慮事項を参照してください。
Windows 7 デスクトップ	Win7	Windows 7 の 32 ビット版と 64 ビット版の両方が展開されている場合、それぞれに個別のプロファイルを持つことをお勧めします。そのため、%ProfVer% は各プラットフォームで異なるように構成する必要があります。

そのため、OldDomain ユーザーの john.smith は、Windows 7 デスクトップ用に `\\FileServ2\Profiles\john.smith.OldDomain\Win7` に、Citrix Virtual Apps サーバー用に `\\FileServ2\Profiles\john.smith.OldDomain\Win2012x64` にプロファイルを持っています。

そして、NewDomain ユーザーの william.brown は、Windows 7 デスクトップ用に `\\FileServ2\Profiles\william.brown .NewDomain\Win7` に、XenApp サーバー用に `\\FileServ2\Profiles\william.brown.NewDomain\Win2012x64` にプロファイルを持っています。

ここでも、グループポリシーを使用してフォルダーリダイレクトを設定します。ドメインは Windows Server 2012 に基づいているため、フォルダーリダイレクトは **<グループポリシーオブジェクト名\>** \> **ユーザーの構成** \> **ポリシー** \> **Windows の設定** \> **フォルダーリダイレクト** から設定します。

ポリシー	値
お気に入り	`\\FileServ2\Redirected\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\Favorites`
マイドキュメント	`\\FileServ2\Redirected\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\Documents`

フォルダーリダイレクトパスに %USERDOMAIN% が追加されました。このポリシーは NewDomain ユーザーにのみ適用されるため、この設定は必須ではありません。しかし、将来的に OldDomain ユーザーを同じサーバーに移行することを決定した場合に役立つ可能性があります。今のところ、OldDomain ユーザーは、フォルダーを `\\FileServ1` にリダイレクトする OldDomain のフォルダーリダイレクトポリシーを引き続き使用します。

フェーズ 6: ライブテスト

テストは2つの段階で実行します。

1. NewDomain のユーザーのプロファイルデータが正しく動作することを確認します。これらのユーザーは、クロスプラットフォーム設定ストアにデータが設定されていません。クロスプラットフォーム設定を作成するためのポリシーソースが無効に設定されているため、プロファイルの変更は OldDomain に伝播されません。
2. OldDomain の一部のユーザーでテストします。初めてログオンすると、クロスプラットフォーム設定データがプロファイルにコピーされます。その後のログオンでは、いずれかのドメインからの変更がもう一方のドメインにコピーされます。OldDomain のユーザーが NewDomain にログオンし、プロファイルデータが存在しない場合（OldDomain が Profile Management 5.0 にアップグレードされて以来、ユーザーが OldDomain でプロファイルを使用していないため）、クロスプラットフォーム設定ストアは更新されません。このトピックで説明されている構成では、ユーザーがドメイン間で設定をローミングする前に、OldDomain にログオンする必要があります。これにより、ユーザー設定（おそらく長年にわたって作成されたもの）が NewDomain のデフォルト設定によって上書きされないようにします。

その他の考慮事項

このケーススタディで構成されているように、Profile ManagementはNewDomainからの設定を使用してクロスプラットフォーム設定ストアを初期化しません。OldDomainからの設定のみがストアの初期化に使用できます。これは、NewDomainに複数の種類のプロファイル（Windows 7 32ビットやWindows 7 64ビットなど）が含まれるまでは許容されます。あるいは、NewDomainのユーザーがOldDomainのリソースにアクセスする必要があるかもしれません。これらの場合、さらに多くの種類のマシンで、ポリシー「Source for creating cross-platform settings」を適切に有効にする必要があります。

> **注意：**
>
> もし クロスプラットフォーム設定を作成するためのソースが誤って設定されている場合、新しいプロファイルが、多くの蓄積された大切な設定を持つ既存のプロファイルを上書きしてしまう可能性があります。そのため、このポリシーは一度に1つのプラットフォームタイプにのみ設定することをお勧めします。このプラットフォームは通常、ユーザーが保持したいと考える設定が蓄積されている、より古い（成熟した）プラットフォームです。

> このケーススタディでは、いくつかの点を説明するために別々のドメインが使用されています。また、クロスプラットフォーム設定機能は、2つのOU間、あるいは単一のOU内の異な

> る種類のマシン間で設定のローミングを管理できます。この場合、異なるマシンタイプに対してポリシー「Source for creating cross-platform settings」を異なる方法で設定する必要があるかもしれません。この設定はいくつかの方法で実現できます。

- .iniファイル内の設定CPMigrationsFromBaseProfileToCPStoreを使用して、各マシンタイプでポリシーを異なる方法で設定します。ポリシー「Source for creating cross-platform settings」は設定しないでください。
- 同じOU上の異なるGPOを管理するために、Windows Management Instrumentation (WMI) フィルタリングを使用します。OU内のすべてのマシンに適用されるGPOで共通設定を構成できます。しかし、追加のGPOにはポリシー「Source for creating cross-platform settings」のみを追加し、WMIクエリを使用してフィルタリングします。

アプリケーションプロファイラーを有効にする

この機能は、アプリケーションベースのプロファイル処理を定義します。この機能を有効にすると、定義ファイルで定義された設定のみが同期されます。

アプリケーションプロファイラーを有効にするには、次の手順を実行します。

1. **プロファイル管理**の下で、**Citrix Virtual Apps™最適化設定**フォルダーを開きます。
2. **Citrix Virtual Apps最適化を有効にする**ポリシーを有効にします。
3. **Citrix Virtual Apps最適化定義へのパス**ポリシーを有効にします。
4. Citrix Virtual Apps最適化の定義ファイルが配置されているフォルダーを指定します。
5. ポリシーの展開を適用するには、`gpupdate /force`コマンドを実行します。

> **注：**
>
> 定義ファイルの作成については、「定義ファイルの作成」を参照してください。

> ログオフ時に、定義ファイル内の設定のみが同期され、その他のすべての設定は破棄されます。セッションでユーザー文書を表示または更新する場合は、フォルダーリダイレクトを使用します。フォルダーリダイレクトの構成については、「フォルダーリダイレクトの構成」を参照してください。

ユーザーのログオフを強制する

既定では、問題が発生した場合 (たとえば、ユーザー ストアが利用できない場合) は、ユーザーに一時プロファイルが与えられます。しかし、代わりにProfile Managementを構成して、エラーメッセージを表示し、ユーザーをログオフさせることもできます。このエラーメッセージは、トラブルシューティングに役立ちます。

1. **Profile Management**で、**詳細設定**フォルダーを開きます。
2. **問題が発生した場合にユーザーをログオフする**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。

ファイルセキュリティ属性を同期する

プロファイル管理が、プロファイルがインストールされているシステムとユーザー ストアの間でユーザー プロファイル内のファイルとフォルダーをコピーする際に、セキュリティ属性を同期できます。この機能は、セキュリティ属性間の不整合を防ぐことを目的としています。Windows 10以降、およびWindows Server 2016で必要です。

この機能はデフォルトで有効になっています。無効にするには、次の手順を実行します。

1. **UPMPolicyDefaults_all.ini** ファイルの **General Settings** セクションに **SecurityPreserveEnabled=0** を追加します。
2. コマンドラインから、`gpupdate /force` コマンドを実行します。

プロファイル管理は、プロファイルの最終変更時刻に基づいてプロファイルの変更を同期します。変更がファイルのセキュリティ属性のみに対して行われた場合、プロファイル管理はファイルを同期しません。

ユーザーグループポリシーのログオン時の非同期処理を有効にする

Windowsは、ユーザーグループポリシーに同期モードと非同期モードの2つの処理モードを提供します。Windowsは、次回のユーザーログオン時の処理モードを決定するためにレジストリ値を使用します。レジストリ値が存在しない場合、同期モードが適用されます。

レジストリ値はマシンレベルの設定であり、ユーザーと共にローミングされません。そのため、ユーザーが以下の場合、非同期モードは期待どおりに適用されません。

- 異なるマシンにログオンする。

- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除するポリシーが有効になっている同じマシンにログオンする。

Citrix Profile Managementは、この問題を解決するために「**ユーザーグループポリシーのログオン時の非同期処理を有効にする**」ポリシーを提供します。このポリシーを有効にすると、Profile Managementはレジストリ値をユーザーと共にローミングします。その結果、ユーザーがログオンするたびに実際の処理モードが適用されます。

この機能は、WindowsおよびWindows Server OSの両方に適用されます。

前提条件

Windowsマシンで非同期モードを有効にするために、追加のアクションは必要ありません。ただし、Windows Serverマシンでこのモードを有効にするには、以下の要件を満たしていることを確認してください。

- リモートデスクトップセッションホストの役割がインストールされていること。
- グループポリシーが次のように設定されていること。
  - **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > システム > ログオン > コンピューターの起動とログオン時に常にネットワークを待機する**: 無効
  - **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > システム > グループポリシー > リモートデスクトップサービス経由でログオンするときに非同期ユーザーグループポリシー処理を許可する**: 有効

ポリシーを有効にする

ポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開き、**ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management** にアクセスします。
2. Profile Management で、**詳細設定**をクリックします。
3. **ログオン時のユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
4. **有効**を選択します。
5. **OK**をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンしてください。詳細については、`<https://`

`docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` を参照してください。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの対応する設定が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、ポリシーは無効になります。

ポリシー

プロファイル管理ポリシー

この記事では、.admファイルと.admxファイル内のポリシーの重要な側面について説明します。

プロファイル管理変数

このバージョンのプロファイル管理では、グループポリシーと.iniファイルの両方で使用できる以下の変数が利用可能です。

ファイルとレジストリエントリを定義するポリシーの場合、以下の変数は次のように展開されます。

変数	バージョン1プロファイルの展開	バージョン2プロファイルの展開
`!ctx_localsettings!`	`Local Settings\Application Data`	`AppData\Local`
`!ctx_roamingappdata!`	`Application Data`	`AppData\Roaming`
`!ctx_startmenu!`	`Start Menu`	`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Start menu`
`!ctx_internetcache!`	`Local Settings\Temporary Internet Files`	`AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files`
`!ctx_localappdata!`	`Local Settings\Application Data`	`AppData\Local`

パスを構築するために使用されるポリシーの場合、`!ctx_osbitness!` 変数はオペレーティングシステムに応じてx86またはx64に展開されます。以下の変数も展開されます。

- `!ctx_osname!` は、オペレーティングシステムに応じて次のように短い名前に展開されます。

- `!ctx_profilever!` は、オペレーティングシステムに応じて次のようにプロファイルバージョンに展開されます。

プロファイル管理サービスが開始されると、長い名前がログファイルに書き込まれます。

長い名前	短い名前	プロファイルバージョン
`Windows 11`	Win11	v6
`Windows 10 Redstone 6`	Win10 アールエス6	v6
`Windows 10 Redstone 5`	Win10 アールエス5	v6
`Windows 10 Redstone 4`	Win10 アールエス4	v6
`Windows 10 Redstone 3`	Win10 アールエス3	v6
`Windows 10 Redstone 2`	Win10 アールエス2	v6
`Windows 10 Redstone 1`	Win10 アールエス1	v6
`Windows 10`	Win10	v5
`Windows 8.1`	Win8.1	v4 または v2
`Windows 8`	Win8	v3 または v2
`Windows 7`	Win7	v2
`Windows Server 2022`	Win2022	v6
`Windows Server 2019`	Win2019	v6
`Windows Server 2016`	Win2016	v6
`Windows Server 2012 R2`	ウィン2012R2	v4 または v2
`Windows Server 2012`	Win2012	v3 または v2
`Windows Server 2008 R2`	Win2008	v2
`Windows Server 2008`	Win2008	v2

注:

20H1以降のWindows 10の場合、長い名前はWindows10 \<postfix\>で、対応する短い名前はWin10_\<postfix\>です。\<postfix\>の値は、次の2つの特定のレジストリエントリから取得されます。

- エントリ: `HKLM\Software\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion` > 値の名前: DisplayVersion
- エントリ: `HKLM\Software\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion` > 値の名前: ReleaseId

最初のレジストリエントリに値が含まれている場合、それが\<postfix\>として使用されます。それ以外の場合は、2番目のレジストリエントリの値が使用されます。

Windows 8、Windows 8.1、Windows Server 2012、およびWindows Server 2012R2の場合、実際のプロファイルバージョンは、`HLKM\System\CurrentControlset\Services\ProfSvc\Parameters`の下にある`UseProfilePathExtensionVersion`レジストリキーの設定によって変更される可能性があります。

- 1に設定されている場合、プロファイルバージョンはオペレーティングシステムに応じてv3またはv4になります。
- 設定されていないか0に設定されている場合、プロファイルバージョンはv2になります。

バージョン別のポリシー

移行を支援するために、以下の表は、Profile Managementのさまざまなバージョンで利用可能なポリシー、.adm（または.admx）ファイルおよび.iniファイル内の各ポリシーの場所、および各ポリシーが設計されている機能（またはすべての展開の基本構成の一部であるかどうか）を示しています。

.admまたは.admxファイル内の場所は、`Citrix > Profile Management`に対する相対パスです。

バージョン2311以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
SelectBestPerfUS	\AdvancedSettings	SelectBestPerfUS	ユーザーストアの選択方法
SharedStoreProfileContainerFileSizeLimit	\FileDeduplication	SharedStoreProfileContainerFileSizeLimit	ファイル重複排除
PreventLoginWhenProfileContainerMountFailed	\ProfileContainerSettings	PreventLoginWhenProfileContainerMountFailed	ログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合にユーザーをログオフする
GroupsToAccessProfileContainer	\ProfileContainerSettings	GroupsToAccessProfileContainer	プロファイルコンテナにアクセスするユーザーとグループ

バージョン 2308 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイルの場所	.INI ファイルのポリシー	機能
AutoExtend	\ProfileContainerSettings	AutoExtend	プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする
AutoExtendThreshold	\AdvancedSettings	AutoExtendThreshold	プロファイルコンテナの自動拡張しきい値
AutoExtendSize	\AdvancedSettings	AutoExtendSize	プロファイルコンテナの自動拡張増分
AutoExtendLimit	\AdvancedSettings	AutoExtendLimit	プロファイルコンテナの自動拡張制限
VhdCapacity	\AdvancedSettings	VhdCapacity	VHD コンテナーのデフォルト容量

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイルの場所	.INI ファイルのポリシー	機能
DisableConcurrentAccessToProfileContainer	\ProfileContainerSettings	DisableConcurrentAccessToProfileContainer	VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする
DisableConcurrentAccessToOneDriveContainer	\ProfileContainerSettings	DisableConcurrentAccessToOneDriveContainer	VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする
EnableUwpAppsRoaming	\AdvancedSettings	EnableUwpAppsRoaming	UWPアプリのローミング

バージョン 2305 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
UserGroupLevelConfigEnabled	\AdvancedSettings	UserGroupLevelConfigEnabled	ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする
OrderedGroups	\AdvancedSettings	OrderedGroups	ユーザーグループの優先順位を設定する

バージョン 2303 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
PSMidSessionWriteBackSessionLock	\BasicSettings	PSMidSessionWriteBackSessionLock	セッションロック時および切断時にアクティブなライトバックを有効にする
AppAccessControl	\AppAccessControl	AppAccessControl	アプリケーションアクセス制御を有効にする
EnableVHDDiskCompaction	\ProfileContainerSettings	EnableVHDDiskCompaction	VHDディスクの圧縮を有効にする

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
FreeRatio4Compaction	\AdvancedSettings	FreeRatio4Compaction	VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率
Nログオフ4コンパクション	\AdvancedSettings	エヌログオフフォーコンパクション	VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数
エヌデフラグフォーコンパクション	\AdvancedSettings	エヌデフラグフォーコンパクション	VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

バージョン 2209 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
SharedStoreFileInclusionList	\ファイルの重複排除	SharedStoreFileInclusionList	重複排除のために共有ストアに含めるファイル
SharedStoreFileExclusionList	\ファイルの重複排除	SharedStoreFileExclusionList	共有ストアから除外するファイル

バージョン 2206 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
SyncGpoStateEnabled	\AdvancedSettings	SyncGpoStateEnabled	ログオン時のユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする
OneDriveContainer	\AdvancedSettings	OneDriveContainer	ローミング OneDrive フォルダーを有効にする

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
OutlookSearchRoamingConcurrentSessionEnabled	\AdvancedSettings	OutlookSearchRoamingConcurrentSessionEnabled	同時セッションでの Outlook 検索データローミングを有効にする
PSForPendingAreaEnabled	\ストリーミングユーザープロファイル	PSForPendingAreaEnabled	ペンディングエリアのプロファイルストリーミングを有効にする

バージョン2203から利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
EnableVolumeReattach	\詳細設定	EnableVolumeReattach	セッションで VHDX ディスクを自動的に再アタッチする

バージョン2112から利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
ProfileContainerExclusionListFile	プロファイルコンテナー設定	ProfileContainerExclusionListFile	プロファイルコンテナからファイルを除外する
ProfileContainerInclusionListFile	プロファイルコンテナー設定	ProfileContainerInclusionListFile	プロファイルコンテナにファイルを含める
VhdStorePath	AdvancedSettings	PathToVhdStore	VHDXファイルのネットワークストレージの場所を指定する

バージョン2109以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
CredBasedAccessEnabled	AdvancedSettings	CredBasedAccessEnabled	ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする

バージョン2106から利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
AccelerateFolderMirroring	\FileSystemSettings\FSSynchronization	AccelerateFolderMirroring	フォルダーのミラーリングを高速化する
CredBasedAccessEnabled	AdvancedSettings	CredBasedAccessEnabled	ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする
MultiSiteReplication	AdvancedSettings	MultiSiteReplication	ユーザーストアをレプリケートする

バージョン2103から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
PSForFoldersEnabled	\PsSettings	PSForFoldersEnabled	フォルダーのプロファイルストリーミング
ProfileContainerLocalCache	\ProfileContainerSettings	ProfileContainerLocalCache	プロファイルコンテナのローカルキャッシュ

バージョン2009以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
ProfileContainerExclusionListDir	\ProfileContainerSettings	ProfileContainerExclusionListDir	プロファイルコンテナ
ProfileContainerInclusionListDir	\ProfileContainerSettings	ProfileContainerInclusionListDir	プロファイルコンテナ

バージョン2003から利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
FSLogixProfileContainerSupport	\AdvancedSettings	FSLogixProfileContainerSupport	**バージョン2103より前:** FSLogix Profile Containerのマルチセッションライトバックを有効にする **バージョン2103以降:** Profile Containersのマルチセッションライトバックを有効にする

バージョン1909以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイルの場所	.INI ファイルのポリシー	機能
MigrateUserStore		MigrateUserStore	ユーザー ストアの移行
OutlookEdbBackupEnabled	\AdvancedSettings	OutlookEdbBackupEnabled	Outlook 検索インデックス データベース - バックアップと復元
ApplicationProfilesAutoMigration	\AdvancedSettings	ApplicationProfilesAutoMigration	既存のアプリケーションプロファイルの自動移行

バージョン 1903 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
ProfileContainer	**バージョン 2009 より前:** \FileSystemSettings\FSSynchronization **バージョン 2009 以降:** \ProfileContainer	ProfileContainer	プロファイルコンテナ

バージョン 7.18 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
OutlookSearchRoamingEnabled	\AdvancedSettings	OutlookSearchRoamingEnabled	Outlook 検索ローミング

バージョン 7.16 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
XenAppOptimizationSettings	\XenAppOptimizationSettings	XenAppOptimizationSettings	Citrix Virtual Apps and Desktops アプリケーションの最適化
XenAppOptimizationDefinitionPath	\XenAppOptimizationSettings	XenAppOptimizationDefinitionPath	Citrix Virtual Apps and Desktops アプリケーションの最適化
LargeFileHandlingList	\FileSystemSettings	LargeFileHandlingList	大容量ファイル処理

バージョン 7.15 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
LogonExclusionCheck	\FileSystemSettings	LogonExclusionCheck	ログオン除外チェック

バージョン 5.8 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
StreamingExclusionList	\PsSettings	StreamingExclusionList	プロファイルストリーミング除外リスト

バージョン 5.6 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
`CEIPEnabled`	\AdvancedSettings	`CEIPEnabled`	CEIP
PSMidSessionWriteBackReg		PSMidSessionWriteBackReg	アクティブライトバックレジストリ

バージョン 5.5 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
デフォルトの除外リスト	\レジストリ	DefaultExclusionListRegistry	ベース
NTUSER.DAT	\レジストリ	LastKnownGoodRegistry	NTUSER.DAT のバックアップ
デフォルトの除外リスト - ディレクトリ	\ファイルシステム	DefaultSyncExclusionListDir	ベース

バージョン 5.0〜5.4 で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
除外されるグループ		ExcludedGroups	除外グループ
自動構成を無効にする	\詳細設定	DisableDynamicConfig	自動構成

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
AppData (Roaming) フォルダーをリダイレクトする、`Desktop` フォルダーをリダイレクトする、...	\フォルダーリダイレクト (ユーザー構成内)	注: 適用されません	XenDesktop との統合
キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延	\プロファイル処理	ProfileDeleteDelay	ベース

バージョン 4.x 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	\クロスプラットフォーム設定	CPUserGroupList	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム設定を有効にする	\クロスプラットフォーム設定	`CPEnabled`	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム設定の作成元	\クロスプラットフォーム設定	CPMigrationFromBaseProfileToCPStore	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム定義へのパス	\クロスプラットフォーム設定	CPSchemaPath	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	\クロスプラットフォーム設定	`CPPath`	クロスプラットフォーム設定
オフラインプロファイルのサポート	\クロスプラットフォーム設定	OfflineSupport	オフラインプロファイル

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
問題が発生した場合にユーザーをログオフする	\詳細設定	LogoffRatherThanTempProfile	トラブルシューティングの改善

バージョン3.x以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
アクティブライトバック		PSMidSessionWriteBack	アクティブプロファイルのライトバック（バージョン4.0では「Active write back」に名称変更）
ミラーリングするフォルダー（バージョン3.1以降で利用可能）	\File system\Synchronization	MirrorFoldersList	フォルダーミラーリング
ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する（バージョン3.1以降で利用可能）	\詳細設定	ProcessCookieFiles	フォルダーミラーリング
リダイレクトされたフォルダーの削除 (バージョン 3.2、3.2.2、および 4.0 で利用可能)	\詳細設定	DeleteRedirectedFolders	フォルダーリダイレクトのサポート
常にキャッシュ	\ストリーム配信ユーザープロファイル	PSAlwaysCache	ストリーミングユーザープロファイル
プロファイルストリーミング	\ストリーム配信ユーザープロファイル	`PSEnabled`	ストリーミングユーザープロファイル

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
ペンディングエリアロックファイルのタイムアウト	\ストリーム配信ユーザープロファイル	PSPendingLockTimeout	ストリーミングユーザープロファイル
ストリーミングされたユーザープロファイルグループ	\ストリーム配信ユーザープロファイル	PSUserGroupsList	ストリーミングユーザープロファイル

バージョン 2.x 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
ユーザーストアへのパス		PathToUserStore	ベース
処理されるグループ		ProcessedGroups	ベース
ローカルプロファイルの競合処理	\プロファイル処理	LocalProfileConflictHandling	ベース
既存プロファイルの移行	\プロファイル処理	MigrateWindowsProfilesToUserStore	ベース
テンプレートプロファイル	\プロファイル処理	テンプレートプロファイルパス、テンプレートプロファイルオーバーライドローミングプロファイル、テンプレートプロファイルオーバーライドローカルプロファイル	ベース
ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する	\プロファイル処理	DeleteCachedProfilesOnLogoff	ベース

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
MFTキャッシュファイルのディレクトリ (バージョン5.0で削除)	\詳細設定	`USNDBPath`	ベース
同期するディレクトリ	\ファイルシステム\同期	SyncDirList	ベース
除外リスト	\レジストリ	ExclusionListRegistry	ベース
同期するファイル	\ファイルシステム\同期	SyncFileList	ベース
包含リスト	\レジストリ	InclusionListRegistry	ベース
除外リスト - ディレクトリ	\ファイルシステム	SyncExclusionListDir	ベース
除外リスト - ファイル	\ファイルシステム	SyncExclusionListFiles	ベース
ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数	\詳細設定	LoadRetries	ベース
ローカル管理者によるログオンの処理		ProcessAdmin	ベース
Profile Management を有効にする		ServiceActive	ベース
ログの有効化	\ログ設定	LoggingEnabled	ログ
ログ設定	\ログ設定	LogLevel	ログ
ログファイルの最大サイズ	\ログ設定	MaxLogSize	ログ

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
ログファイルへのパス (バージョン2.1以降で利用可能)	\ログ設定	PathToLogFile	ログ

Profile Management ポリシーの説明とデフォルト

このトピックでは、Profile Management の .adm および .admx ファイルにあるポリシーについて説明します。

ポリシーの詳細については、「Profile Management policies」を参照してください。

.adm および .admx ファイルのセクション

Profile Management ポリシーは、次のセクションにあります。

プロファイル管理

Profile Management\\フォルダーリダイレクト (ユーザー構成)

プロファイル管理\\プロファイル処理

プロファイル管理\\詳細設定

プロファイル管理\\ログ設定

プロファイル管理\\レジストリ

プロファイル管理\\ファイルシステム

プロファイル管理\\ファイルシステム\\同期

プロファイル管理\\ファイル重複排除

プロファイル管理\\ストリーミングユーザープロファイル

プロファイル管理\\クロスプラットフォーム設定

グループポリシーオブジェクトエディターでは、ほとんどのポリシーは **Computer Configuration \> Administrative Templates \> Classic Administrative Templates \> Citrix** の下に表示されます。フォルダーリダイレクトポリシーは **User Configuration \> Administrative Templates \> Classic Administrative Templates \> Citrix** の下に表示されます。

グループポリシーエディターでは、ポリシーが **User Configuration** というラベルのセクションの下にある場合を除き、ポリシーは **Computer Configuration** の下に表示されます。

プロファイル管理

プロファイル管理を有効にする

プロファイル管理を有効にできます。デフォルトでは、展開を容易にするため、プロファイル管理はログオンまたはログオフを処理しません。他のすべてのセットアップタスクを実行し、Citrix®ユーザープロファイルが環境でどのように動作するかをテストした後にのみ、プロファイル管理を有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、プロファイル管理はWindowsユーザープロファイルを一切処理しません。

処理されるグループ

プロファイルが処理されるユーザーを指定できます。次のユーザーグループを使用してユーザーを指定します。

- ドメイングループ (ローカル、グローバル、ユニバーサル) を `<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME>` の形式で
- ローカルグループを `GROUP NAME` の形式で

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されている場合、プロファイル管理は、これらのユーザーグループのメンバーのみを処理します。このポリシーが無効になっている場合、プロファイル管理はすべてのユーザーを処理します。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、すべてのユーザーグループのメンバーが処理されます。

除外されたグループ

プロファイルが処理されないユーザーを指定できます。以下のユーザーグループを使用してユーザーを指定できます。

- `<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME>`の形式のドメイングループ（ローカル、グローバル、ユニバーサル）
- `GROUP NAME`の形式のローカルグループ

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されている場合、Profile Managementはそれらのユーザーグループのメンバーを除外します。
2. この設定が無効になっている場合、Profile Managementはどのユーザーも除外しません。
3. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
4. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、どのグループのメンバーも除外されません。

ローカル管理者のログオンを処理する

Profile Managementが`BUILTIN\Administrators`グループのメンバーのログオンを処理するかどうかを指定できます。ほとんどのユーザーがローカル管理者であるCitrix Virtual Desktops展開では、このポリシーを有効にすることをお勧めします。

Citrix Virtual Apps環境は、マルチセッションオペレーティングシステムの典型的なユースケースです。このポリシーがマルチセッションオペレーティングシステムで無効になっているか、構成されていない場合、Profile Managementはドメインユーザーのログオンを処理しますが、ローカル管理者のログオンは処理しません。Citrix Virtual Desktops™環境は、シングルセッションオペレーティングシステムの典型的なユースケースです。シングルセッションオペレーティングシステムでは、Profile Managementはローカル管理者のログオンを処理します。

ローカル管理者権限を持つドメインユーザーは、通常、仮想デスクトップが割り当てられたCitrix Virtual Desktopsユーザーです。デスクトップでProfile Managementに関する問題が発生した場合、このポリシーにより、ユーザーはログオン処理をバイパスしてログオンし、問題をトラブルシューティングできます。

> **注:**
>
> ドメインユーザーのログオンは、グループメンバーシップによって課される制限を受ける場合があります。これは通常、製品ライセンスへの準拠を確実にするためです。

> 構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、Profile Management はローカル管理者によるログオンを処理しません。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、管理者は処理されません。

ユーザー ストアへのパス

ユーザー ストアの保存パスを指定できます。ユーザー ストアは、ユーザープロファイル（レジストリの変更と同期されたファイル）が保存される中央のネットワーク上の場所です。

パスは次のいずれかです。

- ホームディレクトリに対する相対パス。ホームディレクトリは通常、Active Directory のユーザーの `#homeDirectory#` 属性として構成されます。
- UNC パス。通常、サーバー共有または DFS 名前空間を指定します。
- 無効または未構成。この場合、パスは `#homeDirectory#\Windows` です。

パス設定では、次の種類の変数を使用できます。

- パーセント記号で囲まれたシステム環境変数（例: `%ProfVer%`）。システム環境変数には通常、追加の設定が必要です。
- ハッシュで囲まれた Active Directory ユーザーオブジェクトの属性（例: `#sAMAccountName#`）。
- プロファイル管理変数。詳細については、プロファイル管理変数の製品ドキュメントを参照してください。

`%username%` と `%userdomain%` を除き、ユーザー環境変数は使用できません。場所やユーザーなどを完全に定義するために、カスタム属性を作成することもできます。属性では大文字と小文字が区別されます。

例:

- `\\server\share#sAMAccountName#` は、ユーザー設定をUNCパス `\\server\share\JohnSmith` に保存します（現在のユーザーに対して#sAMAccountName#がJohnSmithに解決される場合）。
- `\\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` は `\\server\profiles$\JohnSmith.DOMAINCONTROLLER1\Win8x64` に展開される場合があります。

重要: どの属性または変数を使用する場合でも、このポリシーがNTUSER.DATを含むフォルダーより1レベル上のフォルダーに展開されることを確認してください。たとえば、このファイルが\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64\UPM_Profileに存在する場合、ユーザーストアへのパスは\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64（\UPM_Profileサブフォルダーではない）として設定します。

ユーザーストアへのパスを指定する際の変数の使用に関する詳細については、以下のトピックを参照してください。

- 複数のファイルサーバーでCitrixユーザープロファイルを共有する
- OU内およびOU間でプロファイルを管理する
- プロファイル管理による高可用性と災害復旧

構成の優先順位:

1. が無効になっている場合、ユーザー設定はホームディレクトリのWindowsサブディレクトリに保存されます。このポリシーが無効になっている場合、ユーザー設定はホームディレクトリのWindowsサブディレクトリに保存されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ホームドライブ上のWindowsディレクトリが使用されます。

ユーザーストアの移行

Profile Managementが以前使用していたユーザー ストアのストレージ パス（以前指定した`path to user store`設定）を指定できます。

この設定が構成されている場合、以前のユーザー ストアに保存されていたユーザー設定は、現在のユーザー ストアに移行されます。

パスは、絶対UNCパスまたはホームディレクトリに対する相対パスにすることができます。

どちらの場合も、次の種類の変数を使用できます。

- パーセント記号で囲まれたシステム環境変数
- ハッシュ記号で囲まれたActive Directoryユーザーオブジェクトの属性

例:

- 「%ProfileVer%」がW2K3に解決されるシステム環境変数である場合、`Windows\%ProfileVer%`フォルダーはユーザー設定をユーザー ストアの`Windows\W2K3`というサブフォルダーに保存します。
- 現在のユーザーに対して`#SAMAccountName#`がJohnSmithに解決される場合、`\\server\share#SAMAccountName#`はユーザー設定をUNCパス`\\server\share\<JohnSmith>`に保存します。

構成の優先順位:

1. パスでは、`%username%`と`%userdomain%`を除くユーザー環境変数を使用できます。この設定が無効になっている場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルからの対応する設定が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。

アクティブライトバック

アクティブライトバック機能を有効にできます。この機能を有効にすると、Profile Management は、セッション中にローカルコンピューターで変更されたファイルとフォルダーをユーザー ストアに同期します。

設定の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、無効になります。

アクティブライトバックレジストリ

Profile Management を有効にして、セッション中にローカルコンピューターで変更されたレジストリエントリをユーザー ストアに同期させることができます。このポリシーは、**アクティブライトバック**ポリシーと併用してください。

設定の優先順位:

1. この設定をここで構成しない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. この設定をここでも .ini ファイルでも構成しない場合、アクティブライトバックレジストリは無効になります。

セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック

このポリシーと**アクティブライトバック**ポリシーの両方が有効になっている場合、プロファイルファイルとフォルダーは、セッションがロックまたは切断されたときにのみ書き戻されます。

このポリシーと、**アクティブライトバック**および**アクティブライトバックレジストリ**の両方のポリシーが有効になっている場合、レジストリエントリは、セッションがロックまたは切断されたときにのみ書き戻されます。

設定の優先順位:

- この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
- この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、このポリシーは無効になります。

オフラインプロファイルのサポート

オフラインプロファイル機能を有効にできます。この機能により、プロファイルを可能な限り早くユーザー ストアと同期できます。

この機能は、頻繁にローミングするラップトップまたはモバイルデバイスのユーザーを対象としています。ネットワーク接続が切断されても、再起動または休止状態の後でも、プロファイルはラップトップまたはデバイス上でそのまま維持されます。モバイルユーザーがセッションを開始すると、プロファイルはローカルで更新されます。Profile Management は、ネットワーク接続が復元された後にのみ、プロファイルをユーザー ストアと同期します。

構成の優先順位:

- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、オフラインプロファイルは無効になります。

プロファイル管理\詳細設定

ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数

ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数を指定できます。

このポリシーを有効にする必要はほとんどありません。

ログオフ中に、ロックされたファイルがある場合、Profile Management は指定された回数だけファイルにアクセスし、ユーザー ストアにコピーしようとします。しかし、通常、Profile Management はコピー操作を成功させるためにファイルを読み取るだけで（書き込みはせず）、

ロックされたファイルが存在する場合、Profile Management はローカルプロファイルを削除せず、「古い」状態のままにします（適切なポリシーが有効になっている限り）。

このポリシーを有効にしないことをお勧めします。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、デフォルト値の5回の再試行が使用されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルト値が使用されます。

ログオフ時にインターネットクッキーファイルを処理する

一部の展開では、`Index.dat` が参照しない余分なインターネットクッキーが残されます。長時間のブラウジング後にファイルシステムに残された余分なクッキーは、プロファイルの肥大化につながる可能性があります。このポリシーを使用すると、Profile Management を有効にして Index.dat の処理を強制し、余分なクッキーを削除できます。このポリシーはログオフ時間を増加させるため、この問題が発生した場合にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、Index.dat の処理は行われません。

自動構成を無効にする

Profile Management は、実行時に Citrix 環境を評価し、推奨されるグループポリシー設定を自動的に構成します。

自動構成は、展開を高速化し、最適化を簡素化するのに役立ちます。自動構成はデフォルトで *有効* になっています。通常、このポリシーを構成する必要はありません。ただし、次の場合には自動構成を無効にできます。

- すべてのカスタマイズされたポリシー設定を、構成どおりに正確に保持する必要がある場合。
- Profile Management の以前のバージョンからアップグレードしており、同じ有効な設定を維持したい場合。
- Profile Management に関連する問題のトラブルシューティングを行っている場合。

> **注:**

> 通常、自動構成を無効にすると、期待される動作を保証するために、関連するポリシーを手動で構成する必要がある場合があります。

> 自動構成は、動的な構成チェッカーとして機能します。実行時に環境に基づいてデフォルトのポリシー設定を調整します。実行時要因には以下が含まれます。

- Windows OS および OS のバージョン
- Citrix仮想デスクトップの存在
- 個人用vDiskの存在
- インストールされているアプリケーション（例：Office 365）
- 既存のProfile Managementポリシー設定

詳細については、「自動構成の使用」を参照してください。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここで構成されておらず、.iniファイルでも構成されていない場合、自動構成が有効になります。この場合、環境が変更されるとProfile Managementの設定も変更される可能性があります。

問題が発生した場合にユーザーをログオフする

問題が発生した場合にProfile Managementがユーザーをログオフするかどうかを指定できます。

このポリシーが無効になっているか、構成されていない場合、問題が発生するとProfile Managementはユーザーに一時プロファイルを提供します。たとえば、ユーザー ストアが利用できない場合などです。

構成の優先順位:

1. この設定が有効になっている場合、エラーメッセージが表示され、ユーザーはログオフされます。この設定により、問題のトラブルシューティングが簡素化されます。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここで構成されておらず、.iniファイルでも構成されていない場合、一時プロファイルが提供されます。

カスタマーエクスペリエンス向上プログラム

デフォルトでは、匿名の統計情報と使用状況データを送信することでCitrix製品の品質とパフォーマンスを向上させるために、カスタマーエクスペリエンス向上プログラムが有効になっています。

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

Outlookの検索インデックスローミングを有効にする

このポリシーを有効にすると、Profile ManagementはOutlookの検索データをユーザープロファイルとともに自動的にローミングすることで、ユーザーにネイティブなOutlook検索エクスペリエンスを提供します。このポリシーでは、Outlookの検索インデックスを保存するために追加のストレージが必要です。

このポリシーを有効にするには、ログオフしてから再度ログオンしてください。

Outlook検索インデックスデータベース – バックアップと復元

Outlookの検索インデックスローミングを有効にするポリシーが有効になっている場合に、ログオン時にProfile Managementが何を行うかを指定できます。

このポリシーが有効になっている場合、Profile Managementは、ログオン時にデータベースが正常にマウントされるたびに検索インデックスデータベースをバックアップします。Profile Managementは、このバックアップを検索インデックスデータベースの良好なコピーとして扱います。データベースの破損により検索インデックスデータベースのマウントが失敗した場合、Profile Managementは検索インデックスデータベースを最後に確認された良好なコピーに戻します。

> **注：**
>
> 新しいバックアップが正常に保存されると、Profile Managementは以前に保存されたバックアップを削除します。バックアップは利用可能なVHDXストレージを消費します。

Outlook検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする

Profile Managementが同じユーザーの同時セッションでネイティブなOutlook検索エクスペリエンスを提供できるようにします。このポリシーは、Outlookの検索インデックスローミングポリシーと併用してください。

このポリシーを有効にすると、各同時セッションは個別のOutlook OSTファイルを使用します。

デフォルトでは、Outlook OSTファイルを保存するために使用できるVHDXディスクは2つだけです（ディスクごとに1ファイル）。ユーザーがさらにセッションを開始すると、Outlook OSTファ

イルはローカルユーザープロファイルに保存されます。Outlook OSTファイルを保存するためのVHDXディスクの最大数を指定できます。

プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする

マルチセッションシナリオでプロファイルコンテナのライトバックを有効にできます。

> **注:**
>
> Citrix Profile Managementプロファイルコンテナは、Citrix Profile Management 2103以降で利用可能です。FSLogix Profile Containerは、Citrix Profile Management 2003以降で利用可能です。
>
> ポリシーが有効になっている場合、すべてのセッションでの変更はプロファイルコンテナに書き戻されます。そうでない場合、プロファイルコンテナでは最初のセッションのみが読み取り/書き込みモードであるため、最初のセッションでの変更のみが保存されます。

FSLogix Profile Containerでこのポリシーを使用するには、以下の前提条件が満たされていることを確認してください。

- FSLogix Profile Container機能がインストールされ、有効になっていること。
- FSLogixでプロファイルタイプが**読み取り/書き込みプロファイルを試行し、読み取り専用にフォールバックする**に設定されていること。

ユーザーストアをレプリケートする

ログオンおよびログオフごとに、リモートユーザープロファイルストアを複数のパスにレプリケートできます。これにより、Profile Managementはユーザーログオンのプロファイル冗長性を提供します。

このポリシーを有効にすると、システムI/Oが増加し、ログオフが長引く可能性があります。

> **注:**
>
> - この機能は、ユーザーストアとフルプロファイルコンテナの両方で利用できます。
> - レプリケートされたプロファイルコンテナは、ユーザーログオンのプロファイル冗長性を提供しますが、セッション内フェイルオーバーには対応していません。

ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする

ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にします。

既定では、Citrix Profile Management は現在のユーザーを偽装してユーザー ストアにアクセスします。そのため、現在のユーザーがユーザー ストアにアクセスする権限を持っている必要があります。場合によっては、現在のユーザーがアクセス権を持たないストレージ リポジトリ (Azure Files など) にユーザー ストアを配置したいことがあります。そのような場合は、このポリシーを有効にして、Profile Management がストレージ リポジトリの資格情報を使用してユーザー ストアにアクセスできるようにします。

Profile Management が資格情報を使用してユーザー ストアにアクセスできるようにするには、Workspace Environment Management™ (WEM) または Windows 資格情報マネージャーに資格情報を保存します。Profile Management を実行している各マシンで同じ資格情報を構成する必要をなくすために、Workspace Environment Management を使用することをお勧めします。Windows 資格情報マネージャーを使用する場合は、ローカル システム アカウントを使用して資格情報を安全に保存してください。

> **注:**

> このポリシーは、ファイルベースとVHDXベースの両方のユーザー ストアで利用できます。Profile Management のバージョン2212より前では、このポリシーはVHDXベースのユーザー ストアでのみ利用できます。

> 構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、既定では無効になります。

VHDXファイルのストレージパスを指定する

Profile Managementで使用されるVHDXファイルを保存するためのストレージパスを指定できます。

Citrix Profile Managementは、次のVHDXベースのポリシーを提供します: ネイティブOutlook検索エクスペリエンスの有効化、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナ、およびフォルダミラーリングの高速化。既定では、VHDXファイルはユーザー ストアに保存されます。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、既定では無効になります。

VHDコンテナの既定の容量

VHDコンテナのデフォルトのストレージ容量（GB単位）を指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトは50 (GB)です。

セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする

このポリシーを有効にすると、Profile ManagementはVHDXベースのポリシーの高い安定性を確保します。デフォルトでは、このポリシーは有効になっています。

このポリシーが有効な場合、Profile ManagementはVHDXベースのポリシーで使用されているVHDXディスクを監視します。いずれかのディスクがデタッチされた場合、Profile Managementはディスクを自動的に再アタッチします。

ログオン時にユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする

Windowsは、ユーザーグループポリシーに同期と非同期の2つの処理モードを提供します。Windowsは、次のユーザーログオンの処理モードを決定するためにレジストリ値を使用します。レジストリ値が存在しない場合、同期モードが適用されます。レジストリ値はマシンレベルの設定であり、ユーザーとともにローミングされません。したがって、ユーザーが次の場合、非同期モードは期待どおりに適用されません。

- 異なるマシンにログオンする。
- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除するポリシーが有効になっている同じマシンにログオンする。

このポリシーを有効にすると、レジストリ値はユーザーとともにローミングされます。その結果、ユーザーがログオンするたびに処理モードが適用されます。

VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域比率

VHDディスクの圧縮を有効にする が有効な場合に適用されます。VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域比率を指定できます。ユーザーログオフ時に空き領域比率が指定された値を超えると、ディスク圧縮がトリガーされます。

空き領域比率 = (現在のVHDファイルサイズ – 必要な最小VHDファイルサイズ*) ÷ 現在のVHDファイルサイズ

* Microsoft Windows オペレーティングシステムから `MSFT_Partition` クラスの GetSupportedSize メソッドを使用して取得されます。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. ここでも .ini ファイルでもこの設定が構成されていない場合、デフォルト値の 20 (%) が使用されます。

VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数

VHDディスクの圧縮を有効にする が有効な場合に適用されます。VHDディスクの圧縮をトリガーするユーザーログオフの回数を指定できます。

前回の圧縮以降のログオフ回数が指定された値に達すると、ディスク圧縮が再度トリガーされます。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. ここでも .ini ファイルでもこの設定が構成されていない場合、デフォルト値の 5 が使用されます。

VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

VHDディスクの圧縮を有効にする が有効な場合に適用されます。VHDディスク圧縮のファイルデフラグを無効にするかどうかを指定できます。

VHDディスク圧縮が有効な場合、VHDディスクファイルはまずWindowsに組み込まれている `defrag` ツールを使用して自動的にデフラグされ、その後圧縮されます。VHDディスクのデフラグはより良い圧縮結果をもたらしますが、無効にするとシステムリソースを節約できます。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフラグはデフォルトで有効になります。

プロファイルコンテナの自動拡張しきい値

プロファイルコンテナが自動拡張をトリガーするストレージ容量の使用率を指定できます。

構成の優先順位:

- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトはストレージ容量の90%です。

プロファイルコンテナの自動拡張増分

自動拡張がトリガーされたときに、プロファイルコンテナが自動的に拡張するストレージ容量（GB単位）を指定できます。

構成の優先順位:

- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトは10 GBです。

プロファイルコンテナの自動拡張制限

自動拡張がトリガーされたときに、プロファイルコンテナが自動的に拡張できる最大ストレージ容量（GB単位）を指定できます。

構成の優先順位:

- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトは80 (GB)です。

OneDriveコンテナを有効にする

OneDriveフォルダーをユーザーと共にローミングできるようにします。

OneDriveコンテナは、VHDXベースのフォルダーローミングソリューションです。Profile Managementは、ファイル共有上にユーザーごとにVHDXファイルを作成し、ユーザーのOneDriveフォルダーをVHDXファイルに保存します。VHDXファイルは、ユーザーがログオンするときにアタッチされ、ログオフするときにデタッチされます。

UWPアプリのローミング

UWP (Universal Windows Platform) アプリをユーザーと共にローミングできるようにします。その結果、ユーザーは異なるデバイスから同じUWPアプリにアクセスできます。

このポリシーを有効にすると、Profile ManagementはUWPアプリを個別のVHDXディスクに保存することで、ユーザーと共にローミングできるようにします。これらのディスクは、ユーザーのログオン時にアタッチされ、ログオフ時にデタッチされます。

構成の優先順位:

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。 この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、この機能は無効になります。

ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする

このポリシーを有効にすると、マシンレベルのポリシー設定がユーザーレベルで機能し、ユーザーレベルの設定がマシンレベルの設定を上書きします。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

ユーザーグループの優先順位を設定する

ユーザーグループの優先順位を指定します。ユーザーが異なるポリシー設定を持つ複数のグループに属している場合、この順序によってどのグループが優先されるかが決まります。

ユーザーが競合するポリシー設定を持つ複数のグループに属している場合、以下を考慮してください。

- ユーザーがこのポリシーで定義されている1つ以上のグループに属している場合、最も優先度の高いグループが優先されます。
- ユーザーがこのポリシーで定義されているどのグループにも属していない場合、アルファベット順で最初にリストされているSIDを持つグループが優先されます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、優先順位は指定されません。

ユーザーストアの選択方法

複数のユーザーストアが利用可能な場合に、ユーザーストアの選択方法を指定できます。オプションは次のとおりです。

- **構成順序。** Profile Managementは、最初に構成されたストア（構成順序で最も早いもの）を選択します。
- **アクセスパフォーマンス。** Profile Managementは、最高のアクセスパフォーマンスを持つストアを選択します。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、**構成順序**が使用されます。

Profile Management\Citrix Virtual Appsの最適化設定

Citrix Virtual Apps™ の最適化を有効にする

この機能を有効にすると、ユーザーが起動または終了する公開アプリケーションに固有の設定のみが同期されます。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここで、または.iniファイルでこの設定が構成されていない場合、Citrix Virtual Appsの最適化設定は適用されません。

Citrix Virtual Apps最適化定義へのパス

Citrix Virtual Appsの最適化の定義ファイルを保存するフォルダーを指定できます。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここで、または.iniファイルでこの設定が構成されていない場合、Citrix Virtual Appsの最適化設定は適用されません。

> **注:**
>
> フォルダーはローカルストレージまたはSMBファイル共有に配置できます。

プロファイル管理\クロスプラットフォーム設定

クロスプラットフォーム設定を有効にする

クロスプラットフォーム設定を有効にできます。クロスプラットフォーム設定機能は、主にWindows 7およびWindows Server 2008からWindows 8およびWindows Server 2012への移行に使用されます。この移行では、Microsoft Office 2003またはOffice 2007からOffice 2010への移行も含まれる場合があります。

既定では、展開を容易にするため、クロスプラットフォーム設定は無効になっています。このポリシーは、この機能の十分な計画とテストを行った後にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでもこのポリシーが構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

クロスプラットフォーム設定のユーザーグループ

クロスプラットフォーム設定機能が適用されるWindowsユーザーグループを指定できます。たとえば、このポリシーを使用して、テストユーザーグループのプロファイルのみを処理できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが構成されている場合、Profile Managementのクロスプラットフォーム設定機能は、これらのユーザーグループのメンバーのみを処理します。このポリシーが無効になっている場合、この機能は、処理対象グループポリシーで指定されたすべてのユーザーを処理します。
2. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. ここでも.iniファイルでもこのポリシーが構成されていない場合、すべてのユーザーグループが処理されます。

クロスプラットフォーム定義へのパス

定義ファイルが置かれているネットワークの場所を指定できます。

このパスはUNCパスである必要があります。ユーザーはこの場所への読み取りアクセス権を持ち、管理者は書き込みアクセス権を持っている必要があります。この場所は、Server Message Block (SMB) またはCommon Internet File System (CIFS) ファイル共有である必要があります。

構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

クロスプラットフォーム設定ストアへのパス

クロスプラットフォーム設定ストアへのパスを指定できます。このストアは、ユーザーのクロスプラットフォーム設定が保存されるフォルダーを指します。

このストアは、複数のプラットフォームで共有されるプロファイルデータが配置されているユーザー ストア内にあります。ユーザーはストアへの書き込みアクセス権を持っている必要があります。パスは絶対UNCパス、またはホームディレクトリに対する相対パスにすることができます。**ユーザー ストアへのパス**で使用される変数を使用できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、`Windows\PM_CP`パスが使用されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルト値が使用されます。

クロスプラットフォーム設定を作成するためのソース

このポリシーがそのプラットフォームのOUで有効になっている場合、プラットフォームをベースプラットフォームとして指定できます。このポリシーは、ベースプラットフォームのプロファイルからクロスプラットフォーム設定ストアにデータを移行します。デフォルトでは、このポリシーは無効になっています。

各プラットフォーム独自のプロファイルセットは、個別のOUに保存されます。クロスプラットフォーム設定ストアをシードするためのベースプラットフォームとして使用するプラットフォームのプロファイルデータを決定します。

このポリシーが有効になっている場合、次のいずれかの状況が発生すると、Profile Managementはシングルプラットフォームプロファイルからストアにデータを移行します。

- クロスプラットフォーム設定ストアにデータのない定義ファイルが含まれている。
- シングルプラットフォームプロファイルのキャッシュデータが、ストア内の定義データよりも新しい。

> **重要:**

> このポリシーが複数のOU、ユーザーオブジェクト、またはマシンオブジェクトで有効になっている場合、最初のユーザーがログオンするプラットフォームがベースプロファイルになります。

プロファイル管理\ファイルシステム

除外リスト - ファイル

Profile Managementが同期中に無視するファイルを指定できます。ファイル名はユーザープロファイル (%USERPROFILE%) に対する相対パスである必要があります。ワイルドカードが許可されており、再帰的に適用されます。

例:

- `Desktop\Desktop.ini` は、`Desktop` フォルダー内の `Desktop.ini` ファイルを無視します。
- `%USERPROFILE%*.tmp` は、プロファイル全体で `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを無視します。
- `AppData\Roaming\MyApp*.tmp` は、プロファイルの一部で `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを無視します。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、ファイルは除外されません。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ファイルは除外されません。

デフォルトの除外リストを有効にする - ディレクトリ

Profile Managementが同期中に無視するディレクトリのデフォルトリストを指定できます。このポリシーを使用して、GPO除外ディレクトリを手動で入力することなく指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーを無効にすると、Profile Management はデフォルトでどのディレクトリも除外しません。
2. ここでこのポリシーを構成しない場合、Profile Management は .ini ファイルの値を使用します。

3. ここでも .ini ファイルでもこのポリシーを構成しない場合、Profile Management はデフォルトでどのディレクトリも除外しません。

除外リスト - ディレクトリ

Profile Management が同期中に無視するフォルダーを指定できます。フォルダー名は、ユーザープロファイル (%USERPROFILE%) に対する相対パスとして指定する必要があります。

例:

- Desktop はユーザープロファイル内の Desktop フォルダーを無視します

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、フォルダーは除外されません。
2. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
3. ここでも .ini ファイルでもこのポリシーが構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

ログオン時の除外チェック

ユーザーストア内のプロファイルに除外されたファイルまたはフォルダーが含まれている場合に、Profile Management が何を行うかを指定できます。

構成の優先順位:

1. この設定が無効になっているか、デフォルト値の **除外されたファイルまたはフォルダーを同期する** に設定されている場合、ユーザーがログオンすると、Profile Management はそれらの除外されたファイルまたはフォルダーをユーザーストアからローカルプロファイルに同期します。
2. この設定が **除外されたファイルまたはフォルダーを無視** に設定されている場合、Profile Management はユーザーログオン時にユーザー ストア内の除外されたファイルまたはフォルダーを無視します。この設定が **除外されたファイルまたはフォルダーを削除** に設定されている場合、Profile Management はユーザーログオン時にユーザー ストア内の除外されたファイルまたはフォルダーを削除します。
3. この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
4. この設定がここで構成されておらず、.ini ファイルでも構成されていない場合、Profile Management はユーザー ストアからローカル プロファイルへ除外されたファイルまたはフォルダーを同期します。

大容量ファイル処理 - シンボリックリンクとして作成されるファイル

シンボリックリンクとして作成されるファイルを指定できます。この設定は、ログオンパフォーマンスを向上させ、大容量ファイルを処理するために使用されます。

ファイルを参照するポリシーでワイルドカードを使用できます。例: `!ctx_localappdata!\Microsoft\Outlook*.OST`。

オフライン Outlook データファイル (`*.ost`) を処理するには、Profile Management で **Outlook** フォルダーが除外されていないことを確認してください。

これらのファイルには、複数のセッションで同時にアクセスすることはできません。

プロファイル管理\ファイルシステム\同期

同期するディレクトリ

親フォルダーが除外されている場合に、Profile Management に同期させたいフォルダーを指定できます。

このリストのパスは、ユーザープロファイルに対して相対的である必要があります。

Profile Management は、各ユーザーのプロファイル全体を、インストールされているシステムとユーザー ストアの間で同期します。このリストにユーザープロファイルのサブフォルダーを追加して含める必要はありません。

このポリシーを無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないフォルダーのみが同期されます。

同期するファイル

親フォルダーが除外されている場合に、Profile Management で同期させたいファイルを指定できます。

このリストのパスは、ユーザープロファイルに対する相対パスである必要があります。ワイルドカードはファイル名とフォルダー名で使用できます。ただし、ワイルドカードはファイル名でのみ再帰的に適用されます。

例:

- AppData\Local\Microsoft\Office\Access.qat は、デフォルト構成で除外されているフォルダー内のファイルを指定します。
- AppData\Local\MyApp*.cfg は、プロファイルフォルダー AppData\Local\MyApp およびそのサブフォルダー内の拡張子 .cfg を持つすべてのファイルを指定します。

Profile Management は、インストールされているシステムとユーザー ストアの間で、各ユーザーのプロファイル全体を同期します。このリストにファイルを追加して、ユーザープロファイルに含める必要はありません。

このポリシーを無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないファイルのみが同期されます。

ミラーリングするフォルダー

このポリシーは、トランザクションフォルダー（参照フォルダーとも呼ばれます）に関連する問題を解決するのに役立ちます。この種のフォルダーには、あるファイルが他のファイルを参照するような、相互依存するファイルが含まれています。

このポリシーを使用すると、Profile Management は、ユーザープロファイルを同期する際に、トランザクションフォルダーとその内容を単一のエンティティとして処理します。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、フォルダーはミラーリングされません。

フォルダーミラーリングの高速化

このポリシーと**ミラーリングするフォルダー**ポリシーの両方が有効になっている場合、Profile Management はミラーリングされたフォルダーを VHDX ベースの仮想ディスクに保存します。ログオン時に仮想ディスクをアタッチし、ログオフ時にデタッチします。このポリシーを有効にすると、ユーザー ストアとローカル プロファイルの間でフォルダーをコピーする必要がなくなり、フォルダーのミラーリングが高速化されます。

プロファイル管理\ファイルの重複排除

ユーザー ストア内のさまざまなユーザープロファイル間に同一のファイルが存在する可能性があります。ユーザー ストアにファイルの重複インスタンスが保存されていると、ストレージコストが増加します。

ファイル重複排除ポリシーを使用すると、Profile Management はユーザー ストアから重複ファイルを削除し、それらの単一インスタンスを中央の場所（*共有ストア* と呼ばれる）に保存できます。これにより、ユーザー ストアでのファイルの重複が回避され、ストレージコストが節約されます。

重複排除のために共有ストアに含めるファイル

ファイル重複排除を有効にし、重複排除のために共有ストアに含めるファイルを指定できます。

共有ストアから除外するファイル

共有ストアから除外するファイルを指定できます。このポリシーは、*重複排除のために共有ストアに含めるファイル* ポリシーと併用してください。

プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズ

プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズを指定できます。このサイズは 256 MB 以上である必要があります。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、値は256になります。

プロファイル管理\ログ設定

ログ記録を有効にする

Profile Managementのログ記録を有効にするかどうかを指定できます。このポリシーは、Profile Managementのトラブルシューティングを行う場合にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、エラーのみがログに記録されます。このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、エラーのみがログに記録されます。

ログ設定

Profile Managementがログに記録するイベントまたはアクションを選択できます。Citrixの担当者から要求された場合にのみ、すべてを選択してください。

構成の優先順位:

1. ポリシーがここで構成されていない場合、Profile Managementは.iniファイルの値を使用します。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、エラーと一般情報がログに記録されます。

このポリシーのチェックボックスは、.iniファイルの次の設定に対応しています: LogLevelWarnings, LogLevelInformation, LogLevelFileSystemNotification, LogLevelFileSystemActions, LogLevelRegistryActions, LogLevelRegistryDifference, LogLevelActiveDirectoryActions, LogLevelPolicyUserLogon, LogLevelLogon, LogLevelLogoff, and LogLevelUserName.

ログファイルの最大サイズ

Profile Managementログファイルの最大サイズをバイト単位で指定できます。

Profile Managementログファイルの最大サイズのデフォルト値は10 MBです。十分なディスク容量がある場合は、この値を増やしてください。ログファイルが最大サイズを超えて大きくなると、次のようになります。

1. 既存のファイルのバックアップ（.bak）が削除されます。
2. ログファイルの名前が.bakに変更されます。
3. 新しいログファイルが作成されます。

ログファイルは`%SystemRoot%\System32\Logfiles\UserProfileManager`、または**ログファイルへのパス**ポリシーで指定された場所に作成されます。

構成の優先順位：

1. このポリシーが無効になっている場合、デフォルト値の10 MBが使用されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルト値が使用されます。

ログファイルへのパス

ログファイルを保存する代替パスを構成できます。

パスはローカルドライブまたはネットワークベースのドライブ（UNCパス）を指すことができます。

- 大規模な分散環境ではリモートドライブが推奨されます。ただし、リモートドライブは大量のネットワークトラフィックを生成する可能性があり、ログファイルには適さない場合があります。
- ローカルドライブは、永続的なハードドライブを持つプロビジョニングされた仮想マシンでよく使用されます。

この設定により、マシンの再起動時にログファイルが保持されます。永続的なハードドライブを持たない仮想マシンの場合、UNCパスを設定することでログファイルを保持できます。ただし、マシンのシステムアカウントはUNC共有への書き込みアクセス権を持っている必要があります。オフラインプロファイル機能によって管理されるラップトップには、ローカルパスを使用してください。

ログファイルにUNCパスを使用する場合、Citrixはログファイルフォルダに適切なアクセス制御リストを適用することを推奨します。アクセス制御により、承認されたユーザーまたはコンピューターアカウントのみが保存されたファイルにアクセスできるようになります。

例:

- D:\LogFiles\ProfileManagement。
- \\server\LogFiles\ProfileManagement

このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトの場所 %SystemRoot%\System32\Logfiles\UserProfileManager が使用されます。

プロファイル管理\プロファイルコンテナ設定

プロファイルコンテナー

VHDXベースのネットワークディスク（プロファイルコンテナ）を使用してユーザープロファイルを保存できます。ユーザープロファイル全体または一部を保存するために使用できます。ユーザーログオン時に、プロファイルコンテナはユーザー環境にマウントされ、プロファイルフォルダはすぐに利用可能になります。

プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にできます。このポリシーは、プロファイルコンテナがユーザープロファイル全体に対して有効になっている場合にのみ適用されます。

ポリシーが**有効**に設定されている場合、各ローカルプロファイルは、そのCitrix Profile Managementプロファイルコンテナのローカルキャッシュとして機能します。プロファイルストリーミングが使用されている場合、ローカルにキャッシュされたファイルはオンデマンドで作成されます。それ以外の場合は、ユーザーログオン時に作成されます。

プロファイルコンテナから除外するフォルダ

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナから除外するフォルダを指定できます。

プロファイルコンテナに含めるフォルダー

親フォルダーが除外されている場合に、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナに保持するフォルダーを指定できます。

このリストのフォルダーは、除外されたフォルダーのサブフォルダーである必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。

この設定を無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

プロファイルコンテナに含めるファイル

親フォルダーが除外されている場合に、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナに含めるファイルを指定できます。

このリストのファイルは、除外されたフォルダー内にある必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。

プロファイルコンテナから除外するファイル

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナから除外するファイルを指定できます。

VHDディスクの圧縮を有効にする

Profile ManagementのVHDディスク圧縮を有効にできます。有効にすると、特定の条件が満たされた場合に、ユーザーのログオフ時にVHDディスクが自動的に圧縮されます。このポリシーにより、プロファイルコンテナ、OneDriveコンテナ、およびミラーフォルダーコンテナによって消費されるストレージスペースを節約できます。

必要性と利用可能なリソースに応じて、詳細設定にある「**VHDディスク圧縮をトリガーする空き領域の比率**」、「**VHDディスク圧縮をトリガーするログオフ回数**」、「**VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする**」の各ポリシーを使用して、デフォルトのVHD圧縮設定と動作を調整できます。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、この機能は無効になります。

プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする

プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にするかどうかを指定できます。有効にすると、すべてのVHD自動拡張設定がプロファイルコンテナに適用されます。

構成の優先順位:

- ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- ここで、または.iniファイルのいずれでもこのポリシーが構成されていない場合、無効になります。

VHDコンテナへの排他アクセスを有効にする

デフォルトでは、VHDコンテナは同時アクセスを許可します。この設定を有効にすると、一度に1つのアクセスのみを許可します。この機能は、プロファイルコンテナとOneDriveコンテナに適用されます。

> **注:**
>
> コンテナベースのプロファイルソリューションでは、プロファイルコンテナに対してこの設定を有効にすると、*プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする*設定が自動的に無効になります。

> 構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここで、または.iniファイルのいずれでもこのポリシーが構成されていない場合、設定は無効になります。

ログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合、ユーザーをログオフする

ユーザーログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合に、ユーザーを強制的にログオフさせるかどうかを指定し、ユーザーに表示されるエラーメッセージをカスタマイズできます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、この設定は無効になります。

プロファイルコンテナにアクセスするユーザーとグループ

プロファイルコンテナに対する読み取りおよび実行権限を持つADドメインユーザーとグループを指定できます。デフォルトでは、プロファイルコンテナはその所有者のみがアクセスできます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの設定が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、プロファイルコンテナはその所有者のみがアクセスできます。

プロファイル管理\プロファイル処理

ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する

ログオフ後にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除するかどうかを指定できます。

このポリシーが有効になっている場合、ユーザーのログオフ後にユーザーのローカルプロファイルキャッシュが削除されます。この設定はターミナルサーバーに推奨されます。このポリシーが無効になっている場合、キャッシュされたプロファイルは削除されません。

> **注:**

> キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延ポリシーを使用して、ログオフ時にプロファイルキャッシュが削除されるタイミングを制御できます。

> 構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、キャッシュされたプロファイルは削除されません。

キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延

ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルが削除されるまでの遅延に、オプションで延長時間を指定できます。プロセスがログオフ中にファイルまたはユーザーレジストリハイブを開いたままにしていることがわかっている場合、遅延を延長すると便利です。大規模なプロファイルの場合、この設定はログオフを高速化することもできます。

値が0の場合、ログオフプロセスの終了時にプロファイルがすぐに削除されます。

Profile Managementは1分ごとにログオフをチェックします。値が60の場合、最後のチェックが行われたタイミングに応じて、ユーザーログオフ後1〜2分以内にプロファイルが削除されることが保証されます。

重要: このポリシーは、「ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する」が有効になっている場合にのみ機能します。

このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、プロファイルはすぐに削除されます。

既存のプロファイルの移行

ユーザーストアが空の場合に、Profile Managementがどの種類のユーザープロファイルをユーザーストアに移行するかを指定できます。

ユーザーがユーザーストアにプロファイルを持っていない場合、Profile Managementはログオン中に既存のプロファイルを「オンザフライ」で移行できます。ローミングプロファイルまたはリモートデスクトップサービスプロファイルを移行する場合は、**ローミング**を選択します。

ログオン中に次のイベントが発生します。ユーザーがユーザーストアにCitrixユーザープロファイルではなくWindowsプロファイルを持っている場合、Profile ManagementはWindowsプロファイルをユーザーストアに移行します。このプロセス後、Profile Managementは、同じユーザーストアへのパスで構成された現在のセッションおよびその他のセッションでユーザーストアプロファイルを使用します。

構成の優先順位:

1. この設定が有効になっている場合、プロファイルの移行は、ローミングプロファイルとローカルプロファイル（デフォルト）、ローミングプロファイルのみ、ローカルプロファイルのみに対してアクティブ化できます。または、プロファイルの移行を無効にすることもできます。
2. このポリシーが無効になっており、ユーザーストアにCitrixユーザープロファイルが存在しない場合、プロファイルを作成するための既存のWindowsメカニズムが使用されます。

3. プロファイルの移行が無効になっており、ユーザーストアにCitrixユーザープロファイルが存在しない場合、プロファイルを作成するための既存のWindowsメカニズムが使用されます。
4. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
5. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Profile Managementは既存のローカルプロファイルと移動プロファイルをユーザーストアに移行します。

既存のアプリケーションプロファイルの自動移行

この設定は、異なるオペレーティングシステム間で既存のアプリケーションプロファイルを自動的に移行するかどうかを有効または無効にします。アプリケーションプロファイルには、**AppData**フォルダー内のアプリケーションデータと、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE`の下のレジストリエントリの両方が含まれます。この設定は、異なるオペレーティングシステム間でアプリケーションプロファイルを移行したい場合に役立ちます。

たとえば、オペレーティングシステム (OS) をWindows 10バージョン1803からWindows 10バージョン1809にアップグレードする必要があるとします。この設定が有効になっている場合、各ユーザーが最初にログオンするときに、Profile Managementは既存のアプリケーション設定をWindows 10バージョン1809に自動的に移行します。**AppData**フォルダー内のアプリケーションデータと、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE`の下のレジストリエントリが移行されます。

既存のアプリケーションプロファイルが複数ある場合、Profile Managementは次の優先順位で移行を実行します。

1. 同じOSタイプのプロファイル（シングルセッションOSからシングルセッションOS、マルチセッションOSからマルチセッションOS）。
2. 同じWindows OSファミリーのプロファイル（例: Windows 10からWindows 10、またはWindows Server 2016からWindows Server 2016）。
3. 以前のバージョンのOSのプロファイル（例: Windows 7からWindows 10、またはWindows Server 2012からWindows 2016）。
4. 最も近いOSのプロファイル。

> **注:**
>
> ユーザーストアパスに`!CTX_OSNAME!`変数を指定して、OSの短い名前を指定する必要があります。これにより、Profile Managementは既存のアプリケーションプロファイルを特定します。

> この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの設定が使用されます。

この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトで無効になります。

ローカルプロファイルの競合処理

ユーザー ストア内のプロファイルとローカルの Windows ユーザー プロファイル (Citrix ユーザー プロファイルではない) の両方が存在する場合に、Profile Management がどのように動作するかを指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっているか、デフォルト値の **ローカルプロファイルを使用** に設定されている場合、Profile Management はローカルプロファイルを使用しますが、それを一切変更しません。
2. このポリシーが **ローカルプロファイルを削除** に設定されている場合、Profile Management はローカルの Windows ユーザー プロファイルを削除します。その後、ユーザー ストアから Citrix ユーザー プロファイルをインポートします。このポリシーが **ローカルプロファイルの名前を変更** に設定されている場合、Profile Management はローカルの Windows ユーザー プロファイルの名前を変更し (バックアップ目的で)、その後、ユーザー ストアから Citrix ユーザー プロファイルをインポートします。
3. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、既存のローカルプロファイルが使用されます。

テンプレートプロファイル

テンプレートとして使用するプロファイルの保存パスを指定できます。このパスは、NTUSER.DAT レジストリファイルと、テンプレートプロファイルに必要なその他のフォルダーおよびファイルを含むフォルダーの完全パスです。

重要: パス設定に `NTUSER.DAT` を含めないでください。たとえば、`\\myservername\myprofiles\template\ntuser.dat` ファイルの場合、場所を `\\myservername\myprofiles\template` と設定します。 UNC パスまたはローカルコンピューター上のパスである絶対パスを使用してください。後者は、たとえば Citrix Provisioning™ Services イメージにテンプレートプロファイルを永続的に指定するために使用できます。相対パスはサポートされていません。

このポリシーは、Active Directory 属性、システム環境変数、または `%USERNAME%` および `%USERDOMAIN%` 変数の展開をサポートしていません。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、テンプレートは使用されません。
2. このポリシーが有効になっている場合、Profile Management はユーザープロファイルの作成時に、ローカルのデフォルトプロファイルの代わりにテンプレートを使用します。ユーザーが Citrix ユーザープロファイルを持たず、ローカルまたは移動 Windows ユーザープロファイルが存在する場合、デフォルトではローカルプロファイルが使用されます。そして、このポリシーが無効になっていない場合、ローカルプロファイルはユーザー ストアに移行されます。この設定は、**テンプレートプロファイルがローカルプロファイルを上書きする** または **テンプレートプロファイルが移動プロファイルを上書きする** チェックボックスを有効にすることで変更できます。また、テンプレートを Citrix 強制プロファイルとして識別することは、Windows 強制プロファイルと同様に、変更が保存されないことを意味します。
3. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
4. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、テンプレートは使用されません。

プロファイル管理＼レジストリ

除外リスト

ログオフ時にProfile Managementが無視するHKCUハイブ内のレジストリキーを指定できます。

例: Software\Policies

構成の優先順位:

- このポリシーが無効になっている場合、レジストリキーは除外されません。
- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、レジストリキーは除外されません。

包含リスト

ログオフ時にProfile Managementが処理するHKCUハイブ内のレジストリキーを指定できます。

例: Software\Adobe。

構成の優先順位:

1. このポリシーが有効になっている場合、このリストにあるキーのみが処理されます。このポリシーが無効になっている場合、HKCUハイブ全体が処理されます。

2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、HKCU全体が処理されます。

デフォルトの除外リストを有効にする - Profile Management 5.5

Profile Managementがユーザープロファイルに同期しないHKCUハイブ内のレジストリキーを指定できます。このポリシーを使用して、GPO除外ファイルを手動で入力することなく指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーを無効にすると、Profile Managementはデフォルトでレジストリキーを除外しません。
2. ここでこのポリシーを構成しない場合、Profile Managementは.iniファイルの値を使用します。
3. ここでも.iniファイルでもこのポリシーを構成しない場合、Profile Managementはデフォルトでレジストリキーを除外しません。

NTUSER.DATのバックアップ

NTUSER.DATの最後に正常に動作したコピーのバックアップを有効にし、破損が発生した場合にロールバックできるようにします。

ここでこのポリシーを構成しない場合、Profile Managementは.iniファイルの値を使用します。ここでも.iniファイルでもこのポリシーを構成しない場合、Profile ManagementはNTUSER.DATをバックアップしません。

プロファイル管理\アプリのアクセス制御

ファイル、フォルダー、およびレジストリへのアクセスを制御できます。

アプリのアクセス制御

有効にすると、Profile Managementは、指定したルールに基づいて、項目（ファイル、フォルダー、レジストリなど）へのユーザーアクセスを制御します。

アプリケーションルールを作成するには、次の方法を使用します。

- GUIベースのツール – **WEMツールハブ > アプリアクセスコントロールのルールジェネレーター**
- PowerShellツール – Profile Managementインストールパッケージに付属

設定の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

プロファイル管理\ストリーム配信されるユーザープロファイル

プロファイルストリーミング

プロファイルストリーミング機能を有効にします。この機能が有効な場合、ユーザープロファイル内のファイルは、ユーザーがアクセスしたときにのみ、ユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチされます。`NTUSER.DAT`ファイルと保留領域内のファイルは例外です。これらはすぐにフェッチされます。NTUSER.DATにはレジストリエントリが保存されます。

設定の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする

ユーザープロファイル内のフォルダーに対してプロファイルストリーミング機能を有効にします。

このポリシーと**プロファイルストリーミング**ポリシーの両方が**有効**に設定されている場合、ユーザープロファイル内のフォルダーは、ユーザーがアクセスしたときにのみ、ユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチされます。

設定の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

常にキャッシュ

ログオン直後にユーザー ストアからローカル コンピューターにフェッチされるファイルのサイズの最小制限を指定できます。

プロファイル ストリーミング機能が有効になっている場合、ユーザー プロファイル内のファイルは、ユーザーがアクセスしたときにローカル コンピューターにフェッチされます。このオンデマンドのファイル フェッチ メカニズムは、ユーザーが要求するファイルが大きい場合に、読み込みが遅くなる原因となります。このポリシーを有効にすると、Profile Management は、指定されたサイズより大きいファイルをログオン直後にローカル コンピューターにフェッチします。

ログオン直後にプロファイル全体をローカル コンピューターにフェッチするには、この制限をゼロに設定します。

構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. ここで、または .ini ファイルでこのポリシーが構成されていない場合、無効になります。

保留領域ロックファイルのタイムアウト

タイムアウト期間（日数）を指定できます。その期間が経過すると、Profile Management はユーザーのファイルを解放します。タイムアウトが発生すると、ストレージ サーバーが応答しなくなったときにユーザー ストアがロックされたままの場合、ユーザーのファイルは保留領域からユーザー ストアに書き込まれます。このポリシーを使用して、保留領域の肥大化を防ぎ、ユーザー ストアに常に最新のファイルが含まれるようにします。

構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. ここで、または .ini ファイルでこのポリシーが構成されていない場合、デフォルト値の1日が使用されます。

ストリーミングされたユーザープロファイルグループ

ユーザープロファイルがストリーミングされるWindowsユーザーグループを指定できます。

このポリシーは、OU内のWindowsユーザーグループのサブセットのプロファイルをストリーミングします。他のすべてのグループのユーザーのプロファイルはストリーミングされません。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、すべてのユーザーグループが処理されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、すべてのユーザーが処理されます。

プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ

プロファイルストリーミングが無視するフォルダーを指定できます。フォルダー名は、ユーザープロファイルに対する相対パスとして指定する必要があります。

例: `Desktop` と入力すると、ユーザープロファイルの `Desktop` ディレクトリが無視されます。

構成の優先順位:

1. この設定が無効になっている場合、フォルダーは除外されません。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

> **注:**
>
> プロファイルストリーミングの除外は、構成されたフォルダーがプロファイル処理から除外されることを意味しません。Citrix Profile Managementは引き続きそれらを処理します。

保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする

保留領域内のファイルおよびフォルダーに対してプロファイルストリーミング機能を有効にできます。

保留領域は、プロファイルストリーミングが有効になっている間のプロファイルの一貫性を確保するために使用されます。これは、同時セッションで変更されたプロファイルファイルとフォルダーを一時的に保存します。

既定では、このポリシーは無効になっており、保留領域内のすべてのファイルとフォルダーはログオン時にローカルプロファイルにフェッチされます。このポリシーを有効にすると、保留領域内のファイルは要求されたときにのみローカルプロファイルにフェッチされます。このポリシーをプロファイルストリーミングポリシーと組み合わせて使用すると、同時セッションシナリオで最適なログオンエクスペリエンスを確保できます。

このポリシーは、フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にするポリシーが有効になっている場合、保留領域内のフォルダーに適用されます。

プロファイル管理\フォルダーリダイレクト (ユーザー構成)

プロファイルに一般的に表示されるフォルダーをリダイレクトするかどうか、およびリダイレクトターゲットを指定できます。ターゲットは、UNC パス (サーバー共有またはDFS名前空間の場合) またはユーザーのホームディレクトリに対する相対パスとして指定します。ホームディレクトリは通常、Active Directory の `#homeDirectory#` 属性で構成されます。

ここでポリシーが構成されていない場合、プロファイル管理は指定されたフォルダーをリダイレクトしません。

> **注:**

> フォルダーリダイレクトにUNCパスを使用する場合、#homedirectory# 変数はサポートされません。**ユーザーのホームディレクトリにリダイレクト**ポリシーを選択した後、パスを指定する必要はありません。

> `<folder-name>` フォルダーのリダイレクトポリシーを使用すると、`<folder-name>` フォルダーをリダイレクトする方法を指定できます。これを行うには、**有効**を選択し、リダイレクトされたパスを入力します。

> **注意:**

> データ損失が発生する可能性があります。

> ポリシーが有効になった後でパスを変更したい場合があります。ただし、変更する前にデータ損失の可能性を考慮してください。変更されたパスが以前のパスと同じ場所を指している場合、リダイレクトされたフォルダーに含まれるデータが削除される可能性があります。

たとえば、連絡先パスを `path1` として指定します。その後、`path1` を `path2` に変更します。`path1` と `path2` が同じ場所を指している場合、ポリシーが有効になった後、リダイレクトされたフォルダーに含まれるすべてのデータが削除されます。

データ損失の可能性を回避するには、次の手順を実行します。

1. Active Directory グループポリシーオブジェクトを介してプロファイル管理が実行されているマシンにMicrosoftポリシーを適用します。詳細な手順は次のとおりです。
    a. グループポリシー管理コンソールを開きます。
    b. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Windows コンポーネント > エクスプローラー** に移動します。
    c. **リダイレクトする前に、古いフォルダーリダイレクトと新しいフォルダーリダイレクトのターゲットが同じ共有を指していることを確認する** を有効にします。
2. 該当する場合は、Profile Managementが実行されているマシンに修正プログラムを適用します。詳細については、`<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/977229>` および `<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/2799904>` を参照してください。

ファイルベースおよびコンテナベースのソリューションのポリシー

Profile Managementは、ファイルベースおよびコンテナベースのプロファイルソリューションを提供します。次の表に、Profile Managementのポリシーと、各ソリューションでの利用可能性を示します。

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
NA	プロファイルのリセット	Y	Y	この設定は、ポリシー設定ではなく、Profile Management WMIプラグインによって提供されるWMIコマンドです。コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、Profile Managementはユーザープロファイルを作成し、`Downloads`や`Pictures`などのプロファイルフォルダー内のレガシーコンテンツを復元しません。
プロファイル管理	Profile Managementを有効にする	Y	Y	
	処理されたグループ	Y	Y	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	除外されたグループ	Y	Y	
	ローカル管理者のログオンを処理する	Y	Y	
	ユーザーストアへのパス	Y	Y	
	ユーザーストアを移行する	Y	N	
	アクティブライトバック	Y	N	
	アクティブライトバックレジストリ	Y	N	
	セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック	Y	N	
	オフラインプロファイルサポート	Y	N	
プロファイル管理\詳細設定	ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数	Y	N	
	ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する	Y	N	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	自動構成を無効にする	Y	N	
	問題が発生した場合、ユーザーをログオフする	Y	Y	
	カスタマーエクスペリエンス向上プログラム	Y	Y	
	ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする	Y	Y	
	ユーザーグループの優先順位を設定する	Y	Y	
	Outlook の検索インデックスローミングを有効にする	Y	Y	
	Outlook 検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする	Y	Y	
	プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする	Y	Y	
	ユーザーストアをレプリケートする	Y	Y	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする	Y	Y	
	VHDX ファイルのストレージ パスをカスタマイズする	Y	Y	
	アプリのアクセス制御	Y	Y	
	セッションで VHDX ディスクを自動的に再アタッチする	Y	Y	
	ログオン時にユーザー グループ ポリシーの非同期処理を有効にする	Y	Y	
	OneDriveコンテナを有効にする	Y	Y	
	VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率	Y	Y	
	VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数	Y	Y	
	VHDディスクの圧縮のためのデ	Y	Y	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	フラグを無効にする			
	プロファイルコンテナの自動拡張しきい値	Y	Y	
	プロファイルコンテナの自動拡張増分	Y	Y	
	プロファイルコンテナの自動拡張制限	Y	Y	
	UWPアプリのローミング	Y	Y	
	VHDコンテナのデフォルト容量	Y	Y	
	ユーザーストアの選択方法	Y	Y	
プロファイル管理\アプリ アクセス制御	アプリ アクセス制御	Y	Y	
プロファイル管理\Citrix Virtual Appsの最適化	Citrix Virtual Appsの最適化を有効にする	Y	N	
	Citrix Virtual Apps™最適化定義へのパス	Y	N	
プロファイル管理\クロスプラットフォーム設定	クロスプラットフォーム設定を有効にする	はい	いいえ	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	はい	いいえ	
	クロスプラットフォーム定義へのパス	はい	いいえ	
	クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	はい	いいえ	
	クロスプラットフォーム設定作成元	はい	いいえ	
プロファイル管理\ファイル重複排除	重複排除のために共有ストアに含めるファイル	Y	Y	
	共有ストアから除外するファイル	Y	Y	
	プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズ	Y	Y	
プロファイル管理\ファイルシステム	除外リスト - ファイル	Y	N	
	デフォルトの除外リストを有効にする - ディレクトリ	Y	N	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	除外リスト - ディレクトリ	Y	N	
	ログオン除外チェック	Y	N	
	大容量ファイル処理 - シンボリックリンクとして作成されるファイル	Y	N	
プロファイル管理\ファイルシステム\同期	同期するディレクトリ	Y	N	
	同期するファイル	はい	いいえ	
	ミラーリングするフォルダー	はい	いいえ	
	フォルダーミラーリングの高速化	はい	いいえ	
プロファイル管理\ログ設定	ログ記録を有効にする	はい	はい	
	ログ設定	はい	はい	
	ログファイルの最大サイズ	Y	Y	
	ログファイルへのパス	Y	Y	
プロファイル管理 > プロファイ	プロファイルコンテナー	N	Y	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
ルコンテナー設定				
	プロファイルコンテナーから除外するフォルダー	N	Y	
	プロファイルコンテナーに含めるフォルダー	N	Y	
	プロファイルコンテナから除外するファイル	N	Y	
	プロファイルコンテナに含めるファイル	N	Y	
	プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする	N	Y	コンテナベースのソリューションでこのポリシーを有効にすると、ファイルベースのソリューションに適用されるすべてのポリシー設定（プロファイルストリーミングやアクティブライトバックなど）がコンテナベースのソリューションでも機能します。

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	VHDディスクの圧縮を有効にする	Y	Y	
	プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする	Y	Y	
	VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする	Y	Y	
	ログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合、ユーザーをログオフする	N	Y	
	プロファイルコンテナにアクセスするユーザーとグループ	Y	Y	
プロファイル管理\プロファイル処理	ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する	Y	N	コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、ポリシーが無効になっていても、ユーザーログオフ時にローカルプロファイルは常に自動的に削除されます。
	キャッシュされたプロファイル	Y	Y	コンテナベースのソリューションが有効になっ

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	を削除するまでの遅延			ている場合、ポリシーが無効になっていても、ユーザーログオフ時にローカルプロファイルは常に自動的に削除されます。
	既存のプロファイルの移行	Y	N	コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、ユーザーログオフ時にローカルプロファイルは自動的にコンテナに移行されます。
	既存のアプリケーションプロファイルの自動移行	Y	N	
	ローカルプロファイルの競合処理	Y	N	コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、ユーザーのログオフ時にローカルプロファイルが自動的にコンテナに移行されます。
	テンプレートプロファイル	Y	Y	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
プロファイル管理\レジストリ	除外リスト	Y	N	
	デフォルトの除外リストを有効にする	Y	N	
	包含リスト	Y	N	
	NTUSER.DAT のバックアップ	Y	N	
プロファイル管理\ストリーミングされたユーザープロファイル	プロファイルストリーミング	Y	N	
	フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする	Y	N	
	保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする	Y	N	
	常にキャッシュする	Y	N	
	保留中のエリアロックファイルのタイムアウト (日数)	Y	N	
	ストリーミングされたユーザープロファイルグループ	Y	N	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ	Y	N	

統合

プロファイル管理とCitrix Virtual Apps™

このバージョンのProfile ManagementをCitrix Virtual Appsサーバーで使用するには、Profile Management EULAに従う必要があります。Profile Managementはローカルデスクトップにもインストールでき、ユーザーはローカルプロファイルを公開リソースと共有できます。

注： Profile ManagementはCitrix Virtual Desktops™では自動的に構成されますが、Citrix Virtual Apps環境では構成されません。Citrix Virtual Apps展開のProfile Management設定を調整するには、グループポリシーまたは.iniファイルを使用してください。

Profile Managementは、Remote Desktop Services（旧称Terminal Services）を使用するCitrix Virtual Apps環境で機能します。これらの環境では、サポートされている各オペレーティングシステムに対してOUを設定する必要があります。詳細については、Microsoftのドキュメントを参照してください。

異なるバージョンのCitrix Virtual Appsを含むファーム、または異なるオペレーティングシステムを実行するファームでは、Citrixは各バージョンまたはオペレーティングシステムを実行する各サーバーに対して個別のOUを使用することを推奨します。

重要：複数のユーザーで共有されるフォルダー（Citrix Virtual Appsで公開された共有アプリケーションデータを含むフォルダーなど）の包含および除外はサポートされていません。

ストリーミングアプリケーション

Profile Managementは、アプリケーションがユーザーデバイスに直接ストリーミングされる環境、またはCitrix Virtual Appsサーバーにストリーミングされ、そこからユーザーに公開される環境で使用できます。

Citrix Virtual Appsのクライアント側アプリケーション仮想化テクノロジーは、アプリケーションを自動的に分離するアプリケーションストリーミングに基づいています。アプリケーションストリーミング機能により、アプリケーションをCitrix Virtual Appsサーバーおよびクライアントデバイスに配信し、保護された仮想環境で実行できます。ユーザーにストリーミングされるアプリケーションを分離する理由は多数あります。たとえば、アプリケーションの競合を防ぐために、ユーザーデバイス上でアプリケーションがどのように相互作用するかを制御できることなどです。たとえば、同じアプリケーションの異なるバージョンが存在する場合、ユーザー設定の分離が必要です。

Microsoft Office 2003がローカルにインストールされ、Office 2007がユーザーのデバイスにストリーミングされる場合があります。ユーザー設定を分離しないと競合が発生し、両方のアプリケーション（ローカルおよびストリーミング）の機能に深刻な影響を与える可能性があります。

ストリーミングアプリケーションでのProfile Managementの使用に関する要件については、システム要件を参照してください。

プロファイル管理とCitrix Virtual Desktops™

重要: Citrix Virtual Desktopsに統合されているプロファイル管理機能を使用することをお勧めします。詳しくは、 Citrix Virtual Desktopsのドキュメントを参照してください。このトピックの情報は、Citrix Virtual Desktopsと、別途インストールおよび構成されたプロファイル管理コンポーネントを使用する、別の展開に適用されます。

Citrix Virtual Desktops展開でのプロファイル管理のインストールとアップグレード

このバージョンのプロファイル管理をCitrix Virtual Desktopsで使用するには、プロファイル管理EULAに従う必要があります。EULAの条項に従い、Citrix Virtual Desktops環境でCitrix Virtual Apps™とプロファイル管理を使用することもできます。

Citrix Virtual Desktops展開でプロファイル管理をアップグレードする場合、プロファイル管理のアップグレードで説明されているログファイルの場所への影響を考慮してください。

Quick DeployセットアップのCitrix Virtual Desktopsについては、構成の決定の推奨事項を参照してください。

Citrix Virtual Desktops展開でのプロファイル管理の構成

イメージが展開される前にプロファイル管理が正しく構成されていない場合、グループポリシーが適用される前にプロファイル管理サービスが開始されます。これを回避するには、イメージを本番環境に投入する前に、文書化された手順を使用して構成を実行してください。

重要: 複数のユーザーで共有されるフォルダー（たとえば、複数の仮想デスクトップで共有できるデータを含むフォルダー）の包含と除外はサポートされていません。

Personal vDisk展開でのプロファイル管理の構成

Citrix Virtual DesktopsのPersonal vDisk機能を使用する場合、Citrixユーザープロファイルは、デフォルトで仮想デスクトップのPersonal vDisk（通常はP:ドライブ）に保存されます。プロファイルはユーザーのC:ドライブには保存されません。しかし、プロファイル管理はプロファイルをC:ドライブにあると想定しています。そのため、Virtual Delivery Agentのインストールまたはアップ

グレード中に、マスターイメージのレジストリを変更する必要があります。さらに、Personal vDiskの空き容量を増やしたため、マスターイメージ上のアプリケーションのデフォルトのディスク容量割り当てを増やすことも良い方法です。これらの変更に関する手順については、「Managing Citrix Virtual Desktops」ドキュメントを参照してください。

Personal vDiskにコピーが残っている間に、ユーザーストア内のプロファイルのコピーを削除しないでください。これを行うと、プロファイル管理エラーが発生し、仮想デスクトップへのログオンに一時プロファイルが使用されます。詳しくは、一般的な問題のトラブルシューティングの「ユーザーが新規または一時プロファイルを受け取る」を参照してください。

ウィンドウズ アプリ - マイクロソフト ストア

Citrix Virtual Desktops環境では、Microsoft Storeのアプリケーション（UWPアプリとも呼ばれる）がサポートされています。プールされたマシン（プールランダム、静的、またはRDS）でMicrosoft Storeアプリケーションを使用するには、グループポリシー管理エディターを開き、**［ポリシー］\>［管理用テンプレート］\>［従来の管理用テンプレート（ADM）］\>［Citrix］\>［Profile Management］\>［ファイルシステム］\>［同期］**で次の設定を構成します。

- ミラーリングするフォルダーを有効にし、その後、`appdata\local\packages`をミラーリングするフォルダーのリストに追加します
- 同期するファイルを有効にし、同期するファイルのリストに`!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\UsrClass.dat*`を追加します

ユーザーのプロファイルが別のデスクトップで既に作成されている場合、Personal vDisk (推奨ソリューション) を使用して専用デスクトップにアクセスすると、Microsoft Store アプリケーションが動作しない可能性があります。

Citrix Virtual Desktops の設定例

このトピックでは、一般的な Citrix Virtual Desktops 展開で使用される Profile Management ポリシー設定を一覧表示します。Windows 7 仮想デスクトップは Citrix Provisioning™ Services で作成され、複数のユーザーで共有されます。この例では、プールされたランダムカタログから作成され、ログオフ時に削除されるデスクトップは、静的ワークステーション (モバイルノートPCではない) での使用を目的としており、パーソナル vDisk は使用されません。

ポリシーがリストされていない場合、グループポリシーで選択または入力は行われておらず、デフォルト設定が適用されます。

次の点に注意してください。

- **ユーザー ストアへのパス** - Profile Management 変数をユーザー ストアへのパスに組み込むことができます。この例では、パスが解釈されるときにそれぞれ Win7 と x86 に展開される \!CTX_OSNAME\! と \!CTX_OSBITNESS\! を使用しています。AD 属性 #sAMAccountName# もユーザー名を指定するために使用されます。
- **ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する** - このポリシーを無効にしても安全です。デスクトップにはパーソナル vDisk が含まれておらず、ユーザーがログオフすると削除されるためです。したがって、ローカルにキャッシュされたプロファイルを保持する必要はありません。(デスクトップがログオフ時に破棄されない場合は、このポリシーを有効にしてください。)
- **プロファイル ストリーミング** - この設定を有効にすると、この展開でのログオン時間が改善されます。
- **アクティブ ライトバック** - このポリシーは、この展開のプールされたデスクトップがユーザーに一時的に割り当てられるだけであるため、有効になっています。そのため、ユーザーはプロファイルを変更しても、デスクトップセッションを閉じるのを忘れたり、気にしなかったりする可能性があります。この設定を有効にすると、プロファイル内のローカルファイルの変更がログオフ前にユーザー ストアにミラーリングされます。

注: アクティブ ライトバック ポリシーを有効にすると、セッション内で多数のファイル操作 (ファイルの作成、ファイルのコピー、ファイルの削除など) を実行すると、システム I/O アクティビティが高くなり、Profile Management がファイルの変更をユーザー ストアに同期している間、一時的なパフォーマンスの問題が発生する可能性があります。

- **ローカル管理者ログオンの処理** - この設定を有効にすることは、ほとんどのユーザーがローカル管理者である Citrix Virtual Desktops 展開で推奨されます。
- **処理されるグループ** - すべてのドメインユーザーのプロファイルは Profile Management によって管理されます。
- **除外リスト - ディレクトリ** (ファイルシステム) および **除外リスト** (レジストリ) - これらの設定は、リストされた一時ファイルまたはキャッシュファイル、およびリストされたレジストリエントリが処理されるのを防ぎます。これらのファイルとエントリは、一般的にユーザープロファイルに保存されます。
- **同期するディレクトリ** および **同期するファイル** - ユーザーのアプリケーションデータがどこに保存されているかを知ることで、これらの設定を定義するのに役立ちました。

重要: Citrix Virtual Desktops の展開はさまざまであるため、決定する Profile Management ポリシー設定は、この例のものとは異なる可能性があります。設定を計画するには、 構成を決定する のアドバイスに従ってください。

Citrix/プロファイル管理

Profile Management を有効にする

> 有効

処理されるグループ

> `MyDomainName\Domain Users`

ユーザーストアへのパス

> `\\MyServer.MyDomain\MyUserStore#sAMAccountName#\!CTX_OSNAME!_!CTX_OSBITNESS!`!

アクティブライトバック

> 有効

ローカル管理者によるログオンの処理

> 有効

Citrix/プロファイル管理/プロファイルの処理

ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する

> 無効

Citrix/プロファイル管理/詳細設定

ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する

> 有効

Citrix/プロファイル管理/ファイルシステム

除外リスト - ディレクトリ

```
$Recycle.Bin
```

```
`AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files`
```

```
`AppData\Local\Microsoft\Outlook`
```

```
`AppData\Local\Temp`
```

```
`AppData\LocalLow`
```

```
`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Start Menu`
```

```
`AppData\Roaming\Sun\Java\Deployment\cache`
```

```
`AppData\Roaming\Sun\Java\Deployment\log`
```

```
`AppData\Roaming\Sun\Java\Deployment\tmp`
```

Citrix/プロファイル管理/ファイルシステム/同期

同期するディレクトリ

```
`AppData\Microsoft\Windows\Start Menu\Programs\Dazzle Apps`
```

ミラーリングするフォルダー

> `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`

Citrix/プロファイル管理/ストリーム配信ユーザープロファイル

プロファイルストリーミング

> 有効

プロファイル管理とUE-V

Profile Management 5.xとMicrosoft User Experience Virtualization (UE-V) 2.0は、同じ環境で共存できます。UE-Vは、複数のプロファイルバージョンが存在する場合（例：バージョン1とバージョン2のプロファイル）に役立ちます。このため、UE-Vが存在する場合は、Citrix Profile Managementのクロスプラットフォーム設定機能を使用しないでください。UE-Vは、より多くのアプリケーション、ユーザーセッション中の同期、およびアプリケーションのXML構成と生成をサポートするため、その機能よりも推奨される場合があります。

Profile ManagementがUE-Vと共存する場合、クロスプラットフォーム設定機能が有効になっているかどうかにかかわらず、次の点に注意してください。

- `AppData\Local\Microsoft\UEV`フォルダーを除外します。UE-Vによってキャプチャされたプロファイル設定は、Profile Managementによってキャプチャされたプロファイル設定を上書きします。
- UE-Vによって制御されるプロファイルを、Profile Managementのみによって制御されるプロファイルと共有しないでください。共有した場合、「最後の書き込みが優先されます」。つまり、プロファイルを同期する最後のコンポーネント（UE-VまたはProfile Management）が、どのデータが保存されるかを決定し、データ損失につながる可能性があります。

注: UE-Vには、Microsoft Desktop Optimization Pack (MDOP)が必要です。

プロファイル管理とシトリックス コンテンツ コラボレーション™

この記事の情報は、Citrix Content Collaboration の展開における Profile Management の使用に適用されます。一部の情報は、他のインターネットベースのファイル共有システムにも役立つ場合があります。

Citrix Content Collaboration は、Profile Management 4.1.2 以降で使用できます。Citrix Content Collaboration は、オンデマンドモードでのみサポートされています。

インストール

ShareFile 2.7 を使用している場合、互換性の問題を避けるために、Profile Management をインストールする前にこのバージョンをインストールしてください。ShareFile 2.6 では、このインストール依存関係は存在しません。

除外

Citrix Content Collaboration は、構成データをローカルの `\AppData\Roaming\ShareFile` フォルダーに保存します。Citrix ユーザープロファイルを持つユーザーの場合、ユーザー固有の Citrix Content Collaboration 構成が保持されるように、このデータはユーザープロファイルとともにローミングする必要があります。この `ShareFile` フォルダーはプロファイルの一部であるため、Profile Management の構成は不要です。構成データはデフォルトでローミングされます。

ただし、Citrix Content Collaboration によって管理されるユーザーデータは、プロファイルのルートにある `ShareFile` フォルダー (`%USERPROFILE%\ShareFile`) に含まれています。このデータは Citrix Content Collaboration サーバーによって管理され、同期されるため、プロファイルとともにローミングしてはなりません。したがって、このフォルダーを Profile Management の除外対象として追加する必要があります。除外の設定方法については、「項目の含める/除外」を参照してください。

パーソナルvDisk

Personal vDisk を使用して仮想デスクトップを作成する場合、vDisk 上のユーザーデータの場所で Citrix Content Collaboration を構成します。これにより、デスクトップと Citrix Content Collaboration サーバー間でファイル同期が行われるようになります。デフォルトでは、Personal vDisk はデスクトップ上で P: ドライブとしてマップされるため、データは `P:\Users\<user` name\> に配置される可能性があります。この場合、Citrix Content Collaboration の LocalSyncFolder ポリシーを使用して場所を設定します。

重要: 仮想デスクトップ上で同期する必要がある場合を除き、大きなファイルを含むフォルダーでは **Folder-ID** 設定を使用することをお勧めします。これにより、Profile Management および Personal vDisk のパフォーマンスに悪影響を与える可能性のある不要な同期を防ぐことができます。これは ShareFile の設定です。

プロファイル管理とApp-V

Microsoft Application Virtualization 5.x (App-V 5.x) と同じ環境でProfile Managementを使用できます。

> **注:**
>
> Profile Managementは、グローバルに公開されたApp-Vのみをサポートします。
>
> Profile Managementの除外機能を使用して、次の項目を除外します。

- プロファイル管理\\ファイルシステム\\除外リスト\\ディレクトリ:
  - `AppData\Local\Microsoft\AppV`
  - `AppData\Roaming\Microsoft\AppV\Client\Catalog`
- プロファイル管理\\レジストリ\\除外リスト:
  - `Software\Microsoft\AppV\Client\Integration`
  - `Software\Microsoft\AppV\Client\Publishing`

除外設定の手順については、「項目を含めるおよび除外する」を参照してください。

App-Vで**UserLogonRefresh**設定が有効になっている場合、Profile Managementのプロファイルストリーミングポリシーを無効にします。この制限は、**UserLogonRefresh**とプロファイルストリーミングの非互換性によるものです。

App-Vアプリケーションをシーケンスする方法の例については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows/application-management/app-v/appv-sequence-a-new-application>`を参照してください。

App-Vが有効なサードパーティのProfile Managementソリューションの構成については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/microsoft-desktop-optimization-pack/appv-v5/performance-guidance-for-application-virtualization-50>`を参照してください。Microsoft Windows 10システムでは`Software\Classes`を含めないでください。

プロファイル管理とプロビジョニングサービス

この記事では、Citrix Provisioning Servicesで作成された仮想ディスク（vDisk）上のCitrixユーザープロファイルを維持するためのアドバイスを提供します。このアドバイスに従う前に、「永続的ま

たはプロビジョニング済み、専用または共有」で説明されているように、vDisk構成がProfile Management構成にどのように影響するかを理解してください。

サポートされているモード

Profile Managementは、標準イメージモードおよびプライベートイメージモードで実行されているvDiskで使用できますが、差分ディスクイメージモードでは使用できません。

マスターターゲットデバイスから不要なローカルキャッシュプロファイルを削除するには

不要なローカルキャッシュプロファイルが保存されないようにするには、マスターターゲットデバイスイメージを作成する前に、標準イメージモードで実行されているvDiskからこれらのプロファイルを削除してください。ただし、現在ログオンしているローカル管理者のプロファイルは削除しないでください。これを実現する良い方法は次のとおりです。この手順中にエラーメッセージが表示される場合があります。

1. コンピューターを右クリックします。
2. プロパティを選択します。
3. 詳細システム設定をクリックします。
4. 詳細設定タブで、ユーザープロファイルの「設定」をクリックします。
5. 削除する各プロファイルを強調表示し、「削除」をクリックします。

vDiskイメージからログファイルを取得する

このトピックでは、Citrix Provisioning™ Servicesで作成された共有（vDisk）イメージに存在するログファイルの使用に関するガイダンスを提供します。Profile Managementはログオフ時にファイルを保存します。しかし、vDiskイメージを使用する場合、ベースイメージがリセットされる可能性があり、その結果ログファイルが削除されるという事実に留意してください。したがって、ファイルを回復するために何らかの措置を講じる必要があります。講じる措置は、ログファイルがログオン時に削除されるかログオフ時に削除されるかによって異なります。

vDiskイメージの使用はCitrix Virtual Desktops™の展開で一般的であるため、このトピックのガイダンスではその製品を例として使用します。

ログオフ時に削除されるログファイルを取得するには

プロファイル全体またはその一部がネットワーク上のユーザーストアに保存されない場合、ログファイルもそこに保存されません。

Provisioning Servicesのライトキャッシュがプロビジョニング Servicesを実行しているコンピューターに保存されている場合、この問題は発生しません。そして、ログファイルはユーザー ストアに保存されます。

ライトキャッシュがローカルに保存されている場合、この手順ではユーザーと同じデバイスからログオンする必要があるかもしれません。ただし、ライトキャッシュがRAMにローカルに保存されている場合、これも失敗する可能性があります。

ライトキャッシュがProvisioning Servicesを実行しているコンピューター上にない場合、vDiskイメージのコピーを作成する必要があるかもしれません。それを新しい仮想マシンに割り当て、そのコンピューターに保存されるようにイメージ上のライトキャッシュを変更します。

1. Citrix仮想デスクトップで、デスクトップグループを作成し、1つの仮想マシンを追加して、vDiskイメージを指すようにします。
2. 仮想マシンへのアクセスを1人のテストユーザーと管理者に付与します。
3. デスクトップグループのアイドルプール数を終日1に変更します（電源管理によるマシンのシャットダウンを防ぐため）。ログオフ動作を「何もしない」に設定します（マシンの再起動とイメージのリセットを防ぐため）。
4. テストユーザーとして仮想デスクトップにログオンし、その後ログオフします。
5. XenCenter®またはVMwareコンソールから管理者としてログオンし、ログファイルを取得します。

デスクトップグループの作成とプロパティの変更に関する詳細については、Citrix Virtual Desktops documentationを参照してください。

ログオン時に削除されるログファイルを取得するには

プロファイルがネットワーク上のユーザー ストアで最新であるにもかかわらず、ユーザーがログオンしたときに正しくロードされない場合、ログファイルのエントリは失われます。

1. `\\<vmhostname>\C$` にドライブをマップし、ユーザーがセッションからログオフする前にログファイルを特定します。ログファイルは完全ではありません（一部のエントリが欠落している可能性があります）が、トラブルシューティングしている問題がログオン時に発生している場合、問題の原因を特定するのに十分な情報を提供できます。

Provisioning Servicesログファイルを再配置するには

標準イメージモードを使用すると、システムがシャットダウンしたときにProvisioning Servicesイベントログファイルが失われます。これを防ぐためにファイルのデフォルトの場所を変更する方法については、Knowledge Centerの記事CTX115601を参照してください。

プロビジョニングされたイメージでプロファイル管理を事前構成する

Citrix Provisioning Services、Citrix XenServer、VMware ESXなどのプロビジョニングソフトウェアを使用すると、プロファイル管理がプリインストールされたイメージを構築できます。その際、イメージのセットアップ中にレジストリにグループポリシー設定の一部が取り込まれる可能性があります。たとえば、Provisioning Servicesでプライベートイメージモードの場合に発生します。イメージを展開しても、設定は残っています。たとえば、Provisioning Servicesで標準イメージモードに戻した場合などです。理想的には、仮想マシンが起動したときの状態と、ユーザーがログオンしたときの要件に合ったデフォルトを選択してください。少なくとも、(/ja-jp/profile-management/2402-ltsr/plan/upm-plan-decide-4a.html)で説明されているポリシーに対して適切なデフォルト設定があることを確認してください。

Citrix Profile Management Serviceが開始される前に`gpupdate`が実行されない場合、デフォルトが使用されます。そのため、ほとんどの場合に適切なデフォルト設定であることを確認するのが最善です。イメージに保持したいこれらの設定やその他の設定を事前構成するには、この手順を使用します。

注: Provisioning Servicesを使用する場合は、まずProfile Managementの.iniファイルでイメージを事前構成することをお勧めします。そして、テストが成功したことが証明されてから、設定を.admまたは.admxファイルに転送してください。

1. .admまたは.admxファイルを使用する場合は、適切なGPOでそのファイルを使用して目的の設定を変更します。.iniファイルを使用する場合は、この手順を省略します。変更は後の手順で行います。
2. ログレベルにも同じ変更を加えます。
3. 次のいずれかを実行します。
    - イメージをプライベートイメージモード（Citrix Provisioning™ Services）に切り替え、その上でオペレーティングシステムを起動します。
    - オペレーティングシステム（Citrix XenServer®またはVMware ESX）を起動します。
4. 管理者アカウント（設定した可能性のあるテストユーザーアカウントではない）を使用してログオンし、`gpupdate /force`を実行します。この手順により、レジストリが正しく構成されます。
5. .iniファイルを使用する場合は、ファイル内の目的の設定を変更します。
6. Profile Management Serviceを停止します。

7. 新しく作成されるログファイルとの混同を避けるため、古いProfile Managementログファイルと構成ログファイルを削除します。これらは古いイメージの名前を使用するファイル名を持っています。更新されたイメージには新しいファイル（新しいイメージの名前を持つ）があるため、これらは冗長です。
8. 次のいずれかを実行します。
   - イメージを標準イメージモード（Citrix Provisioning Services）に戻します。
   - 更新されたイメージ (Citrix XenServer または VMware ESX) を保存します。
9. イメージ上のオペレーティングシステムを起動します。

プロファイル管理とセルフサービスプラグイン

デフォルトでは、プロファイル管理はWindowsの**スタートメニュー**フォルダーを除外します。Citrix セルフサービスプラグインのユーザーは、購読しているアプリケーションを**スタートメニュー**で確認できません。このデフォルトの動作を調整するには、**除外リスト - ディレクトリ**ポリシーからフォルダー `%APPDATA%\Microsoft\Windows\Start Menu` を削除します。さらに、GPOを使用して構成する場合、プロファイル管理の.iniファイルを削除することがベストプラクティスです。これらのアクションにより、購読しているアプリケーション（およびユーザーが作成したサブフォルダー）を含む**スタートメニュー**フォルダーがプロファイル管理によって処理されるようになります。

注：グループポリシーではなくプロファイル管理の.iniファイルを使用している場合は、そのファイルのデフォルトの除外リストからこのエントリを削除してください。

プロファイル管理とOutlook

この記事では、Microsoft Outlookとローミングプロファイルを統合するためのベストプラクティスについて説明します。

ユーザーがOutlookデータをネットワーク共有やローカルではなく、サーバーに保存するようにすることは良い習慣です。

ローミングプロファイルでは、環境変数 `%UserProfile%` (ローカルコンピューター上) で定義された場所にあるファイルとフォルダーは、 `%UserProfile%\Local Settings` という1つのフォルダーを除いて、ユーザーとともにローミングします。この例外はOutlookユーザーに影響します。Microsoftの推奨により、既定では一部のOutlookデータ（たとえば、 `.ost` 、 `.pst` 、 `.pab` ファイル）がこの非ローミングフォルダーに作成されるためです。

重要： この場所にあるファイルは通常サイズが大きく、ローミングプロファイルのパフォーマンスを妨げます。

以下のプラクティスは、Outlookでのローミングプロファイルのトラブルシューティングを減らし、ユーザーと管理者による適切なメール管理を促進します。

- 可能であれば、`.pst` ファイルの使用を禁止するMicrosoft Office用のADMテンプレートを使用してください。
- ユーザーがより多くのスペースを必要とする場合は、ネットワーク共有ではなく、Microsoft Exchangeサーバーのストレージを増やしてください。
- 個々のユーザーに `.pst` ファイルの例外を許可したり、個人ストレージ容量を増やしたりするのではなく、会社全体でメール保持ポリシー（会社全体のメールストレージサーバーを含むもの）を定義し、適用します。このポリシーは、ユーザーが受信トレイへのメール復元を簡単に要求できるようにすることで、`.pst` ファイルへの依存を抑制する必要もあります。
- `.pst` ファイルを禁止できない場合は、プロファイル管理またはローミングプロファイルを構成しないでください。**Outlookの検索インデックスローミングを有効にする** 機能は、`.pst` ファイル向けには設計されていません。

Password Manager およびシングルサインオンでの Windows プロファイルの使用

この記事には、Profile Management に固有の情報は含まれていません。Citrix Single Sign-on がローカルプロファイル、移動プロファイル、強制プロファイル、またはハイブリッドプロファイルで最適に動作するように、特定の Windows オプションを構成する方法について説明します。このトピックは、Citrix Single Sign-on 4.8 または 5.0 に適用されます。

ローカルプロファイル

ローカルプロファイルは、ユーザーがログオンしたローカルサーバーに保存されます。Password Manager とシングルサインオンは、ユーザーレジストリの `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Citrix\MetaFrame Password Manager` ハイブにレジストリ情報を保存します。

`%SystemDrive%\Documents` および `Settings\%username%\NTUSER.DAT`。

ファイルは次の場所にも保存されます。

`%SystemDrive%\Documents and Settings\%username%\Application Data\Citrix\MetaFrame Password Manager`。

Windows 7 では、シングルサインオンは以下を使用します。

`%APPDATA%\Roaming\Citrix\MetaFrame Password Manager`

重要: シングルサインオンが以下のファイルに対してフルコントロールアクセス権を持つことが重要です。

ファイル名	説明
%ユーザー名%.mmf	aelist.ini へのポインターを含むユーザーの資格情報ファイル。
entlist.ini	同期ポイントまたは Active Directory でエンタープライズレベルで作成されたアプリケーション定義ファイル。
aelist.ini	ユーザーのローカルアプリケーション定義ファイル (applist.ini) とエンタープライズアプリケーション定義 (entlist.ini) をマージして作成されたアプリケーション定義ファイル。

ローミングプロファイル

ローミングプロファイルはネットワーク共有に保存され、ユーザーがログオンするたびにローカルサーバーのコピーに同期されます。ローミングプロファイルの展開が成功するための特徴には、SAN (System Area Network) や NAS (Network Area Storage) などの高速ネットワーク接続が含まれます。その他の一般的な展開には、プロファイルが高可用性サーバーに保存されるクラスタリングソリューションが含まれます。

ローミングプロファイルと強制プロファイルの展開には、次の2つの問題があります。

- 単一のローミングプロファイルは、1つのファイル同期ポイントでのみ使用できます。複数の同期ポイントが使用される場合、メモリマップファイル (MMF) 内のデータが破損する可能性があります。
- 複数の同時セッションでローミングプロファイルが使用される場合、バックエンドのMMFを共有します。すべてのアクティブなセッションは、再試行ロックカウンター、最終使用データカウンター、イベントログエントリなど、いくつかの共通セッションデータを共有します。

強制プロファイルまたはハイブリッドプロファイル

強制プロファイルは、定義上、ユーザーの読み取り専用プロファイルです。シングルサインオンには、**Application Data** の下のプロファイルフォルダーへの書き込み権限が必要です。強制プロファイルでは、ユーザーが変更を行うことはできますが、ログオフ時にその変更はプロファイルに保存されません。強制プロファイルでシングルサインオンが正しく機能するためには、Application Data フォルダーをリダイレクトする必要があります。

レジストリの変更は、ユーザーがログオンするたびに書き込まれます。資格情報が同期ポイントと同期されますが、変更はプロファイルに保存されません。

Windows 2000以降、Microsoftは**Application Data**フォルダーをリダイレクトするメカニズムを提供しています。ただし、Windows NT4ドメインを使用する場合は、**Application Data**フォルダーの場所を変更できるログオンスクリプトが必要です。これは、`Kix` や `VBScript` などのツールを使用して、**Application Data**フォルダーの書き込み可能な場所を定義することで実現できます。

次の例では、ユーザーログオン時に `Kix` を使用して **Application Data** フォルダーをリダイレクトします。

重要: このサンプルスクリプトは情報提供のみを目的としています。まずテストせずに、ご自身の環境で使用しないでください。

```
$LogonServer = "%LOGONSERVER%"

$HKCU = "HKEY_CURRENT_USER"

$ShellFolders_Key =

"$HKCU\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\Shell

Folders"

$UserShellFolders_Key =

"$HKCU\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\User

Shell Folders"

$UserProfFolder =

"$LogonServer\profiles\@userID"
```

```
$UserAppData =

"$LogonServer\profiles\@userID\Application Data"

$UserDesktop =

"$LogonServer\profiles\@userID\Desktop"

$UserFavorites =

"$LogonServer\profiles\@userID\Favorites"

$UserPersonal = "X:\My Documents"

$UserRecent =

"$LogonServer\profiles\@userID\Recent"

if (exist("$UserAppData") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserAppData"'

endif

if (exist("$UserDesktop") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserDesktop"'

endif

if (exist("$UserRecent") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserRecent"'

endif

if (exist("$UserFavorites") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserFavorites"'

endif
```

ハイブリッドプロファイルは、強制プロファイルの問題に対するもう1つの解決策です。ユーザーがログオンすると、強制プロファイルがロードされ、カスタムアプリケーションがユーザーに利用可能なアプリケーションに基づいてユーザーレジストリハイブをロードおよびアンロードします。強制プロファイルと同様に、ユーザーはセッション中にレジストリのそれらの部分を変更できます。強制プロファイルとの違いは、ユーザーがログオフするときに変更が保存され、再度ログオンするときに再ロードされることです。

ハイブリッドプロファイルが使用される場合、ログオンおよびログオフプロセスの一部として、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Citrix\MetaFrame Password` レジストリキーをインポートおよびエクスポートする必要があります。

フォルダーリダイレクト

フォルダーリダイレクトは、グループポリシーオブジェクトとActive Directoryを使用して実装されます。ユーザープロファイルの一部であるフォルダーの場所を定義するために、グループポリシーを使用します。

リダイレクトできるフォルダーは4つあります。

- マイドキュメント
- アプリケーションデータ
- デスクトップ
- スタートメニュー

グループポリシーを使用して、基本リダイレクトと高度なリダイレクトの2つのリダイレクトモードを設定できます。どちらもシングルサインオンでサポートされています。Windows 2000では、アプリケーションデータを格納する共有を `%username%` 変数を使用して参照する必要があります（例: `\\servername\sharename\%username%`）。

フォルダーリダイレクトはユーザーに対してグローバルであり、そのユーザーのすべてのアプリケーションに影響します。**Application Data** フォルダーを使用するすべてのアプリケーションがこれをサポートしている必要があります。

フォルダーリダイレクトの詳細については、以下のMicrosoftの記事を参照してください。

方法: フォルダーリダイレクトを使用して安全なリダイレクトフォルダーを動的に作成する

Windows のフォルダーリダイレクト機能

管理者がリダイレクトされたフォルダーにアクセスできるようにする

ベストプラクティス

- 可能な場合は、Application Data フォルダーをリダイレクトします。このアプローチにより、ネットワークパフォーマンスが向上し、ユーザーがログオンするたびにそれらのフォルダー内のデータをコピーする必要がなくなります。
- Password Manager Agent のトラブルシューティングを行う際は、ログオンしているユーザーが自身の Application Data フォルダーに対してフルコントロールのアクセス許可を持っていることを常に確認してください。

Firefoxブラウザ

シームレスなユーザーエクスペリエンスのために、Profile Management は、各ユーザーのプロファイル全体を、インストールされているシステムとユーザー ストアの間で同期します。その結果、Firefox ユーザーはログオンまたはログオフが遅くなる可能性があります。この問題は、Firefox に関連付けられている一部のファイルが大きくなる可能性があるために発生します。

以下のファイルとフォルダーを削除し、同期から除外するようにログオフスクリプトをカスタマイズすることをお勧めします。

- `Appdata\Roaming\Mozilla\Firefox\profiles*\sessionstore.bak`
- `AppData\Roaming\Mozilla\Firefox\Profiles*\sessionstore-backups`

一般的なワークフローは次のとおりです。

1. Windows PowerShell またはユーザーコンピューターでサポートされているその他の言語を使用してログオフスクリプトを作成します。VBScript や Jscript を含む、Windows Script Host (WSH) でサポートされている言語やコマンドファイルも使用できます。
2. スクリプトをドメインコントローラーの **Netlogon** 共有フォルダーにコピーします。
3. **グループポリシー管理コンソール**で、スクリプトをユーザーログオフイベントに関連付けます。詳細については、Microsoft の記事を参照してください。

Google Chrome ブラウザー

シームレスなユーザーエクスペリエンスを提供するために、Profile Management は、インストールされているシステムとユーザー ストアの間で、各ユーザーのプロファイル全体を同期します。その結果、Google Chrome ユーザーはログオンまたはログオフが遅くなる可能性があります。この問題は、Google Chrome に関連付けられている一部のファイルが大きくなる可能性があるために発生します。

Google Chrome のユーザーエクスペリエンスを向上させるには、次の操作を行います。

1. ミラーリングするフォルダーのリストに次のフォルダーを追加します。
    - AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default
2. 同期から次のフォルダーを除外します。
    - Appdata\Local\Google\Chrome\User Data\Default\Cache
    - Appdata\Local\Google\Chrome\User Data\Default\JumpListIconsMostVisited
    - Appdata\Local\Google\Chrome\User Data\Default\JumpListIconsRecentClosed
    - AppData\Local\Google\Chrome\ユーザーデータ\Default\メディアキャッシュ
3. 同期から次のファイルを除外します。
    - AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default\Favicons
    - AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default\History
    - AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default\Preferences
    - `AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default` フォルダー内のブックマークに関連しないファイル

ログオンまたはログオフが遅い場合は、プロファイルストリーミング機能の使用をお勧めします。詳細については、ユーザープロファイルのストリーミングを参照してください。

トラブルシューティング

Profile Management の設定を確認する

問題のトラブルシューティングの最初のステップとして、現在のProfile Management設定を次のように確認します。

1. Citrix Directorでトラブルシューティングを開始します。このコンソールには、問題の診断と修正に役立つプロファイルのプロパティが表示されます。
2. UPMConfigCheckツールを使用して、稼働中のProfile Management展開を調査し、最適に構成されているかどうかを判断します。

   このツールのインストールと使用方法の詳細については、Knowledge Centerの記事CTX132805を参照してください。
3. Profile Management .iniファイルが使用されている場合は、影響を受けるマシンでその構成を確認します。
4. リストとして入力するProfile Managementポリシー（たとえば、除外リストや包含リスト）を非アクティブ化するには、ポリシーを「無効」に設定します。「未構成」に設定しないでください。
5. 影響を受けるマシンで`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies`レジストリエントリを確認します。GPタトゥーイングの問題により古いポリシーがある場合は、それらを削除します。タトゥーイングは、ポリシーがGPから削除されてもレジストリに残る場合に発生します。
6. 各ユーザーに適用されているProfile Management設定を含むUPMSettings.iniファイルを確認します。このファイルは、ユーザー ストア内の各Citrixユーザープロファイルのルートフォルダーに存在します。

Profile Management ログファイルを確認する

ログファイルは、システム動作のトラブルシューティングに役立ちます。Profile Management の設定を確認した後、Profile Management のログ記録を有効にし、問題を再現してログファイルを確認します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. すべてのイベントとアクションに対してProfile Management のログ記録を有効にする。

2. マシン上で問題を再現する。
3. `%SystemRoot%\system32\LogFiles\UserProfileManager`フォルダーにあるProfile Managementログファイル（例：#computername#.#domainname#_pm.log）でエラーと警告を確認します。それぞれ「ERROR」または「WARNINGS」という単語を検索して見つけます。

   ログファイルの詳細は、この記事の後半にあるリファレンスを参照してください。
4. ユーザーストアへのパスが正しいことを確認します。
5. Active Directoryからのすべての情報が正しく読み取られたことを確認します。
6. タイムスタンプを確認して、時間がかかりすぎるアクションがないか調べます。

> **ヒント:**
>
> Microsoft Excelを使用してProfile Managementログファイルを確認できます。詳細については、Knowledge Centerの記事CTX200674を参照してください。

Profile Management のログ記録を有効にする

Profile Management展開で問題をトラブルシューティングする場合にのみ、すべてのイベントとアクションに対してProfile Managementのログ記録を有効にしてください。問題が解決したら、ログ記録を無効にし、機密情報が含まれている可能性があるためログファイルを削除してください。

このセクションでは、GPOと`UPMPolicyDefaults_all.ini`を使用して、すべてのイベントとアクションのログ記録を有効にする方法について説明します。

Citrix Studio と Workspace Environment Management (WEM) を使用して、この目標を達成することもできます。詳細については、「Profile Management を集中管理する場所を決定する」を参照してください。

GPO を使用してログを有効にする

GPO を使用してすべてのイベントとアクションの Profile Management ロギングを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開き、グループポリシーオブジェクトを作成します。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ログ設定**にアクセスします。

3. Profile Management ロギングを次のように有効にします。
   a. **ログの有効化**をダブルクリックします。
   b. **有効**をクリックします。
   c. **OK**をクリックします。
4. Profile Management ですべてのイベントとアクションをログに記録するように有効にします。
   a. **ログ設定**をダブルクリックします。
   b. すべてのイベントとアクションを選択します。これらの説明の詳細については、「イベントとアクション」を参照してください。
   c. **OK**をクリックします。
5. ログファイルのデフォルトの最大サイズを変更するには、次の手順に従います。
   a. **ログファイルの最大サイズ**をダブルクリックします。
   b. 「**有効にする**」をクリックし、「**最大サイズ (バイト単位)**」フィールドにサイズを入力します。
   c. 「**OK**」をクリックします。

   > 「**ヒント:**」:
   >
   > 最大サイズに達すると、Profile Management はバックアップファイルを1つ保持します (例: Logfilename.log.bak)。

6. マシンで `gpupdate /force` コマンドを実行します。

   これらのポリシーはマシンで有効になります。

ログ設定ポリシーの詳細については、Profile Management のポリシーの説明とデフォルト を参照してください。

.ini ファイルを使用してログを有効にする

`UPMPolicyDefaults_all.ini` を使用してすべてのイベントとアクションに対して Profile Management のログ記録を有効にするには、次の手順に従います。

1. Profile Management のインストールフォルダー (デフォルトでは C:\Program Files\Citrix\User Profile Manager) で `UPMPolicyDefaults_all.ini` を開きます。

2. **Log settings** を検索して設定を見つけます。

```
; Log settings
;
;LoggingEnabled=
;LogLevelWarnings=
;LogLevelInformation=
;LogLevelFileSystemNotification=
;LogLevelFileSystemActions=
;LogLevelRegistryActions=
;LogLevelRegistryDifference=
;LogLevelActiveDirectoryActions=
;LogLevelPolicyUserLogon=
;LogLevelLogon=
;LogLevelLogoff=
;LogLevelUserName=
;MaxLogSize=
;PathToLogFile=
```

3. `LoggingEnabled` に `1` を入力します。
4. `LogLevelWarnings` から `LogLevelUserName` までの各パラメーターに `1` を入力します。これらのパラメーターの詳細については、イベントとアクション を参照してください。
5. ログファイルのデフォルトの最大サイズを変更するには、必要に応じて `MaxLogSize` にサイズを入力します。
6. ログファイルのデフォルトフォルダを変更するには、必要に応じて`PathToLogFile`のパスを入力します。

リファレンス

このセクションでは、以下の情報を提供します。

- ログの種類
- イベントとアクション
- Profile Managementログファイルのフィールド

ログの種類

この表は、Profile Managementのトラブルシューティングに使用できるログを一覧表示します。

通称	ログファイル名	場所	ログ情報の種類
Profile Management ログファイル	#computername#.#domainname#_pm.log	%SystemRoot%\system32\LogFiles\UserProfileManager	情報メッセージ、警告、エラーは、Profile Management ログファイルに書き

通称	ログファイル名	場所	ログ情報の種類
			込まれます。ドメイン名はコンピューターのドメインです。コンピューター名を特定できない場合、このログファイルは UserProfileManager.log と呼ばれます。コンピューター名が利用可能であるにもかかわらずドメインを特定できない場合、ログファイルは #computername#_pm.log と呼ばれます。
Profile Management 構成ログファイル	#computername#.#domainname#_pm_config.log	%SystemRoot%\system32\LogFiles\UserProfileManager	構成ログファイルは、ログ記録がオフになっている場合でも、GPO および .ini ファイルの設定をキャプチャします。コンピューター名を特定できない場合、UserProfileManager_pm_config と呼ばれます。コンピューター名が利用可能であるにもかかわらずドメインを特定できない場合、ログファイルは #computername#_pm_config.log と呼ばれます。
Windows イベントログ	Application.evtx	%SystemRoot%\System32\winevt\Logs	Microsoft イベントビューアーで表示する Windows イベン

通称	ログファイル名	場所	ログ情報の種類
			トは、主にエラー報告に使用されます。エラーのみが書き込まれます。

イベントとアクション

この表は、Profile Management がログに記録できるイベントとアクションを示します。

種類	説明	.INI のパラメーター
一般的な警告	すべての一般的な警告。	LogLevelWarnings
一般情報	すべての一般情報。	LogLevelInformation
ファイルシステム通知	処理されたファイルまたはフォルダーが変更されるたびに、1つのログエントリが作成されます。	LogLevelFileSystemNotification
ファイルシステムアクション	Profile Managementによって実行されるファイルシステム操作。	LogLevelFileSystemActions
レジストリアクション	Profile Managementによって実行されるレジストリアクション。	LogLevelRegistryActions
ログオフ時のレジストリの差異	セッション中に変更されたHKCUハイブ内のすべてのレジストリキー。重要: この設定は、ログファイルに大量の出力を生成します。	LogLevelRegistryDifference
Active Directoryアクション	Profile ManagementがActive Directoryを照会するたびに、エントリがログファイルに書き込まれます。	LogLevelActiveDirectoryActions
ポリシー値	Profile Managementサービスが開始されるか、ポリシーの更新が行われると、ポリシー	LogLevelPolicyUserLogon

種類	説明	.INI のパラメーター
	値がログファイルに書き込まれます。	
ログオン	ログオン中のアクションの系列がログファイルに書き込まれます。	LogLevelLogon
ログオフ	ログオフ中のアクションの系列がログファイルに書き込まれます。	LogLevelLogoff
パーソナライズされたユーザー情報	該当する場合、ユーザー名とドメイン名はログファイルの専用列に記録されます。	LogLevelUserName

ログファイルフィールド

Profile Managementログファイルの各行には、セミコロンで区切られた複数のフィールドがあります。この表は、ログファイルのフィールドを示しています。

フィールド	説明
日付	ログエントリの日付
時刻	ログエントリの時刻（ミリ秒を含む）
重大度	INFORMATION、WARNING、またはERRORのいずれか
ドメイン	ユーザーのドメイン（該当する場合）
ユーザー名	ユーザー名（該当する場合）
セッションID	セッションID（該当する場合）
スレッドID	この行を作成したスレッドのID
関数と説明	その時点で実行されていたProfile Management関数の名前とログメッセージ

Windowsイベントを確認する

Profile Managementによってログに記録されたWindowsイベントは、トラブルシューティングのための診断情報も提供します。Windowsイベントは、`%SystemRoot%\System32\winevt\Logs\`フォルダー内のApplication.evtxファイルに保存されます。

Windowsイベントビューアーを使用してイベントを表示するには、次の手順に従います。

1. Windowsマシンで**イベントビューアー**を起動します。
2. 左ペインで**Windowsログ > アプリケーション**ノードを選択します。

   イベントは右ペインに表示されます。

イベントのリスト

Profile Managementによってログに記録されたイベントは、すべてが連番になっているわけではなく、このバージョンのProfile Managementですべてが使用されているわけではありません。ただし、以前のバージョンからアップグレードした場合は、ログに記録される可能性があります。

イベントID	説明	原因	アクション
5	Citrix Profile Managementがユーザーログオン時に選択したユーザーストアとネットワークの遅延を示します。	Citrix Profile Managementがユーザーログオン時にユーザーストアを選択しました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
6	Citrix Profile Managementサービスが開始されました。	Citrix Profile Managementサービスが開始されました。これは、自動開始、手動開始、または再起動の結果である可能性があります。	開始または再起動が計画されていなかった場合は、イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示されている是正措置を講じてください。
7	Citrix Profile Managementサービスが停止しました。	Citrix Profile Managementサービスが停止しました。これは、手動停止の	サービス停止が計画されていなかった場合は、イベントログでエラーを確認し、

イベントID	説明	原因	アクション
		結果であるか、シャットダウン処理の一部である可能性があります。	Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示されている是正措置を講じてください。
8	ユーザーのプロファイルは、Citrix Profile Managementの新しいバージョンによって変更されたため、このバージョンでは使用できません…	このマシンのCitrix Profile Managementサービスは、新しいバージョンのProfile Managementがユーザーストア内のユーザープロファイルを変更したことを検出しました。データ損失の可能性を防ぐため、以前のバージョンのProfile Managementは一時プロファイルの使用に戻ります。	このコンピューター（およびユーザーストアを共有し、以前のバージョンのProfile Managementを使用している他のすべてのコンピューター）を最新バージョンにアップグレードしてください。
9	ログオンフックの検出で問題が発生しました…	Citrix Profile Managementサービスは、ログオン通知の設定中に問題が検出されました。Citrix Profile Managementサービスでは、インストールパスにスペースが含まれていないこと、またはサービスがインストールされているボリュームで8.3ファイル名サポートが有効になっていることが必要です。	Citrix Profile Managementをスペースのないパスに再インストールするか、Profile Managementがインストールされているボリュームで8.3ファイル名サポートを有効にしてください。

イベントID	説明	原因	アクション
10	ユーザーストアへのユーザーパスは…	有効なCitrixユーザープロファイルが指定された場所で見つかりました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
11	spsMain: CreateNamedPipeが失敗しました…	(このイベントは使用されなくなりました。)	なし。
12	StartMonitoringProfile: ログオン中にWindows変更ジャーナル管理で問題が検出されました…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。Windows変更ジャーナルイベント管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	Profile Managementによって管理されるすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
13	StopMonitoringProfile: ログオフ中にWindows変更ジャーナル管理で問題が検出されました…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーの監視を停止できませんでした。Windows変更ジャーナル管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Management	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、

イベントID	説明	原因	アクション
		はこのフォルダーを処理しません。ファイルとレジストリの変更はユーザーに対して同期されません。	Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示されている是正措置を講じてください。
14	CJIncreaseSizeIfNecessary: 変更ジャーナルの作成/サイズ変更に失敗しました…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルを作成またはサイズ変更しようとしたときに問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示されている是正措置を講じてください。
15	CJInitializeForMonitoring: ジャーナルを照会できません…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルを照会しているときに問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、

イベントID	説明	原因	アクション
		Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示されている是正措置を講じてください。
16	CJInitializeForMonitoring: 初期MFTスキャンがエラーで終了しました。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの初期スキャンを実行しているときに問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示されている是正措置を講じてください。
17	CJInitializeForMonitoring: サービス開始以降のFS変更の処理に失敗しました。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの更新スキャンを実行中に問題が検出されました。このエラーは、サービスが変更を監	このエラーはProfile Managementの動作を妨げませんが、とにかくエラーを確認してください。Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピュー

イベントID	説明	原因	アクション
		視するのを妨げません。Citrix Profile Managementは、このディレクトリを通常どおり処理します。	ターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示された是正措置を講じてください。
18	CJProcessAvailableRecords: 内部エラー…	Citrix Profile Managementサービスが、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視中に障害が発生しました。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの更新スキャンを実行中に問題が検出され、サービスが最近の変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementは、このフォルダーの処理を完了しません。重要なデータを手動でバックアップしてください。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。Windows変更ジャーナルイベント管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementは、このフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。
19	USNChangeMonitor: 変更ジャーナルの初期化に失敗しました…	Citrix Profile Managementサービスが、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視中に障害が発生しました。ボリューム上のNTFS	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。Windows変更ジャーナルイベ

イベントID	説明	原因	アクション
		変更ジャーナルの初期スキャンを準備中に問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementは、このディレクトリの処理を完了しません。重要なデータを手動でバックアップしてください。	ント管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementは、このフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。
20	CADUser::Init: DNSドメインとADsPathの決定に失敗しました…	ログオンしているユーザーに関する情報をActive Directoryにクエリ中に問題が発生しました。Citrix Profile Managementは、このフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	コンピューターがドメインコントローラーへの機能するネットワークパスを持っていることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Management のトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
21	DNS ドメインと ADsPath の決定に失敗しました…	この問題は、Microsoft TechNet の記事 263693 に記載されているように、メモリ割り当ての制限によって発生する可能性があります。	この問題の解決策は、Citrix Knowledge Center の記事 CTX124953 に記載されています。
22	ファイルアクセスが遅かった。ユーザー	ユーザーがファイルにアクセスしようと	エンタープライズアンチウイルス製品に

イベントID	説明	原因	アクション
	は、ユーザーストアからファイルがフェッチされる際に遅延を経験しました。	しましたが、Profile Management はこの操作に遅延を検出しました。ユーザーは警告メッセージを受け取りました。このエラーは、アンチウイルスソフトウェアがユーザーストア内のファイルへのアクセスを妨げていることが原因である可能性があります。	関するトラブルシューティングと構成のアドバイスについては、Profile Management のドキュメントを参照してください。
23	ファイルアクセスが拒否される可能性があります。ユーザーは、ユーザーストアからファイルがフェッチされる際に長い遅延を経験しました。	ユーザーがファイルにアクセスしようとしましたが、Profile Management はこの操作に非常に大きな遅延を検出したため、アクセスが拒否される可能性があります。ユーザーはエラーメッセージを受け取りました。このエラーは、アンチウイルスソフトウェアがユーザーストア内のファイルへのアクセスを妨げていることが原因である可能性があります。	エンタープライズアンチウイルス製品に関するトラブルシューティングと構成のアドバイスについては、Profile Management のドキュメントを参照してください。
24	RevertToSelf がエラーコードで失敗し、Profile Management がシャットダウンされました。	ログオンおよびログオフ処理の一部は、偽装を使用して実行されます。通常、偽装が完了するとRevertToSelf関数が呼び出されます。このとき、関数が呼び	セキュリティ侵害が疑われる場合は、組織の手順に従って対処し、Profile Managementを再起動してください。

イベントID	説明	原因	アクション
		出されませんでした。そのため、セキュリティ上の理由から、Profile Managementソフトウェアはシャットダウンされました。ユーザーにはエラーメッセージが表示されました。	
25	ユーザーのプロファイルはCitrix Profile Managementによって管理されていますが、ユーザーストアにアクセスできません…	このコンピューター上のCitrix Profile Management Serviceは、指定されたユーザーストアにアクセスできません。これは通常、ネットワークの問題、またはユーザーストアをホストしているサーバーが利用できないことが原因です。	ユーザーストアをホストしているサーバーが利用可能であり、このコンピューターとサーバー間のネットワークが動作していることを確認してください。
26	デフォルトのプロファイル場所が無効です。この場所にあるプロファイルは正しく監視できません…	このコンピューター上のプロファイルは、ドライブ文字（例: C:）にマウントされたディスク上にある必要があります。	このコンピューター上のプロファイルをドライブ文字にマウントされたディスクに移動し、Profile Managementを再起動してください。
27	ユーザーのプロファイルフォルダーがデフォルトのプロファイル場所にありません…	レジストリでは、このユーザーのプロファイルの場所とデフォルトプロファイルの場所が一致しません。これは、たとえば、Profile Management Serviceを実行しているマシ	このユーザーのプロファイルがデフォルトのフォルダーの場所にあることを確認してください。必要に応じて適切なツールを使用し、ファイルシステム内のプロファイルデータがプ

イベントID	説明	原因	アクション
		ン上の異なるボリューム間でプロファイルが移動された場合に発生する可能性があります。	ロファイルのレジストリ設定と一致するようにしてください。
28	ユーザーのレジストリハイブのセキュリティ権限をリセットしようとしてエラーが発生しました。	このCitrixユーザープロファイルを作成するために使用されたデフォルトまたはテンプレートプロファイルのレジストリに、権限の問題がある可能性があります。	必要に応じて、SetAclなどのサードパーティユーティリティを使用して、Profile Managementユーザーストア内のユーザーのレジストリハイブのセキュリティ権限をリセットしてください。
29	テンプレートプロファイルのパスが構成されていますが、プロファイルが見つかりませんでした…	指定されたフォルダーにはファイルNTUSER.DATが含まれていないため、テンプレートプロファイル設定では使用できません。この問題は、NTUSER.DATを含むフォルダーではなく、NTUSER.DATファイルのフルパスが構成されている場合に頻繁に発生します。テンプレートプロファイル設定は、Active Directory属性、システム環境変数、または `%USERNAME%` および `%USERDOMAIN%` 変数の展開をサポートしていません。	テンプレートプロファイルを含むフォルダーへの有効なパスが構成されていることを確認してください。パスにNTUSER.DATが含まれていることを確認してください。このファイルが有効であり、すべてのファイルへの読み取りアクセスを許可するようにフォルダーのアクセス権が正しく設定されていることを確認してください。

イベントID	説明	原因	アクション
33	Citrix Profile Managementは、LOCATIONにあるローカルプロファイルからユーザーストアにプロファイルを作成しました。	示された場所からユーザーストアにプロファイルが作成されました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
34	Citrix Profile Managementは、LOCATIONにある移動プロファイルからユーザーストアにプロファイルを作成しました。	示された場所からユーザーストアにプロファイルが作成されました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
35	Citrix Profile Management は、LOCATION にあるテンプレート プロファイルからユーザー ストアにプロファイルを作成しました。	指定された場所から、ユーザー ストアにプロファイルが作成されました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
36	USER の既存のプロファイル フォルダーを、このユーザーの新しい Citrix 強制プロファイル用に準備できません。可能であれば、ユーザーには一時プロファイルが与えられます。	Citrix 強制プロファイルは、ログオンごとにテンプレート プロファイルのコピーを使用します。既存のプロファイルはすべて削除され、指定されたテンプレートの場所から Citrix 強制プロファイルがコピーされます。このプロセスは失敗しました。	既存のプロファイル フォルダーを手動で削除してください。削除が失敗する原因となる別のプロセスによってファイルがロックされている場合は、コンピューターを再起動する必要がある場合があります。テンプレート フォルダーが存在し、ユーザーがその内容を読み取る権限を持っていることを確認してください。

イベントID	説明	原因	アクション
37	ユーザーのユーザー ストア パスに到達できません。このユーザーのために一時プロファイルが作成され、このユーザー ストアのプロファイルには変更が保存されません。	このコンピューター上の Citrix Profile Management Service は、指定されたユーザー ストアに到達できません。これは通常、ネットワークの問題、またはユーザー ストアをホストしているサーバーが利用できないためです。	ユーザー ストアをホストしているサーバーが利用可能であり、このコンピューターとサーバー間のネットワークが動作していることを確認してください。
38	ユーザーのプロファイルは Citrix Profile Management によって管理されていますが、ユーザー ストア パスが見つかりません。このユーザーのために一時プロファイルが作成され、このユーザー ストアのプロファイルには変更が保存されません。	このコンピューター上の Citrix Profile Management Service は、指定されたユーザー ストア内のプロファイルを見つけることができません。これは、ネットワークの問題、またはユーザー ストアをホストしているサーバーが利用できないためである可能性があります。しかし、ユーザー ストア内のプロファイルが削除または移動されたためである可能性もあります。あるいは、ユーザー ストアへのパスが変更され、ユーザー ストア内の既存のプロファイルを正しく指していない可能性もあります。	ユーザー ストアをホストしているサーバーが利用可能であることを確認します。また、このコンピューターとサーバー間のネットワークが動作しており、ユーザー ストアへのパスが既存のプロファイルを指していることを確認します。ユーザー ストア内のプロファイルが削除されている場合は、ローカル マシン上のプロファイルを削除します。

イベントID	説明	原因	アクション
42	ユーザー `<userdomain>\<username>` のポリシー設定を更新しようとしているときにエラーが発生しました。ポリシー設定が正しく適用されていない可能性があります。エラーコード: `<error code>`	Citrix Profile Management は、Citrix グループ ポリシー設定の更新に失敗しました。	Citrix Group Policy Client-Side Extension がインストールされ、正しく動作していることを確認してください。
3005	`<path1>` からアクセス ポイント `<path2>` への仮想ディスクのマウントに失敗しました。	Citrix Profile Management は、仮想ディスクをアクセス ポイントにマウントできませんでした。この問題は、仮想ディスクにアクセスできない場合、アクセス ポイントが空でない場合、または仮想ディスクがすでにマウントされている場合に発生する可能性があります。	マシンを再起動し、問題が解決したかどうかを確認します。解決しない場合は、CDF トレースを収集し、Citrix テクニカル サポートにお問い合わせください。
3008	`<path1>` からアクセス ポイント `<path2>` への検索データベースのマウントに失敗しました。	Windows Search サービスは、検索データベースのマウントに失敗しました。この問題は、検索データベースが破損している場合に発生する可能性があります。	CDF トレースを収集し、Citrix テクニカル サポートにお問い合わせください。
5000	ローカル ホストとユーザー ストア <"%3"> 間のネットワーク遅延は <%2>	NA	NA

イベントID	説明	原因	アクション
	ミリ秒です。セッション ID は %1 です。		
5001	現在のプロファイルサイズは <%1> バイトです。セッションIDについてはイベントデータを参照してください。	NA	NA
5002	保留領域のサイズは <%1> バイトで、<%2> 個のファイル、<%3> 個のフォルダーを含み、セッションIDは <%4>、ユーザー名は <%5> です。	NA	NA
5003	保留領域の同期が開始されました。セッションID: <%1>。ユーザー名: <%2>。	NA	NA
5004	保留領域の同期が完了しました。セッションID: <%1>。ユーザー名: <%2>。	NA	NA

一般的な問題のトラブルシューティング

この記事では、一般的なProfile Managementの問題をトラブルシューティングする方法について説明します。

ログオンが遅い

ユーザーのログオンが遅い場合は、次の手順でトラブルシューティングを行ってください。

1. Citrix Directorのパネルでプロファイルの読み込み時間を確認します。予想よりも大幅に長い場合は、ユーザープロファイルの読み込みが原因でログオンが遅くなっています。

詳細については、「ユーザーログオンの問題の診断」を参照してください。

2. Citrix Profile Managementログファイルでプロファイルの処理時間を確認します。

   `C:\Windows\System32\Log Files\User Profile Manager`にあるProfile Managementログファイルで、`DispatchLogonLogoff`で始まるエントリを見つけます。次の例は、ログオン処理時間が10.22秒であることを示しています。

   `DispatchLogonLogoff: ---------- Finished logon processing successfully in [s]: <10.22>.`.

3. 推奨されるProfile Managementポリシーが適用されていることを確認してください。

   「ユーザーログオンパフォーマンスの向上」のログオンパフォーマンスを向上させるための推奨事項に従ってください。

4. Citrixテクニカルサポートにお問い合わせください。

   ログオンの遅延が続く場合は、Citrixテクニカルサポートに連絡して、さらにサポートを受けてください。詳細については、「Citrixテクニカルサポートへのお問い合わせ」を参照してください。

プロファイルがストリーミングされていることを確認する

ストリーミングユーザープロファイルを有効にしており、この機能がユーザープロファイルに適用されていることを確認したい場合は、次の手順を実行します。

1. Profile Managementログファイルで次の種類のエントリを確認します。

   ```
   2010-03-16;16:16:35.369;INFORMATION;;;;1140;ReadPolicy: Configuration
   value read from policy: PSEnabled=<1>
   ```

   最後の項目は、機能が有効になっている場合、PSEnabled=\<1\> に設定する必要があります。

2. プロファイル管理ログファイルで、ユーザーの次のエントリを確認します。

   ```
   2010-03-16;20:17:30.401;INFORMATION;<domain name>;<user
   name>;2;2364;ProcessLogon: User logging on with Streamed Profile
   support enabled.
   ```

   ストリーミングされたユーザープロファイルが適用されていない場合、項目には「ProcessLogon: User logging on with Streamed Profile support disabled.」と表示されます。

適用されているポリシーを特定する

UPMSettings.ini ファイルを使用して、適用されているプロファイル管理ポリシーを特定します。このファイルは、ユーザーストア内の各Citrixユーザープロファイルのルートフォルダーに存在します。このファイルを調べることは、ポリシーの結果セット (RSoP) を使用するよりも便利かもしれません。特に、GPOと.iniファイル設定を組み合わせてポリシーを決定している場合はそうです。

UPMFRSettings.ini ファイルを使用して、除外リストにあるため処理されないプロファイルフォルダーを特定します。UPMFRSettings.ini ファイルもルートフォルダーに存在します。

破損したプロファイルデータを除外する

ユーザープロファイルが破損しており、特定ファイルまたはフォルダーに問題があることが確実な場合は、同期プロセスから除外します。その方法は、そのファイルまたはフォルダーを除外リストに追加することです。

レジストリエントリへの接続をクリーンアップする

一部のシナリオ (プロファイル管理に関連するものだけでなく) では、ユーザーがログオフした後もレジストリプロファイルデータへの接続が保持されます。この保持により、ログオフが遅くなったり、ユーザーセッションが完全に終了しなかったりする可能性があります。Microsoft の User Profile Hive Cleanup (`UPHClean`) ツールは、これらのシナリオの解決に役立ちます。

ローカルプロファイルを削除する

Microsoft Delprof.exe と Sepago Delprof2 は、ユーザープロファイルの削除に役立つツールです。

プロファイルが保存されている場所を特定する

プロファイルの問題を診断するには、ユーザープロファイル内のファイルがどこに保存されているかを特定することが含まれます。次の手順は、プロファイルが保存されている場所をすばやく特定する方法を提供します。

1. イベントビューアーで、左ペインの をクリックします。
2. 右ペインの「ソース」の下で、目的のCitrix Profile Managementイベントを見つけてダブルクリックします。
3. イベントに関連付けられているユーザーストアへのパスは、 タブにリンクとして表示されます。
4. ファイルを調べたい場合は、リンクをたどってユーザーストアを参照します。

サーバーの確認

サーバーがユーザーのログオンとログオフを正しく処理しているかどうかを確認するには、ユーザーストア内のユーザープロファイルにあるPmCompatibility.iniというファイルをチェックします。このファイルはプロファイルのルートフォルダーにあります。ファイルの最後の項目は、ユーザーが最後にログオフしたサーバーの名前です。たとえば、サーバーがProfile Management 5.0を実行している場合、項目は次のようになります。

```
[LastUpdateServerName]

5.0=<computer name>
```

ロールバック

Profile Managementの以前のバージョンにロールバックするには、ユーザーストアをホストするファイルサーバーでコマンドラインから **del /s** を実行します。このコマンドは、各プロファイルからPmCompatibility.iniファイルを削除します。たとえば、ユーザーストアへのローカルパスが `D:\UpmProfiles` の場合、次を実行します。

```
del /s D:\UpmProfiles\pmcompatibility.ini
```

コマンドが完了すると、ユーザーは以前のバージョンを実行しているコンピューターにログオンし、ユーザーストアからプロファイルを受け取ることができます。

ユーザーストア内の除外されたフォルダー

除外されたフォルダーがユーザーストアに表示されます。この問題は想定されており、修正措置は不要です。除外リストにあるフォルダーはユーザーストアに作成されますが、その内容は同期されません。

ログファイル内の情報の欠落

デバッグモードをアクティブにしても、完全なログ記録が自動的に有効になるわけではありません。ログ設定で、ログに記録したいイベントのすべてのチェックボックスが選択されていることを確認してください。

ヒント: リストの最後のチェックボックスを有効にするには、スクロールダウンする必要がある場合があります。

GPO設定が無効

GPO設定を変更しても、Citrix Profile Management Serviceを実行しているコンピューターで有効になりません。この問題は、GPがすぐに更新されず、展開で指定されたイベントまたは間隔に基づいているために発生します。GPをすぐに更新するには、コンピューターで `gpupdate /force` を実行します。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

ユーザーが新規または一時プロファイルを受け取る

デフォルトでは、問題が発生した場合（例：ユーザー ストアが利用できない場合）に、ユーザーには一時プロファイルが与えられます。または、Profile Management を構成して、エラーメッセージを表示し、その後ユーザーをログオフさせることもできます。このアプローチは、トラブルシューティングに役立ちます。

この機能の構成方法については、ユーザーのログオフを強制するを参照してください。

状況によっては、ユーザーがログオンしたときに、キャッシュされたプロファイルではなく新しいプロファイルを受け取ることがあります。

ユーザー ストア内のコピーが削除された後もローカルプロファイルが存在する場合、ユーザーは一時プロファイルを受け取ることもあります。この状況は、ユーザー ストアがクリアされても、ログオフ時にローカルプロファイルが削除されない場合に発生する可能性があります。

Profile Management は、このような部分的なプロファイルの削除をネットワーク、共有、または権限のエラーとして扱い、ユーザーに一時プロファイルを提供します。このため、部分的な削除は推奨されません。この問題を回避するには、影響を受けるコンピューターにログオンし、プロファイルを手動で削除してください。

展開にパーソナルvDiskが含まれている場合、これらのディスクのデフォルト処理が正しく調整されていないと、ユーザーは一時プロファイルを受け取る可能性があります。詳細については、ユーザープロファイルの移行を参照してください。

仮想デスクトップセッションが応答しなくなったときにプロファイルデータが失われる

Citrix Virtual Desktops の展開では、リモートデスクトッププロトコル（RDP）セッションから切断すると、仮想デスクトップが応答しなくなったり、再起動したりする可能性があります。この動

作は、セッション終了時にプロファイルデータが失われるため、Profile Management に影響を与えます。この問題は、Citrix Virtual Delivery Agent バージョン 3.1.3242 以降で修正されています。

ユーザーがログオンできない（イベントID: 1000、ソース: Userenv）

ユーザーが Citrix 環境にログオンできず、次のエラーメッセージが表示されます: 「Windows はローミングプロファイルを読み込みませんでした。ローカルプロファイルでログオンしようとしています... ネットワーク管理者に連絡してください。」このエラーは、Windows アプリケーションイベントログ（イベントID: 1000、ソース: Userenv）に表示されます。

印刷

Citrix Virtual Desktops™ 環境では、ユーザーはデフォルトプリンターを選択できますが、ログオン間でその選択が保持されないことがあります。この問題は、標準イメージモードの Citrix Provisioning Services Personal vDisk に基づくプールされた仮想デスクトップでプリンターを設定するために Citrix Virtual Desktops のポリシーが使用される場合に観察されています。

この問題は Profile Management に起因するものではありません。Profile Management のログファイルには、プリンターのレジストリエントリがログオフ時にコピーされたこと（これは予期される動作）が示されていますが、ユーザーの NTUSER.dat にはそのエントリが含まれていません（これは予期されない動作です）。この問題は実際には、Citrix Virtual Desktops が `DefaultPmFlags` レジストリ設定を使用する方法に起因しています。

プロファイルに予期しないプリンターが追加されることがあります。ユーザーがそれらを削除しても、次のログオン時にプリンターが再表示されます。詳細については、Profile Management サポートフォーラムを参照してください。

複数のプラットフォームでのアプリケーション設定に関する問題

複数のプラットフォーム間でアプリケーション設定が正しくローミングされないという問題が発生する可能性があります。通常、これらの問題は次の原因で発生します。

- あるシステムから別のシステムに適用できない設定。たとえば、すべてのシステムに存在するわけではないハードウェア固有の設定など。
- 異なるシステムに異なる方法でインストールされているアプリケーション。例：
    - あるシステムではC:ドライブにインストールされているが、別のシステムではD:ドライブにインストールされているアプリケーション。
    - あるシステムでは `C:\Program Files` にインストールされているが、別のシステムでは `C:\Program Files (x86)` にインストールされているアプリケーション。

    - あるシステムにはインストールされているが、別のシステムにはインストールされていないExcelアドイン。

- 設定情報をプロファイルに保存しないアプリケーション。たとえば、ローカルマシンの設定またはユーザープロファイルの外部に保存されている情報など。
- レジストリに保存されている言語固有の構成設定。Profile Managementは、バージョン1プロファイルの言語固有のフォルダー名を自動的に翻訳しますが、レジストリ内のものは翻訳しません。

ほとんどの場合、これらの問題を引き起こすシステムの標準化を改善することで、問題を最小限に抑えることができます。ただし、多くの場合、問題はOSまたはそれぞれのアプリケーションの（複数のプラットフォームとの）固有の非互換性に起因します。問題のある設定が重要でない場合は、プロファイルから除外することで問題が解決する可能性があります。

不明なアカウントが所有するプロファイル

まれに、プロファイルが不明なアカウントに属しているように見えることがあります。コンピューターの**システムプロパティ**ダイアログボックスの**詳細設定**タブで、ユーザープロファイルの**設定**をクリックすると、「アカウント不明」と表示されます。この問題は、イベントログエントリ「*コンポーネント \<application ID\> のイベント作成のプロファイル通知に失敗しました。エラーコードは???*」とともに発生します。レジストリでは、アプリケーションIDはMicrosoftコンポーネントであるSHACCTプロファイル通知ハンドラーを指しています。

この問題がご使用の環境で発生していることを確認するには、Profile Managementがデータを処理しないユーザーとしてログオンし、これらの症状を確認してください。

これはProfile Managementの問題ではなく、Active Directoryが仮想マシンのスナップショットと適切に連携しない結果である可能性があります。Citrixユーザープロファイルの操作には影響ありません。ユーザーはログオンおよびログオフでき、プロファイルの変更は保持されます。

高度なトラブルシューティングを実行する

現在のProfile Management設定を確認し、Profile Managementログが有用な情報のソースではないと判断した後、このチェックリストを使用してさらにトラブルシューティングを行ってください。

- 分析対象のマシンからResultant Set of Policies (RSoP) レポートを確認し、すべてのGPOが期待どおりに適用されていることを確認します。

  レポートを生成するには、そのマシンで`gpresult`コマンドを実行します。

- 最新バージョンのProfile Managementがインストールされていることを確認します。詳細については、「Profile Managementのバージョンを確認する」を参照してください。
- 他のユーザーからの解決策については、Profile Managementサポートフォーラムを確認してください。
- 影響を受けるマシンと同じオペレーティングシステムを持つクリーンなマシンで問題を再現してみてください。ソフトウェア製品を1つずつインストールし、各インストール後に問題が再現するかどうかを確認します。詳細については、「テスト環境にProfile Managementを展開する」を参照してください。

Profile Managementのバージョンを確認する

バージョン情報を確認するには、次の手順に従います。

1. WindowsエクスプローラーでUserProfileManager.exeファイルを右クリックします。
2. **>** をクリックします。
3. 最新バージョンでない場合は、My Accountサイトから最新バージョンをダウンロードします。Citrix®製品を選択し、ダウンロードセクションからProfile Managementをダウンロードします。

> **ヒント:**
>
> アップグレード後、必要に応じて新しい機能を有効にできます。

テスト環境にProfile Managementを展開する

ログファイルが問題のトラブルシューティングに役立たない場合は、次の例で使用されているトラブルシューティングアプローチを試してください。このアプローチは、次の目的で使用できます。

- どの構成設定が読み取られているかを判断します。
- 構成設定がどこから読み取られているかを判断します（複数のADMファイルが存在する場合）。
- ログファイルがプロファイルに加えられた変更を正しく追跡していることを確認します。

展開例

この例での展開は次のとおりです。

- Citrix virtual apps™ サーバーはWindows Server 2022で実行されています。
- ユーザーは、Citrix Workspace app for Windowsを使用して、公開されたリソースに接続しています。
- INIファイルベースの構成ではなく、OUベースのGPOが使用されます。

> **注意:**
>
> レジストリを誤って編集すると、オペレーティングシステムの再インストールが必要になるような深刻な問題が発生する可能性があります。レジストリエディターの不適切な使用によって生じた問題が解決できることを保証することはできません。レジストリエディターは自己責任で使用してください。編集する前に必ずレジストリをバックアップしてください。

トラブルシューティングのワークフロー

この例には、1台のサーバーのみで構成される小さなテストOUが含まれています。サーバーのプロファイル設定を編集できます。その後、ログファイルとポリシーの結果セット（RSoP）レポートで設定の変更を追跡します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. 実稼働環境から、Citrixユーザープロファイルをホストする Citrix virtual appsサーバーの1つを削除します。次に、そのサーバーを新しいOUに追加します。
2. サーバー上のProfile Managementを削除して再インストールします。
3. ドメイン管理者としてサーバーにログオンします。
4. ローカルポリシーを調べて、このレベルのADMファイルを削除します。
5. 新しいOUに割り当てられているGPOへのリンクをすべて削除します。
6. サーバーで、レジストリエディターからキーとすべてのサブキーを削除します: `HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies\Citrix\UserProfileManager\`。
7. Profile Managementの.iniファイルをすべて削除します。
8. **マイコンピュータ \> プロパティ \> 詳細設定**を使用して、テストしたいプロファイル以外のすべてのプロファイルを削除します。表示されるエラーを調査します。
9. Authenticated Usersグループにファイルのフルコントロールを付与します。これにより、ユーザーとしてログオンしたときにProfile Managementのログファイルを確認できます。ログファイルは `C:\Windows\System32\LogFiles\UserProfileManager\<domainname>#<computername>_pm.log`

です（ここで、\<domainname\>はコンピューターのドメイン、\<computername\>はその名前です）。ドメインを特定できない場合、ログファイルはUserProfileManager.logです。

10. 次の設定のみを含むGPOを作成し、新しいOUにリンクします。GPOがAuthenticated Usersグループに割り当てられていることを確認します。これらの設定を有効にして構成します。

    a. Profile Managementを有効にします。

    b. ユーザーストアへのパス。

    c. ログ記録を有効にします。

    d. ログ設定。すべてのイベントとアクションを選択します。

    e. 既存のプロファイルの移行。ローミングプロファイルとローカルプロファイルを選択します。

    f. ローカルプロファイルの競合処理。ローカルプロファイルの名前を変更を選択します。

    g. ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除します。

    h. *ローカル管理者ログオンの処理*設定を無効にします。これにより、Profile Managementが誤って構成され、ユーザーのログオンが妨げられた場合でも、管理者としてログオンできます。

11. OUを右クリックし、**継承のブロック**を選択して、GPOリンクがOUに適用される方法を制御します。

12. サーバーに一度もログオンしたことがなく、ローカル管理者グループのメンバーではないドメインテストユーザーを作成します。

13. このユーザーにフルデスクトップを公開し、ユーザーがRemote Desktop Usersグループに属していることを確認します。

14. ドメインに複数のドメインコントローラー（DC）がある場合は、サーバーと同じサイト内のすべてのDC間でADレプリケーションを強制します。

15. ドメイン管理者としてサーバーにログオンし、ログファイルを削除し、Citrix Profile Managementサービスを再起動して、`gpupdate /force`を実行します。

16. レジストリを確認し、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies\Citrix\UserProfileManager\`内の値が新しいGPOの値のみであることを確認します。

17. 管理者としてログアウトします。

18. Internet Explorerの設定をいくつか変更し、My Docsフォルダーに空のテストファイルを作成します。

19. Profile Managementログファイルへのショートカットを作成します。それを開いてエントリを調べます。注意が必要な項目を調査します。
20. ドメイン管理者としてログアウトし、再度ログオンします。
21. `gpresult`を実行して、テストユーザーとサーバーのRSoPレポートを生成します。

レポートに期待する内容が含まれていない場合は、注意が必要な項目を調査します。

Citrixテクニカルサポートへのお問い合わせ

このセクションのトラブルシューティングアドバイスを確認し、発生した問題がProfile Managementに起因すると考えられる場合は、Citrixテクニカルサポートにお問い合わせください。常に以下のファイルと、可能な限り多くのその他の情報を収集して提供してください。

Profile Managementログファイルの収集

詳細な手順は次のとおりです。

1. すべてのイベントとアクションをログに記録するように、マシンでProfile Managementを有効にします。詳しくは、「Profile Managementログの有効化」を参照してください。
2. 影響を受けるマシンで問題を再現します。
3. `%SystemRoot%\System32\Logfiles\UserProfileManager`からProfile Managementログファイルとそのバックアップファイルを収集します。

影響を受けるマシンからのログファイルには、少なくとも以下の情報が含まれています。

- サービスの開始（Profile Managementのバージョンとビルド番号を含む）
- サービスによる構成の読み取り
- 影響を受けるユーザーの完全なログオンプロセス
- 問題発生時のユーザーのアクティビティ
- 影響を受けるユーザーの完全なログオフプロセス

Windowsイベントログファイルの収集

影響を受けるマシンで問題を再現した後、以下の手順に従ってWindowsイベントログファイルを収集します。

1. `%SystemRoot%\System32\winevt\Logs`フォルダーを見つけます。
2. Application.evtx ファイルを収集します。

インストールされているソフトウェアの詳細を収集する

影響を受けるマシンにインストールされている以下のソフトウェアの詳細を収集します。

- オペレーティングシステム、言語、およびバージョン。
- Citrix製品とバージョン。

.iniファイルを収集する

Profile Managementに関連付けられている.iniファイルを収集するには、次の手順に従います。

1. ユーザー ストア内の各Citrixユーザープロファイルのルートフォルダーを特定します。
2. 以下の.iniファイルを収集します。
    - UPMSettings.ini
    - UPMFRSettings.ini
    - PmCompatibility.ini

Always On Tracingログファイルを収集する

Always On Tracing (AOT) ログは、Profile Managementの重大な問題を特定するのに役立つ情報を提供し、それにより問題の再現の必要性を減らします。

AOTログファイルは、次の手順で収集します。

1. 問題が発生したマシンで、`C:\ProgramData\Citrix\TelemetryService\CitrixAOT` に移動します。すべての AOT ログファイルが表示されます。

    > **注:**
    >
    > AOT が有効になっている他の Citrix コンポーネントがマシンにインストールされている場合、AOT ログファイルにはそれらのコンポーネントからのログも含まれます。

2. 最新のログファイルを手動で生成するには、次の手順に従います。
    a. **Windows PowerShell** を管理者として実行します。
    b. コマンドを実行します: `Restart-Service -Name "Citrix Telemetry Service"`
3. すべての AOT ログファイルを集めて、Citrix テクニカルサポートに送信します。

CDFControl を使用して診断トレースログを収集する

CDFControl を使用して診断トレースログを次のように収集します。

1. Knowledge Center の記事 CTX111961 から CDFControl ツールをダウンロードします。
2. CDFControl 実行可能ファイルを実行します。
3. 表示されるウィンドウで、必要に応じて 1 つ以上のトレースモジュールを選択します。機能の説明の詳細については、次の表を参照してください。
4. をクリックします。
5. 問題を再現します。
6. をクリックします。
7. CDFControl 実行可能ファイルと同じフォルダーでトレースログを見つけます。

この表は、CDFControl のトラックモジュールの機能を示しています。

トレースモジュール	説明
UPM_DLL_GPCSE	Profile Management から Citrix Group Policy クライアント側拡張機能に送信されたユーザーグループポリシー評価要求をトレースします。
UPM_DLL_OUTLOOK_HOOK	Outlook の Profile Management フックモジュールをトレースします。Outlook 検索インデックスのローミング機能に関する問題をトレースするには、これを選択します。
UPM_DLL_Perfmon	Profile Management に関連付けられている Windows パフォーマンスモニターカウンターと、Profile Management によって生成されたエラーをトレースします。
UPM_DLL_SearchSvc_Hook	Windows Search Service の Profile Management フックモジュールをトレースします。Outlook 検索インデックスのローミング機能に関する問題をトレースするには、これを選択します。
UPM_DLL_WfShell	公開アプリケーションのデスクトップ準備完了イベントを報告する Profile Management `Wfshell` プラグインをトレースします。

トレースモジュール	説明
UPM_Driver	Citrix ストリーミングユーザープロファイルドライバーが使用されるたびに、ファイルシステムの変更をトレースします。
UPM_Service	Profile Management Service が呼び出されるたびに情報をトレースします。例としては、ログオン時、ログオフ時、またはセッション中の同期や定期的なメンテナンスが行われる場合などがあります。
UPM_SessionLaunchEvaluation	Profile Management の一意のトランザクション ID に関連付けられた起動イベントをトレースします。
UPM_WMI	Profile Management VDA WMI プラグインイベントをトレースします。

その他の情報の収集

可能であれば、以下の情報を収集してください。

- `gpresult` コマンドを実行して、影響を受けるマシンとユーザーのポリシーの結果セット (RSoP) レポート。
- アプリケーションイベントログ。
- 利用可能な場合は、**Userenv** デバッグファイル。このツールに関する情報については、Microsoft のドキュメントを参照してください。

注:

Citrix Provisioning Services が展開の一部であり、プロファイルが初期化されているときに問題が発生する場合、データ収集は複雑になる可能性があります。そのシナリオでは、.ini ファイルで前述の構成更新を行い (GPO ログ設定を無効にし)、プロビジョニングされたイメージでの Profile Management の事前構成 の指示に従うことをお勧めします。

方法

ユーザーログオンパフォーマンスの向上

プロファイル管理は、ユーザーログオンパフォーマンスを向上させるためのさまざまなポリシーを提供します。例としては、**ストリーム配信ユーザープロファイル**、**フォルダーミラーリングの高速化**、および**プロファイルコンテナ**ポリシーがあります。これらのポリシーは、ユーザープロファイルが日常の使用で増え続けるシナリオで役立ちます。

このセクションでは、ユーザーログオンパフォーマンスを向上させるための2つのプロファイル管理ソリューションを提供します。

ストリーム配信プロファイルを有効にし、フォルダーミラーリングを高速化する

環境にユーザーストアを展開した後、ユーザーログオンパフォーマンスを向上させるために、以下のポリシーを有効にします。

1. **プロファイル管理 > ストリーム配信ユーザープロファイル**に移動し、次に**プロファイルストリーミング**と**フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**を有効にします。
2. **プロファイル管理 > ファイルシステム**に移動し、次に**フォルダーミラーリングの高速化**を有効にします。

完全なプロファイル用にプロファイルコンテナを有効にする

VHDXベースのCitrix®プロファイルソリューション（プロファイルコンテナと呼ばれる）を展開して、ログオンパフォーマンスを向上させることができます。これらのVHDXファイルは、ユーザーログオン時に動的にアタッチされます。 VHDXベースのソリューションを展開するには、完全なユーザープロファイルを保存するためにプロファイルコンテナを次のように有効にします。

1. **プロファイル管理 > プロファイルコンテナ設定**に移動します。
2. **プロファイルコンテナ**を有効にし、プロファイルコンテナリストにアスタリスク (*) を入力します。

パフォーマンスの比較

一般的なユーザープロファイルを使用したテストに基づいて、上記のソリューションをお勧めします。詳細については、Knowledge Centerの記事CTX463658を参照してください。以下の表に示すように、いずれかのソリューションを展開した後、ユーザーのログオン時間とログオフ時間は大幅に短縮されました。

ストリーム配信ユーザープロファイルと**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーを有効にした場合のテスト結果:

パラメーター	変更前	変更後
ログオン時間 / 合計ログオン時間	53.81 秒 / 56.48 秒	1.80 秒 / 4.45 秒
ログオフ時間 / 合計ログオフ時間	42.49 秒 / 43.67 秒	5.62 秒 / 6.89 秒

完全なプロファイルに対して**プロファイルコンテナ**ポリシーを有効にしたテスト結果:

パラメータ	変更前	変更後
ログオン時間 / 合計ログオン時間	53.81 秒 / 56.48 秒	2.66 秒 / 5.26 秒
ログオフ時間 / 合計ログオフ時間	42.49 秒 / 43.67 秒	3.63 秒 / 4.99 秒

ファイルの重複排除を使用してストレージ容量を節約する

ユーザー ストア内のさまざまなユーザー プロファイルに同一のファイルが存在する可能性があります。たとえば、異なるユーザーが同じファイルをダウンロードしたり、同じソフトウェアをユーザー プロファイルにインストールしたりする場合があります。**ファイル重複排除**ポリシーを使用すると、Profile Management はファイルの重複インスタンスをユーザー ストアから中央の場所 (*共有ストア*と呼ばれる) に移動し、他のファイルを削除します。そのため、ストレージ コストが削減されます。

前提条件

ファイルの重複排除を有効にするには、次のことを確認してください。

- 共有ストアが自動的に作成されるように、**ユーザー ストアへのパス**設定で **%username%** または **#samaccountname#** を使用します。
- Citrix Profile Management バージョン 2209 以降をインストールします。

ファイル重複排除ポリシーを有効にして構成する

例として、Workspace Environment Management™ (WEM) Web コンソールを使用します。コンソールを使用してファイルの重複排除を有効にして構成するには、次の手順に従います。

1. **プロファイル > Profile Management 設定 > ファイル重複排除** に移動します。
2. **ファイルの包含を有効にする**を選択し、重複排除するファイルを指定します。必要に応じて、**ファイルの除外を有効にする**を選択し、含まれるファイルから除外するファイルを指定します。詳細については、「ファイルの重複排除を有効にする」を参照してください。

変更頻度の低いファイルのみを重複排除することをお勧めします。たとえば、次のとおりです。

- ユーザーがインストールするプログラム ファイル:

  `AppData\Local\Microsoft\Teams*.exe`,
  `AppData\Local\Microsoft\Teams*.dll`,
  `AppData\Local\Microsoft\OneDrive*.exe`,
  `AppData\Local\Microsoft\OneDrive*.dll`

- ユーザーがダウンロードするインストーラーまたはイメージ ファイル:

  `Downloads*.exe`, `Downloads*.msi`, `Downloads*.iso`

以下のファイルの重複排除は推奨しません。

- ユーザーが頻繁に編集する可能性のあるドキュメント:

  `Documents*.xlsx`、`Documents*.docx`

- 頻繁に変更される可能性のあるデータファイル:

  `AppData\Local*.dat`

> **注:**
>
> ファイルの重複排除の効果は、ユーザー環境や重複排除の対象として指定するファイルによって異なります。実際の状況に基づいてファイル設定をカスタマイズすることをお勧めします。

権限設定を変更する

共有ストアフォルダーを作成する際、Profile Management は以下のプリンシパルにフォルダーを付与します。

- ドメインコンピューター (フルコントロールアクセス権付き)
- ドメインユーザー (読み取りアクセス権付き)

これらのデフォルトの権限設定では、ファイルの重複排除はドメイン参加済みマシンでのみ機能します。ドメインに参加していないマシンで機能させるには、共有ストアフォルダーへのフルコントロールアクセス権を持つユーザーアカウントをそれらのマシンに割り当てる必要があります。詳細な手順は次のとおりです。

1. 共有ストアサーバーで、ユーザーアカウント (例: `admin0`) に共有ストアフォルダーへのフルコントロールアクセス権を付与します。
2. 各VDAで、`admin0` ユーザーアカウントのWindows資格情報を追加して、共有ストアフォルダーにサインインします。これを行うには、Windows資格情報マネージャーまたはWorkspace Environment Managementを使用します。詳細については、ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする に記載されている手順を参照してください。
3. (オプション) 共有ストアサーバーで、共有ストアフォルダーを見つけて、ドメインコンピューターの権限エントリを削除します。

重複排除されたファイルのデータ変更のサポート

この機能は、重複排除されたファイルのデータ変更を処理できます。例えば、2人のユーザーがソフトウェアXYZバージョン1をインストールし、それをファイル重複排除の対象に含めたとします。その後、1人のユーザーがバージョン2にアップグレードすると、Profile Managementは共有ストアに新しいバージョンのファイルを作成します。もう1人のユーザーもバージョン2にアップグレードすると、Profile Managementは古いバージョンのファイルを削除します。

新しいMicrosoft Teamsのローミングを有効にする

この記事では、Profile Managementを使用して新しいMicrosoft Teams（バージョン2.1以降）のローミングを有効にする方法について説明します。プロセスは、選択するインストーラーの種類によって異なります。

- マシンごとのインストーラーを使用してインストールおよび構成する
- ユーザーごとのインストーラーを使用してインストールおよび構成する

マシンごとのインストーラーを使用してインストールおよび構成する

要件: Profile Managementバージョン2402以降。

管理者として、以下の手順に従ってマシンを作成します。

1. マスターイメージに、マシンごとのインストーラーを使用して新しいMicrosoft Teamsをインストールします。

   インストールに関する詳細については、このMicrosoftの記事を参照してください。
2. マスターイメージにProfile Managementバージョン2402以降をインストールする。
3. マスターイメージを使用してマシンを作成します。
4. Microsoft Teamsのローミングを有効にするために必要な設定を構成する。

ユーザーごとのインストーラーを使用してインストールおよび構成する

要件: Profile Managementバージョン2308以降。

管理者として、以下の手順に従ってマシンを準備します。

1. Profile Management をバージョン 2308 以降にアップグレードします。
2. プロファイルローミング機能がユーザーに対して正しく機能することを確認します。
3. **UWP アプリのローミングを有効にする**ポリシーを有効にします。詳細については、「UWP アプリのローミングを有効にする」を参照してください。
4. Microsoft Teams のローミングを有効にするために必要な設定を構成する。

複数のマシンで新しい Microsoft Teams を使用したいユーザーは、それらのマシンのうち *1台にのみ* 新しい Microsoft Teams をインストールする必要があります。

1. マシンにログオンします。
2. ユーザーごとのインストーラーを使用して、新しい Microsoft Teams をインストールします。

   Profile Management は、インストールされた Microsoft Teams をキャプチャし、コンテナ化します。別のマシンにログオンすると、Profile Management は Microsoft Teams コンテナをそのマシンに自動的にマウントします。

必要な設定を構成する

ファイルベースとコンテナベースの両方のプロファイルソリューションは、新しい Microsoft Teams でのローミングをサポートしています。ローミングを有効にするには、以下の必要な設定を適切に完了してください。

- ファイルベースのプロファイルソリューションに必要な設定
- コンテナベースのプロファイルソリューションに必要な設定

ファイルベースのプロファイルソリューションに必要な設定

Microsoft Teams のローミングを有効にするために、以下の必要な設定を実行します。

1. 以下のフォルダーを**ミラーリングするフォルダー**ポリシーに追加します。
   - `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`
   - `AppData\Local\Microsoft\Windows\INetCookies`
   - `AppData\Local\Microsoft\Windows\WebCache`
   - `AppData\Local\Microsoft\Vault`
   - `AppData\Local\Microsoft\Windows\Caches`
   - `AppData\Local\Packages`
2. 「**フォルダミラーリングの高速化**」ポリシーが無効になっている場合、フォルダを除外するには、Microsoft の推奨事項に従ってください。
3. 「**フォルダミラーリングの高速化**」ポリシーが有効になっている場合、以下の考慮事項に従って除外リストを構成してください。
   - フォルダを除外するために、Microsoft の推奨事項に従わないでください。
   - `AppData\Local\Packages` または `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe` が「**ミラーリングするフォルダ**」ポリシーに含まれている場合、`AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe` の下のフォルダが除外リストに含まれていないことを確認してください。
   - Microsoft Teams のトラブルシューティングガイドを確認してください - ステップ 3: AppData フォルダ内の以下のすべてのディレクトリにアクセスするための読み取り権限があるかどうかを確認します。`AppData\LocalLow` の下のフォルダを除き、リスト内のすべてのフォルダが除外リストに**含まれていない**ことを確認してください。(注: `AppData\LocalLow` フォルダを除外リストに含めるかどうかは、ユーザーが決定できます)。
4. 以下のフォルダを「**プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**」ポリシーに追加します。
   - `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\AC`
   - `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\AppData`

- `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\LocalCache`
- `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\LocalState`
- `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\RoamingState`
- `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\Settings`
- `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\SystemAppData`
- `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\TempState`

5. スタートメニューに新しいMicrosoft Teamsアイコンが表示されない場合（特にWindows Server 2019または2022およびWindows 10の場合）、次の設定を構成します。

   - Windows Server 2022およびWindows 10の場合、次のパスを除外リストに追加します。

     `AppData\Local\Packages\Microsoft.Windows.StartMenuExperienceHost_cw5n1h2txyewy\TempS`

   - Windows Server 2019の場合、次のパスを除外リストに追加します。

     `AppData\Local\Packages\Microsoft.Windows.ShellExperienceHost_cw5n1h2txyewy\TempState`

   - 次のレジストリキーを **1 (DWORD)** に設定します。

     `HKCU\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\ImmersiveShell\StateStore\ResetCache`

6. VDAバージョンが2402より前の場合、新しいMicrosoft Teamsクライアントを最適化するために次のレジストリキーを展開します。このレジストリキーがない場合、新しいMicrosoft Teamsクライアントは非最適化モード（サーバー側レンダリング）で動作します。

   - 場所: HKLM\SOFTWARE\WOW6432Node\Citrix\WebSocketService
   - キー (REG_Multi_SZ): ProcessWhitelist
   - 値: msedgewebview2.exe

コンテナベースのプロファイルソリューションに必要な設定

Microsoft Teams のローミングを有効にするには、以下の必要な設定を構成します。

1. **Enable local caching for profile containers** ポリシーが無効になっている場合は、以下の考慮事項に従って除外リストを構成します。

   - Microsoft のフォルダー除外に関する推奨事項に従わないでください。`AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe` の下のフォルダーがコンテナ除外リストに含まれていないことを確認してください。

- Microsoft Teams のトラブルシューティングガイド - ステップ 3: AppData フォルダー内の以下のすべてのディレクトリにアクセスするための読み取り権限があるか確認する を確認してください。リスト内のすべてのフォルダーがコンテナ除外リストに**含まれていない**ことを確認してください。

2. **Enable local caching for profile containers** ポリシーが有効になっている場合は、以下の手順に従ってください。

   a. Microsoft の推奨事項 に従い、フォルダーを除外します。

   b. 以下のフォルダーを **Folders to mirror** ポリシーに追加します。

      - `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`
      - `AppData\Local\Microsoft\Windows\INetCookies`
      - `AppData\Local\Microsoft\Windows\WebCache`
      - `AppData\Local\Microsoft\Vault`
      - `AppData\Local\Microsoft\Windows\Caches`
      - `AppData\Local\Packages`

3. スタートメニューに新しいMicrosoft Teamsアイコンが表示されない場合（特にWindows Server 2019または2022およびWindows 10の場合）、次の設定を構成します。

   - Windows Server 2022およびWindows 10の場合、次のパスを除外リストに追加します。

     `AppData\Local\Packages\Microsoft.Windows.StartMenuExperienceHost_cw5n1h2txyewy\TempS`

   - Windows Server 2019の場合、次のパスを除外リストに追加します。

     `AppData\Local\Packages\Microsoft.Windows.ShellExperienceHost_cw5n1h2txyewy\TempState`

   - 次のレジストリキーを **1 (DWORD)** に設定します。

     `HKCU\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\ImmersiveShell\StateStore\ResetCache`

4. VDAのバージョンが2402より前の場合、新しいMicrosoft Teamsクライアントを最適化するために、次のレジストリキーを展開することをお勧めします。このレジストリキーがない場合、新しいMicrosoft Teamsクライアントは非最適化モード（サーバー側レンダリング）で動作します。

   - 場所: HKLM\SOFTWARE\WOW6432Node\Citrix\WebSocketService
   - キー (REG_Multi_SZ): ProcessWhitelist
   - 値: msedgewebview2.exe

__index__

アクティブライトバックを構成する

デフォルトでは、Profile Management は、ユーザーがログオフするときに、ローカルユーザープロファイルに加えられた変更をユーザー ストアに書き戻します。ユーザーが最初のセッションからログオフする前に2番目のセッションを開始した場合、最初のセッションで行われたローカルプロファイルの変更は、2番目のセッションでは利用できません。

同時セッション間でのプロファイルの一貫性を向上させるには、アクティブライトバック機能を有効にできます。この機能を使用すると、Profile Management は、ユーザーがログオフするまで待つのではなく、*セッション中*にローカルプロファイルの変更をユーザー ストアに書き戻します。

概要

Profile Management は、**アクティブライトバック**ポリシーと、次の2つの拡張ポリシーを提供します。

- **アクティブライトバック**。Profile Management は、ローカルの*プロファイルファイルとフォルダー*に加えられた変更をユーザー ストアに書き戻します。デフォルトでは、Profile Management は5分ごとにアクティブライトバックを実行します。
- **アクティブライトバックレジストリ**。**アクティブライトバック**ポリシーと併用します。Profile Management は、ローカルの*レジストリエントリ*に加えられた変更をユーザープロファイルに書き戻します。
- **セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック**。**アクティブライトバック**ポリシーと併用します。Profile Management は、5分ごとではなく、セッションがロックまたは切断された場合にのみアクティブライトバックを実行します。

アクティブライトバックを有効にする

GPO を使用してアクティブライトバックを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management** にアクセスします。

3. **アクティブライトバック**をダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。 デフォルトでは、アクティブライトバックは5分ごとに実行されます。
5. レジストリエントリのアクティブライトバックを有効にするには、次の手順に従います。

   a. **Active write back registry** をダブルクリックします。

   b. 表示されるポリシーウィンドウで、**「Enabled」** を選択し、**「OK」** をクリックします。

6. セッションがロックまたは切断されている場合にのみProfile Managementでアクティブライトバックを実行させるには、次の手順に従います。

   a. **Active write back on session lock and disconnection** をダブルクリックします。

   b. 表示されるポリシーウィンドウで、**「Enabled」** を選択し、**「OK」** をクリックします。

> **注：**
>
> ベストプラクティスとして、**Active write back on session lock and disconnection** ポリシーを有効にすることをお勧めします。

アクティブライトバックポリシーの構成の優先順位は次のとおりです。

- GPO、Studio、またはWorkspace Environment Management™（WEM）を使用して設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- 設定がどこにも構成されていない場合、Profile Managementは動的に構成します。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

クロスプラットフォーム設定の構成

重要: この機能に関する以下の重要な情報に注意してください。

- Profile Managementのクロスプラットフォーム設定は、サポートされているオペレーティングシステム（OS）とアプリケーションのセットをサポートします。この機能は、本番環境でのみ構成してください。

- Microsoft Officeの設定は、そのアプリケーションのバージョン間ではローミングされません。詳細については、「クロスプラットフォーム設定でサポートされるオペレーティングシステムとアプリケーション」を参照してください。
- この機能は、レジストリおよびアプリケーション設定に適しています。ファイルやフォルダー、またはフォルダーリダイレクトで通常使用されるオブジェクト（ブラウザーのお気に入り、デスクトップ、スタートメニューの設定など）には適していません。
- この機能を使用して、異なるプロファイルバージョンのシステム間でユーザープロファイルを移行する場合、すべてのユーザーの移行が完了したら、この機能を無効にしてください。この機能を使用すると、主にログオフ時にパフォーマンスに影響があります。そのため、プロファイルバージョン間のローミングをサポートしない限り、無効にしておくのが最善です。

このトピックでは、クロスプラットフォーム設定を構成するために実行できる手順の例を示します。より詳細なケーススタディについては、「クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ」を参照してください。

ヒント: この機能を本番環境に導入する前に、少数のテストユーザーに限定することをお勧めします。これには、 **クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ**オプションを使用します。この設定が構成されている場合、Profile Managementのクロスプラットフォーム設定機能は、これらのユーザーグループのメンバーのみを処理します。この設定が無効になっている場合、この機能は、処理対象グループ設定で指定されたすべてのユーザーを処理します。もし **クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ**がグループポリシーまたは.iniファイルで構成されていない場合、すべてのユーザーグループが処理されます。

1. すべてのプラットフォームに共通する設定については、共通のグループポリシーオブジェクト（共通GPO）を作成し、それをProfile Managementの.admまたは.admxファイルにリンクし、必要に応じて設定を構成します。この設定は、後でトラブルシューティングが困難になる可能性のある重複する設定を最小限に抑えるため、ベストプラクティスです。要件に応じて、**ユーザーストアへのパス**を除くすべてのProfile Management設定は複数のプラットフォームで機能します。バージョン1とバージョン2のプロファイルのユーザーストア構造が異なるため、ユーザーストアへのパスはプラットフォームごとに個別に構成してください。共通GPOでは、この設定を未構成のままにします。
2. 異なるプラットフォーム用に個別のOUを作成します。たとえば、Windows 7からWindows 8に移行する場合、これらのオペレーティングシステム用に個別のOUを作成し、各OUでユーザーストアへのパスを適切に設定します。
3. パーソナライズをプラットフォーム間で機能させたいサポート対象アプリケーションの定義（.xml）ファイルを見つけます。これらのファイルは、ダウンロードパッケージのCrossPlatformフォルダーにあります。独自のアプリケーション定義ファイルを作成できます。詳細については、「定義ファイルの作成」を参照してください。

4. これらの.xmlファイルをネットワーク上の適切な場所にコピーします。
5. グループポリシー管理エディターで共通GPOを編集します。Profile Managementの下にある「クロスプラットフォーム設定」フォルダーを開き、次の設定を構成します。
    - クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ。クロスプラットフォーム設定を体験するユーザーを制限します。この設定はオプションです。この機能をテストしたり、段階的に展開したりする場合に役立ちます。
    - クロスプラットフォーム定義へのパス。ダウンロードパッケージからコピーした定義ファイルのネットワーク上の場所を識別します。このパスはUNCパスである必要があります。ユーザーはこの場所への読み取りアクセス権を持ち、管理者は書き込みアクセス権を持つ必要があります。この場所は、Server Message Block（SMB）またはCommon Internet File System（CIFS）ファイル共有である必要があります。
    - クロスプラットフォーム設定ストアへのパス。これは、複数のプラットフォームで共有されるプロファイルデータが格納されるユーザー ストアの共通領域です。ユーザーはこの領域への書き込みアクセス権を持っている必要があります。パスは絶対UNCパス、またはホームディレクトリに対する相対パスにすることができます。「**ユーザー ストアへのパス**」と同じ変数を使用できます。
6. そのプラットフォームのOUで「クロスプラットフォーム設定作成元」が「有効」に設定されていることを確認して、ベースプラットフォームを指定します。この設定により、ベースプラットフォームのプロファイルからクロスプラットフォーム設定ストアにデータが移行されます。その他のプラットフォームのOUでは、このポリシーを「無効」または「未構成」に設定します。各プラットフォーム独自のプロファイルセットは、個別のOUに保存されます。クロスプラットフォーム設定ストアのシードに使用するプラットフォームのプロファイルデータを決定する必要があります。これをベースプラットフォームと呼びます。クロスプラットフォーム設定ストアにデータのない定義ファイルが含まれている場合、または単一プラットフォームプロファイルのキャッシュデータがストア内の定義データよりも新しい場合、Profile Managementは、この設定を無効にしない限り、単一プラットフォームプロファイルからストアにデータを移行します。 重要: 複数のOUで「クロスプラットフォーム設定作成元」が有効になっている場合、最初にユーザーがログオンしたプラットフォームがベースプロファイルになります。
7. 「クロスプラットフォーム設定を有効にする」を「有効」に設定します。デフォルトでは、展開を容易にするため、この設定を有効にするまでクロスプラットフォーム設定は無効になっています。
8. グループポリシーの更新を実行します。

9. プロファイルをプラットフォーム間で移行するが、それらのローミングをサポートしない場合は、移行が完了したら、「クロスプラットフォーム設定を有効にする」を「**無効**」に設定します。

ここで「クロスプラットフォーム定義へのパス」が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

「クロスプラットフォーム設定ストアへのパス」が無効になっている場合、デフォルトパス `Windows\PM_CP` が使用されます。ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、デフォルトパスが使用されます。

ここで「クロスプラットフォーム設定を有効にする」が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

例：Windows Server 2008とWindows 7間でのMicrosoft Office設定のローミング

この例では、バージョン2プロファイルを作成する2つのオペレーティングシステム間でユーザーのアプリケーション設定をローミングできるようにするための主要な手順について説明します。Microsoft Office 2010を例として、Windows Server 2008上のCitrix XenApp 6.5とWindows 7の間でローミングが行われます。両方のOSは64ビットです。

1. ユーザーは、Citrix Virtual Apps™サーバー上の公開アプリケーションとしてOffice 2010およびInternet Explorer 9にアクセスすることに慣れており、これらのアプリケーションでいくつかの設定を変更します。たとえば、Officeでメール署名を変更したり、Internet Explorerで新しいホームページを選択したりします。
2. 将来的に、仮想デスクトップ（Citrix Virtual Desktops™で作成）が作成されますが、まだユーザーにはリリースされていません。デスクトップはWindows 7で実行され、Office 2010とInternet Explorer 9がプリインストールされています。
3. ユーザーは、新しいデスクトップでも設定が同じであることを期待しています。このトピックの手順に従って、クロスプラットフォーム設定機能を構成します。これには、Windows Server 2008のOUで「クロスプラットフォーム設定作成元」を有効にすることが含まれます。
4. ユーザーが次にアプリケーションの公開バージョン（新しい仮想デスクトップではない）を実行すると、その設定はクロスプラットフォーム設定ストアにコピーされます。
5. その後、新しいデスクトップがユーザーにリリースされます。ユーザーがログオンしてOfficeおよびInternet Explorerのローカルバージョンを実行すると、以前のWindows Server 2008セッ

ションからの設定が使用されます。ユーザーが変更したメール署名とホームページは、Windows 7マシンで利用できます。

6. ユーザーは仮想デスクトップから Internet Explorer で閲覧し、ホームページを再度変更することにしました。
7. ユーザーはログオフして退社します。自宅では仮想デスクトップにアクセスできませんが、公開されている Internet Explorer 9 をリモートで実行できます。彼らは、前のステップで Windows 7 上で作成された最新のホームページが保持されていることを確認します。

アプリケーション定義ファイルの構造

この記事では、Profile Management アプリケーション定義ファイルの XML 構造について説明します。この構造は、アプリケーションプロファイラーとクロスプラットフォーム設定の両方に適用されます。

アーキテクチャ図

アーキテクチャ図(/en-us/profile-management/2402-ltsr/media/definitionfilestructure.jpg)

- XML宣言とエンコーディング属性

  XML宣言では、属性 \<?xml version="1.0"\> を指定する必要があります。

  Encoding="UTF-8" は推奨される属性です。

- GroupDefinitions

  グループのコレクションのコンテナです。XMLドキュメントのルート要素として機能します。その属性には、バージョンとGUIDが含まれます。これらは必須属性です。

- グループ

  サブアプリケーションの設定を定義します。その属性はnameとGUIDです。これらは必須属性です。

- オブジェクト

  サブアプリケーションの1つの設定を定義します。その属性はnameとGUIDです。これらは必須属性です。

- プラットフォーム

  Platformは、異なるオペレーティングシステムで異なる定義を提供します。オペレーティングシステムを指定するために、オプションの属性OSVersionNumberを使用できます。属性がない場合、すべてのプラットフォームは設定の内部定義を受け入れます。Platformには、RegKey、RegValue、File、Folder、Wallpaperのいずれかの要素が含まれている必要があります。

- RegKey

  レジストリ内のキーとして設定を定義します。Key要素を含める必要があります。オプションのサブ要素として、RecurseとMergeの2つが含まれます。RecurseとMergeは、Profile Managementがキーをローミングする際のパフォーマンスを定義します。もう1つのオプションのサブ要素はExcludeValuesです。ExcludeValuesは、除外できるレジストリ値を定義します。

- RegValue

  レジストリ内の値として設定を定義します。親キーのパスを指定するためにKeyを含める必要があります。

- フォルダー

  設定をフォルダーとして定義します。フォルダーのパスを指定するためにPathを含める必要があります。オプションのサブ要素として、`Recurse`と`Merge`があります。RecurseとMergeは、Profile Managementがフォルダーをローミングする際のパフォーマンスを定義します。もう1つのオプションのサブ要素は`ExcludeFiles`で、これは除外できるファイルを定義します。

- ファイル

  設定をファイルとして定義します。親フォルダーのパスを指定するPathと、ファイル名を指定する`FileName`を含める必要があります。

- 壁紙

  すべての壁紙設定を定義します。属性やサブ要素は必要ありません。Profile Managementはこれらの設定を自動的にローミングします。

- Key

  レジストリキーのパス、または親レジストリキーのパスを指定します。KeyはRegKeyとRegValueのサブ要素です。

- ValueName

  レジストリ値の名前を指定します。RegValueのサブ要素です。

- パス

  フォルダのパスまたは親フォルダのパスを指定します。これはFolderとFileのサブ要素です。Profile Managementの変数を採用できます。

- FileName

ファイル名を指定します。これはFileのサブ要素です。

- 再帰

  RegKeyとFolderのオプションのサブ要素です。この要素が存在する場合、Profile Managementはキーとフォルダを再帰的にローミングします。

- マージ

  RegKeyとFolderのオプションのサブ要素です。この要素が存在する場合、Profile Managementはキーとフォルダをマージします（ただし、置換はしません）。

- ExcludeValues

  RegKeyのオプションのサブ要素です。キーをローミングする際に除外できる値を指定します。

- ExcludeFiles

  Folderのオプションのサブ要素です。フォルダをローミングする際に除外できるファイルを指定します。

- 除外

  ExcludeValuesとExcludeFilesのサブ要素です。ファイルまたはレジストリ値の除外項目を指定します。

> **注**
>
> ドキュメントに正しい構文形式が含まれていることを確認してください。Profile Managementは、これらのファイルがロードされるときに、CPSValidationSchema.xsd検証ファイルを使用してこれらのファイルをチェックします。検証ファイルはProfile Managementのインストールパスの下にあります。Profile Managementは不正なファイルを無視し、エラーメッセージをログに記録します。

サンプル

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>



<!-- Copyright 2011 Citrix Systems, Inc. All Rights Reserved. -->
```

```
&lt;GroupDefinitions GUID="748E63D3-426E-4796-9C32-420B25DB2D9F"
Version="4.0.0.0">

<!-- Application Settings -->

&lt;Group GUID="0FCCCF29-0A0E-482d-A77E-3F39A8A854A6" Name="Application
Settings">

<!-- Registry Key Setting Example -->

&lt;Object GUID="637EC13C-2D47-4142-A8EB-3CEA6D53522A"
Name="Software\Application\certain key">

&lt;Platform>

&lt;RegKey>

&lt;Key>Software\Microsoft\Office\certain key&lt;/Key>

&lt;Merge/>

&lt;Recurse/>
```

```
&lt;ExcludeValues>

&lt;Exclude>excluded value 1&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded value 2&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded value 3&lt;/Exclude>

&lt;/ExcludeValues>

&lt;/RegKey>

&lt;/Platform>

&lt;/Object>

<!-- Registry Value Setting Example -->

&lt;Object GUID="3C896310-10C4-4e5f-90C7-A79F4E653F81"
Name="Software\Application\certain value">

<!-- Folder Setting Example -->
```

```
&lt;Object GUID="7F8615D0-5E63-4bd0-982D-B7740559C6F9" Name="!
CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\setting folder">

&lt;Platform>

&lt;Folder>

<!-- We can use Citrix variable if necessary -->

&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\setting folder&lt;/Path>

&lt;Merge/>

&lt;Recurse/>

&lt;ExcludeFiles>

&lt;Exclude>excluded file 1&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded file 2&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded file 3&lt;/Exclude>
```

```
&lt;/ExcludeFiles>

&lt;/Folder>

&lt;/Platform>

&lt;/Object>

<!-- File Setting Example -->

&lt;Object GUID="7F8615D0-5E63-4bd0-982D-B7740559C6F9" Name="!
CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\file.txt">

&lt;Platform>

&lt;File>

<!-- We can use Citrix variable if necessary -->

&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application&lt;/Path>
```

```
&lt;FileName>file.txt&lt;/FileName>



&lt;/File>



&lt;/Platform>



&lt;/Object>



<!-- Setting based on different OS -->



&lt;Object GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6" Name="!
CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\%osname%\folder">



<!-- Assuming that the folder locates differently when in different
platforms -->



&lt;Platform OSVersionNumber="6.1">



<!-- Win7 -->



&lt;Folder>



&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder&lt;/Path>
```

```
&lt;Recurse/>

&lt;/Folder>

&lt;/Platform>

&lt;Platform OSVersionNumber="10.0">

<!-- Win10 -->

&lt;Folder>

&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder&lt;/Path>

&lt;Recurse/>

&lt;/Folder>

&lt;/Platform>

&lt;/Object>
```

```
&lt;/Group>


&lt;/GroupDefinitions>
```

定義ファイルを作成する

定義ファイルは、同期するフォルダー、ファイル、またはレジストリを定義します。独自のアプリケーション定義ファイルを作成できます。

Microsoft UE-V テンプレートジェネレーターを使用して、UE-V テンプレートファイルを作成します。

1. Microsoft のWebサイトから、Windows 10 用の**Windows Assessment and Deployment Kit** (Windows ADK) をダウンロードします。
2. Windows ADK をインストールします。**Microsoft User Experience Virtualization (UE-V) Template Generator** を選択します。**Install** をクリックします。インストールが完了したら、**Finish** をクリックしてウィザードを閉じます。
3. **Start** をクリックし、**Microsoft User Experience Virtualization** をクリックし、次に **Microsoft User Experience Virtualization Generator** をクリックします。
4. **Create a settings location template** をクリックします。
5. ウィザードに従って、アプリケーション関連のパラメーターを指定します。**Next** をクリックして続行します。

   メモ帳を例にとります。ファイルパスを **C:\\Windows\\System32\\notepad.exe** と指定します。
6. 指定したアプリケーションが起動したら、閉じます。
7. プロセスが完了したら、**Next** をクリックして続行します。
8. 左ペインで **Review Locations** を選択します。標準および非標準のレジストリ/ファイルのリストにあるすべてのチェックボックスを選択します。
9. **Create** をクリックして、テンプレート XML ファイルを保存します。

   メモ帳を例にとります。テンプレート XML ファイルを **Notepad.xml** として保存します。

> **注**
>
> 1 つの UE-V テンプレートファイルに複数のアプリケーションが定義されている場合があります。

> UE-Vテンプレートファイルをクロスプラットフォーム定義ファイルに変換するには、次の手順を実行します。

1. 変換ツールをこちらからダウンロードします。
2. コマンドプロンプトから、コマンド **convert show filename** を実行して、定義ファイル内のすべてのアプリケーション名を表示します。
3. UE-Vテンプレートファイルを定義ファイルに変換するには、次のコマンドを実行します。

   convert source destination \[/Index\] \[/V\]

   \[/Index\]: インデックス番号で指定されたアプリケーションのみを変換します。

   デフォルトでは、このツールはUE-Vテンプレート内のすべてのアプリケーションを変換します。

   \[/V\]: 変換の詳細情報を表示します。

クロスプラットフォーム設定の場合、他のオペレーティングシステムに対して前述の手順を繰り返し、定義ファイルを1つにマージする必要があります。ファイルをマージするには、**OSVersionNumber** 属性を持つ **Platform** 要素を使用できます。Windows 7では、設定フォルダーは **AppData\\Application\\Win7\\folder** にあります。Windows 10では、**AppData\\Application\\Win10\\folder** にあります。

Windows 7で作成した定義ファイルは次のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>



<GroupDefinitions Version="4.0.0.0"
GUID="93E41C6E-2091-1B9B-36BC-7CE94EDC677E">



    <Group Name="Common Settings" GUID="32D83BB6-F3AD-985F-
```

```
D4BC-655B3D9ACBE2">



        <Object Name="!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder"
GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6">



            <Platform>



                <Folder>



                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder</
Path>



                    <Recurse/>



                </Folder>



            </Platform>



        </Object>



    </Group>
```

```
</GroupDefinitions>
```

Windows 10で作成した定義ファイルは次のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>



<GroupDefinitions Version="4.0.0.0"
GUID="93E41C6E-2091-1B9B-36BC-7CE94EDC677E">



    <Group Name="Common Settings" GUID="32D83BB6-F3AD-985F-
D4BC-655B3D9ACBE2">



        <Object Name="!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder"
GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6">



            <Platform>



                <Folder>



                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder</
Path>



                    <Recurse/>



                </Folder>
```

```
            </Platform>


        </Object>


    </Group>


</GroupDefinitions>
```

マージ後、定義ファイルの内容は次のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>



<GroupDefinitions Version="4.0.0.0"
GUID="93E41C6E-2091-1B9B-36BC-7CE94EDC677E">



    <Group Name="Common Settings" GUID="32D83BB6-F3AD-985F-
D4BC-655B3D9ACBE2">



        <Object Name="!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\%osname%\folder"
GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6">



            <!-- Assuming that the folder locates differently when in
different platforms -->



            <Platform OSVersionNumber="6.1"> <!-- Win7 -->
```

```
                <Folder>

                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder</
Path>

                    <Recurse/>

                </Folder>

            </Platform>

            <Platform OSVersionNumber="10.0"> <!-- Win10 -->

                <Folder>

                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder</
Path>

                    <Recurse/>

                </Folder>
```

```
            </Platform>


        </Object>


    </Group>


</GroupDefinitions>
```

クロスプラットフォーム設定の構成については、クロスプラットフォーム設定の構成を参照してください。

定義ファイルのアーキテクチャについては、アプリケーション定義ファイルの構造を参照してください。

アプリケーションプロファイラーの有効化については、アプリケーションプロファイラーの有効化を参照してください。

クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ

クロスプラットフォーム設定機能は、主にWindows 7およびWindows Server 2008からWindows 8およびWindows Server 2012への移行に使用されます。この移行では、Microsoft Office 2003またはOffice 2007からOffice 2010への移行も含まれる場合があります。Windows 2003システムへの一般的な投資を考慮すると、かなりの共存期間が予想されます。この機能は、移行と持続的な共存の両方をサポートすることが期待されます。

このケーススタディは、Office 2007が稼働している既存のWindows 7およびWindows 2008環境から始まり、Windows 8の共有プロビジョニング済み仮想デスクトップを追加します。

ケーススタディは以下で構成されます。

- 初期構成
- 新しいサイトの計画
- 計画の実行
- その他の考慮事項

初期設定

次の図は、このケーススタディにおける環境構成を示しています。

グラフィック(/en-us/profile-management/2402-ltsr/media/upm-cross-platform-settings-case-study-initial-1.png)

Windows 7マシンは、Citrix XenApp 6.5で公開されているOffice 2007を使用するように構成されています。

ドメインには、Windows 2008レベルでActive Directoryを実行しているWindows 2008ドメインコントローラーが含まれています。すべてのマシンは2k8_FarmというOUに属しており、Profile Management 5.0の.admファイルは2k8_Farm_POというGPOに追加されています。以下のポリシーが構成されています。

ポリシー	値
ユーザーストアへのパス	`\\FileServ1\Profiles#sAMAccountName#\%ProfVer%`
プロファイルストリーミング	有効
アクティブライトバック	有効

システム環境変数`%ProfVer%`を設定するマシンログオンスクリプトは、OU内のすべてのマシンで実行されます。

マシンタイプ	%PROFVER%
Windows 2008上のXenApp®サーバー	Win2008
Windows 7デスクトップ	Win7

たとえば、ユーザーjohn.smithは、Windows 7デスクトップ用に`\\FileServ1\Profiles\john.smith\Win7`に、Citrix仮想アプリサーバー用に`\\FileServ1\Profiles\john.smith\Win2008`にプロファイルを持っています。デスクトップとサーバーには個別のプロファイルが維持されます。管理者は、ワークステーションとマルチセッションオペレーティングシステム間でプロファイルがローミングする際に問題が発生する可能性があることを認識しており、慎重に対応しています。

フォルダーリダイレクトは、グループポリシーの**ユーザーの構成** \> **ポリシー** \> **Windows の設定** \> **フォルダーリダイレクト**で設定されます。

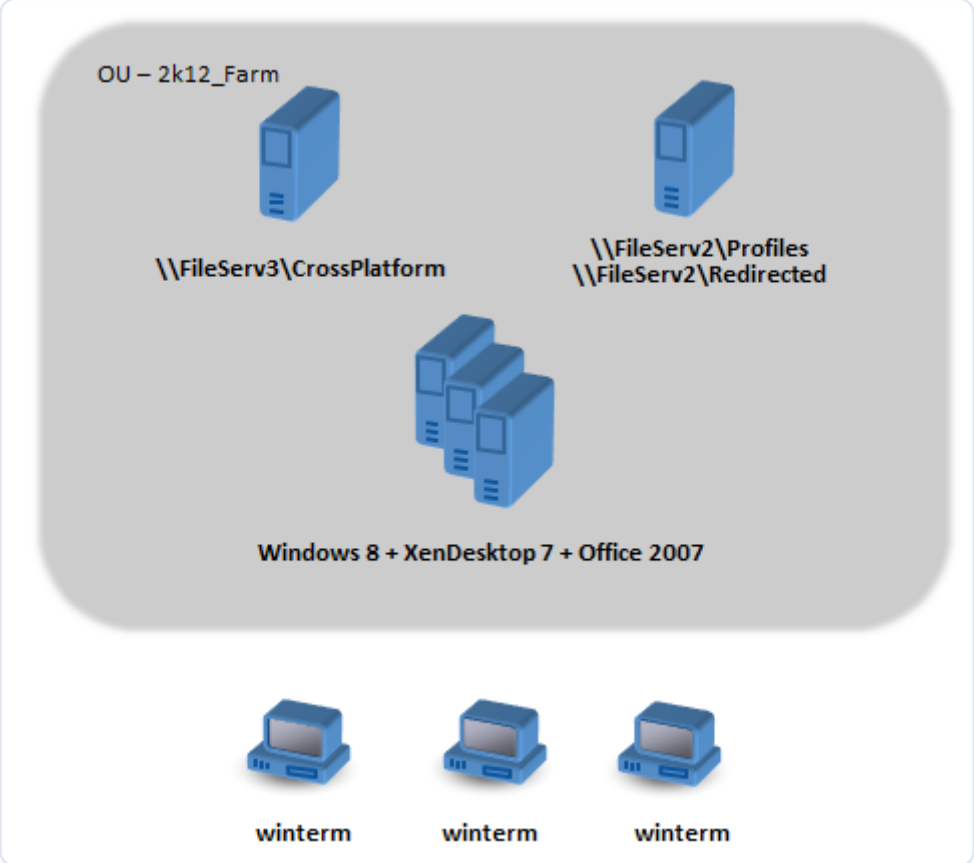
新しいサイトの計画

ネットワーク管理者は、Windows Server 2012 ドメインコントローラーと Active Directory 2012 に基づく、新しい環境用の新しいドメインを設定することを決定しました。最終的には、Windows Server 2012 で仮想アプリを実行する新しい仮想アプリサイトが計画されています。しかし、今のところ、新しいドメインは Windows 7 仮想デスクトップサイトにのみ使用されています。

このサイトは、XenServer (旧 Citrix Hypervisor™) 環境でホストされ、Windows ターミナルからアクセスされる共有 Windows 7 ベースイメージに基づいています。Office 2007 はベースイメージに含まれています。

両方のドメインのユーザーが新しいドメインを使用することが予想されるため、OldDomain と NewDomain の間に双方向の信頼関係が設定されます。両方のドメインは同じ AD フォレストに属している必要があります。

次の図は、新しい仮想デスクトップサイトの構成を示しています。



トランザクションフォルダーを管理する

トランザクションフォルダーとは、相互依存するファイル（あるファイルが他のファイルを参照する）を含むフォルダーを指します。**ミラーするフォルダー**ポリシーは、プロファイル同期中に

トランザクションフォルダーの整合性を確保します。このポリシーにより、Profile Managementはユーザー ストアとローカル ユーザー プロファイルの間でトランザクションフォルダー全体をミラーリングします。

フォルダーミラーリングの高速化ポリシーは、Profile Management 2106以降で利用できます。

この記事では、**ミラーするフォルダー**ポリシーを使用してトランザクションフォルダーを管理するプロセスについて説明します。また、このポリシーを使用してInternet ExplorerのCookieフォルダーを管理する方法の例も示します。

フォルダー ミラーリングの仕組み

通常、Profile Managementがユーザー ストアとローカル プロファイル間でユーザー プロファイルを同期する場合、タイムスタンプを比較して更新されたファイルのみを同期します。しかし、トランザクションフォルダーでは、その中のファイルは関連付けられており、整合性の問題を避けるためにProfile Managementはフォルダー全体を同期する必要があります。トランザクションフォルダーの例としては、トランザクションログファイルとそれに対応するデータベースファイルを含むフォルダーがあります。異なるセッションからのトランザクションログファイルとデータベースファイルを混在させると、トランザクションの整合性の問題が発生する可能性があります。

トランザクションフォルダーを正しく同期するために、Profile Managementは**ミラーするフォルダー**ポリシーを提供します。トランザクションフォルダーを宛先に同期する際、Profile Managementは以下の手順を使用してフォルダーを宛先にミラーリングします。

1. フォルダー内のすべてのコンテンツをタイムスタンプを無視して宛先にコピーします。
2. 宛先にある追加のコンテンツをすべて削除します。

> **注意:**
>
> トランザクションフォルダーをミラーリングするということは、「最後の書き込みが優先される」ことを意味します。複数のセッションで変更されたファイルは、最新の更新によって上書きされ、プロファイルの変更が失われる可能性があります。

ミラーするフォルダーを指定する

ミラーするフォルダーポリシーを有効にし、ミラーするフォルダーを指定します。

Google Chromeを例にとってみましょう。`AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default`にあるブックマーク関連のファイルとサブフォルダーは相互依存しており、プロ

ファイル同期中に全体として処理される必要があります。この目的を達成するには、このフォルダーを**ミラーするフォルダー**ポリシーに追加する必要があります。

ミラーするフォルダーからファイルやサブフォルダーを除外することもできます。前の例では、`AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default`フォルダーにはブックマークとは無関係のファイルやサブフォルダーも含まれています。それらを除外するには、**除外リスト – ディレクトリ**および**除外リスト – ファイル**ポリシーを使用できます。

詳細な手順は次のとおりです。

1. **Profile Management \> File system \> Synchronization** に移動し、**Folders to mirror** ポリシーをダブルクリックします。
2. **Enabled** を選択します。
3. **List of folders to mirror** フィールドに、ユーザー ストアへの相対パスの形式でミラーリングするフォルダーのリストを入力します。フォルダーを区切るには `Enter` を入力します。

   > **注：**
   >
   > このポリシーは再帰的に機能します。サブフォルダーをリストに追加しないでください。
   >
   > たとえば、`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies` を追加した場合、`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies\Low` は追加しないでください。

4. **OK** をクリックします。
5. ミラーリングされたフォルダー内の一部のファイルとサブフォルダーをミラーリングプロセスから除外するには、次の手順に従います。

   a. **Profile Management \> File system** に移動し、**Exclusion list – directories** ポリシーまたは **Exclusion list – files** ポリシーをダブルクリックします。

   b. 除外するファイルとサブフォルダーを指定します。

構成の優先順位：

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、フォルダーはミラーリングされません。

フォルダーミラーリングの高速化

Profile Management 2106以降、**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーを有効にすることで、フォルダーミラーリングを高速化できます。

このポリシーを有効にすると、Profile Managementは、ミラーリングされたフォルダーをVHDXベースの仮想ディスクに保存します。Profile Managementは、ログオン時に仮想ディスクをアタッチし、ログオフ時にデタッチします。これにより、ユーザー ストアとローカル プロファイルの間でフォルダーをコピーする必要がなくなります。

このポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. **Profile Management \> ファイルシステム \> 同期**で、**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **OK**をクリックします。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ポリシーは無効になります。

例: Internet ExplorerのCookieフォルダーを管理する

Internet ExplorerのCookieフォルダーを管理する場合、プロファイルの肥大化を抑えながら、トランザクションの整合性を確保する必要があります。この目標を達成するには、**ミラーリングするフォルダー**ポリシーと**ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**ポリシーを使用します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. ミラーリングするCookieフォルダーを指定する。
2. プロファイルの肥大化の問題が発生した場合は、ユーザーログオフ時に古いCookieの削除を有効にする。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。詳細については、このMicrosoftの記事を参照してください。

概要

このセクションでは、2つのポリシーがCookieフォルダーの管理にどのように役立つかを説明します。

Internet Explorer 8のCookieフォルダーを例にとってみましょう。そのフォルダーには、index.datファイルとCookieファイルが含まれています。ユーザーがインターネットを閲覧すると、index.datはCookieファイルを参照します。たとえば、ユーザーがそれぞれ異なるデバイスから2つのInternet Explorerセッションを持ち、各セッションで異なるサイトにアクセスするとします。各サイトからのCookieは、対応するデバイスに追加されます。

トランザクションの整合性を確保する方法

前述の例で、ユーザーが両方のセッションからログオフしたときに何が起こるか見てみましょう。セッションからのCookieはマージされ、index.datファイルは最後にログオフしたセッションのものと同期されます。その結果、Cookieファイルとindex.dat内のそれらのCookieファイルへの参照が一致しなくなります。

ミラーするフォルダーポリシーがこの問題を解決します。このポリシーが設定されている場合、Profile Managementはプロファイルの同期中にフォルダー全体を宛先にコピーします。このポリシーの動作の詳細については、「トランザクションフォルダーの管理」を参照してください。

プロファイルの肥大化を回避する方法

新しいセッションでのブラウジングは、Cookieフォルダーの肥大化につながります。また、Webサイトが再訪問されると、古いCookieが蓄積されます。**ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**ポリシーは、ユーザーがログオフするときにプロファイルから古いCookieを削除することで、この問題を解決します。

> **注：**
>
> Internet Explorer 9以前のCookieおよび閲覧履歴情報は、Internet Explorer 10以降のCookieおよび閲覧履歴情報と互換性がありません。ユーザーは、異なるバージョンのInternet Explorerがインストールされている複数のシステム間で移動しないことをお勧めします。\[#474200\]

ミラーするCookieフォルダーを指定する

ミラーするフォルダーポリシーを有効にします。ポリシーで、展開でサポートされているOSバージョンに基づいて、ミラーするCookieフォルダーを指定します。

1. **Profile Management \> ファイルシステム \> 同期**に移動します。
2. **ミラーするフォルダー**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。

4. 「**ミラーリングするフォルダーのリスト**」フィールドに、次のCookieフォルダーを追加します。フォルダーを区切るには`Enter`を使用します。
   - バージョン2プロファイルの場合`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`。
   - `AppData\Local\Microsoft\Windows\INetCookies` (Windows 8.1以降のCookieフォルダー)
   - `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies` (Windows 7およびWindows 8のCookieフォルダー)
   - `AppData\Local\Microsoft\Windows\WebCache` (Cookieデータベースファイル`Webcache01.dat`が保存されているInternet Explorer 10以降で利用可能なフォルダー)
5. **OK**をクリックします。
6. Profile Management 2106以降を使用している場合は、**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーをダブルクリックし、**有効**を選択します。

(オプション) ログオフ時に古いCookieを削除する

Profile Managementでユーザーログオフ時に古いCookieを削除するには、**ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**ポリシーを有効にします。

このポリシーはログオフ時間を増加させるため、プロファイルの肥大化の問題が発生した場合にのみ有効にしてください。

1. **Profile Management** \> **詳細設定**に移動します。
2. **ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **OK**をクリックします。

用語集

この記事では、Profile Managementソフトウェアおよびドキュメントで使用される用語と定義を一覧表示します。他のCitrix®ソフトウェアで使用されるプロファイル関連の用語も含まれています。Windowsユーザープロファイルに関連する他の概念を理解するには、MicrosoftのWebサイトをご覧ください。

用語	定義
ベースプラットフォーム	クロスプラットフォーム設定ストアを参照してください。

用語	定義
ベースプロファイル	ベースプロファイルは、ユーザーストア内のプロファイルへのUNCパスによって定義されます。クロスプラットフォーム設定機能が使用されている場合、レジストリ設定とファイルは、ベースプロファイルのサブセットからプラットフォーム間で共有できます。このサブセットはクロスプラットフォーム設定ストアにコピーされ、そこから移行またはローミングのターゲットとして使用されるプロファイルに追加されます。クロスプラットフォーム設定ストアにはベースプロファイルのサブセットが含まれていますが、これ（およびターゲットプロファイル）は常に完全なプロファイルとして保存されます。そして、必要に応じて、標準のWindowsローミングプロファイルまたはローカルプロファイルとして使用できます。ただし、ストリーミングユーザープロファイル機能が使用されている場合、ベースプロファイルは一時的に不完全になる可能性があることに注意してください。一部のファイルは、ユーザーがログオフするまで保留領域に存在する可能性があります。ローミングシナリオでベースプロファイルを定義する際の考慮事項については、ローミングを参照してください。
キャッシュ	「キャッシュ」と「同期」という用語は、ユーザーストアからファイルをダウンロードする、またはユーザーストアにアップロードする行為を指します。「フェッチ」という用語はより具体的で、ストリーミングユーザープロファイル機能が、ログオン後いつでもユーザーが必要とするときに、ユーザーストアからファイルのサブセットをダウンロードする方法を指します。
Citrix強制プロファイル、Citrixローミングプロファイル、Citrixユーザープロファイル	Citrixユーザープロファイルは、Profile Managementがインストールされ有効になっているときにユーザーが受け取るプロファイルの一般的な用語です。Citrixユーザープロファイルには2種類あります。Citrixローミングプロ

用語	定義
	ファイルとCitrix強制プロファイルです。Citrixローミングプロファイルは、ユーザーが日常業務でカスタマイズし、ログオフ時にユーザーストアに保存され、Profile Managementポリシーによって処理されるファイル、フォルダー、およびレジストリ設定の標準的なコレクションです。Citrix強制プロファイルは、Profile Managementがそれらを処理する方法においてCitrixローミングプロファイルに似ています。ただし、ログオフ時にユーザーストアに変更は保存されません。ログオン時には、強制プロファイルの新しいコピーがロードされます。Citrixユーザープロファイルは、Microsoftローカルプロファイル、Microsoftローミングプロファイル、またはMicrosoft強制プロファイルとは異なります。
コンピューター	これらのProfile Managementトピックで使用される「コンピューター」という一般的な用語は、Citrix Profile Management Serviceがインストールされている任意のマシンを指すことができます。これは、ユーザーデバイス、仮想デスクトップ（Citrix Virtual Desktops™仮想マシンからプロビジョニングされた可能性のあるもの）、または公開アプリケーションをホストするCitrix仮想アプリサーバーである可能性があります。
クロスプラットフォーム定義ファイル	このファイルは、クロスプラットフォーム設定機能を動作させるために必要な情報を含む、Profile Managementに付属の.xmlファイルです。サポートされているアプリケーションごとに1つのファイルがあります。
クロスプラットフォーム設定ストア	この場所はユーザー ストアとは別にあり、クロスプラットフォーム設定機能が構成されると、サポートされているアプリケーションの設定が保持されます。どのプラットフォームのプロファイル データを使用してクロスプラットフォーム設定ストアをシードするかを選択します。それがベースプラットフォームです。

用語	定義
フェッチ	キャッシュを参照してください。
レガシーアプリケーション	レガシーアプリケーションは、設定を非標準の場所に保存するため、動作が適切ではありません。これには、一時的なアプリケーションデータをユーザープロファイルに保存し、それによってプロファイルの肥大化を引き起こすシステムが含まれます。
移行	移行とは、プロファイルをあるプラットフォームから別のプラットフォームへ（たとえば、Windows XPからWindows 7へ）計画的に一方向へ移動させることです。
プロファイルの肥大化	一時ファイルが削除されない場合、Windowsユーザープロファイルのサイズは増加する可能性があります。これはログオンの遅延を引き起こし、プロファイルの肥大化と呼ばれます。
ローミング	ローミングとは、複数のコンピューターまたはセッションから異なるベースプロファイルを使用することです（たとえば、Windows 2008 R2を実行しているコンピューター用のベースプロファイルと、Windows 7用の別のベースプロファイル）。ユーザーは、異なるベースプロファイルを持つコンピューターまたはセッション間で接続を切り替えるときにローミングします。組織単位（OU）の構成方法によっては、ベースプロファイルをプラットフォーム間で共有できます。たとえば、Windows 2008 R2とWindows 7の両方のOUで同じプロファイルを使用できます。この場合、同じベースプロファイルが共有されるため、ユーザーはローミングしません。ベースプロファイルは、同じプロファイルバージョン（バージョン1またはバージョン2プロファイル）のオペレーティングシステムでのみ共有できます。バージョン1とバージョン2の両方のプロファイルがアクティブな場合、ユーザーは常にローミングします。

用語	定義
同期	キャッシュを参照してください。
ユーザー ストア	ユーザー ストアは、Citrix ユーザープロファイルを保存するための中央ネットワークロケーションです。クロスプラットフォーム設定ストアも参照してください。
vディスク、パーソナル vディスク	vDiskは、Citrix Provisioning™ Servicesによってマスターイメージから作成される仮想ディスクです。Personal vDiskは、Citrix仮想デスクトップがプロファイル、ユーザーがインストールしたアプリケーション、部門別アプリケーション、およびユーザーデータを保存するために使用するディスクです。Personal vDiskは、オペレーティングシステム、レジストリ、および基本アプリケーションに使用されるディスクとは別個のものです。
バージョン1プロファイル、バージョン2プロファイル	Microsoft Windows XPおよびWindows Server 2003のプロファイルは、バージョン1プロファイルとして知られています。Windows Vista、Windows 7、Windows Server 2008、およびWindows Server 2008 R2のプロファイルは、バージョン2プロファイルとして知られています。バージョン1プロファイルとバージョン2プロファイルは異なる名前空間を持ち、その構成のいくつかの側面に影響を与えます。

プロファイルについて

Windowsユーザープロファイルは、ユーザーアカウントでログオンするユーザーの環境を定義する、フォルダー、ファイル、レジストリ、および構成設定のコレクションです。これらの設定は、管理構成に応じて、ユーザーがカスタマイズできます。カスタマイズできる設定の例は次のとおりです。

- 壁紙やスクリーンセーバーなどのデスクトップ設定
- ショートカットとスタートメニューの設定
- Internet Explorerのお気に入りおよびホームページ
- Microsoft Outlookの署名

- プリンタ

一部のユーザー設定とデータは、フォルダーリダイレクトによってリダイレクトできます。ただし、フォルダーリダイレクトが使用されていない場合、これらの設定はユーザープロファイル内に保存されます。

プロファイルの種類

Windowsには、いくつかの種類のプロファイルが含まれています。

プロファイルの種類	保存場所	構成場所	アプリケーション	変更を保存しますか？
ローカル	ローカルデバイス	ローカルデバイス	ローカルデバイスのみ	はい
ローミング	ネットワーク	アクティブディレクトリ	アクセスされた任意のデバイス	はい
強制 (強制ローミング)	ネットワーク	アクティブディレクトリ	アクセスされた任意のデバイス	いいえ
一時的	該当なし	該当なし	ローカルデバイスのみ	いいえ

一時プロファイルは、特定のプロファイルタイプを割り当てられない場合にのみ割り当てられます。強制プロファイルを除き、通常、各ユーザーには個別のプロファイルが存在します。強制プロファイルでは、ユーザーはカスタマイズを保存できません。

Remote Desktop Services ユーザーの場合、Remote Desktop Services セッションとローカルセッションで同じプロファイルがユーザーに割り当てられた場合に発生する可能性のある問題を回避するために、特定のローミングプロファイルまたは強制プロファイルを割り当てることができます。

プロファイルのバージョン

Microsoft Windows ユーザープロファイルのバージョンは次のとおりです。

- バージョン 6 – ウィンドウズ 11、ウィンドウズ 10 1607 以降、ウィンドウズ サーバー 2016、ウィンドウズ サーバー 2019、および ウィンドウズ サーバー 2022
- バージョン 5 – Windows 10 RTM
- バージョン 4 – Windows 8.1 および Windows Server 2012 R2

- バージョン 3 - Windows 8 および Windows Server 2012
- バージョン 2 - ウィンドウズ Vista、ウィンドウズ 7、ウィンドウズ サーバー 2008、およびウィンドウズ サーバー 2008 R2
- バージョン 1 – Windows Vista および Windows Server 2008 以前のオペレーティングシステム

Microsoft のバージョン 1 プロファイルのフォルダー構造 (または名前空間) は、ほとんど互換性があります。たとえば、Windows XP と Windows Server 2003 のフォルダーはほぼ同じです。同様に、バージョン 2 プロファイルの構造もほとんど互換性があります。

ただし、バージョン 1 とそれ以降のプロファイルでは名前空間が異なります。このフォルダー構造は、ユーザーおよびアプリケーションデータ用に分離されたユーザー固有のフォルダーを提供するために、後のオペレーティングシステムで変更されました。バージョン 1 プロファイルは、ルートフォルダーである **Documents and Settings** にデータを保存します。バージョン 2 プロファイルは、より直感的な名前の **Users** というフォルダーにデータを保存します。たとえば、Windows Vista の **AppData\Local** のフォルダーの内容は、Windows XP の `Documents and Settings\<username>\Local Settings\Application Data` の内容と同じです。

バージョン 1 とそれ以降のプロファイルの違いの詳細については、「Managing Roaming User Data Deployment Guide」を参照してください。

インストールとセットアップ

この記事では、Profile Management をインストーラーを使用してインストールするための一般的なワークフローについて説明します。また、Profile Management をセットアップするためのベストプラクティスも提供します。

Profile Management をインストールするための一般的なワークフローは次のとおりです。

1. インストールパッケージをダウンロードする
2. Profile Management をインストールする

Profile Management をセットアップする際は、以下のベストプラクティスを参照してください。

- ローカル GPO で Profile Management をテストする
- ユーザー ストアを作成する

ユーザー ストアを作成する

この記事では、組織に最適な方法でユーザー ストアを作成するのに役立ちます。ここに記載されている情報を確認するだけでなく、ユーザー ストアへのパスを可能な限り効率的に構成してくだ

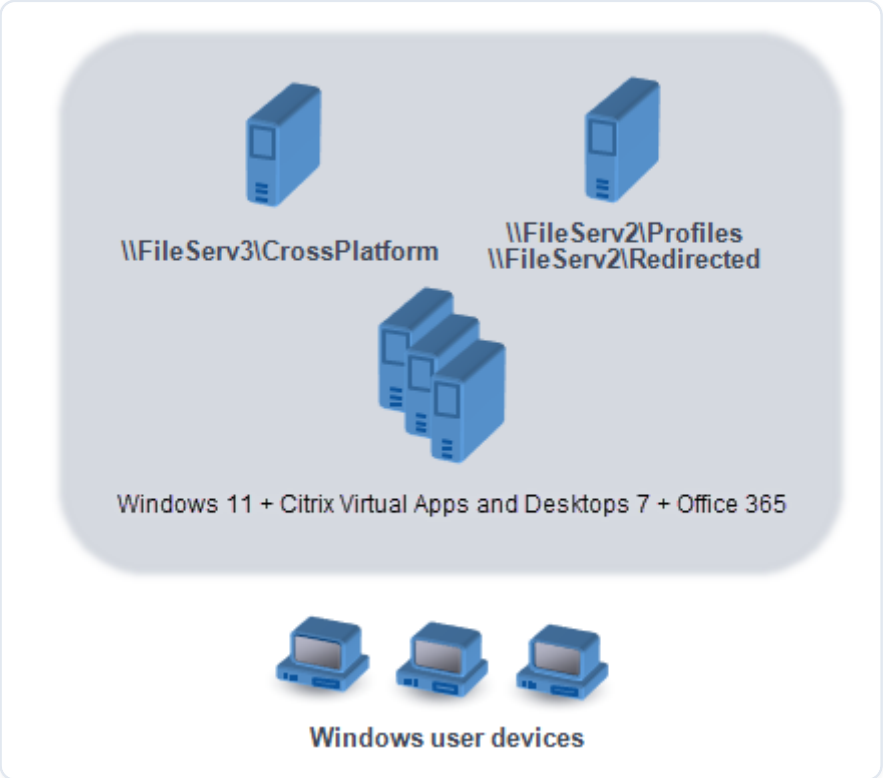
さい。たとえば、変数を適切に使用してパスを構成します。その件に関するアドバイスと例については、「ユーザー ストアへのパスを指定する」を参照してください。

ユーザー ストアは、Citrix® ユーザー プロファイルを保存するための中央のネットワーク ロケーションです。

ユーザー ストアには、Server Message Block (SMB) または Common Internet File System (CIFS) のファイル共有を使用できます。ベスト プラクティスは、以下を確実にすることです。

- 共有が、Citrix ユーザー プロファイルで使用されるアカウントからアクセス可能であること。
- 共有が、プロファイル データを保存するのに十分な大きさであること。
- 共有が、ディスクまたはネットワーク障害の場合に堅牢であること。

この図は、リダイレクトされたフォルダー アイテムのストレージ、クロスプラットフォーム設定ストア (別のファイル サーバー上)、および Microsoft Office を実行している Windows 11 仮想デスクトップ (Citrix Virtual Desktops™ で公開) に関連するユーザー ストアの例を示しています。仮想デスクトップにアクセスするユーザー デバイスも参照用に示されています。



セキュアなユーザー ストアの作成に関する推奨事項は、Microsoft TechNet Web サイトの「移動ユーザー プロファイル用のファイル共有を作成する」という記事で入手できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作に対して高いレベルのセキュリティを保証します。また、ユーザー ストアへのアクセスを構成する際には、Citrix ユーザー プロファイルを変更または削除するために必要な Administrators グループを含めます。

展開に複数のプラットフォームが含まれている場合は、「複数のプラットフォームの計画」でバージョン 1 およびバージョン 2 のプロファイル タイプに関する情報を確認してください。ユーザー ストアの構造については、「Profile Management のアーキテクチャ」を参照してください。

注: アプリケーションがユーザー プロファイル内のファイルのアクセス制御リスト (ACL) を変更しても、Profile Management はそれらの変更をユーザー ストアにレプリケートしません。この動作は、Windows 移動プロファイルと整合しています。

このビデオを見て、詳細を確認してください:



セキュリティ

このトピックでは、Profile Management を保護するための推奨されるベストプラクティスについて説明します。一般に、Citrix® ユーザープロファイルデータへの不要なアクセスを防ぐため、ユーザーストアが配置されているサーバーを保護してください。

安全なユーザーストアを作成するための推奨事項は、Microsoft TechNet Web サイトの「移動ユーザープロファイル用のファイル共有を作成する」という記事で確認できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作に対して高いレベルのセキュリティを保証します。また、ユーザーストアへのアクセスを設定する際には、Citrix ユーザープロファイルを変更または削除するために必要な Administrators グループを含めてください。

権限

Citrix は、ユーザーストアおよびクロスプラットフォーム設定ストアに対して、以下の権限をテストし、推奨しています。

- 共有権限: ユーザーストアのルートフォルダーに対するフルコントロール
- Microsoft が現在推奨する以下の NTFS 権限:

グループまたはユーザー名	アクセス許可	適用先
作成者/所有者	フルコントロール	サブフォルダーとファイルのみ
Profile Management の制御下にあるアカウントのグループ	フォルダーの一覧表示 / データ読み取りおよびフォルダーの作成 / データ追加	このフォルダーのみ

グループまたはユーザー名	アクセス許可	適用先
ローカルシステム	フルコントロール	このフォルダー、サブフォルダー、およびファイル

継承が無効になっていない場合、これらの権限により、アカウントはストアにアクセスできます。また、アカウントはユーザープロファイル用のサブフォルダーを作成し、必要な読み取り/書き込み操作を実行できます。

この最小限の要件を超えて、サブフォルダーとファイルのみを完全に制御できる管理者グループを作成することで、管理を簡素化することもできます。そうすることで、プロファイルの削除（一般的なトラブルシューティングタスク）がそのグループのメンバーにとって容易になります。

テンプレートプロファイルを使用する場合、ユーザーはそれに対する読み取りアクセス権が必要です。

アクセス制御リスト（ACL）

クロスプラットフォーム設定機能を使用する場合は、定義ファイルを保存するフォルダーに次のようにACLを設定します。認証済みユーザーには読み取りアクセス権、管理者には読み取り/書き込みアクセス権。

Windowsローミングプロファイルは、ネットワーク上のプロファイルデータを含むフォルダーから管理者権限を自動的に削除します。Profile Managementは、ユーザーストア内のフォルダーからこれらの権限を自動的に削除しません。組織のセキュリティポリシーによっては、手動で削除できます。

注：アプリケーションがユーザープロファイル内のファイルのACLを変更しても、Profile Managementはそれらの変更をユーザーストアに複製しません。これはWindowsローミングプロファイルの動作と一致しています。

プロファイルストリーミングとエンタープライズウイルス対策製品

Citrix Profile Managementのストリーミングユーザープロファイル機能は、高度なNTFS機能を使用して、ユーザープロファイルに存在しないファイルの存在をシミュレートします。この点で、この機能は階層型ストレージマネージャー（HSM）として知られる製品群に似ています。HSMは通常、磁気テープや書き換え可能な光ストレージなどの低速大容量ストレージデバイスに、あまり使用されないファイルをアーカイブするために使用されます。そのようなファイルが必要な場合、HSMドライバーは最初のファイル要求を傍受し、要求を行っているプロセスを一時停止し、アーカイブストレージからファイルを取得します。そして、ファイル要求の続行を許可します。こ

の類似性から、ストリーミングユーザープロファイルドライバーであるupmjit.sysは、実際にはHSMドライバーとして定義されています。

このような環境では、ウイルス対策製品がHSMドライバーを認識するように構成する必要があり、ストリーミングユーザープロファイルドライバーも例外ではありません。最も高度な脅威から防御するために、ウイルス対策製品はデバイスドライバーレベルで一部の機能を実行する必要があります。そして、HSMドライバーと同様に、ファイル要求を傍受し、元のプロセスを一時停止し、ファイルをスキャンして再開することで機能します。

ストリーミングユーザープロファイルドライバーのようなHSMを中断するようにウイルス対策プログラムを誤って構成することは比較的容易であり、これによりユーザーストアからのファイルの取得が妨げられ、ログオンがハングする可能性があります。

幸いなことに、エンタープライズ向けウイルス対策製品は、HSMのような高度なストレージ製品の可能性を念頭に置いて作成されています。そして、HSMがその作業を完了するまでスキャンを遅延するように構成できます。家庭用ウイルス対策製品はこの点において洗練されていません。そのため、家庭用およびSoHo（小規模オフィス/ホームオフィス）ウイルス対策製品は、ストリーミングされたユーザープロファイルではサポートされていません。

ストリーミングされたユーザープロファイルで使用するためにウイルス対策製品を構成するには、次の製品機能のいずれかを探してください。機能名はあくまで目安です。

- **信頼できるプロセスリスト**。ウイルス対策製品にHSMを識別させ、HSMがファイル取得プロセスを完了できるようにします。ウイルス対策製品は、信頼できないプロセスによってファイルが最初にアクセスされたときにファイルをスキャンします。
- **開く操作またはステータスチェック操作ではスキャンしない**。データがアクセスされたとき（たとえば、ファイルが実行または作成されたとき）にのみファイルをスキャンするようにウイルス対策製品を構成します。その他の種類のファイルアクセス（たとえば、ファイルが開かれたときやそのステータスがチェックされたとき）は、ウイルス対策製品によって無視されます。HSMは通常、ファイルを開く操作やファイルステータスチェック操作に応答してアクティブになるため、これらの操作でのウイルススキャンを無効にすると、潜在的な競合が解消されます。

Citrixは、主要なエンタープライズ向けウイルス対策製品のバージョンでストリーミングされたユーザープロファイルをテストし、Profile Managementとの互換性を確認しています。これらのバージョンには以下が含まれます。

- マカフィー ウイルススキャン エンタープライズ 8.7
- シマンテック エンドポイント プロテクション 11.0
- トレンドマイクロ オフィススキャン 10

これらの製品の以前のバージョンはテストされていません。

他のベンダーのエンタープライズ向けウイルス対策製品を使用している場合は、それがHSM対応であることを確認してください。スキャンを実行する前にHSM操作が完了するように構成できます。

一部のウイルス対策製品では、管理者が読み取り時にスキャンするか、書き込み時にスキャンするかを選択できます。この選択は、パフォーマンスとセキュリティのバランスを取るものです。ストリーミングされたユーザープロファイル機能は、この選択の影響を受けません。

ストリーミングおよびウイルス対策展開におけるProfile Managementのトラブルシューティング

ログオンがハングしたり、時間がかかったりするなどの問題が発生した場合、Profile Managementとエンタープライズ向けウイルス対策製品の間で構成ミスがある可能性があります。次の手順をこの順序で試してください。

1. Profile Managementの最新バージョンを使用していることを確認してください。問題はすでに発見され、修正されている可能性があります。
2. Profile Managementサービス (UserProfileManager.exe) を、エンタープライズ向けウイルス対策製品の信頼できるプロセスリストに追加します。
3. 開く、作成、復元、ステータスチェックなどのHSM操作でのウイルスチェックを無効にします。読み取りまたは書き込み操作でのみウイルスチェックを実行してください。
4. その他の高度なウイルスチェック機能を無効にします。たとえば、ウイルス対策製品は、実際のファイルタイプを特定するために、ファイルの最初の数ブロックをクイックスキャンする場合があります。これらのチェックは、ファイルの内容を宣言されたファイルタイプと照合しますが、HSM操作を妨げる可能性があります。
5. 少なくともプロファイルがローカルドライブに保存されているフォルダーについては、Windowsの検索インデックス作成サービスを無効にします。このサービスは不要なHSM取得を引き起こし、ストリーミングされたユーザープロファイルとエンタープライズウイルス対策製品との間で競合を引き起こすことが観察されています。

これらの手順のいずれも機能しない場合は、ストリーミングされたユーザープロファイルを無効にします（**Profile streaming**設定を無効にすることで）。それが機能する場合は、その機能を再度有効にし、エンタープライズウイルス対策製品を無効にします。それも機能する場合は、機能しないケースのProfile Management診断情報を収集し、Citrixテクニカルサポートに連絡してください。彼らはエンタープライズウイルス対策製品の正確なバージョンを知る必要があります。

Profile Managementを引き続き使用するには、エンタープライズウイルス対策を再度有効にし、ストリーミングされたユーザープロファイルを無効にすることを忘れないでください。この構成では、Profile Managementの他の機能は引き続き機能します。プロファイルのストリーミングのみが無効になります。

システム要件

ソフトウェア要件

Profile Managementを実行するシステムは、以下のいずれかのオペレーティングシステムに基づいている必要があります。

- **デスクトップ** - Microsoft Windows 11、Windows 10

  Citrix Virtual Desktops™環境では、Windowsストアアプリケーション（UWPアプリとも呼ばれる）がサポートされています。

- **サーバー** - Windows Server 2022、Windows Server 2019、Windows Server 2016 の スタンダード および データセンター エディション

> **注:**
>
> Citrix Profile Managementは、製造元によってサポートされているオペレーティングシステムバージョンでのみサポートされます。オペレーティングシステム製造元から拡張サポートを購入する必要がある場合があります。

> 拡張保護モード（EPM）では、Windows 7以降でMicrosoft Internet Explorer 10以降のCookieはサポートされません。EPMが有効な場合、Profile ManagementはCookieを処理または操作しません。

すべてのユーザーは、プロファイルが集中管理されるネットワークフォルダーであるユーザーストアにアクセスできる必要があります。または、必要に応じて、プロファイルをユーザーのホームドライブに保存することもできます。詳しくは、「Profile Managementのアーキテクチャ」を参照してください。

Profile ManagementがCitrix Studioに統合されているXenDesktop 7を使用しない限り、構成にはActive Directory（AD）グループポリシーオブジェクト（GPO）が必要です。Windows Server 2008およびWindows Server 2012ネイティブモードのADフォレスト機能レベルおよびドメイン機能レベルがサポートされています。詳しくは、「Profile Managementでのドメインとフォレストの

サポート」を参照してください。または、構成設定にローカルの.iniファイルを使用することもできますが、一般的に.iniファイルはテスト目的でのみ使用されます。.iniファイルの設定は、GPOで構成されていない設定、つまり「未構成」状態のままになっているグループポリシー設定に適用されます。

Profile Managementで使用しているCitrix製品またはコンポーネントで短いファイル名（8.3形式のファイル名とも呼ばれる）が必須である場合、Profile Managementの展開で短いファイル名のサポートを無効にしないでください。無効にすると、ファイルがユーザーストアとの間でコピーされる際に問題が発生する可能性があります。

Profile Management Serviceを実行しているコンピューターでは、ドライブ文字でマウントされた単一のディスクにプロファイルを保存してください。ディスクがユーザーのプロファイルを保存するために使用されるフォルダー（一般的な例は`C:\Users`）にマウントされている場合、サービスからマスクされ、処理されない可能性があります。

Citrix製品の互換性

Profile Managementは、以下のCitrix製品で使用できます。

- シトリックス バーチャルデスクトップ
- シトリックス バーチャルアプリ™
- シトリックス バーチャルアプリおよびデスクトップ™
- Citrix DaaS™ (旧 Citrix バーチャルアプリおよびデスクトップ サービス)

Profile ManagementとCitrix Virtual Apps and Desktopsの互換性マトリックスについては、「Citrix Profile Managementの追加のライフサイクル情報」を参照してください。

このCurrent Release (CR)をLong Term Service (LTSR)環境で使用する方法やその他のFAQについては、Knowledge Centerの記事を参照してください。

ダウンロード

Profile Management をダウンロードするには

1. Citrixダウンロードページに移動します。
2. マイアカウントにログオンします。アカウントは、展開したCitrix製品のライセンスエンタイトルメントに関連付けられている必要があります。アカウントがライセンスエンタイトルメントに関連付けられていない場合は、Citrixカスタマーサービスにお問い合わせください。
3. で、製品を選択し、ダウンロードの種類として を選択します。
4. Profile Managementの最新バージョンをダウンロードします。

診断機能

Citrix Diagnostic Facilityを使用してトレースログをキャプチャする前に、監視するプロファイルを持つデバイス、仮想デスクトップ、またはCitrixサーバーで使用されているCitrix製品またはコンポーネントでそれが利用可能であることを確認してください。

クロスプラットフォーム設定

このリリースでクロスプラットフォーム設定機能を使用するには、Profile Management Serviceを実行しているすべてのコンピューターにMicrosoft Core XML Services (MSXML) 6.0 Service Pack 1以降をインストールしてください。このコンポーネントはMicrosoft .NET Framework 3.5の一部であり、定義ファイルを処理するために必要です。

この機能は、サポートされているオペレーティングシステムとアプリケーションのセットでのみ使用してください。詳細については、「クロスプラットフォーム設定でサポートされているオペレーティングシステムとアプリケーション」を参照してください。

既存のプロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行する

次のプロファイルタイプからCitrixユーザープロファイルへの移行がサポートされています。

- Windowsローミングプロファイル
- 次のいずれかのオペレーティングシステムに基づくローカルプロファイル:
  - ウィンドウズ 11
  - ウィンドウズ 10
  - ウィンドウズ 8
  - ウィンドウズ 7
  - ウィンドウズ ビスタ
  - ウィンドウズ XP
  - ウィンドウズ サーバー 2022
  - Windows サーバー 2019
  - Windows サーバー 2016
  - ウィンドウズ サーバー 2012 R2
  - Windows サーバー 2012
  - Windows サーバー 2008 R2
  - ウィンドウズ サーバー 2008

    - ウィンドウズ サーバー 2003

- User Profile Manager 2.0で作成されたCitrixユーザープロファイル

以下のプロファイルの種類からCitrixユーザープロファイルへの移行はサポートされていません。

- Microsoft 強制プロファイル。 ヒント: Profile Management のテンプレートプロファイル機能を使用して、Microsoft 強制プロファイルを Citrix 強制プロファイルとして構成できます。Citrix 強制プロファイルはすべてのログオンに使用され、ユーザーの変更が保存されない点を除けば、通常の Citrix ユーザープロファイルとまったく同じように機能します。詳しくは、次を参照してください。 テンプレートプロファイルまたは強制プロファイルを指定する。
- Citrix強制プロファイル。
- User Profile Managerのテクニカルプレビューリリースまたはベータリリースで作成されたCitrixユーザープロファイル。
- サードパーティプロファイル (sepagoPROFILEを含む)。

32ビットのCitrixユーザープロファイルから64ビットのプロファイルへアップグレードすることはできません。

トラブルシューティング

このセクションでは、Profile Management のトラブルシューティング方法について説明します。

一般的なトラブルシューティングのワークフローは次のとおりです。

1. Profile Management の設定を確認する。
2. Profile Management のログファイルを確認する。
3. Profile Management によってログに記録された Windows イベントを確認する。
4. 一般的な問題のトラブルシューティング。
5. 高度なトラブルシューティングを実行する。
6. 前述の手順を試しても問題が解決しない場合は、できるだけ多くの診断情報を収集し、Citrixテクニカルサポートにお問い合わせください。

アップグレードと移行

このセクションでは、Profile Managementソフトウェアをアップグレードする手順と、既存のWindowsユーザープロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行するための情報について説明

します。たとえば、これらの手順を使用して、バージョン3.xからバージョン5.xに簡単にアップグレードできます。

アップグレードする前に、アップグレード元およびアップグレード先のリリースで利用可能なProfile Managementの機能と設定を理解してください。この情報を確認するには、「Profile Managementのポリシー」を参照してください。.iniファイルからグループポリシーへのアップグレードを容易にするため、このトピックでは.iniファイルの設定を.admおよび.admxファイルの設定にマッピングしています。

アップグレード中にProfile Managementを構成しないでください（グループポリシーまたは.iniファイルのいずれでも）。まず展開をアップグレードし、次に必要に応じて設定を構成することで、これら2つのタスクを分離してください。理想的には、「構成の決定」の質問に答えることで設定を構成します。

ヒント：Profile Management 2.1.1以降の展開は、最新バージョンにアップグレードすることでホットフィックスを適用できます。アップグレード後、必要に応じてそれ以降の機能を有効にできます。

混在展開

異なるバージョンのProfile Managementが共存する展開では、次の操作を行います。

- 混在展開が存在する期間を最小限に抑えます。
- 最新バージョンの.admまたは.admxファイルを、すべてのドメインコントローラー上の各グループポリシーオブジェクトに追加します。すべての新機能が無効になっていることを確認し、新しいポリシーが伝播する時間を確保してください。
- いずれかのポリシーを有効にする前に、すべてのコンピューターを最新バージョンのProfile Managementにアップグレードしてください。

バージョン5.xと3.2を含む混在展開はサポートされています。ただし、このような展開は、以前のバージョンから新しいバージョンへの移行中に存在する一時的な状態として扱ってください。

重要: バージョン5.xとバージョン2.1.1またはそれ以前のバージョン（Citrix Technical Previewやベータリリースを含む）が混在する展開はサポートされていません。ただし、アップグレードできず、これらのバージョンが展開内で共存する必要がある場合は、このトピックの残りの部分が役立つかもしれません。

Profile Management 2.1.1以前を含む混在展開

このトピックの残りの部分では、Profile Management 2.1.1以前とProfile Management 3.xまたは5.xの共存に関する情報が含まれています。あるバージョンから別のバージョンへの移行方法について説明します。このトピックでは、これらのバージョンの略語として「バージョン2」と「バージョン5」を使用します。

各バージョンを別々のOUに分離し、各バージョンを実行しているコンピューター用に別々のユーザーストアを維持します。あるいは、単一のユーザーストアが両方のバージョンを実行しているコンピューターにサービスを提供する場合、すべてのコンピューターがバージョン5にアップグレードされるまで、すべてのバージョン5の設定が無効になっていることを確認してください。「混在」ユーザーストアでバージョン4の設定を有効にすると、ユーザーはバージョン2を実行しているコンピューターにログオンできます。しかし、一時的なWindowsユーザープロファイル（ネットワーク上のCitrix®ユーザープロファイルではない）を受け取り、そのプロファイルに行った変更は保存されません。混在展開は一時的なものと見なし、アップグレードを完了する前にその存在期間を最小限に抑える必要があります。

別のOUとユーザーストアを使用すると不便な場合があります。これらの制約を回避するには、次の2つの戦略のいずれかを使用できます。Profile Managementの適切なバージョンで、処理済みグループ設定を使用して各グループを構成します。戦略2は戦略1よりも手間がかかります。前者の場合、バージョン5の処理済みユーザーグループを更新し続けます。そして、2組のアプリケーションとデスクトップを維持します（ただし、Citrix Virtual Apps™からアプリケーション定義をエクスポートすることで自動化できます）。利点は、移行に時間をかけることができることです。

注：以下の戦略の代替として、Windows Server 2008 Active Directoryでは、WMIフィルタリングを使用してGPOをOU内のコンピューターのサブセットに適用し、どのバージョンのProfile Managementがインストールされているかを判断できます。これにより、適用されるポリシーをバージョンに合わせて自動的に調整できます。

戦略1：一括移行

このシナリオでは、ある程度のダウンタイムが許容されることを前提としています。すべてのコンピューターが同時に移行されます。

移行戦略は次のとおりです。

1. バージョン2のADMファイルをバージョン5のファイルに置き換えます。後者は以前のバージョンと互換性があるため、バージョン2のコンピューターは引き続き正常に動作します。
2. すべてのバージョン5設定が無効になっていることを確認します。デフォルトの**無効**に依存しないでください。

3. すべてのコンピューターをバージョン2からバージョン5にアップグレードし始めます。これを通常のメンテナンスおよび更新スケジュールに合わせます。1つの例外を除き、バージョン5は、バージョン5の設定を有効にするまでバージョン2として機能します。例外は次のとおりです。これはまれですが、このアップグレード手順が長期間にわたって段階的に行われる場合に発生する可能性が高くなります。ユーザーが複数のサーバーからCitrixユーザープロファイルにアクセスすると、複数のバージョン4セッションが作成されます。たとえば、最初にワークステーションを使用してあるサーバー上の仮想デスクトップにアクセスし、次にラップトップを使用して別のサーバー上の公開アプリケーションにアクセスします。Profile Managementは、2番目のラップトップセッションに保留領域を使用する必要があります。この時点で、OU全体がバージョン5の展開として扱われます（ただし、バージョン5の機能は何も構成されていません）。そして、PmCompatibility.iniがこの変更を反映するように更新されます。
4. オプションで、バージョン5の処理済みユーザーグループに、小規模なパイロットグループのメンバーのみを含めるように設定します。ADグループポリシーの変更がネットワーク全体に伝播するのを待ちます（たとえば、週末にかけて）。この変更が行われている間、他のユーザーのアクセスを妨げる必要はありません。パイロットグループのプロファイルをバックアップします。その後、パイロットグループにProfile Managementをテストさせます。
5. パイロットグループの結果に満足したら、他のユーザーのプロファイルをバックアップしていることを確認します。
6. 次のスケジュールされたメンテナンス期間を使用して、残りのユーザーをバージョン5の処理済みユーザーグループに追加します。ADグループポリシーの変更が伝播するのに十分な時間を確保し、残りのユーザーがログオンできるようにします。

戦略2：段階的移行

このシナリオでは、すべてのマシンまたはユーザーを一度に新しいバージョンに移行できないため、バッチで移行するユーザーのサブセットを選択することを前提としています。複数のデータセンターや地理的に分散したユーザーがいる展開に適しています。

移行戦略は次のとおりです。

1. バージョン2のADMファイルをバージョン5のファイルに置き換えます。後者は以前のバージョンと互換性があるため、バージョン2のコンピューターは引き続き正常に動作します。
2. すべてのバージョン5設定が無効になっていることを確認します。デフォルトの「無効」に依存しないでください。
3. いくつかのコンピューター（最初のバッチ）をバージョン5にアップグレードします。または、新しいコンピューターにバージョン5をインストールします。デフォルトでは、バージョン5で処理されるユーザーグループには空のグループが含まれているため、どのユーザーも

バージョン5ユーザーとして処理されません。フェーズ移行でコンピューターをアップグレードする場合にも適用される可能性がある、戦略1で説明されている例外に注意してください。

4. バージョン5コンピューターから新しいアプリケーション（Citrix Virtual Appsを使用）または仮想デスクトップ（Citrix Virtual AppsまたはCitrix Virtual Desktops™を使用）を公開します。これらのアプリケーションとデスクトップは、名前を除いて、以前にバージョン2コンピューターから公開されたものと同一です。これらの名前は、バージョン5ユーザーが使用するためのものであることを示します。
5. このバッチで選択されたユーザーは、アプリケーションまたはデスクトップにログオンします（たとえば、Web Interfaceを使用）。彼らは新しいアプリケーションを選択します。（ユーザー名またはグループメンバーシップに基づいて、Web Interfaceを使用してこの手順を強制します）。その結果、セッションはバージョン4コンピューターで実行されますが、バージョン2の設定で処理されます。
6. すべてのユーザープロファイルをバックアップしていることを確認してください。
7. ユーザーをバージョン2処理済みユーザーグループからバージョン4グループに移動します。ADグループポリシーの変更がバージョン5コンピューターに伝播するのを待ちます。次回ログオンすると、ユーザーのセッションはバージョン5の設定で処理されます。
8. 前述のとおり、次のバッチのコンピューターをアップグレードし、次のバッチのユーザーを移行します。

ユーザープロファイルの移行

この記事では、2つの移行ワークフローについて説明します。

- Citrix®コンテナベースプロファイルソリューションへの移行
- Windowsローミングプロファイルソリューションへの移行

移行戦略の詳細については、「アップグレードと移行」を参照してください。

Citrixコンテナベースプロファイルソリューションへの移行

Profile Managementインストールパッケージに含まれる移行ツールを使用して、以下のプロファイルソリューションからCitrixコンテナベースプロファイルソリューションにユーザープロファイルを移行できます。

- Windowsローカルプロファイルソリューション
- Citrixファイルベースプロファイルソリューション
- FSLogix プロファイルコンテナ

移行ワークフロー

現在のプロファイルソリューションをCitrixコンテナベースプロファイルソリューションに移行するには、次の手順に従います。

1. ストレージサーバー上にCitrixユーザーストアをセットアップし、そのWindowsアクセス制御リスト（ACL）を構成します。

   詳細については、「ユーザーストアの作成」を参照してください。

2. Profile Managementに付属の移行ツールを使用してユーザープロファイルを移行します。

   詳細については、「例：FSLogix Profile Containerのユーザープロファイルを移行する」を参照してください。

3. マシンにProfile Managementをインストールします。

   詳しくは、「インストールとセットアップ」を参照してください。

4. 特定のProfile Managementポリシーを構成して、コンテナベースのプロファイルソリューションをセットアップします。基本的なワークフローは次のとおりです。

   a. Profile Managementを有効にする
   b. ユーザーストアへのパスを指定します（ユーザーストアへのパス）。
   c. ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にします（プロファイルコンテナ）。

   プロファイルコンテナの詳細設定については、「Citrix Profile Managementプロファイルコンテナ」を参照してください。

5. （FSLogix Profile Containerの場合）マシンでFSLogix Profile Containerを無効にします。そうしないと、Citrixコンテナベースのソリューションが正常に機能しません。詳細な手順は次のとおりです。

   a. **レジストリエディター**で、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\FSLogix\Profiles`に移動します。
   b. **Enabled**を**0**に設定します。

例：FSLogix Profile Containerのユーザープロファイルを移行する

このセクションでは、VHDXベースのFSLogix Profile ContainerからCitrixコンテナベースのプロファイルソリューションにユーザープロファイルを移行する方法について詳しく説明します。

開始する前に、次の要件を満たしていることを確認してください。

- ストレージサーバーにCitrixユーザーストアをセットアップし、そのWindowsアクセス制御リスト（ACL）を構成していること。
- FSLogix Profile ContainerのVHDXの場所を把握していること。
- ドメイン管理者の資格情報を持っていること。

詳細な手順は次のとおりです。

1. ドメイン管理者アカウントを使用してマシンにログオンします。
2. 管理者として **Windows PowerShell ISE** を実行します。
3. PowerShellコンソールで、Profile Managementインストールパッケージ内の **\tool** フォルダーにアクセスし、**CPM_ProfileContainer_Migration_Tool.ps1** を実行します。
4. プロンプトが表示されたら、移行タイプ **3** を選択します。これは、FSLogix Profile Container (VHDX) からCitrixコンテナベースのプロファイルソリューションへのユーザープロファイルの移行を表します。
5. 移行するユーザーとグループをコンマで区切って入力します。例: `<DOMAIN NAME>\<USER NAME1>,<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME1>`
6. FSLogix Profile ContainerのVHDXの場所を入力します。
7. Citrix VHDXストアへのパスを入力します。

   注:

   - Citrix VHDXストアとして、Citrixユーザーストアまたは別のネットワークストレージを使用できます。
   - すべての変数の中で、`%USERNAME%` のみがサポートされています。

8. マシンのWindows OSバージョンを短縮名で指定します。Windows OSバージョンの短縮名については、「Profile Managementポリシー」を参照してください。

   注:

   指定されたOSタイプのユーザープロファイルのみが移行されます。

   完了すると、移行結果が画面に表示されます。

Windowsローミングプロファイルへの移行

CitrixユーザープロファイルをWindowsローミングプロファイルにいつでも移行できます。プロファイルデータを、ローミングプロファイルが保存されているネットワークの場所に移動します。移行後、Profile Managementはユーザーログオンやアプリケーション設定の処理に関与しません。

1. すべてのユーザーがログオフしていることを確認してください。
2. ソフトウェアが管理するすべてのコンピューターからProfile Management Serviceを削除します。
3. ユーザーストアで、`\UPM_Profile` の内容をローミングプロファイルの場所に移動します。クロスプラットフォーム設定ストアの内容を移動する必要はありません。
4. (バージョン1プロファイルのみ) `\UPM_Profile` のすべてのサブフォルダーから _upm_var サフィックスを削除します。 注：スクリプトを使用すると、この手順が簡素化される場合があります。

新機能

累積更新プログラム 4 (CU4) は、Profile Management 2402 LTSR の最新リリースです。CU4 には、Profile Management 2402 LTSR の初期リリースと比較して、6 つ以上の修正が含まれています。

Profile Managementのドキュメント履歴

次の表に、Profile Management 2402のドキュメントに対する重要な変更点を示します。これらの更新に関する通知を受け取るには、RSSフィードを購読してください。

日付	変更	説明
20 Aug 2024	Profile Management 2402 LTSR累積更新プログラム1のリリース	詳しくは、「新機能」を参照してください。
15 Apr 2024	Profile Management 2402 LTSRの初期リリース	詳しくは、「新機能」を参照してください。